財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第375集

立馬Ⅱ遺跡

－縄文時代中期初頭～前半の集落調査－

八ツ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第８集

2006

国　土　交　通　省
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

『立馬Ⅱ遺跡』正誤表

頁	行	誤	正
例言		下條　正／黒岩芙美恵／富沢友里	下城　正／黒岩芙美枝／富澤友里
		／津金沢吉茂／富沢よね子	／津金澤吉茂／富澤よねこ
	14行	立馬Ⅱ遺跡	立馬Ⅰ遺跡
	42行	吾妻町	東吾妻町
P L 96		外 278	外 620

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第375集

立馬Ⅱ遺跡

－縄文時代中期初頭～前半の集落調査－

八ツ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第８集

2006

国　土　交　通　省
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

外259

口絵2

1．阿玉台式土器

2．北陸系の土器

1．五領ヶ台式土器

2．阿玉台式土器

序

八ツ場ダムは、首都圏の利水および治水を目的に計画され、現在は吾妻郡長野原町ならびに同吾妻町を中心に工事が進められています。八ツ場ダムの建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成６年度から開始され、本年度で12年目を迎えました。

発掘調査の増加により、徐々にこれまで不明だった時代の西吾妻地域の様子がわかり始めています。今回報告する立馬Ⅱ遺跡は、現在の集落から離れた山中にありましたが、豊富な湧出量を持つ湧き水を背景にして、古くから居住地として適地だったことがわかってきました。成果として、これまで出土例の少ない縄文時代草創期から早期の出土遺物多数のほか、県内でも数少ない縄文時代中期初頭から前半の住居跡が10軒発見されました。大量に発見された縄文土器の様子から、日本海側と太平洋側の文化が内陸地域と影響し合い、築き上げられてきた交流の歴史をみることができるものと考えています。

今回の報告書刊行に至るまでには、国土交通省八ツ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、ならびに地元関係者の皆様に多大なるご尽力を賜りました。ここに心から感謝申し上げるとともに、本書が基本的な歴史資料として広く活用されることを願い、序といたします。

平成18年３月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　高橋勇夫

例　言

1．本書は、八ツ場ダム建設工事に関連する付替国道145号立馬地区改良(その１)工事に伴う事前発掘調査報告書である。
2．遺跡所在地　吾妻郡長野原町大字林1559、1560番地
3．事業主体　**国土交通省**
4．調査主体　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
5．調査期間及び担当者
(1)発掘調査　調査期間　平成14年(2002)７月１日～同年９月19日
担当課長　下條　正
調査担当者　麻生敏隆、原信行、飯森康広、唐沢友之
(2)整　理　整理期間　平成16年(2004)４月１日～同18年３月31日
ただし、立馬Ⅱ遺跡の整理作業を並行して行う。
調査研究部長兼整理課長　佐藤明人
整理担当　飯森康広
整理嘱託員　萩原園子（平成16年４月16日～同年11月30日）
整理補助員　井草峯子　新保純子　石村千恵美　吉田豊子
黒岩扶美恵(平成17年)　山口由利枝（同年）　富沢友理(同年)
(3)事　務　理事長　小野宇三郎　高橋勇夫、常務理事　吉田豊　住谷永市　木村裕紀
事業局長　神保侑史　津金沢吉茂、管理部長　萩原利通　矢崎俊夫
八ツ場ダム調査事務所長　水田稔　巾隆之、調査研究部長　津金沢吉茂
佐藤明人、調査研究課長　下條正　斉藤和之　中沢悟、
庶務係長　野口富太郎　町田文雄、庶務係　矢嶋知恵子　富沢よね子
6．報告書作成関係者
編　集　飯森康広
本文執筆　第３章第４節第２項１　橋本淳、第６章　山口逸弘
上記以外　飯森康広（遺物観察含む）
遺物写真撮影　佐藤元彦　金属器保存処理　関邦一　小村浩一　津久井桂一　森田智子
機械実測　酒井史恵　廣津真希子　友廣裕子
7．縄文土器接合・復元作業の進行管理及び選定、縄文時代早期・前期土器の分類は、嘱託員萩原園子が主に担当した。
8．土器実測図作成については、縄文時代草創期・早期土器を当事業団職員橋本淳、中期土器を同山口逸弘に指導・助言を仰いだ。
9．石材鑑定は、当事業団職員渡辺弘幸が行った。自然科学分析は、株式会社古環境研究所に委託して行った。
10．巻頭カラー写真は小川忠博（カメラマン）、土器展開写真は株式会社スカイサーベイに委託して行った。
11．発掘調査及び本書作成にあたり、下記の諸機関、諸氏にご教示、ご協力いただいた。記して感謝の意を表したい(敬称略、順不同)
国土交通省関東地方建設局八ツ場ダム工事事務所、長野原町教育委員会、設楽博巳、
金子直行、鈴木徳雄、菅谷通保、富田孝彦、石田真、萩原園子
12．調査資料は一括して、財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。
13．発掘調査にあっては、地元長野原町をはじめとし、嬬恋村、六合村、草津町、吾妻町、中之条町、吾妻郡東村などから多くの方々が作業に従事していただいた。ここにあらためて感謝の意を表します。

凡　例

1．挿図中に使用した方位は、座標北を表している。

2．遺構図については、各挿図中にスケールを添付したが、原則下記の縮尺で掲載した。

住居跡　1：60　　住居跡のカマド　1：30　　土坑　1：40

土坑（陥し穴）　1：60　　埋設土器・焼土　1：30

3．遺構図中のスクリーントーンは、下記の通りである。

焼土　炭　撹乱

4．遺物図の縮尺は下記のとおりであり、それ以外の場合のみ各挿図番号に（）書きを付した。

石鏃・異形石器・装身具、古銭	1：1
縄文時代早期土器、ドリル・石匙・スクレイパー、鉄器	1：2
土器破片、スタンプ・敲石・打斧・磨斧・石核・磨石・凹石	1：3
縄文土器、石皿・石棒	1：4

5．遺物図中のスクリーントーンは、下記のとおりである。

石器　磨滅部分　荒滅部分

6．胎土に繊維を含む土器は、断面図にドットを添付した。

7．テフラについては、略称を使用している。詳細は第5章を参照。

YPk　浅間草津黄色軽石（As-YPk）　　粕川テフラ　浅間粕川テフラ（As-Kk）

8．遺物写真は、遺構図とほぼ同じ縮尺で掲載してある。

9．遺物観察表（土器）の法量は、口径を口、底径を底、器高を高を略した。推定径には全て（）を付した。遺物観察表（石器・鉄器類）の規模は、欠損品の数値の場合（）を付して完形品と区別した。

10．遺物観察表（土器）の色調は農林水産省農林水産技術会議 監修、財団法人日本色彩研究所　色票監修『新版標準土色帖』を参考に色名を使用した。

11．竪穴住居跡の主軸方位は、傾斜に対して直交方向に近い壁面方位を、主軸として計測した。

12．遺構名称及び付番は、原則調査時点のものをそのまま使用した。このため、土坑については以下のとおり、欠番となった。

土坑　33・39・55・56・75・76・95

13．土坑（陥し穴）の時期決定は、テフラ層位を基準として平安時代以降とそれ以前に分け、それ以外の土坑は層位及び埋没土、出土遺物から縄文時代とした。

14. 土器の胎土観察は肉眼観察で行い、特徴的な含有物を中心に記載を行った。具体的には、片岩、金雲母、白色岩片(粒子)、軟質白色岩片(粒子)が含まれている場合は、それを優先的に記し、それが特徴的に含まれない場合は、粒径をもとに、小礫と細砂の状況を示した。なお、含有物がごく微量で、胎土が緻密なものについては「密」と示してある。土器観察の含有量については概ね20%以上を「多」、20%未満を「含」、1%程度と少ない場合「微」としてある。白色岩片は石英や長石ほか白色の岩片を総称して示した。多く含む場合には、意識して白色の岩片を混入した傾向があるためである。また、軟質白色岩片とは、同じ白色の岩片でありながら、風化が著しい岩片で、指でつぶれる程の強度に見える。渡辺専門員の鑑定によれば、軽石が風化したものという。ただし、該当する土器1点のみの見解であり、検討の余地は残っている。この白色の岩片を特徴的に含む土器群があるため、この分類を作成した。なお、この軟質白色岩片が細かく崩れて混入している場合は、軟質白色粒子として扱っている。この胎土中の含有岩石の傾向は、第4章第2節で検討を行った。

参考文献　(第6章の参考文献も含む)

・上田典男他　1998　『松原遺跡　縄文時代』長野県埋蔵文化財センター
・小口英一郎　2003　「第1節　2号住出土土器の型式学的検討－松本盆地における中期前葉期の様相－」『熊久保遺跡第10次発掘調査報告書』長野県朝日村教育委員会
・小野和之、山口逸弘　1989　『房谷戸遺跡Ⅰ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1989
・小野和之、大木紳一郎、桜井美枝　1997　『南蛇井増光寺遺跡Ⅴ』財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
・小野和之　1997　「4．出土土器について」『南蛇井増光寺遺跡Ⅴ』財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
・佐藤雅一他　2000　『道下遺跡　縄文時代編』新潟県津南町教育委員会
・新藤康夫ほか　1982　『神谷原Ⅱ』八王子市椚田遺跡調査会
・谷藤保彦他　1995　『第8回　縄文セミナー　中期初頭の諸様相』縄文セミナーの会
・谷藤保彦　1997　『神保植松遺跡』財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
・寺内隆夫　1996　「斜行沈線文を多用する土器群の研究」『長野県の考古学』長野県埋蔵文化財センター
・寺内隆夫　1997　「御代田町滝沢遺跡出土の縄文時代中期前葉（滝沢Ⅳ期）の土器について」『滝沢遺跡』御代田町教育委員会
・寺内隆夫他　2000　『更埴条里遺跡・屋代遺跡群－縄文時代編－』長野県埋蔵文化財センター
・長井正欣　1997　『八城二本杉東遺跡・行田大道北遺跡』松井田町遺跡調査会
・伴　信夫　1975　「大石遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告－茅野市・原村その3－』長野県教育委員会
・三上徹也　1987　「梨久保式土器再考」『長野県埋蔵文化財センター紀要』1
・三上徹也、寺内隆夫他　1986　『梨久保遺跡－中部山岳地の縄文時代集落址－』長野県岡谷市教育委員会
・山田芳和ほか　1986　『真脇遺跡』能都町教育委員会、真脇遺跡発掘調査団

目　次

口絵
序
例言
凡例
本文目次・挿図目次・表目次・写真図版目次

第１章　調査の経過と方法 …… 1
　第１節　調査に至る経緯と経過 …… 1
　第２節　調査の方法 …… 2
　第３節　調査区の設定 …… 2
　第４節　基本土層 …… 4
第２章　地理的環境と歴史的環境 …… 6
　第１節　地理的環境 …… 6
　第２節　歴史的環境 …… 6
第３章　検出された遺構と遺物 …… 12
　第１節　遺跡の概要 …… 12
　第２節　縄文時代 …… 12
　　第１項　竪穴住居跡 …… 12
　　第２項　竪穴状遺構 …… 28
　　第３項　土坑 …… 67
　　第４項　埋設土器 …… 78
　　第５項　焼土・集石遺構 …… 79
　第３節　平安時代以前 …… 84
　　第１項　土坑(陥し穴) …… 84
　　第２項　土坑(ピット) …… 89
　第４節　平安時代以降 …… 93
　　第１項　土坑(陥し穴) …… 93
　　第２項　道路状遺構 …… 93
　第５節　遺構外出土遺物 …… 97
　　第１項　出土状況 …… 97
　　第２項　土器 …… 97
　　１．縄文時代草創期・早期 …… 97
　　２．縄文時代前期以降 …… 101
　　３．弥生時代以降 …… 103
第４章　まとめ …… 166
　第１節　遺構 …… 166
　第２節　遺物 …… 169
第５章　自然科学分析 …… 192
　第１節　立馬Ⅱ遺跡における火山灰分析 …… 192
第６章　考察 …… 196
　第１節　縄文時代中期初頭～前葉の土器群 …… 196
第７章　付編 …… 200
　第１節　聞き取り記録「立馬における狩猟経験」 …… 200

挿 図 目 次

第1図 調査区設定図（No36地区）…… 3
第2図 基本土層図…… 5
第3図 周辺遺跡の位置図（1/37,500）…… 10
第4図 周辺遺跡の位置図（長野原都市計画図）…… 11
第5図 6・16区全体図…… 13
第6図 6・16区全体図（縄文）…… 14
第7図 16区1号住居跡…… 15
第8図 16区2号住居跡（1）…… 16
第9図 16区2号住居跡（2）…… 17
第10図 16区3号住居跡（1）…… 18
第11図 16区3号住居跡（2）…… 19
第12図 16区4号住居跡…… 20
第13図 16区5号住居跡…… 21
第14図 16区6号住居跡…… 22
第15図 16区7号住居跡…… 23
第16図 16区8号住居跡…… 25
第17図 16区9号住居跡…… 25
第18図 16区10号住居跡…… 26
第19図 16区11号住居跡…… 27
第20図 16区1号竪穴状遺構…… 28
第21図 16区2号竪穴状遺構…… 28
第22図 16区3号竪穴状遺構・4号竪穴状遺構…… 29
第23図 1号住居跡出土土器…… 30
第24図 2号住居跡出土土器（1）…… 31
第25図 2号住居跡出土土器（2）…… 32
第26図 2号住居跡出土土器（3）…… 33
第27図 2号住居跡出土土器（4）…… 34
第28図 3号住居跡出土土器（1）…… 35
第29図 3号住居跡出土土器（2）…… 36
第30図 3号住居跡出土土器（3）…… 37
第31図 3号住居跡出土土器（4）…… 38
第32図 4号住居跡出土土器（1）…… 38
第33図 4号住居跡出土土器（2）…… 39
第34図 4号住居跡出土土器（3）…… 40
第35図 5号住居跡出土土器（1）…… 41
第36図 5号住居跡出土土器（2）…… 42
第37図 6号住居跡出土土器（1）…… 43
第38図 6号住居跡出土土器（2）…… 44
第39図 7号住居跡出土土器…… 44
第40図 9号住居跡出土土器（1）…… 45
第41図 9号住居跡出土土器（2）…… 46
第42図 10号住居跡出土土器…… 46
第43図 11号住居跡出土土器…… 47
第44図 竪穴状遺構出土土器…… 47
第45図 1号住居跡土器破片（1）…… 48
第46図 1号住居跡土器破片（2）…… 49
第47図 1号住居跡土器破片（3）…… 50
第48図 2号住居跡土器破片（1）…… 50
第49図 2号住居跡土器破片（2）…… 51
第50図 2号住居跡土器破片（3）…… 52
第51図 3号住居跡土器破片（1）…… 53
第52図 3号住居跡土器破片（2）…… 54
第53図 3号住居跡土器破片（3）…… 55
第54図 3号住居跡土器破片（4）…… 56
第55図 4号住居跡土器破片（1）…… 56
第56図 4号住居跡土器破片（2）…… 57
第57図 4号住居跡土器破片（3）…… 58
第58図 5号住居跡土器破片（1）…… 58
第59図 5号住居跡土器破片（2）…… 59
第60図 6号住居跡土器破片（1）…… 59
第61図 6号住居跡土器破片（2）…… 60
第62図 6号住居跡土器破片（3）…… 61
第63図 6号住居跡土器破片（4）…… 62
第64図 8号住居跡土器破片…… 62
第65図 9号住居跡土器破片（1）…… 63
第66図 9号住居跡土器破片（2）…… 64
第67図 11号住居跡土器破片（1）…… 65
第68図 11号住居跡土器破片（2）…… 66
第69図 1号・2号竪穴状遺構土器破片…… 66
第70図 3号竪穴状遺構土器破片…… 66
第71図 4号竪穴状遺構土器破片…… 66
第72図 16区1．2．3．4．5．9．10号土坑…… 68
第73図 16区11．12．13．14．15．16．17．18．19号土坑…… 69
第74図 16区22．23．24．26．27．28・35号土坑…… 71
第75図 16区29．36．37．38．40．41号土坑…… 72
第76図 16区43．45．46．47．50．51・52・53・57．54．58号土坑…… 74
第77図 16区59・60．61．62．63．64．65．66．71．77号土坑…… 76
第78図 16区78．80．81．82．83．86．90．94．97号土坑…… 77
第79図 16区98．99号土坑…… 78
第80図 16区1号・2号埋設土器…… 78
第81図 16区1号焼土…… 79
第82図 16区1号集石…… 79
第83図 土坑出土土器（1）…… 80
第84図 土坑出土土器（2）…… 81
第85図 土坑出土土器（3）…… 82
第86図 土坑出土土器（4）…… 83
第87図 1号・2号埋設土器出土土器…… 83
第88図 6・16区全体図（平安以前）…… 85
第89図 16区7．8．20．21号土坑（隠し穴）…… 86
第90図 16区42．44号土坑（隠し穴）…… 87
第91図 16区49．70．73．74号土坑（隠し穴）…… 88
第92図 16区79．85．87．88号土坑（隠し穴）…… 90
第93図 16区89．92．93．96号土坑（隠し穴）…… 91
第94図 16区25．30．31．32・34．67・68．84．91号土坑（ピット）…… 92
第95図 6・16区全体図（平安以降）…… 94
第96図 16区6．48．69．72号土坑（隠し穴）…… 95
第97図 道路状遺構…… 96
第98図 16区48号土坑、杭、石香炉…… 96
第99図 遺構外出土遺物（1）…… 98
第100図 遺構外出土遺物（2）…… 99
第101図 遺構外出土遺物土器分類別出土割合図…… 102
第102図 遺構外出土土器（1）…… 104
第103図 遺構外出土土器（2）…… 105
第104図 遺構外出土土器（3）…… 106
第105図 遺構外出土土器（4）…… 107
第106図 遺構外出土土器（5）…… 108
第107図 遺構外出土土器（6）…… 109
第108図 遺構外出土土器（7）…… 110
第109図 遺構外出土土器（8）…… 111
第110図 遺構外出土土器（9）…… 112
第111図 遺構外出土土器（10）…… 113
第112図 遺構外出土土器（11）…… 114
第113図 遺構外出土土器（12）…… 115
第114図 遺構外出土土器（13）…… 116

第115図　遺構外出土土器（14）…… 117
第116図　遺構外出土土器（15）…… 118
第117図　遺構外出土土器（16）…… 119
第118図　遺構外出土土器（17）…… 120
第119図　遺構外出土土器（18）…… 121
第120図　遺構外出土土器（19）…… 122
第121図　遺構外出土土器（20）…… 123
第122図　遺構外出土土器（21）…… 124
第123図　遺構外出土土器破片（1）…… 124
第124図　遺構外出土土器破片（2）…… 125
第125図　遺構外出土土器破片（3）…… 126
第126図　遺構外出土土器破片（4）…… 127
第127図　遺構外出土土器破片（5）…… 128
第128図　遺構外出土土器破片（6）…… 129
第129図　遺構外出土土器破片（7）…… 130
第130図　遺構外出土土器破片（8）…… 131
第131図　遺構外出土土器破片（9）…… 132
第132図　遺構外出土土器破片（10）…… 133
第133図　遺構外出土土器破片（11）…… 134
第134図　遺構外出土土器破片（12）…… 135
第135図　遺構外出土土器破片（13）…… 136
第136図　遺構外出土土器破片（14）…… 137
第137図　遺構外出土土器破片（15）…… 138
第138図　遺構外出土土器破片（16）…… 139
第139図　遺構外出土土器破片（17）…… 140
第140図　遺構外出土土器破片（18）…… 141
第141図　遺構外出土土器破片（19）…… 142
第142図　遺構外出土土器破片（20）…… 143
第143図　遺構外出土土器破片（21）…… 144
第144図　遺構外出土土器破片（22）…… 145
第145図　遺構外出土土器破片（23）…… 145
第146図　遺構外出土土器・鉄器…… 145
第147図　出土石器（1）…… 146
第148図　出土石器（2）…… 147
第149図　出土石器（3）…… 148
第150図　出土石器（4）…… 149
第151図　出土石器（5）…… 150
第152図　出土石器（6）…… 151
第153図　出土石器（7）…… 152
第154図　出土石器（8）…… 153
第155図　出土石器（9）…… 154
第156図　出土石器（10）…… 155
第157図　出土石器（11）…… 156
第158図　出土石器（12）…… 157
第159図　出土石器（13）…… 158
第160図　出土石器（14）…… 159
第161図　出土石器（15）…… 160
第162図　出土石器（16）…… 161
第163図　出土石器（17）…… 162
第164図　出土石器（18）…… 163
第165図　出土石器（19）…… 164
第166図　出土石器（20）…… 165
第167図　6・16区陥し穴分布図…… 168
第168図　住居ほか出土遺物分類別制合図（1）…… 170
第169図　住居ほか出土遺物分類別制合図（2）…… 171
第170図　出土遺物分類別勘土制合図（1）…… 175
第171図　出土遺物分類別勘土制合図（2）…… 176
第172図　出土遺物分類別勘土制合図（3）…… 177
第173図　出土遺物分類別勘土制合図（4）…… 178
第174図　住居別石器割合図（1）…… 178
第175図　住居別石器割合図（2）・石器別石材割合図（1）…… 179
第176図　石器別石材割合図（2）…… 180
第177図　グリッド別第Ⅰ～Ⅴ群土器分布グラフ（1）…… 182
第178図　グリッド別第Ⅰ～Ⅴ群土器分布グラフ（2）…… 183
第179図　グリッド別第Ⅵ～Ⅷ群土器分布グラフ（1）…… 184
第180図　グリッド別第Ⅵ～Ⅷ群土器分布グラフ（2）…… 185
第181図　試掘トレンチ土層柱状図…… 195
第182図　立馬Ⅱ遺跡中期初頭～前葉の土器群（1）…… 197
第183図　立馬Ⅱ遺跡中期初頭～前葉の土器群（2）…… 198
第184図　狩猟関係図（長野原都市計画図）…… 201

表目次

第1表　周辺遺跡の一覧…… 9
第2表　住居ほか出土遺物分類別一覧…… 170
第3表　遺構・グリッド別遺物出土数一覧（1）…… 186
第4表　遺構・グリッド別遺物出土数一覧（2）…… 187
第5表　遺構・グリッド別遺物出土数一覧（3）…… 188
第6表　遺構・グリッド別遺物出土数一覧（4）…… 189
第7表　遺構・グリッド別遺物出土数一覧（5）…… 190
第8表　遺構・グリッド別遺物出土数一覧（6）…… 191
第9表　出土土器・金属器観察表…… 202
第10表　出土石器観察表…… 245

写　真　図　版　目　次

遺構写真

口絵1　土器展開写真（遺構外259）
口絵2　1．阿玉台式土器
　　2．北陸系の土器
口絵3　1．五領ヶ台式土器
　　2．阿玉台式土器
PL1　1．遺構確認面状況（南から）
　　2．遺跡遠景（南方から岩山を望む）
PL2　1．遺跡南半分遠景（北側山上から）
　　2．遺跡北半分遠景（北側山上から）
　　3．遺跡南半分近景（南から）
　　4．遺跡南半分土層堆積状況（南から）
PL3　1．1号住居跡遺物出土状況
　　2．同全景
　　3．同深鉢出土状態（北壁付近）
　　4．同焼土確認状況
　　5．同焼土断面
PL4　1．2号住居跡全景
　　2．同遺物出土状態
　　3．同遺物出土状態（南西部）
　　4．同土層断面
　　5．同遺物出土状態近景（南西部）
PL5　1．2号住居跡遺物出土状態
　　2．同石棒出土状態
　　3．同1号埋設土器確認状況
　　4．同1号埋設土器全景
　　5．同1号埋設土器土層断面
　　6．同2号埋設土器出土状態
　　7．同2号埋設土器全景
　　8．同2号埋設土器掘り方全景
PL6　1．3号住居跡全景
　　2．同遺物出土状態
　　3．同深鉢出土状態
　　4．同深鉢出土状態
　　5．同埋設土器出土状態
PL7　1．3号住居跡深鉢出土状態
　　2．同磨石出土状態
　　3．同焼土検出状況
　　4．同焼土土層断面
　　5．4号住居跡全景
PL8　1．4号住居跡遺物出土状況
　　2．同遺物出土状況
　　3．同土層断面
　　4．同遺物深鉢出土状態
　　5．同深鉢出土状態
　　6．同深鉢出土状態
　　7．同深鉢出土状態
　　8．同伏甕出土状態
PL9　1．5号住居跡全景
　　2．同土層断面
　　3．同深鉢出土状態
　　4．同住居内土坑土器出土状態
　　5．同住居内土坑土層断面
PL10　1．6号住居跡全景
　　2．同遺物出土状況
　　3．同1・2号埋甕出土状況
　　4．同1号埋甕出土状態
　　5．同2号埋甕出土状態
PL11　1．7号住居跡全景
　　2．7・8号住居跡全景
　　3．同土層断面
　　4．同内溝全景
　　5．同炉土層断面
PL12　1．8号住居跡全景
　　2．7・8号住居跡全景
　　3．同P1土層断面
　　4．同炉検出状況
　　5．同炉土層断面
PL13　1．9号住居跡遺物出土状況
　　2．同遺物出土状況
　　3．同遺物出土状況
　　4．同深鉢出土状態
　　5．10号住居跡全景
PL14　1．10号住居跡石囲炉全景
　　2．同炉埋設土器土層断面
　　3．同炉埋設土器土層断面
　　4．同深鉢出土状態
　　5．11号住居跡全景
　　6．同深鉢出土状態
　　7．同焼土検出状況
　　8．同炉土層断面
PL15　1．1号竪穴状遺構全景
　　2．1号竪穴状遺構土層断面
　　3．2号竪穴状遺構全景
　　4．2号竪穴状遺構遺物出土状況
　　5．3号竪穴状遺構全景
　　6．4号竪穴状遺構全景
　　7．北側谷部土坑群全景（北から）
　　8．北側谷部土坑群近景（北から）
PL16　1．1号土坑全景
　　2．1号土坑土層断面
　　3．2号土坑全景
　　4．2号土坑土層断面
　　5．3号土坑全景
　　6．3号土坑土層断面
　　7．4号土坑全景
　　8．4号土坑土層断面
　　9．5号土坑全景
　　10．5号土坑土層断面
　　11．9号土坑全景
　　12．9号土坑土層断面
　　13．10号土坑全景
PL17　1．10号土坑土層断面
　　2．11号土坑全景
　　3．11号土坑土層断面
　　4．12号土坑土層断面
　　5．13号土坑全景
　　6．13号土坑土層断面
　　7．14号土坑全景
　　8．14号土坑土層断面
　　9．15号土坑全景
　　10．15号土坑土層断面
　　11．16号土坑全景

12. 16号土坑土層断面
13. 17号土坑全景
14. 17号土坑土層断面
15. 18号土坑全景
16. 18号土坑土層断面
17. 19号土坑全景
18. 19号土坑土層断面

PL18 1. 22号土坑遺物出土状態
2. 22号土坑全景
3. 22号土坑土層断面
4. 23号土坑全景
5. 23号土坑遺物出土状態
6. 23号土坑土層断面
7. 24号土坑全景
8. 24号土坑土層断面
9. 26号土坑全景
10. 26号土坑遺物出土状態
11. 27号土坑遺物出土状態

PL19 1. 27号土坑全景
2. 28・35号土坑全景
3. 28号土坑土層断面
4. 29号土坑遺物出土状態
5. 29号土坑全景
6. 29号土坑土層断面
7. 36号土坑全景
8. 36号土坑土層断面
9. 37号土坑全景
10. 38号土坑全景
11. 38号土坑土層断面
12. 40号土坑全景
13. 40号土坑土層断面
14. 41号土坑全景
15. 41号土坑土層断面

PL20 1. 43号土坑全景
2. 43号土坑土層断面
3. 45号土坑全景
4. 46号土坑全景
5. 46号土坑土層断面
6. 47号土坑全景
7. 47号土坑土層断面
8. 50号土坑全景
9. 50号土坑土層断面
10. 51号土坑土層断面
11. 51・52・53号土坑全景
12. 52・53号土坑土層断面
13. 52号土坑土層断面
14. 54号土坑全景
15. 54号土坑土層断面
16. 57号土坑全景
17. 57号土坑土層断面

PL21 1. 58号土坑全景
2. 58号土坑土層断面
3. 59・60号土坑全景
4. 60号土坑土層断面
5. 61号土坑全景
6. 61号土坑土層断面
7. 62号土坑全景
8. 62号土坑土層断面
9. 63号土坑全景
10. 63号土坑土層断面
11. 64号土坑全景
12. 64号土坑土層断面
13. 65号土坑全景
14. 66号土坑全景
15. 66・90号土坑土層断面
16. 71号土坑全景
17. 71号土坑土層断面
18. 90号土坑全景

PL22 1. 77号土坑全景
2. 77号土坑土層断面
3. 78号土坑全景
4. 78号土坑土層断面
5. 80号土坑全景
6. 80号土坑土層断面
7. 81号土坑全景
8. 82号土坑全景
9. 82号土坑土層断面
10. 83号土坑全景
11. 83号土坑土層断面
12. 86号土坑土層断面
13. 94号土坑全景
14. 94号土坑土層断面
15. 97号土坑土層断面
16. 98号土坑全景
17. 98号土坑土層断面

PL23 1. 99号土坑全景
2. 99号土坑土層断面
3. 1号埋設土器出土状態
4. 1号埋設土器掘り方全景
5. 2号埋設土器出土状態
6. 1号焼土検出状況
7. 1号焼土土層断面
8. 1号集石全景

PL24 1. M13グリッド遺物出土状況
2. N13グリッド遺物出土状況
3. N13グリッド深鉢出土状況
4. R10グリッド深鉢出土状況
5. L11グリッド遺物出土状況
6. O3グリッド遺物出土状況
7. P11グリッド遺物出土状況
8. L14グリッド遺物出土状態

PL25 1. 7号土坑全景
2. 7号土坑土層断面
3. 8号土坑全景
4. 8号土坑土層断面
5. 20号土坑全景
6. 20号土坑土層断面
7. 21号土坑全景
8. 21号土坑土層断面
9. 42号土坑全景
10. 42号土坑土層断面
11. 44号土坑全景
12. 44号土坑土層断面
13. 44号土坑掘削工具痕（西壁）
14. 44号土坑掘削工具痕（東壁）
15. 44号土坑掘削工具痕（北壁）
16. 48・49号土坑土層断面
17. 49号土坑全景
18. 49号土坑土層断面

PL26 1. 70号土坑全景
2. 70号土坑土層断面
3. 73号土坑全景
4. 73号土坑土層断面
5. 74号土坑全景

6．74号土坑土層断面
7．79号土坑全景
8．79号土坑土層断面
9．85号土坑全景
10．85号土坑土層断面
11．87号土坑全景
12．87号土坑土層断面
13．88号土坑全景
14．88号土坑土層断面
15．89号土坑全景
16．89号土坑土層断面
17．92号土坑全景
18．92号土坑土層断面
PL27 1．93号土坑全景
2．93号土坑土層断面
3．96号土坑全景
4．96号土坑土層断面
5．96号土坑テフラ混入状況
6．96号土坑張り底面全景
7．32・34号土坑全景
8．67号土坑全景
9．67号土坑土層断面
10．68号土坑全景
11．68号土坑土層断面
12．84号土坑全景
13．84号土坑土層断面
14．91号土坑全景
15．91号土坑土層断面
16．6号土坑全景
17．6号土坑土層断面
PL28 1．48号土坑全景
2．48号土坑土層断面
3．48号土坑横断面
4．48号土坑杭底全景
5．48号土坑杭5土層断面
6．48号土坑杭1土層断面
7．48号土坑杭2土層断面
8．48号土坑杭3土層断面
9．69号土坑全景
10．69号土坑土層断面
11．69号土坑テフラ堆積状況
12．69号土坑杭1・杭2土層断面
13．69号土坑杭3・杭4土層断面
14．69号土坑杭5土層断面
15．69号土坑杭6土層断面
PL29 1．72号土坑全景
2．72号土坑土層断面
3．72号土坑テフラ堆積状況
4．72号土坑杭底全景
5．72号土坑杭3・杭4土層断面
6．72号土坑杭5土層断面
7．72号土坑杭6・杭7土層断面
8．1号道全景
9．1号道土層断面
10．山道（あしぐら観音付近）
11．あしぐら観音
12．あしぐら観音
13．あしぐら観音台座
14．あしぐら観音

出土遺物写真

PL30～43 住居・竪穴状遺構出土土器
PL43～61 住居・竪穴状遺構出土土器破片
PL61～54 土坑出土土器・埋設土器
PL64～96 遺構外出土遺物（土師・鉄器）
PL97～105 出土石器
PL106～110 土器展開写真

報 告 書 抄 録

ふりがな	だつめにいせき
書名	立馬Ⅱ遺跡
副書名	八ツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	8
シリーズ名	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	375
編著者名	飯森康広/山口逸弘/橋本淳
編集機関	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20060324
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町大字下箱田784-2

遺跡名ふりがな	だつめにいせき
遺跡名	立馬Ⅱ遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんながのはらまちおおあざはやし
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町大字林
市町村コード	10424
遺跡番号	0213
北緯(日本測地系)	363244
東経(日本測地系)	1384116
北緯(世界測地系)	363255
東経(世界測地系)	1384104
調査期間	20020701-20020919
調査面積	2400
調査原因	八ツ場ダム建設
種別	集落／散布地
主な時代	縄文／弥生／平安／近世
遺跡概要	集落－縄文－竪穴住居＋竪穴状遺構＋土坑＋焼土＋集石遺構－土器＋石器／散布地－平安－須恵器／近世－道－古銭＋鉄器
特記事項	縄文時代中期初頭～前半の集落

第１章　調査の経過と方法

第１節　調査に至る経緯と経過

八ツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、建設省関東地方建設局(現　国土交通省関東地方建設局)と群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、吾妻町教育委員会が協議し、平成６年３月18日「八ツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定書」を、建設省関東地方建設局と群馬県教育委員会の両者で締結し、発掘調査事業の実施計画が決定された。同年４月１日、関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で発掘調査受託契約を締結し、同日同教育長と群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の両者で発掘調査委託契約が締結され、調査が開始された。

立馬Ⅱ遺跡の調査は、平成12年から着手されていた国道145号立馬地区改良(その１)工事の施工対象地であった。遺跡地に隣接する地域として、平成14年度５月８日の第１回調整会議(国土交通省八ツ場ダム事務所、県文化課、長野原町教育委員会、八ツ場ダム調査事務所の四者協議：以下同じ)において、保安林であり2,000㎡程度が試掘調査対象となる提案が示された。試掘については、６月10日の第２回調整会議で県文化課による試掘調査を、６月17・18日で行うことで調整がなされた。ただし、実際の試掘調査については、天候の関係で順延となり、同月19日に実施された。試掘の結果、縄文時代住居跡・土坑の存在が確認され、調査範囲が確定され、７月１日から本調査に着手する方針が確定し、８月末調査終了予定となった。なお、同時に調査範囲外について工事着工された。８月５日の第４回調整会議上で、遺構量の関係で８月末調査終了が困難であるため、南側半分を先行して引き渡すことで調整がなされた。

日誌抄録

平成14年度

2002年．７．１　表土掘削

８　遺構確認調査開始

12　航空写真撮影

19　南斜面遺構群から１号住居・土坑調査開始

30　古環境研究所　自然科学分析現地調査

31　２～４号住居調査開始

中之条高校土木課生徒４名　職場体験学習で見学

８．１　５号住居調査開始、北斜面住居群調査着手

13　６号住居調査開始、南斜面先端谷部包含層調査。北斜面谷部表土掘削開始。

１号住居調査終了。１号住居を含む東斜面工事引き渡し。

22　北側谷部調査着手

28　八ツ場ダム工事事務所長遺跡見学のため来跡

９．３　７・８号住居調査着手

５　２～５・７・８号住居調査終了。調査区南半分工事引き渡し。

９　９～11号住居調査着手

10　M13グリッド遺物集中部分調査開始。北斜面土坑群集中調査着手。

19　調査終了・調査事務所撤収

第２節　調査の方法

掘削機（バックホー）による表土の掘削の結果、中央部尾根では表土下にⅦ層が露呈し、南北に埋没する軽微な谷地地形に向かって黒色土が堆積していた。遺構確認作業の結果、埋没谷への地形変換部を中心に、縄文時代の竪穴住居跡が確認された。南北の谷部では廃棄及び流れ込み遺物を主とする縄文土器包含層が確認されたため、規定の４ｍグリッドを基準にして平面的な確認掘削を行った。

竪穴住居跡・土坑などの調査は、埋没土層堆積状況の観察用ベルトを任意に設定し、縄文包含層はグリッド設定線を原則使用して観察用ベルトを設定し、移植ゴテほかにより掘削を行った。

遺構断面（縮尺1/20）測量および写真撮影を行った。

遺構平面測量にあたっては、業者委託によるデジタル平板測量を基本として、任意に縮尺1/10、1/20、1/40、1/100を選択して行った。竪穴住居跡は遺存深度が良好であり、県内有数の縄文時代中期初頭資料である特性を考慮して、遺構確認面近くから原則出土位置を平面実測して、出土地点観測に努めた。

縄文包含層遺物については、将来的な分布範囲の地点的な集約を想定して、４ｍグリッドごとに分別した。

記録写真の撮影には、基本的に６×７、35㎜のモノクロフィルムとリバーサルフィルムを使用した。

第３節　調査区の設定

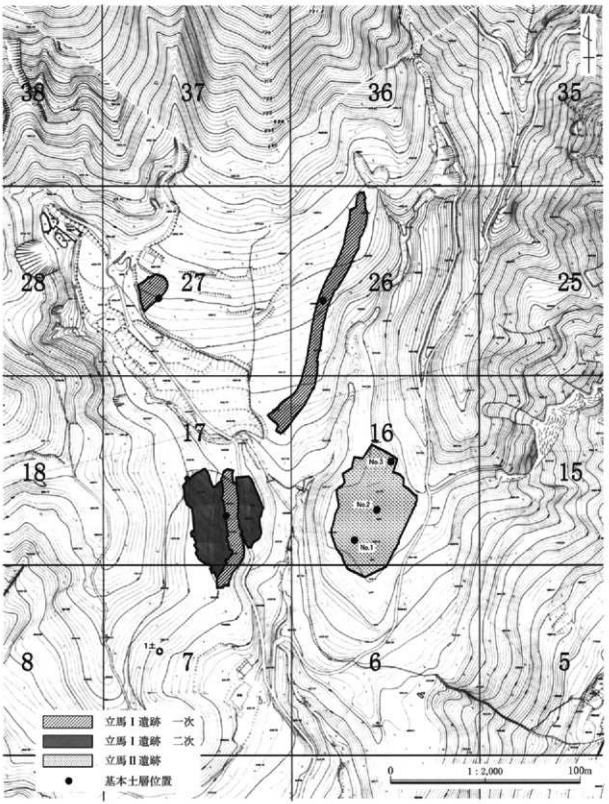
国家座標（2002.4改正以前の日本測地系を使用）に基づく。長野原町域を含め、八ツ場ダム関連の建設事業に及ぶ吾妻町大戸付近に至る範囲に方眼がすでに設定されている。全体的な設定状況については、群埋文2002『八ツ場ダム発掘調査集成(1)』に詳述されているため、参照願いたい。

１㎞方眼をもとに地区（大グリッド）が設定され、本遺跡はNo36地区に所在する。グリッドの設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系を使用しており、方眼の原点は南東隅にあたる吾妻町大柏木付近の座標値Ｘ＝＋58000.0、Ｙ＝－97000.0の地点である。大グリッドはこの地点から北西に向い60区画が設定されている。

さらに100m方眼をもとに、区（中グリッド）が設定され、本遺跡では大部分が16区に入り、一部６区を含むが遺構はない。

グリッドの最小単位として、４ｍ方眼によるグリッド設定がある。Ａ－１～Ｙ－25。100m方眼の中の中グリッド内を４ｍ方眼で625区画に分割する。グリッドの番号はＸ軸にアルファベット、Ｙ軸に算用数字を用いる。Ｘ軸は東から西へＡ～Ｙまで、Ｙ軸は南から北へ１～25までの番号を付す。グリッドの呼称は、南東隅のグリッド番号を使用し、中グリッド名の16区を冠して呼称した。

八ツ場ダム関連埋蔵文化財調査では、別に内部で遺跡略称を設けており、本遺跡は４：林地区にあることから、ＹＤ４－12が付番されている。



第１図　調査区設定図(No36地区)

第４節　基本土層

本遺跡及び立馬Ⅰ遺跡は小河川を挟んで立地することから別の遺跡地として把握されている。しかし、基本土層は同様な様相を持つことから、地域的な確認も含めて本節で両者を並記する。なお、基本土層観測位置は第１図に示してある。

本遺跡中央部は北側山岳部から続く尾根が張り出しており、傾斜地のため黒色土などの流失が著しく、表土下はすぐローム層となり、以下As-YPkが厚さ１ｍ弱堆積している。尾根を挟んだ南北面は西側に南流する立馬沢へ向かって傾斜する軽微な谷地形をなし、1.5mを超える黒色土が堆積して、縄文土器包含層を形成している。また、尾根は緩く比較的広いことから、居住に適した南斜面として縄文集落が形成されたものである。

立馬沢を挟んで西側の立馬Ⅰ遺跡は、立馬沢上流で二筋の流路に挟まれた狭い南斜面と縁辺になっている。26区は東側に流れる立馬沢支流に向かって傾斜するものの、土砂の崩落などは少なく比較的安定した土層堆積を形成している。17区も南東傾斜地であるが、西側背後のやせ尾根から急激に東傾斜することから土砂の堆積が著しく、２ｍ近い黒色土が堆積し、弥生～平安時代遺物包含層と縄文時代早期・前期包含層の二枚の文化層を持っている。27区は立馬沢湧水点に近く北側背後に急峻な山岳部を背負い、中～大角礫を含んだ崩落土が数層にわたっている。遺構はこうした崩落土を掘り込むかたちで造られている。

16・17・26区　基本土層

Ⅰ　黒褐色土　As-Aをわずか含む。表土。

Ⅱ　灰褐色土　黄色小礫を少量含む。

Ⅲ　黒褐色土　As-YPk・黄色小礫を少量含む。

　一部土坑に堆積するAs-B・As-Kkや色調の明るい褐色土はこの層中に含まれる。

Ⅳ　暗褐色土　As-YPk・細粒黄色軽石をやや多く含む。

Ⅴ　黒褐色土　As-YPkをやや多く含む。

Ⅵ　灰褐～褐色土　モザイク状に黄褐色粘質土を含む。ローム漸移層。

Ⅶ　黄褐色粘質土　下層は色調鈍く堅く締まる。

Ⅶ'　にぶい黄褐色粘質土　中～大角礫（山石）を多く含む。崩落土堆積層。

As-YPk　上位に堅く締まったオリーブ～桃色火山灰層が一部で見られる。

　下部の地形変化により、層厚は非常に異なる。

Ⅷ　黄褐色粘質土　下層に粗粒白色軽石（As-OK）を含む。

27区　基本土層

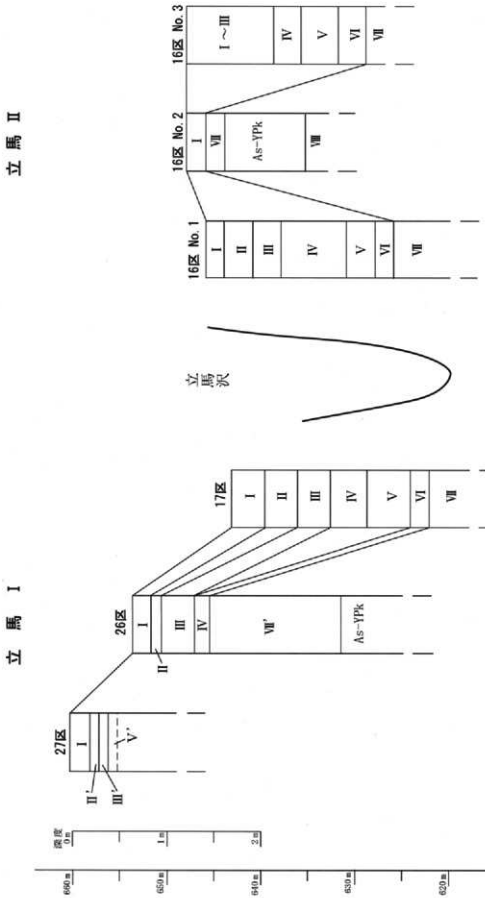
Ⅰ　黒褐色土　中～大角礫（山石）を多く含む。表土。

Ⅱ'　灰褐色土　中～大角礫（山石）を多く含む。

Ⅲ'　中～巨角礫　オリーブ褐色土が混じる。崩落土堆積層。

Ⅴ'　暗灰色土　中～大角礫（山石）を多く含む。

以下、にぶい黄褐色礫混土と黒褐色礫混土が不規則な互層をなす。崩落土堆積層。


立馬Ⅱ
16区 No. 1
16区 No. 2
16区 No. 3
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
Ⅶ
As-YPk
Ⅷ
Ⅰ～Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
立馬沢
立馬Ⅰ
17区
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
26区
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅶ'
As-YPk
27区
Ⅰ
Ⅱ'
Ⅲ
Ⅴ'
深度
0m
1m
2m
660m
650m
640m
630m
620m

第2図　基本土層図

第２章　地理的環境と歴史的環境

第１節　地理的環境

長野原町の中心部を流れる吾妻川は、深い峡谷を刻んで東流している。今から200～100万年前、浅間山に重なる領域には別の火山活動があり、三原付近（蟹恋村）に湖を形成していた。この湖に堆積した粘土は「吾妻粘土」などの名で呼ばれ、厚さ50m以上で標高1,100m辺りまで分布し、湖の最高水位を知ることができる。この湖は浅間山の活動以前には埋没して現在の吾妻川の流路が現れ、渓谷を刻み始めたらしいが、その後も浅間火山活動による堆積物によって埋没が繰り返され、流域に河岸段丘地形を形成した。段丘は最上位・上位・中位・下位の概ね４つにまとめられている。

吾妻川は南北を険しい山地に囲まれている。北側の高間山・王城山は90万年前くらいに活動していたもので、激しい浸食を受けて現形を留めていない。南側の管峰（かんぼう）も古い火山で、活動時期は100万年ほど前と言われ、岩峰丸岩を形成する溶岩を流出している。更に南方には現在も活動する浅間山がそびえる。噴火活動はおおよそ10数万年前からとみられ、天仁元年(1108)に浅間Ｂ軽石、天明３年(1783)に浅間Ａ軽石を降下させた噴火は、前掛山山頂の釜山を火口としている。当遺跡におけるテフラの具体的な堆積状況については、第５章自然科学分析を参照願いたい。

本遺跡は吾妻川北岸の王城山南麓に位置し、大字林に属する。王城山の浸食は激しく、深い谷が山頂に向かって数条延びている。折の沢もその一つであるが、本遺跡が隣接する渓流は折の沢の支流立馬沢であり、近くに湧水点を持つ２つの流路が合流してできている。西方約500m以西には林の集落があり、最上位段丘面に載っている。ふつう段丘面はほぼ水平に近いが、ここでは吾妻川に向かって低くなっている。これは山から流れてきた谷川による土砂の堆積によるものである。この段丘面の最上部の標高は約650mであり、本遺跡の標高とほぼ等しい。

小字名である「立馬」（だつめ）は珍しい地名であり興味深い。地元の古老たちの話によれば、３つほどの由来が考えられている。①馬が立ち上がるほど斜面が険しい所、②馬に乗せた荷駄を詰め替える場所、③狩猟場で追い込んだ獲物を撃つ場所を「立間」（たつま）といい、一部では「ダツメ」ともいう。以上、それぞれが最もらしい由来であるが、第７章に掲載のとおり、本遺跡16区はまさしく、狩猟における「立間」であり、調査前まで狩猟が行われていた証言を得ることができた。よって③の由来が最も有力であると考える。なお、本文に掲載のとおり、本遺跡では狩猟用の陥し穴とみられる土坑が多数発見されており、示唆に富む結果となっていることを付言しておきたい。

第２節　歴史的環境

旧石器時代　遺構は未発見だが、柳沢城跡(32)で細石器文化期の珪質頁岩製のスクレイパー１点が出土する。

縄文時代　草創期では表土採集遺物ながら、横壁勝沼遺跡(22)で槍先形尖頭器１点が発見されている。

早期では、表裏縄文・撚糸文・押型文などの土器群と獣骨の出土した石畑岩陰遺跡(23)が著名であるが、近年調査された楡木Ⅱ遺跡(４)は、撚糸文期の竪穴住居跡17軒が調査された全国的にも希少な遺跡である。本遺跡と同じく、林地区に属し現集落の西端部に位置する。湧水に近い南斜面に立地するなど共通点が多く、示唆に富む遺跡である。

前期では、坪井遺跡(25)で前期初頭(花積下層式期)の住居跡１軒、暮坪遺跡(26)で前期前葉（二ツ木式期）の住居跡２軒、長畝Ⅱ遺跡(24)で関山～黒浜式期の住居跡２軒、楡木Ⅱ遺跡では黒浜式・有尾式～前期後半(諸

磯式）の住居跡９軒が調査されている。

中期前半（五領ヶ台式・阿玉台式期）の調査例は少なく、楡木Ⅱ遺跡で住居跡２軒が調査されたほか、幸神遺跡(20)で完形の阿玉台式土器を持つ円形土坑１基が発見された程度で、本遺跡は希少な資料となる。中期後半以降になると、広い範囲で集落が見られる。横壁中村遺跡(21)では、中期後半(加曽利Ｅ式期)から後期中葉(加曽利B式期)にわたる住居跡250軒余が見つかり、現在でも調査進行中である。また、横壁中村遺跡と吾妻川を挟んで北西対岸にある長野原一本松遺跡(19)でも、中期後半(加曽利Ｅ式期)から後期中葉(加曽利B式期)にわたる住居跡250軒以上が報告され、現在も調査を継続している。

晩期では石畑岩陰遺跡で氷式や安行式、千網式土器などが収集されている。本遺跡も同様に多様な側面を持つが、住居跡の発見は八ツ場地区で初めての事例となった。川原湯勝沼遺跡(18)では晩期から弥生時代初頭に属する土坑２基が調査され、再葬墓の可能性が指摘されている。林地区では上原Ⅳ遺跡で浮線文系の土器片多数が出土しているが、土坑１基が当該期である可能性以外、遺構は不明な状況である。

弥生時代　吾妻地域では、中期前半の岩櫃山式土器の標識遺跡である岩櫃山・鷹ノ巣岩陰遺跡(吾妻町)など当期を代表する遺跡があり、資料の増加が期待されていた。横壁中村遺跡では樫王式土器の甕を埋設する再葬墓の可能性がある土坑１基が検出されている。本遺跡発見の中期後半の土器棺墓も、八ツ場地区では初めての調査事例であり注目される。

古墳時代　吾妻川流域の古墳の分布は、確実な面では吾妻町岩島付近が西限となっている。集落については林地区の林宮原遺跡Ⅱ(17)で５世紀末～６世紀初頭の住居跡１軒が調査され、八ツ場地区では初めての発見となった。林地区では、今後とも資料の増加が期待されている。

古代　律令制下の上野国内の郡・郷の状況は、十世紀の『和名類聚抄』の記載に詳しいが、吾妻郡では長田・伊参・大田の３つの郷しか記載がなく、本地域を含む西吾妻地域の状況を知ることはできない。平安時代の調査遺跡では住居跡が点在する程度のものが多かったが、楡木Ⅱ遺跡では９世紀後半から10世紀前半の住居跡17軒が発見された。中でも、「三家」の墨書を有する土器が数点あることは注目される。「ミヤケ」は古代朝廷の直轄領を指しており、県内では緑野屯倉や佐野三家の存在が『日本書紀』や『山ノ上碑』の記載で知られている。吾妻郡内ではその存在の可能性を初めて示す資料となり、非常に重要な成果である。また林集落の中央部に位置する林宮原遺跡Ⅱでは、わずか200㎡の調査面積の中で、９世紀後半から10世紀前半の住居跡６軒が重複して発見されており、周辺に同期の大きな集落が広がる可能性を見せている。

中世　仁治２年（1241）、本地域は三原荘と呼ばれ海野幸氏の領有であった（『吾妻鏡』）が、正確な荘域は不明である。海野一族は下屋・鎌原・西窪・羽尾などの一族を輩出して本地域各所に広がり、領主層として勢力を温存していった。林地区は羽尾氏の勢力下であったらしく、永禄９年(1566)に嶽山城攻略に戦功のあった湯本氏は、武田信玄から羽尾領之内　林村で20貫文の領地を得ている(『加沢記』所載文書)。なお、羽尾氏は武田氏の吾妻計略の中で没落を遂げる。同じく林村を領有した地侍に横谷氏がある。寛文８年(1668)に所領を安堵された横谷勘十郎は、横谷村・松尾村・林村で合わせて359石余を相続している（上田横谷家文書）。領有開始の時期は不明だが、吾妻渓谷を挟んで横谷村・林村両方を領有していた点で注目される。

中世城郭では長野原城(31)や丸岩城(33)があるが、発掘調査によって常滑焼・珠洲焼の大甕をはじめ、多彩な出土遺物を有することが判明した柳沢城(32)も注目される。林地区では小字名「堀之内」の範囲が「林城」(28)として紹介され、領主の居所と推測されている。また、王城山神社の裏山には「林の烽火台」跡(29)が良好に残存しており、林集落との関わりが想像される。

調査遺跡では、楡木Ⅱ遺跡で信仰物「つぶらっこ様」との有機的な関係を思わせる掘立柱建物群があり、一つ東側の谷地に位置する二反沢遺跡(10)でも14～16世紀の遺物を多く有する区画遺構が発見された。吾妻川に面する下原遺跡(８)では15世紀代の中世屋敷遺構が調査されている。以上から、林地区の西端部にやや多く中世遺跡が分布することがわかってきた。

近世　天正18年(1590)小田原合戦によって北条氏が滅び、徳川家康が江戸に入部することとなったが、永禄年間以来吾妻地域を支配してきた真田氏は、豊臣秀吉との結びつきを背景に勢力を温存していた。そうした関係も関ヶ原合戦では悪い方向に左右することとなったが、一族分離で乗り切った末、真田信幸が沼田藩領に加え、信濃国上田までも領有することとなった。やがて真田氏は本家にあたる上田藩(松代藩)と沼田藩に分かれることとなり、天和元年(1681)には真田信利・信澄の悪政のためか沼田藩が改易となり、以後長野原地域のほとんどが天領(幕府領)となされた。この真田信利が実施した寛文２年(1662)の伊賀守検地では、長野原地域の中で林村が571石余と最大の石盛りとなっている。

天明３年(1783)の浅間山噴火による泥流被災の遺跡では、八ツ場ダム関連の発掘調査をはじめ、県内各所の吾妻川・利根川流域で畑跡などの調査事例が増加してきている。中でも、町内長野原字坪井で泥流に被災した小林助右衛門屋敷跡(27)は広く知られた長者屋敷であり、杉田玄白の手記によっても被災の状況が伝えられてきた。一部発掘調査されて礎石建物跡などが発見され、その実態が漸くわかりはじめている。なお、本遺跡は標高が高いため、泥流被害は及んでいない。

本遺跡周辺の交通を知る資料として、道しるべと馬頭観音がある。林集落から本遺跡へと向かう道の分岐点に林の道しるべ(34)があり「右ハ　ぬまた　者(は)るな　道　左ハ　やま」と刻まれ、本遺跡方向は山道で往還という意識は認められない。馬頭観音群(35)は伝承地名「あしぐら観音」に集中的に造立されており、宝暦４年（1754）を最古に５基が並んでいる。山仕事の道にしては馬頭観音の造立量が多く感じられるが、そこから奥は久森沢川に降りていくだけとなっている。

参考文献

長野原町　1976『長野原町誌』上巻

長野原町　1988『長野原町の自然』

長野原町　1993『長野原町の民俗』

長野原町　2004『町内遺跡Ⅳ』

松原孝志編　2002『八ツ場ダム発掘調査集成(1)』財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

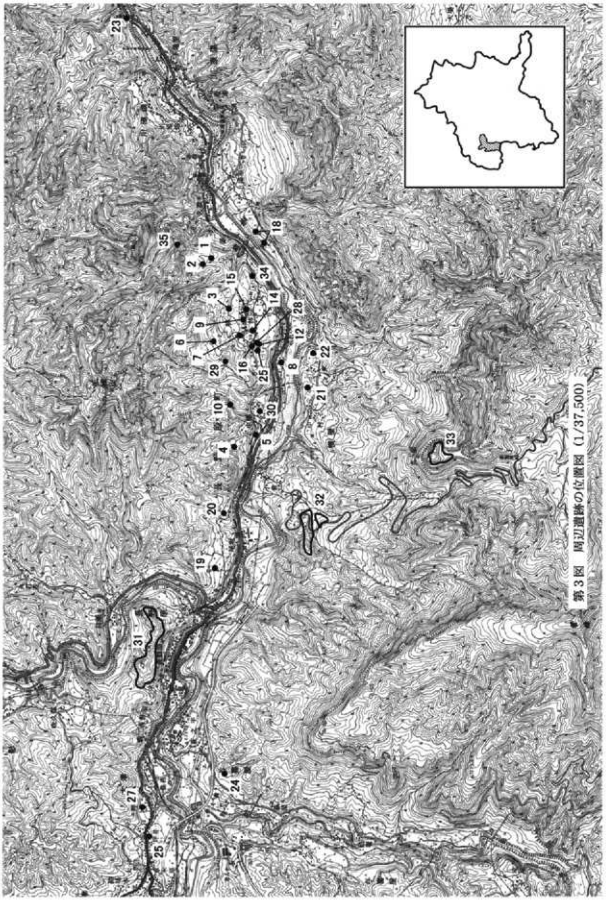
諸田康成編　2002『長野原一本松遺跡(1)』財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

山崎一　山口武夫共著　1972『吾妻郡誌歴史』

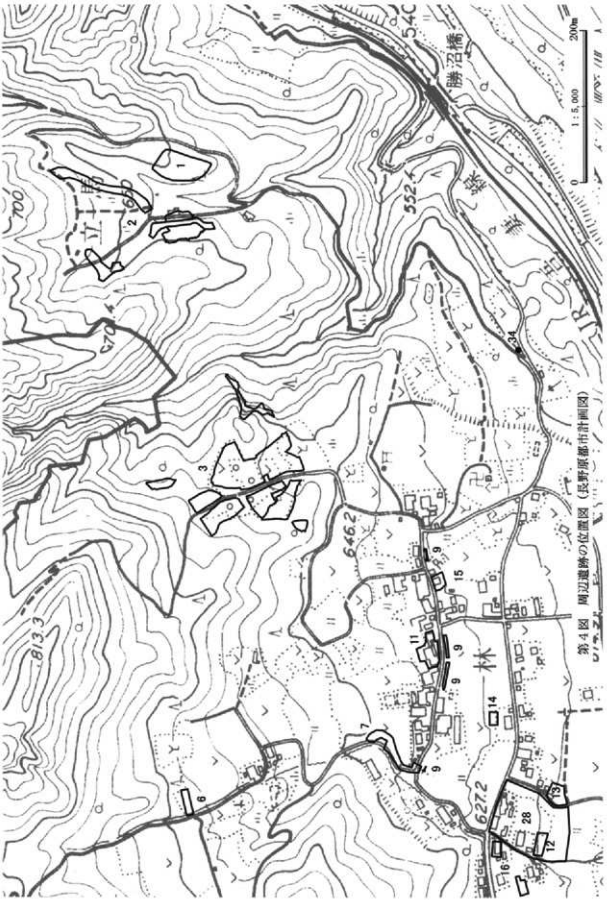
第１表　周辺遺跡の一覧

NO	遺跡名	所在地	概要	文献等
1	立馬Ⅱ遺跡	林	本報告書	群埋文2003『年報22』・同2006『年報25』
2	立馬Ⅰ遺跡	林	縄文時代早期前半の住居２軒、晩期住居１軒、弥生時代中期住居２軒、平安時代住居３軒。縄文時代早期包含層遺物多量出土。縄文時代～平安時代の陥し穴多数検出。	群埋文2003『年報22』・同2006『年報25』
3	花畑遺跡	林	平安時代の住居３軒、陥し穴51基などを検出。	群埋文2002『八ツ場ダム発掘調査集成(1)』
4	楡木Ⅱ遺跡	林	縄文時代早期前半（撚糸文）の住居17軒、前期住居３軒、中期住居１軒。平安時代住居（９～10世紀）14軒。「三家」と書かれた墨書土器あり。中世の掘立柱建物群多数検出。信仰岩石「つぶらっこ様」と関係か。	群埋文2001『年報20』・同2002『年報21』・同2005『年報24』
5	楡木Ⅲ遺跡	林	縄文時代前期、弥生時代前期を中心とする包含層検出。	NO３と同じ
6	上原Ⅱ遺跡	林	トレンチ調査の結果、遺構は検出されなかった。	群埋文2005『年報24』
7	上原Ⅳ遺跡	林	縄文時代後期敷石住居跡４軒、晩期の土器包含層、近世の河道跡検出。	群埋文2004『年報23』
8	下原遺跡	林	古墳時代中期住居跡１軒、平安時代住居跡１軒、中世の屋敷跡１カ所（15世紀代）。中世から近世の畑跡３面検出。	群埋文2003『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』、同2005『年報24』
9	林中原Ⅰ・Ⅱ遺跡	林	縄文時代・平安時代の遺物を検出した。	群埋文2005『年報24』
10	二反沢遺跡	林	中世の石垣を伴う土坑ほか、鍛冶関連遺物。近世の畑跡検出。	群埋文2001『年報20』
11	上原Ⅳ遺跡	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委2003『町内遺跡Ⅲ』
12	林中原Ⅰ遺跡	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委2003『町内遺跡Ⅲ』
13	林中原Ⅰ遺跡Ⅱ	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委2004『町内遺跡Ⅳ』
14	林中原Ⅰ遺跡Ⅳ	林	縄文時代後期敷石住居跡１軒ほかを検出。	長野原町教委2004『町内遺跡Ⅳ』
15	林中原Ⅱ遺跡	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委2004『町内遺跡Ⅳ』
16	林宮原遺跡	林	試掘調査の結果、縄文時代の包含層検出。	長野原町教委2003『町内遺跡Ⅲ』
17	林宮原Ⅱ遺跡	林	古墳時代中期住居跡１軒、平安時代住居跡（９～10世紀）６軒検出。	長野原町教委2004『町内遺跡Ⅳ』
18	川原湯勝沼遺跡	川原湯	縄文時代晩期の埋甕２基。平安時代の住居跡３軒、天明三年の畑跡検出。	群埋文2005『年報24』
19	長野原一本松遺跡	長野原	縄文時代中期後半～後期の住居跡を中心とする集落跡。平安時代の住居跡も含め、250軒以上を検出。調査継続中。	群埋文2002『長野原一本松遺跡(1)』、同2001～2005『年報20～24』
20	華神遺跡	長野原	縄文時代中期住居跡２軒ほかを検出。	群埋文1997『年報16』、同1998『年報17』
21	横壁中村遺跡	横壁	縄文時代中期後半～後期の住居跡を中心とする集落跡。平安時代の住居跡も含め、250軒以上を検出。中世の屋敷跡１カ所。鍛冶関連遺構あり。調査継続中。	群埋文2003『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』、同1997～2005『年報16～24』
22	横壁勝沼遺跡	横壁	縄文時代土坑数基。槍先形失頭器１点表採。平安時代住居跡１軒検出。	NO３と同じ
23	石畑岩陰遺跡	川原畑	縄文時代草創期～晩期の包含層検出。	『群馬県史』資料編１
24	長畝Ⅱ遺跡	与喜屋	縄文時代前期住居跡２軒、中期後半住居跡２軒検出。	長野原町教委1992『長畝Ⅱ遺跡・坪井遺跡』
25	坪井遺跡	大津	縄文時代前期初頭住居跡１軒、中期後半住居跡19軒、平安時代住居跡１軒、掘立柱建物跡１棟ほかを検出。	長野原町教委1992『長畝Ⅱ遺跡・坪井遺跡』、同2000『坪井Ⅱ遺跡』
26	暮坪遺跡	羽根尾	縄文時代前期前葉住居跡２軒ほかを検出。	長野原町教委2001『暮坪遺跡』
27	小林助右衛門屋敷跡	長野原	天明泥流に埋没した吾妻の分限者小林助右衛門屋敷の一部。蔵石建物跡２棟、土蔵跡１棟ほかを検出。	長野原町教委2005『小林家屋敷跡』
28	林城	林	地名「堀ノ内」という以外詳細不明。	県教委1988『群馬県の中世城館跡』
29	林の烽火台跡	林	王城山神社の裏山に所在。堀切２本。	長野原町教委保管「林の烽火台綱張り図」金子康夫氏作図
30	中棚の砦跡	林	伝承のみ、詳細不明。	県教委1988『群馬県の中世城館跡』
31	長野原城	長野原	長野原中心部の裏山にある拠点的な城郭。	同上
32	横沢城	横壁	土塁や堀を調査。珠洲焼の大甕ほか中国陶磁器片出土。	長野原町教委
33	丸岩城	横壁	草津道の須賀尾峠を守備する山城。	県教委1988『群馬県の中世城館跡』
34	林の道しるべ	林	造立年不明「右ハ　ぬまた　者(ひ)るな　道　左ハ　やま」	長野原町1989『長野原町の石造文化財』
35	馬頭観音群（あしべら観音）	林	文化４年以降、明治大正期にわたる数基の馬頭観音群。	

略称　群埋文：財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団、県教委：群馬県教育委員会、長野原町教委：長野原町教育委員会



第３図　周辺遺跡の位置図（1/37,500）



第4図　周辺遺跡の位置図（長野県都市計画図）

第３章　検出された遺構と遺物

第１節　遺跡の概要

本遺跡は尾根部縁辺に営まれた縄文時代中期の集落を主とする遺跡であり、同時期の土坑も分布している。また、谷部から傾斜面を中心に狩猟用と見られる陥し穴が多く分布し、縄文時代から平安時代まで長期間にわたっていた。

縄文時代草創期から早期の遺構は確認されていないが、遺構外遺物110点を掲載した。

同前期も同じく遺構は確認できないが、前期終末期まで継続的に遺構外遺物121点を掲載した。

同中期初頭（五領ヶ台期）から前半（阿玉台期）では、尾根の南北縁辺を利用して竪穴住居跡９軒があり、同時期の土坑も散在する。北側斜面には中期後半の竪穴住居跡１軒も発見された。更に中期と思われるが、確定できない住居跡１軒がある。

同後期・晩期の遺物もわずか出土したが、遺構は不明である。

本遺跡で発見された陥し穴と見られる土坑のうち、粕川テフラの堆積状況や掘り込み面の層位から平安時代とした以外の土坑は、平安時代以前の土坑(陥し穴)として報告を行った。

弥生時代の遺物も非常に少ないが出土している。

平安時代には陥し穴と見られる土坑４基がある。このほか、遺構外から須恵器片がわずか出土している。

近世では古銭や火打金が出土したが、明確な遺構は見つからなかった。

第２節　縄文時代

第１項　竪穴住居跡

１号住居跡（第７図、第23.45～47図、ＰＬ３、30.43～45）

位置　16－Ｋ・Ｌ－３・４グリッド　**重複**　37号土坑と新旧関係不明　**形態**　隅丸方形

主軸方位　Ｎ－４°－Ｅ

規模　南北4.92m以上、東西4.27m以上。東斜面際にあり、東方向への地滑りと地割れにより東半分を欠損。

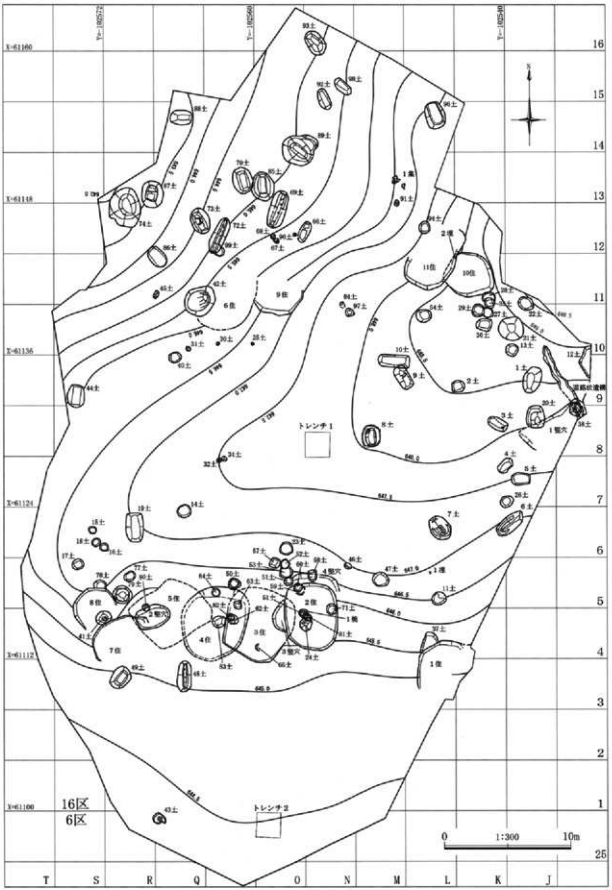
壁　壁高は北辺31～45㎝、西辺19～49㎝である。

炉　中央部より西側床面に焼土があり、状態は悪いが炉の痕跡であろう。焼土範囲は32.5×19㎝。

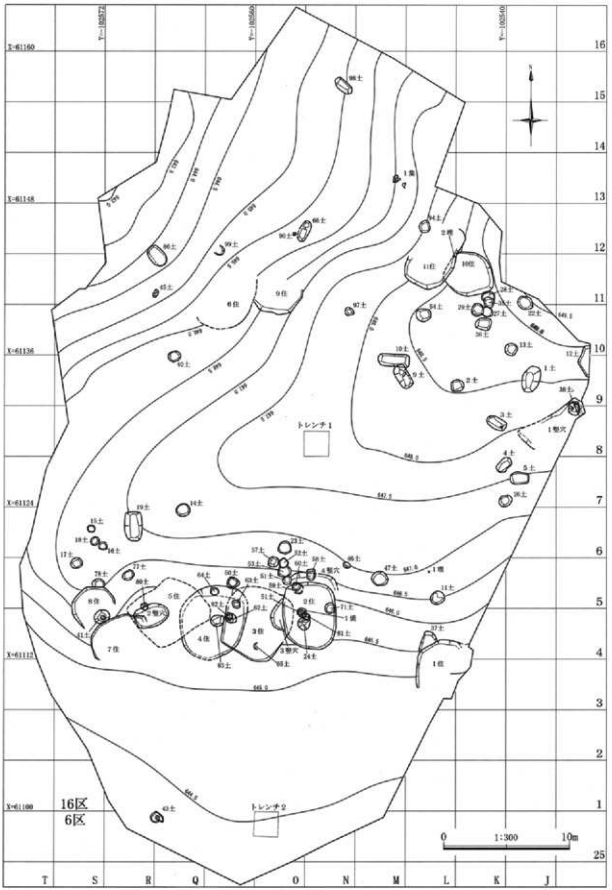
内部施設　ピットは24本、主柱穴は不明確。北壁に接する形でほぼ完形の伏せ甕(１)があり、内部に人頭大の円礫が入っていた。　**ピットの規模**（長径・短径・深さ㎝）Ｐ１：29、26、37、Ｐ２：23、21、22、Ｐ３：32、29、29、Ｐ４：43、26、39、Ｐ５：35、28、48、Ｐ６：36、32、32、Ｐ７：27、26、22、Ｐ８：31、25、50、Ｐ９：33、(21)、17、Ｐ10：32、26、36、Ｐ11：43、40、35、Ｐ12：21、(9)、45、Ｐ13：32、25、58、Ｐ14：21、19、38、Ｐ15：25、21、16、Ｐ16：31、31、19、Ｐ17：18、16、42、Ｐ18：25、20、28、Ｐ19：20、20、24、Ｐ20・21：22、(13)、43、／(34)、34、42、Ｐ22：31、24、27、Ｐ23：41、38、31、Ｐ24：23、(18)、32

床　ローム面が若干硬化する程度であり、掘り方を持たない。東半分は地滑り等により階段状に落ち込む。

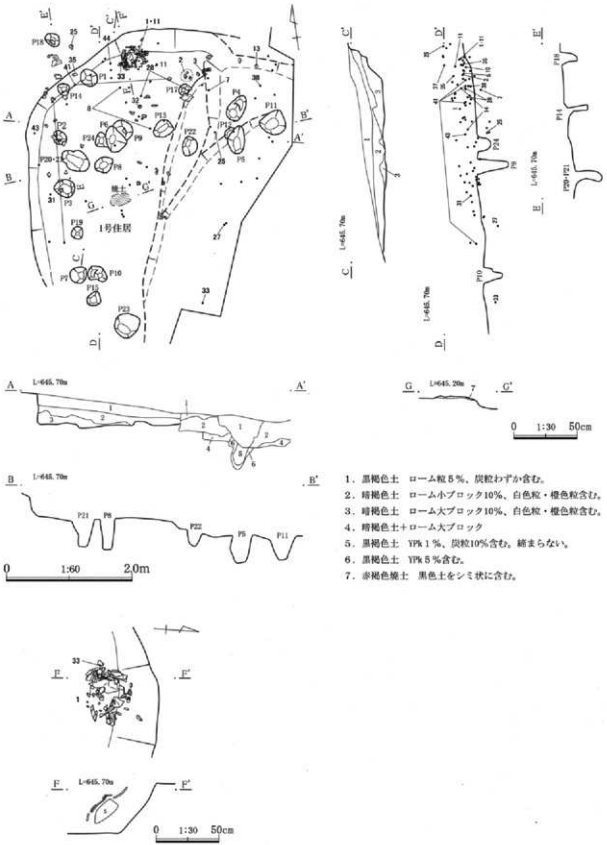
埋没状況　自然埋没　**遺物出土状態**　埋没土中から床面に比較的多く出土したが、北壁近くにある伏せ甕を除いて床面で顕著な遺物はない。


X=61160
X=61148
X=61136
X=61124
X=61112
X=61100
16区
6区
トレンチ１
トレンチ２
0　1:300　10m

第５図　６・16区全体図



第６図　６・16区全体図（縄文）



1．黒褐色土　ローム粒５％、炭粒わずか含む。
2．暗褐色土　ローム小ブロック10％、白色粒・橙色粒含む。
3．暗褐色土　ローム大ブロック10％、白色粒・橙色粒含む。
4．暗褐色土＋ローム大ブロック
5．黒褐色土　YPk１％、炭粒10％含む。締まらない。
6．黒褐色土　YPk５％含む。
7．赤褐色焼土　黒色土をシミ状に含む。

第７図　16区１号住居跡

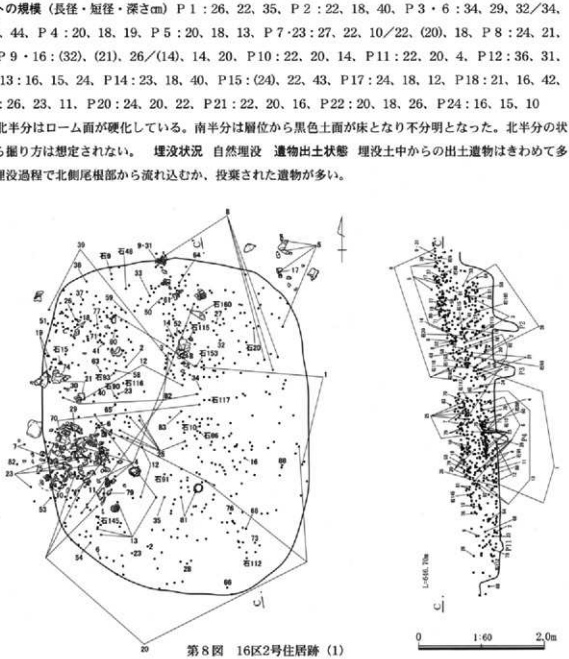
２号住居跡（第９図、第24～27.48～50図、ＰＬ４・５、30～33.45～48）

位置　16－Ｎ・Ｏ－４・５グリッド　**重複**　３号住居、３・４号竪穴状遺構より後出。24号土坑、１号焼土より前出。59～61・71・81号土坑と新旧関係不明。　**形態**　南北に長い隅丸長方形　**主軸方位**　Ｎ－０°

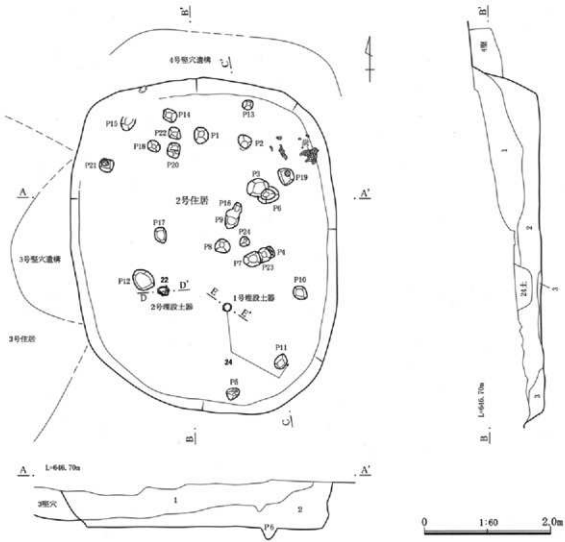
規模　南北5.33m、東西4.28m。　**壁**　壁高は北辺44～52cm、東辺12～44cm、南辺６～28cm、西辺６～14cmである。　**炉**　不明　**内部施設**　ピットは24本で、主柱穴は不明確。南半分に埋設土器(22・24)が２基正位に並んでいたが、周辺に焼土もなく、炉体土器とする根拠がないため、埋設土器２基とした。しかし１号埋設土器(24)の内面は火ハゼが一部認められることから、炉体土器である可能性も残す。出土時は頸部で直線的に欠損し、人為的に割られたとも考えられたが、南東約1.5m離れて口縁部片が接合されたため、元来ハの字形に開く口縁部がついて、埋設されていた可能性が高い。なお、胴部下半部は直線ぎみに欠損し、一部に摩耗も見られるため、人為的に欠かれたものと判断できる。

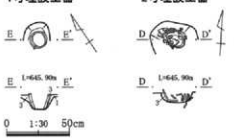
ピットの規模（長径・短径・深さcm）Ｐ１：26、22、35、Ｐ２：22、18、40、Ｐ３・６：34、29、32／34、(25)、44、Ｐ４：20、18、19、Ｐ５：20、18、13、Ｐ７·23：27、22、10／22、(20)、18、Ｐ８：24、21、13、Ｐ９・16：(32)、(21)、26／(14)、14、20、Ｐ10：22、20、14、Ｐ11：22、20、4、Ｐ12：36、31、8、Ｐ13：16、15、24、Ｐ14：23、18、40、Ｐ15：(24)、22、43、Ｐ17：24、18、12、Ｐ18：21、16、42、Ｐ19：26、23、11、Ｐ20：24、20、22、Ｐ21：22、20、16、Ｐ22：20、18、26、Ｐ24：16、15、10

床　北半分はローム面が硬化している。南半分は層位から黒色土面が床となり不分明となった。北半分の状況から掘り方は想定されない。　**埋没状況**　自然埋没　**遺物出土状態**　埋没土中からの出土遺物はきわめて多く、埋没過程で北側尾根部から流れ込むか、投棄された遺物が多い。



第８図　16区２号住居跡（1）





1．暗褐色土　ローム小ブロック10%、白色粒含む。
2．黒褐色土　白色粒含む。
3．黒褐色土　褐色小ブロック５%含む。

第９図　16区２号住居跡（2）

３号住居跡（第10・11図、第28～31.51～54図、ＰＬ６・７、33～36.48～51）

位置　16－Ｏ・Ｐ－３～５グリッド　**重複**　４号住居、82号土坑よりも後出。２号住居、３号竪穴状遺構、62・63・65号土坑より前出。

形態　北側半分が推定線のため不明ながら、隅丸方形と推定される。

主軸方位　Ｎ－31°－Ｅ　**規模**　南北推定5.66m、東西推定5.48m。

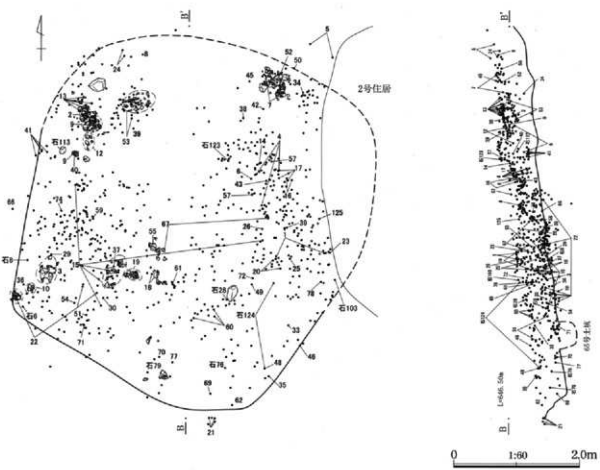
壁　壁高は南辺７～16cm、西辺７～９cmである。２～４号住居まで同時に掘り進めた結果、山側でⅥ・Ⅶ層のローム面を壁面としていた２・４号住居に影響され、Ⅴ層黒褐色土中での北壁面の立ち上がりを平面的にとらえることができなかった。

炉　西壁近くの焼土は地床炉か。焼けは悪い。焼土範囲は41×32cm。落ち込み規模45×36cm、深さ8.5cm。

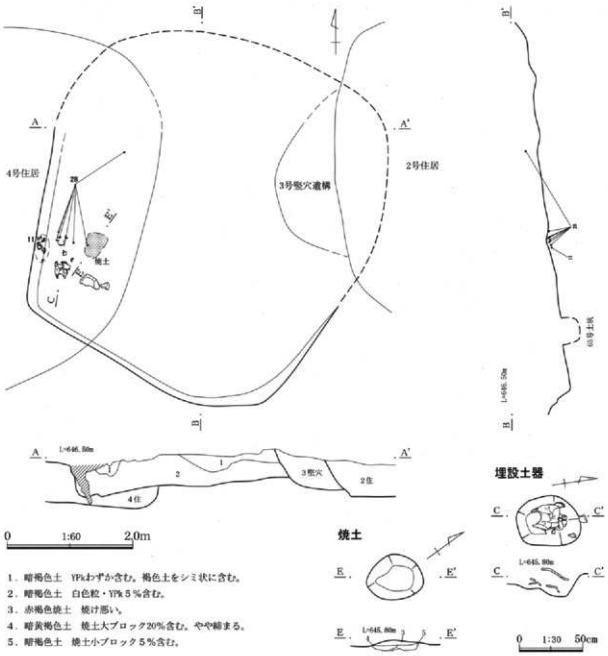
内部施設　ピットは検出されなかった。南西隅部に埋設土器(３)が口縁部を下向きに、斜めに倒れて検出された。口縁部は全周し、底部片以外の破片もほぼそろっている状態で復元できた。底部は接合部から欠損して人為的に打ち欠かれた様子ではないため、元来完形の状態で埋設されたものと判断できる。東側に約30cm離れて扁平な石があり関連が想定される。

床　断面観察で推定されるが、平面的には検出不可。掘り方は想定されない。

埋没状況　自然埋没　**遺物出土状態**　埋没土中からの出土遺物はきわめて多く、埋没過程で北側尾根部から流れ込むか、投棄された遺物が多い。床面では西端部分にやや遺物が集中する。



第10図　16区３号住居跡（1）



第11図　16区３号住居跡（2）

４号住居跡（第12図、第32～34.55～57図、ＰＬ７・８、36・37.51～53）

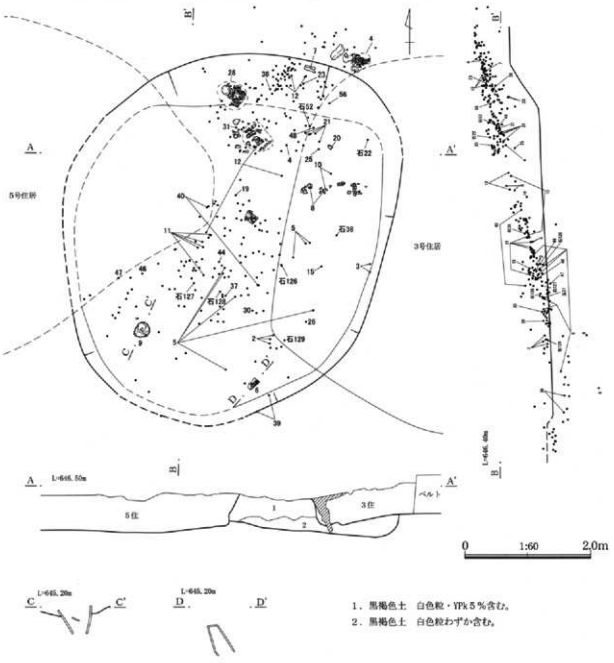
位置　16－Ｐ・Ｑ－３～５グリッド　**重複**　２・５号住居、62・63号土坑より前出。50・64・82・83号土坑と新旧関係不明。　**形態**　不整円形　**主軸方位**　Ｎ－16°－Ｅ　**規模**　南北推定6.06m、東西推定5.20m　**壁**　壁高は北辺５～45㎝、東辺７～28㎝、南辺５㎝、西辺５～９㎝である。

炉　不明　**内部施設**　南端で正位(9)と逆位(6)に埋っている土器が検出されたが、床面に対して深すぎる感もある。掘り込みは確認できず、住居調査終了後の面的な掘削によって出土した経緯もあるが、正位の土器(9)は炉体土器である可能性も残る。接点は見つからなかったが、胴部下部から底部までに破片がいっしょに出土しており、底部を持っていたと判断する。逆位の土器(6)も、床面との深さの違いはあるが、住居時

期よりも新しい様相を持つ土器であり、後出する遺構に伴っていた可能性も含めて、本住居内遺物として扱った。

床　北壁近くはローム面を床とするが、住居の大半は黒色土面を床として不分明。掘り方は想定されない。

埋没状況　自然埋没　**遺物出土状態**　埋没土中からの出土遺物はきわめて多く、埋没過程で北側尾根部から流れ込むか、投棄された遺物が多い。南半分で床面に遺物が点在するが、まとまった個体は見られない。土層観察用ベルト部分については、出土遺物のドット記録を省力化した結果、遺物の流れ込み状況が分断されているが、記録作業上の影響であることを付言しておく。北半分では床面に近い遺物がない点で、特にこの住居は際だっており、ほとんどが流れ込みなどであると判断される。重複関係から周辺でもっとも前出の住居だが、出土遺物の様相にこうした状況が反映されていないのは、そのためであろう。



第12図　16区４号住居跡

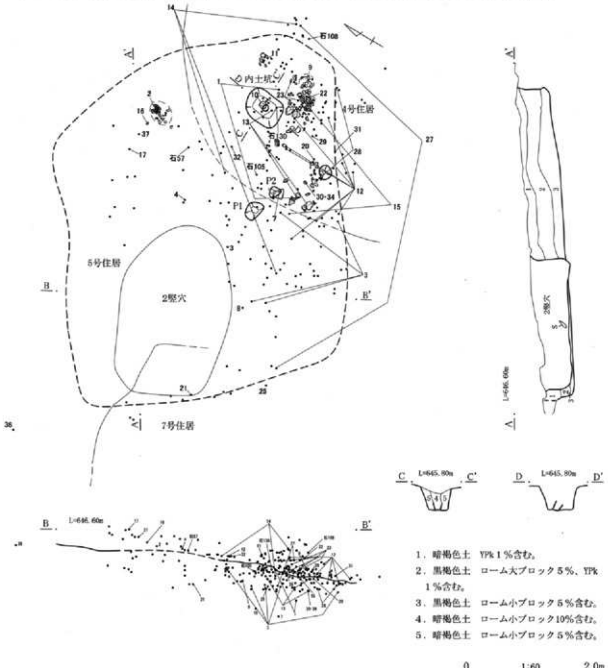
５号住居跡（第13図、第35・36.58・59図、ＰＬ９、37～39.53・54）

位置　16－Ｐ～Ｒ－４・５グリッド　**重複**　４・７号住居より後出で、２号竪穴状遺構より前出。80号土坑と新旧関係不明。　**形態**　推定隅丸長方形　**主軸方位**　Ｎ－41°－Ｗ

規模　南北推定4.94m、東西推定5.50m　**壁**　北壁土層観察面で53cmである。　**炉**　不明

内部施設　ピットは３本、主柱穴不明。南東隅に62×48cm、深さ38cmの方形の内土坑があり、底面に下半分が完存する土器が置かれていた。内面は煤けており、炉体土器としての使用を推測させ、炉の可能性もあるが、土坑自体に焼土は見られない。

ピットの規模（長径・短径・深さcm）Ｐ１：33、22、20、Ｐ２：18、17、19、Ｐ３：22、19、25



第13図　16区５号住居跡

床　黒色土面が若干硬化する。掘り方は想定されない。　**埋没状況**　自然埋没か。埋没土中の遺物が隣接する２～４号住居に比べて少なく、埋没環境の違いをうかがわせる。

遺物出土状態　床面の遺物では、４号住居重複部分に分布の集中が見られる。遺物の帰属は、床面の高さなどを目安にしているが、出土分布を考慮すると疑問が残る。

６号住居跡（第14図、第37・38. 60～63図、ＰＬ10、39・40. 55～57）

位置　16－Ｏ～Ｑ－10・11グリッド　**重複**　42号土坑より前出。９号住居と新旧関係不明。

形態　長円形か。北側は斜面のため欠損。

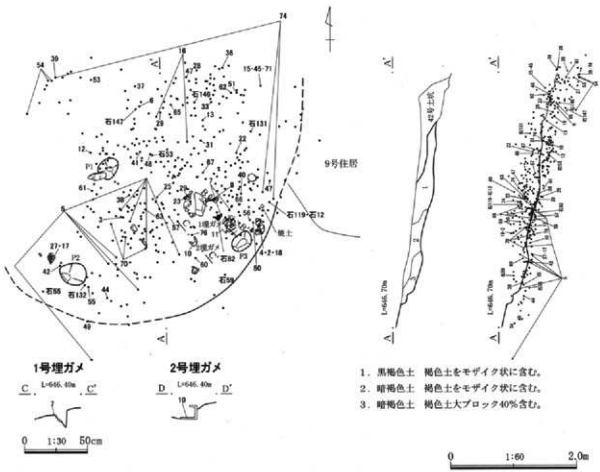
主軸方位　Ｎ－20°－Ｅ　**規模**　南北4.80m以上、東西3.78m以上　**壁**　南壁土層観察面で16cmである。

炉　不明　**内部施設**　ピットは３本、主柱穴不明。南東部に軽微な掘り込みを持って、２基の埋設土器あり。１号埋設土器は口縁片で不自然な出土状態であり、移動している可能性がある。２号埋設土器は下半部が完存する深鉢(10)が横位に出土したもので、炉体土器を思わせるが証左にかける。上半部は輪積み部で水平に欠けている。　**ピットの規模**（長径・短径・深さcm）Ｐ１：35、29、24、Ｐ２：41、37、31、Ｐ３：35、24、59

床　硬化面はなく、遺物の層位などを手がかりとするが不明確。

埋没状況　斜面に向かい傾斜した土層堆積を示すが、自然埋没だろう。

遺物出土状態　埋設土中から床面まで一様に遺物が検出された。後出する42号土坑(陥し穴)出土の遺物13点を含めて掲載した点も留意される。



第14図　16区６号住居跡

７号住居跡（第15図、第39図、ＰＬ11、41.57）

位置　16－Ｒ・Ｓ－３・４グリッド

重複　５号住居、２号竪穴状遺構より前出。８号住居・41号土坑と新旧関係不明。

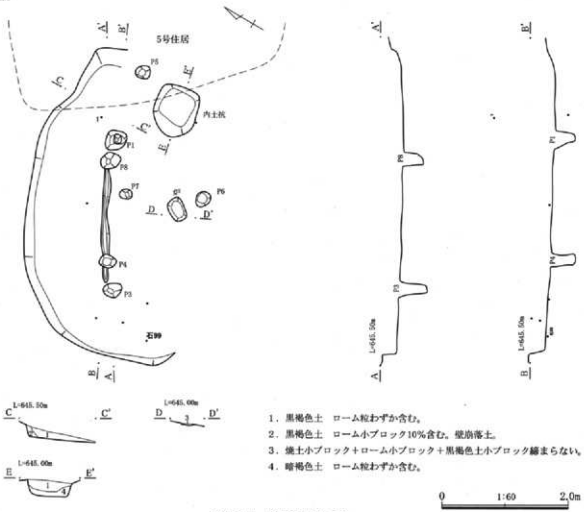
形態　斜面のため山側1/3程度しか遺存しておらず、隅丸方形か。

主軸方位　Ｎ－21°－Ｗ　**規模**　南北2.24m以上、東西5.08m

壁　壁高は北辺40～42㎝、東辺17㎝、西辺28～40㎝である。

炉　中央部にあり、長楕円形で遺存状態悪く、炉床部か。規模26×37㎝、深さ４㎝。焼土をブロック状に含む程度。　**内部施設**　ピットは８本。Ｐ１・Ｐ４とＰ３・Ｐ８の２本ずつで主柱穴となり立て替えか。Ｐ３とＰ８の間に長さ1.8m、最大幅0.13m深さ１～６㎝の溝があり、間仕切りを思わせる。南東部に隅丸方形の土坑がある。規模81×70㎝、深さ27㎝。　**ピットの規模**（長径・短径・深さ㎝）Ｐ１：32、35、21、Ｐ２欠番、Ｐ３：25、27、46、Ｐ４：21、24、38、Ｐ５：21、24、40、Ｐ６：25、24、16、Ｐ７：15、20、44、Ｐ８：33、26、32

床　ローム面がやや堅く硬化する。掘り方は想定されない。　**埋没状況**　土層観察面が少ないという限界もあるものの、埋没土が一様であること。埋没土中の遺物出土が２～５号住居の状況に比して極度に少ないことを考慮して、調査主担当者は人為的な埋没の可能性を示唆している。　**遺物出土状態**　少ない。床面で破片点在。



第15図　16区7号住居跡

８号住居跡（第16図、第64図、ＰＬ11、57）

黒色土面の調査終了後、ローム面まで掘削。輪郭の判然としない落ち込みを確認。当初風倒木と判断されたため、土層観察用ベルトを設けなかったと記録される。

位置　16－Ｒ・Ｓ－４・５グリッド　**重複**　41・78・79号土坑と新旧関係不明。

形態　斜面のため山側2/3程度しか遺存しない。隅丸方形。　主軸方位　Ｎ－36°－Ｗ

規模　南北2.52m以上、東西3.46m　**壁**　壁高は北辺25～67㎝、東辺８～43㎝、西辺４～29㎝である。

炉　中央部にあり、不整円形で遺存状態悪く、炉床部か。焼土範囲は24×21㎝。掘り込み規模53×45㎝、深さ６㎝。炉石の痕跡なし。　**内部施設**　主柱穴４本を検出。

ピットの規模（長径・短径・深さ㎝）Ｐ１：24、20、48、Ｐ２：29、24、46、Ｐ３：32、26、29、Ｐ４：28、20、58　**床**　ローム面が堅く硬化する。掘り方は想定されない。

埋没状況　土層観察用ベルトが無く不明。　**遺物出土状態**　少ない。このため、住居時期も不安定であり、形態的には10号住居に近いことから、10号住居以外の住居よりは新しい時期と考えられる。

９号住居跡（第17図、第40・41.65・66図、ＰＬ13、41・42.58・59）

斜面の落ち際に位置し、大きさから当初土坑として掘削する。遺物の広がりや壁面の立ち上がりなどを総合的に判断して、途中から住居跡として調査を行った経緯がある。

位置　16－Ｏ・Ｐ－10・11グリッド　**重複**　６号住居と新旧関係不明。　**形態**　不明

主軸方位　Ｎ－９°－Ｅ　**規模**　南北2.34m以上、東西3.82m以上

壁　壁高は東辺７～23㎝、南辺４～23㎝である。　**炉**　不明　**内部施設**　なし　**床**　明確な硬化面を持たない。　**埋没状況**　土層観察用ベルトの位置が有効でなかったが、自然埋没だろう。

遺物出土状態　斜面際に遺物集中部分がある。

10号住居跡（第18図、第42図、ＰＬ13・14、42.57）

位置　16－Ｋ・Ｌ－11・12グリッド　**重複**　11号住居より後出。南東部分を風倒木に壊される。

形態　不整円形　**主軸方位**　Ｎ－25°－Ｅ　**規模**　南北3.48m、東西4.02m以上

壁　壁高は北辺６～11㎝、東辺11～56㎝、南辺５～６㎝である。

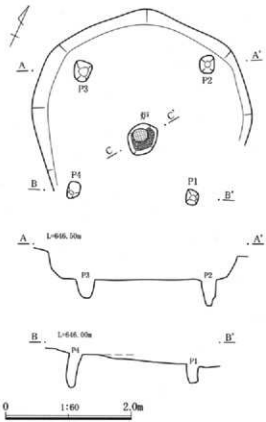
炉　石囲い炉。ほぼ中央にあり、長方形。埋設土器を持つ。底部は埋設当初から欠損していたと判断する。

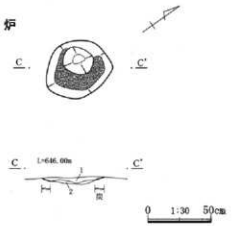
規模　59×36.5㎝、深さ35㎝。囲っている炉石のうち、南辺に重なって一石が発見されたが、調査時の所見により北西の一石が廃棄後移動したものと判断されている。このため、詳細図ではこの一石を除いた使用状況図を示した。　**内部施設**　主柱穴５本検出

ピットの規模（長径・短径・深さ㎝）Ｐ１：41、34、70、Ｐ２：42、38、54、Ｐ３：34、30、48、Ｐ４：32、22、60、Ｐ５：26、20、64　**床**　ローム面を床とし硬化面はない。炉の東側に炭化物の集中する部分がある。

埋没状況　ほぼ一様で、人為埋没の可能性あり。

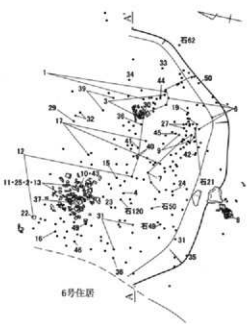
遺物出土状態　出土量は少ない。南端Ｐ４近くに胴部下半を欠損する深鉢(４)が横位で発見され、下半部側に巨礫が並んでいた。この深鉢は口縁部一部と胴部下半を除いて、ほぼ接合復元できる。下側欠損面では二カ所が水平に整っており、倒置して蓋をしていた可能性もある。



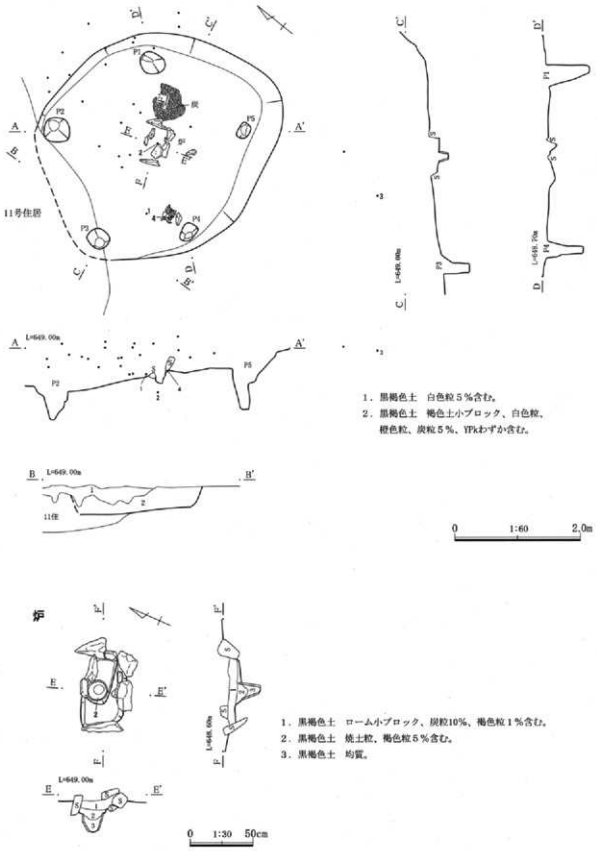


1．赤褐色焼土　YPk10%含む。
2．赤褐色焼土＋ローム小ブロック

第16図　16区８号住居跡



第17図　16区９号住居跡



第18図　16区10号住居跡

11号住居跡（第19図、第43.67・68図、ＰＬ14、43.60・61）

位置　16－Ｋ～Ｍ－11・12グリッド

重複　10号住より前出　**形態**　**隅丸長方形**　**主軸方位**　Ｎ－28°－Ｅ

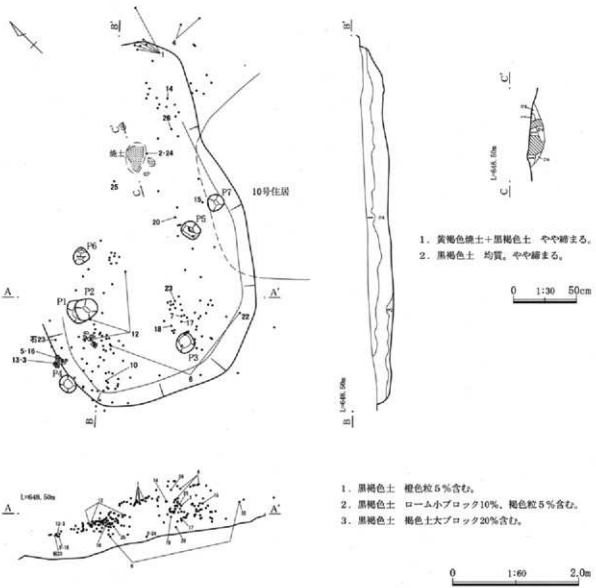
規模　南北5.51m、東西4.0m　**壁**　壁高は東辺４～11cm、南辺５～16cm、西辺14～16cmである。

焼土　中央部北よりに位置する。植物攪乱著しく、焼土はブロックが多い。焼土範囲は40.5×27.5cm。掘り込み規模49×31.5cm、深さ14cm。

内部施設　ピットは７本、主柱穴は不明。　**ピットの規模**（長径・短径・深さcm）Ｐ１・２：38、26、24／37、34、42、Ｐ３：30、30、17、Ｐ４：28、24、34、Ｐ５：30、25、20、Ｐ６：25、24、12、Ｐ７：28、24、14

床　不分明　**埋没状況**　ほぼ一様で、人為埋没の可能性あり。

遺物出土状態　南西部にやや集中する。



第19図　16区11号住居跡

第２項　竪穴状遺構

１号竪穴状遺構（第20図、第69図、ＰＬ15、61）

位置　16－Ｉ・Ｊ－８・９グリッド　**重複**　20号土坑より前出　**形態**　不整方形？斜面のため東側崩落

主軸方位　Ｎ－35°－Ｗ

規模　南北1.52m以上、東西5.6m以上。　**壁**　壁高は東辺22㎝、西辺52㎝である。　**内部施設**　なし

遺物出土状態　小破片が散在する。

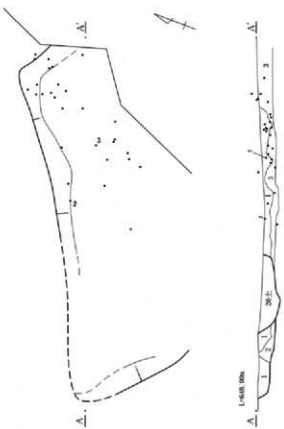
２号竪穴状遺構（第21図、第69図、ＰＬ15、61）

位置　16－Ｑ・Ｒ－４・５グリッド　**重複**　５号住居より後出、80号土坑と新旧関係不明。

形態　長楕円形　**主軸方位**　Ｎ－66°－Ｅ

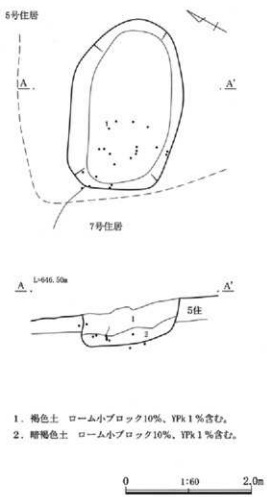
規模　南北1.8m、東西2.72m。　**壁**　壁高は東辺62㎝、南辺50㎝、西辺42㎝である。**内部施設**　なし

遺物出土状態　小破片が散在する。

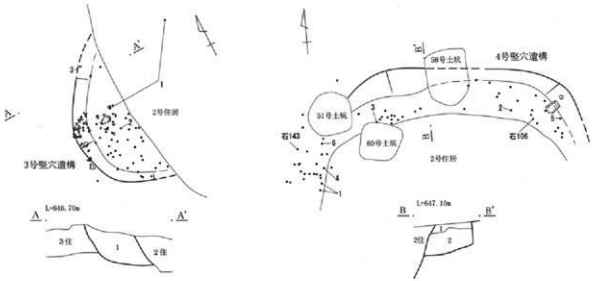


1．暗褐色土　YPk１％含む。
2．暗褐色土　ローム小ブロック20%含む。
3．褐色土　YPk１％含む。

第20図　16区１号竪穴状遺構



第21図　16区２号竪穴状遺構



1．黒褐色土　褐色土をモザイク状に含み、YPk10%含む。

1．暗褐色土　ローム小ブロック10%、白色粒含む。
2．黒褐色土　ローム小ブロック1%含む。黒み強い。

0　1:60　2.0m

第22図　16区3号竪穴状遺構・4号竪穴状遺構

３号竪穴状遺構（第22図、第44.70図、ＰＬ15、43.61）

位置　16－Ｏ－４・５グリッド　**重複**　３号住居より後出。２号住居より前出。底面は３号住居よりも低く、２号住居床面よりも高い。

形態　形態不明。底面はやや平坦だが、床面を思わせる硬化面は検出されなかった。

規模　南北1.72m以上、東西1.56m以上。　**壁**　壁高は西辺８～13cmで、斜めに立ち上がる。

遺物出土状態　埋土層中より出土遺物多い。

備考　２号住居との新旧関係を検証する土層断面(第９図)では、２号住居の土層分割線と本遺構の底面がつながっており、新旧関係が逆転する可能性も残す。２号住居の遺物出土状況では、南西部に石及び大形の土器破片が集中することが注目される。本遺構を不整円形と考えた場合、これら２号住居の遺物が想定範囲に入る印象を受ける。ただし、調査主担当者の所見記録に反する推論である。

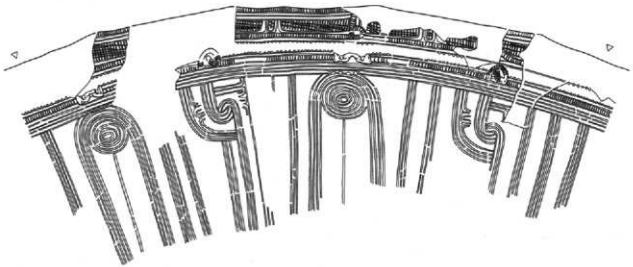
４号竪穴状遺構（第22図、第44.71図、ＰＬ15、61）

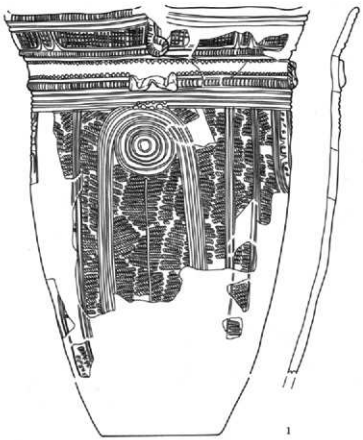
位置　16－Ｎ・Ｏ－５グリッド　**重複**　２号住居より前出。底面は２号住居床面より約50cm高い。51・58・60号土坑とは新旧関係不明。

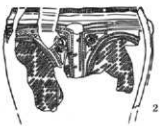
形態　形態不明。重複激しいため、住居の可能性あり。底面にほぼ平坦で、硬化面はみられない。

規模　南北0.9m以上、東西3.74m以上。　**壁**　壁高は北辺54～68cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

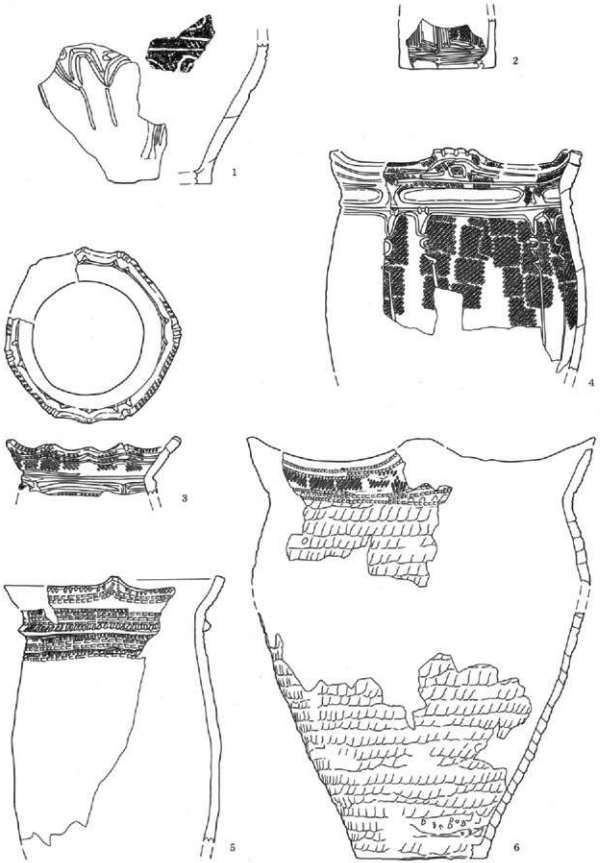
内部施設　なし　**遺物出土状態**　小破片が散在する。



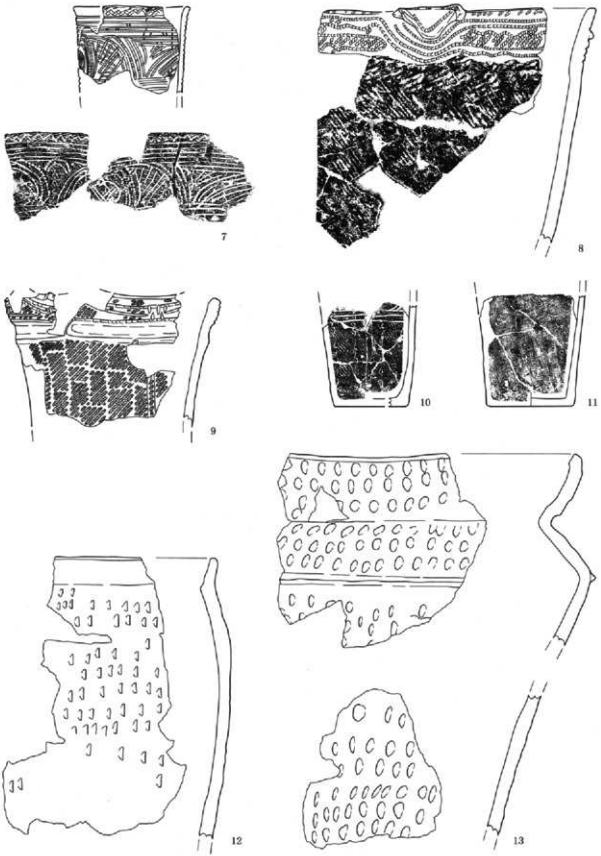




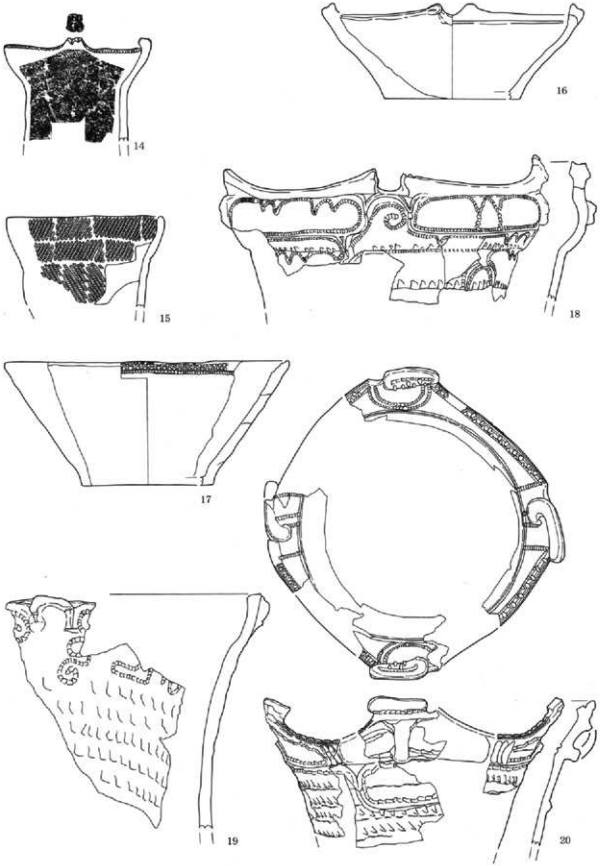
第23図　１号住居跡出土土器



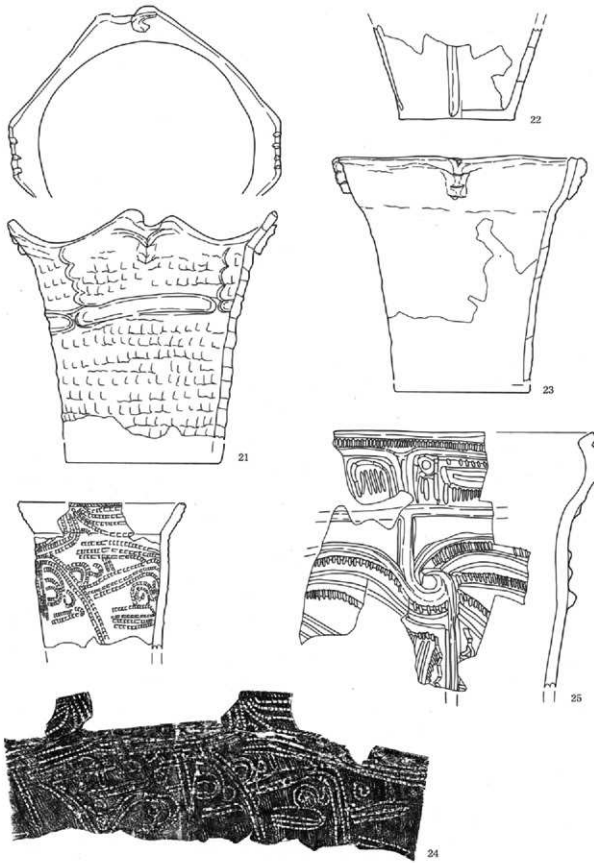
第24図　２号住居跡出土土器（1）



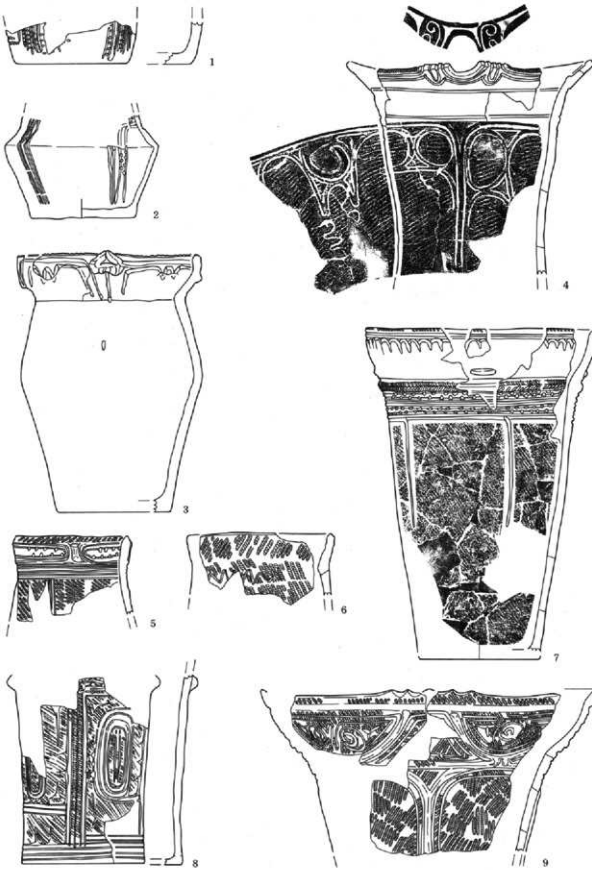
第25図　２号住居跡出土土器（２）



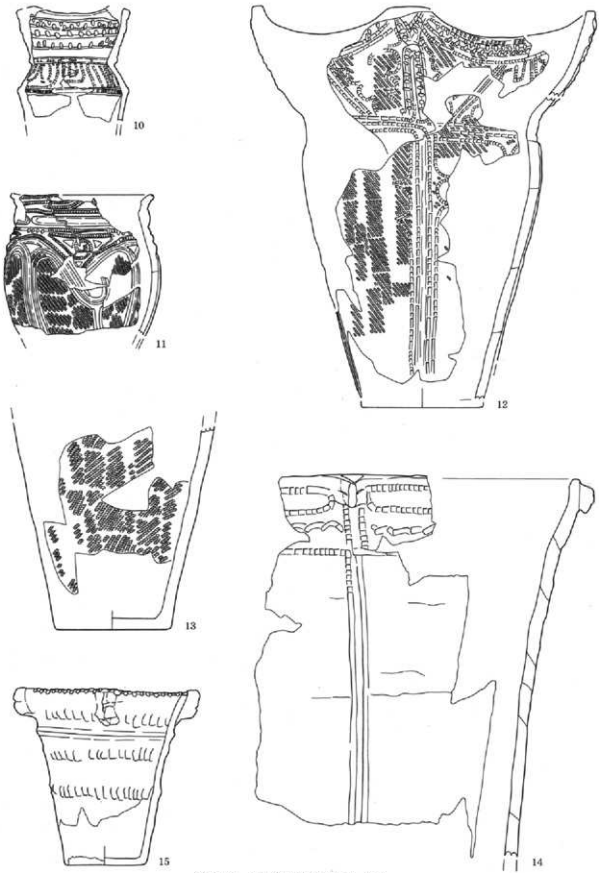
第26図　2号住居跡出土土器（3）



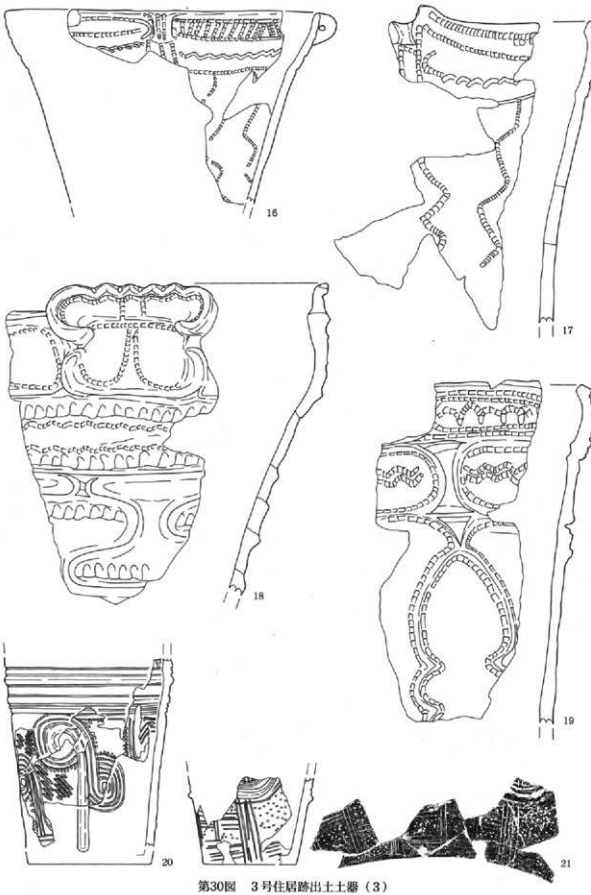
第27図　２号住居跡出土土器（４）



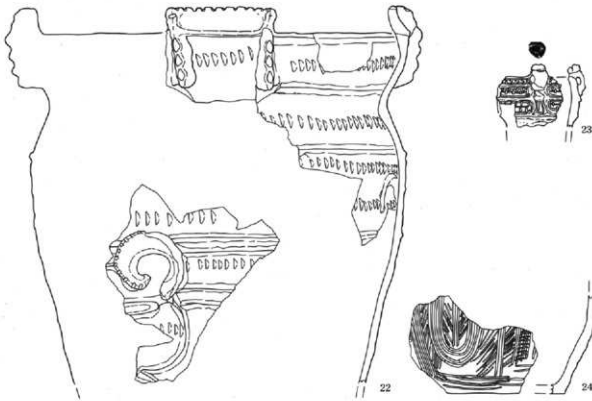
第28図　3号住居跡出土土器（1）



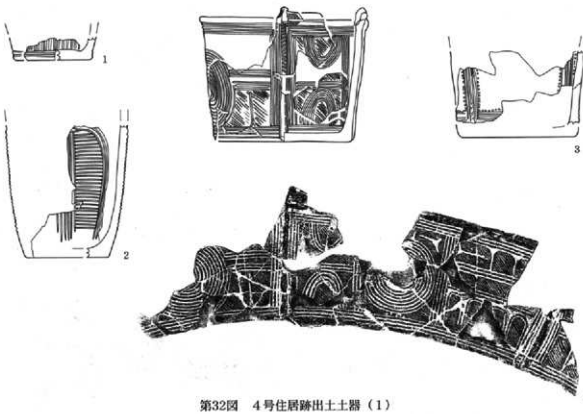
第29図　３号住居跡出土土器（２）



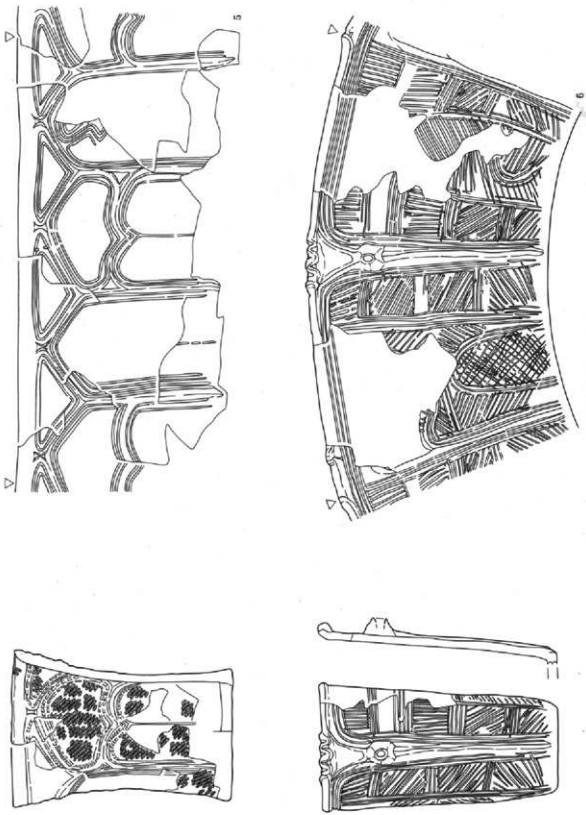
第30図　３号住居跡出土土器（３）



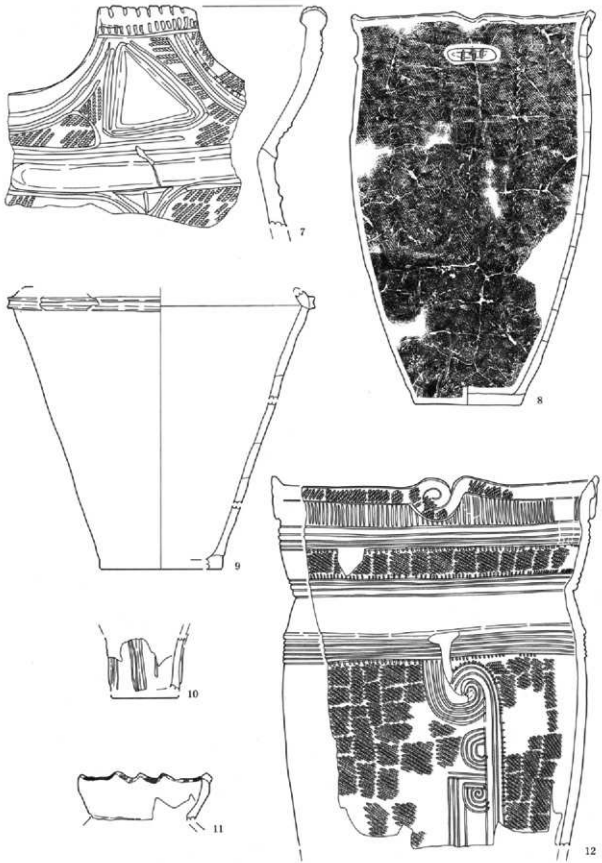
第31図　３号住居跡出土土器（４）



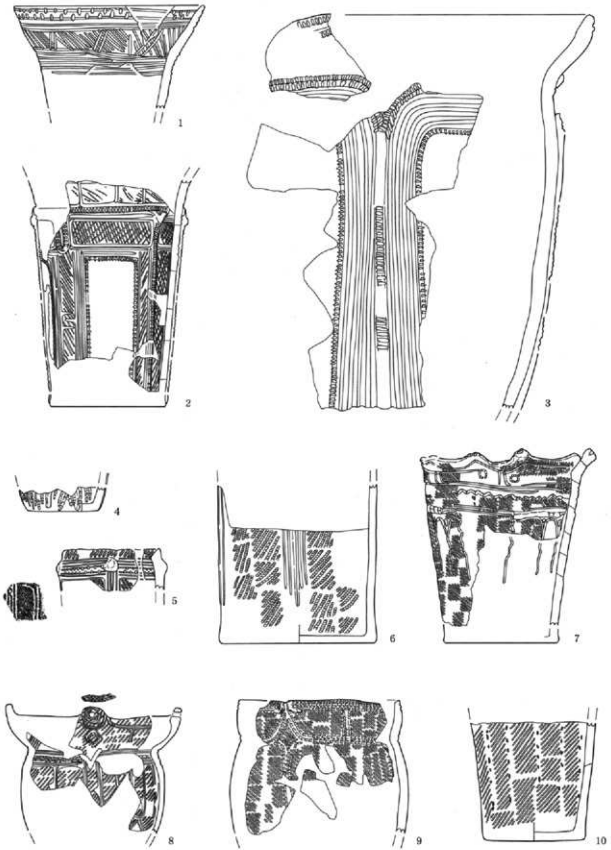
第32図　４号住居跡出土土器（１）



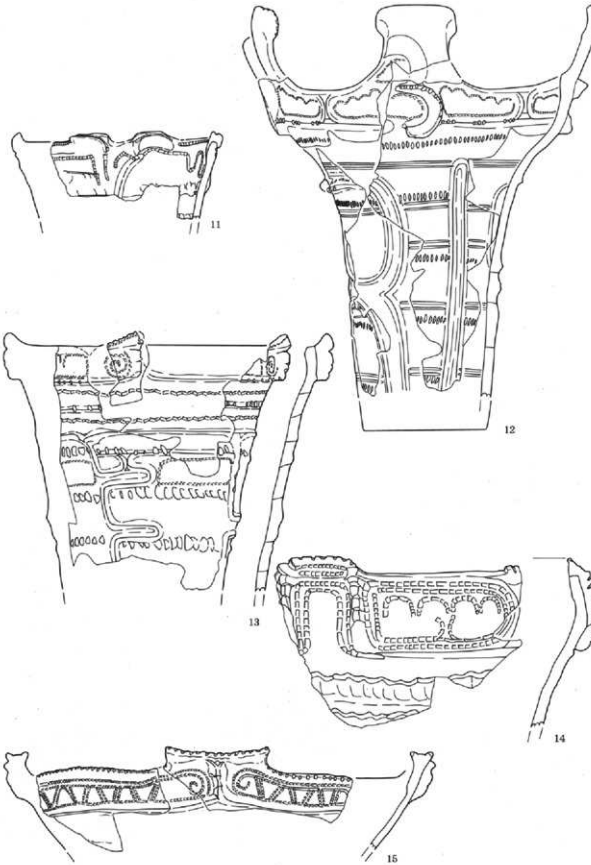
第33図　4号住居跡出土土器（2）



第34図　４号住居跡出土土器（３）

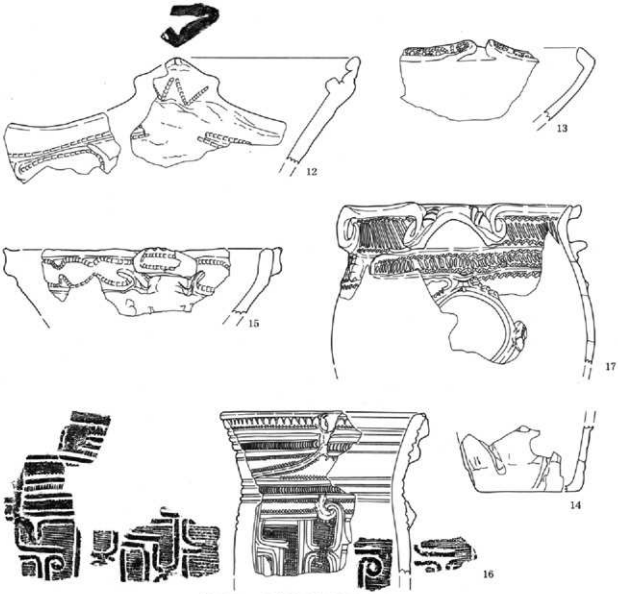


第35図　５号住居跡出土土器（１）

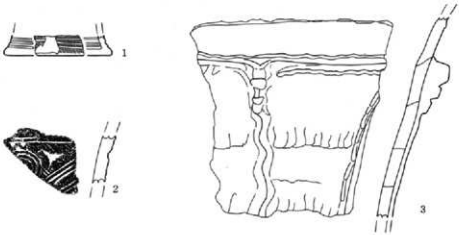


第36図　５号住居跡出土土器（２）

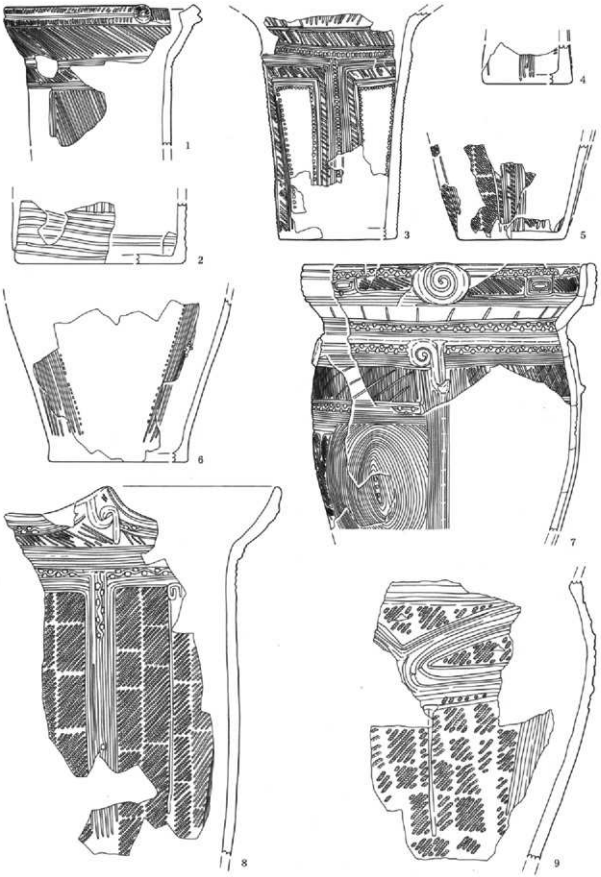
第37図　６号住居跡出土土器（１）



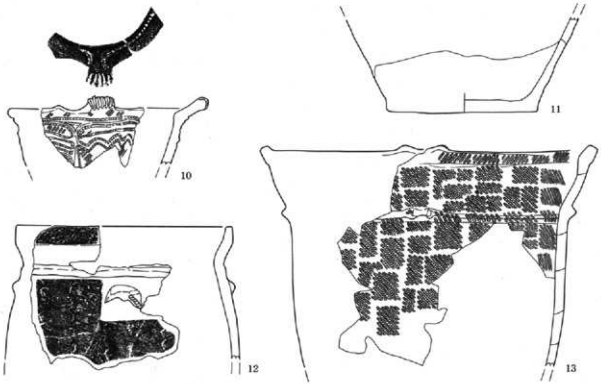
第38図　６号住居跡出土土器（２）



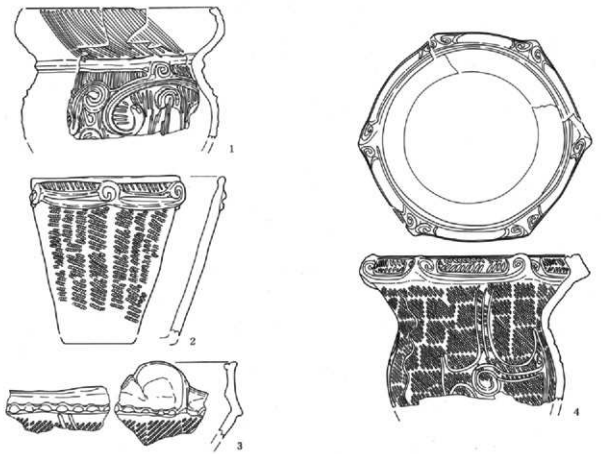
第39図　７号住居跡出土土器



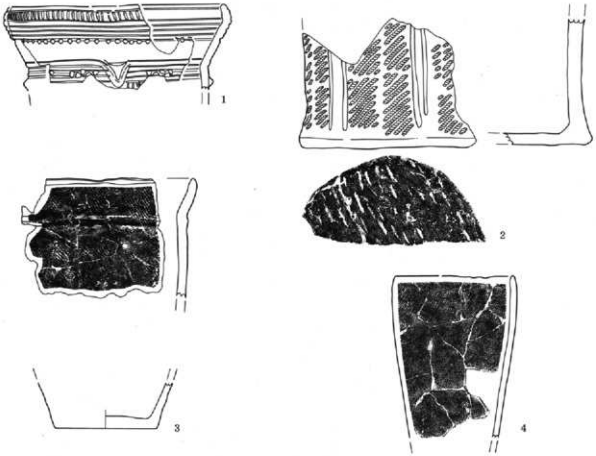
第40図　9号住居跡出土土器（1）



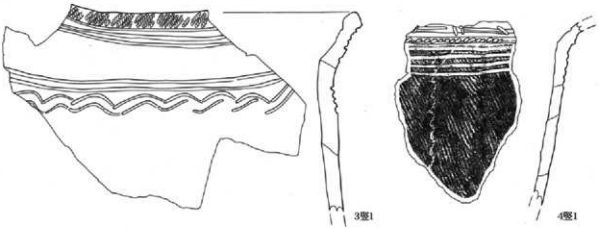
第41図　９号住居跡出土土器（２）



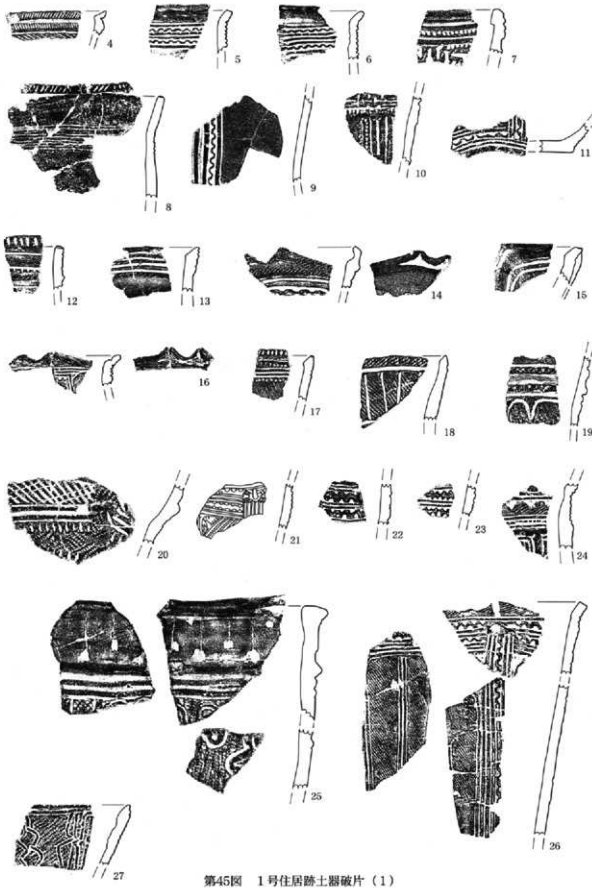
第42図　10号住居跡出土土器



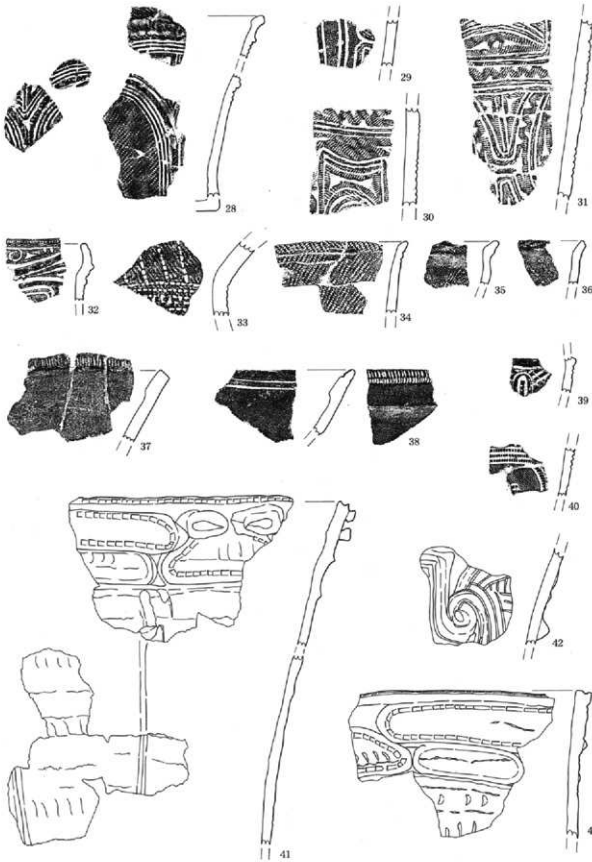
第43図　11号住居跡出土土器



第44図　竪穴状遺構出土土器

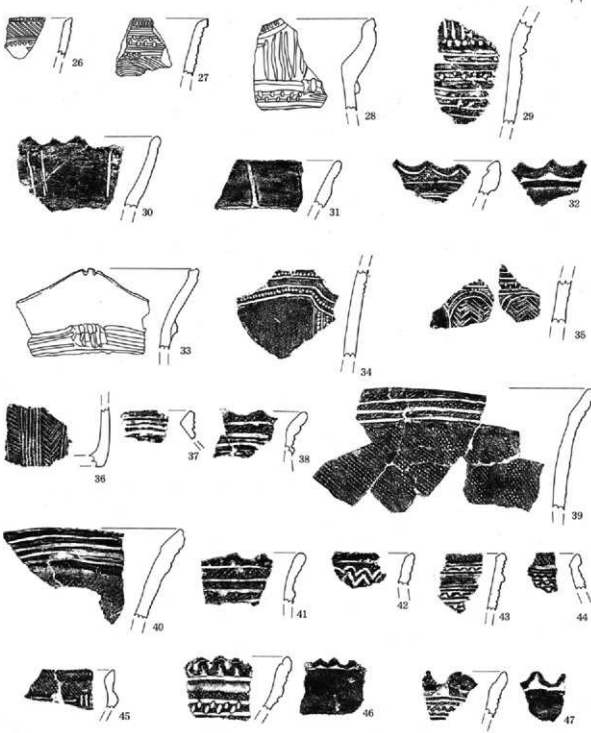


第45図　１号住居跡土器破片（１）

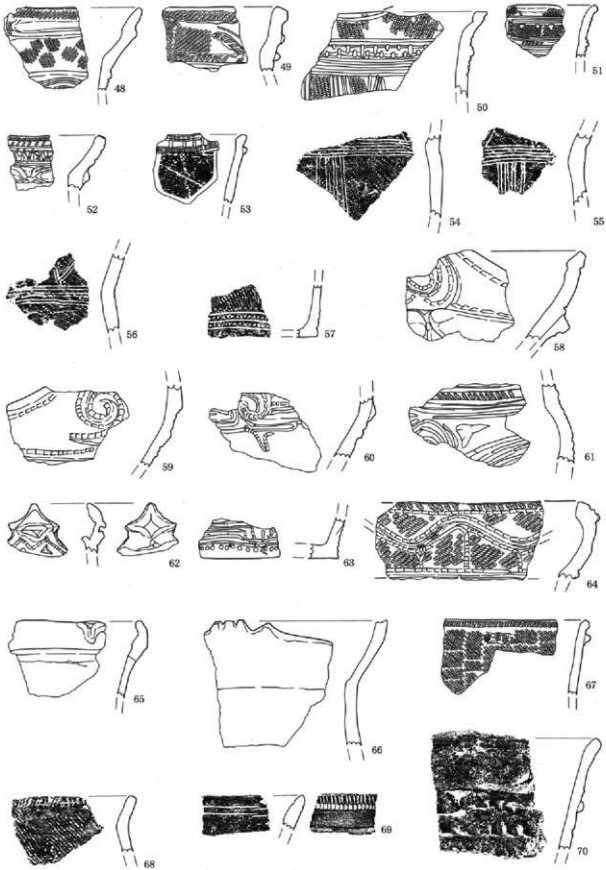


第46図　1号住居跡土器破片（2）

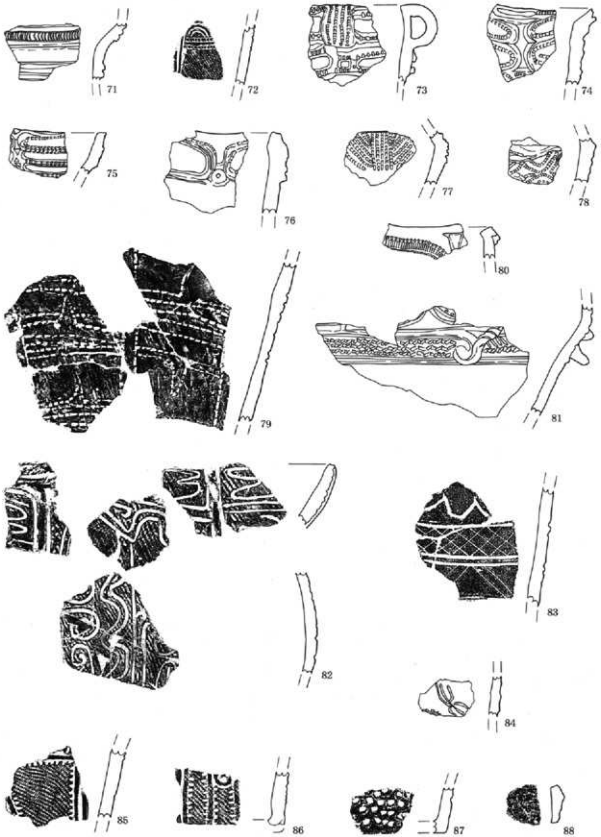
第47図　1号住居跡土器破片（3）



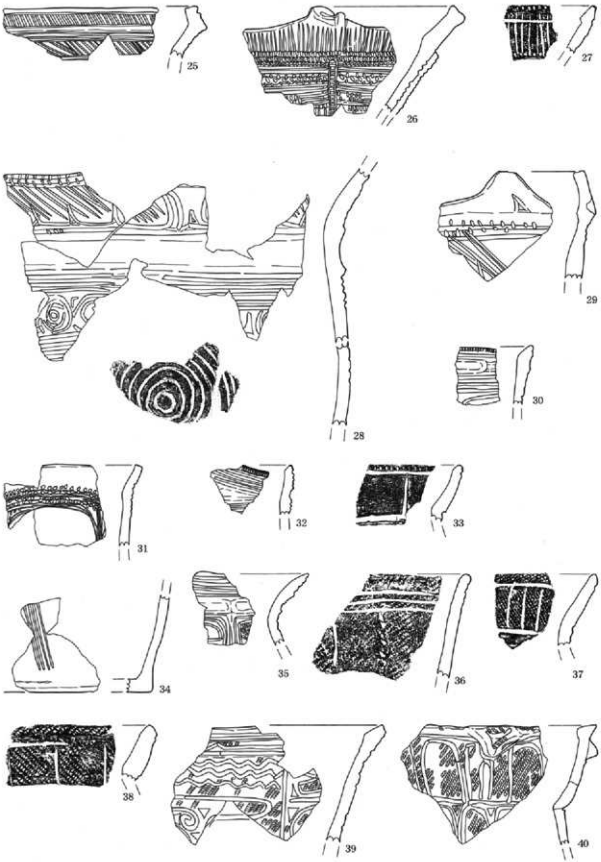
第48図　2号住居跡土器破片（1）



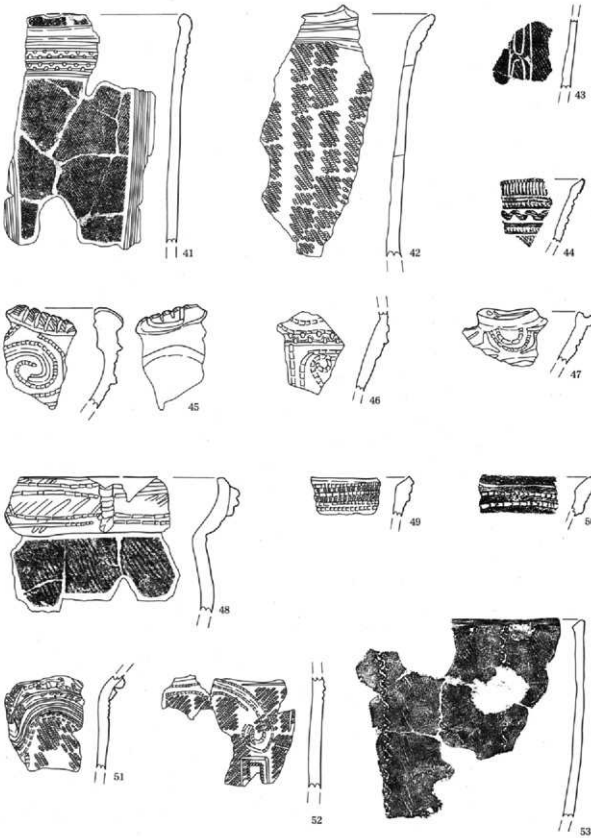
第49図　2号住居跡土器破片（2）



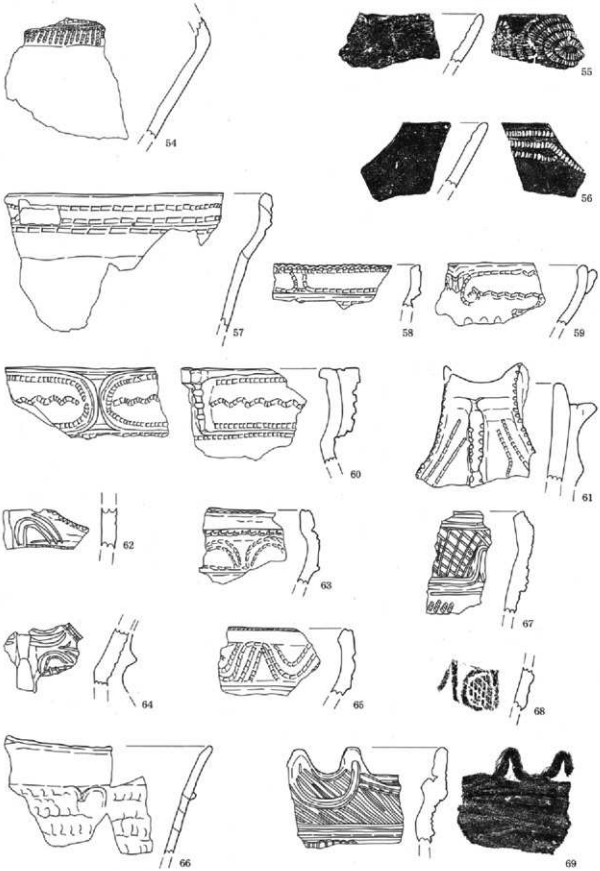
第50図　２号住居跡土器破片（３）



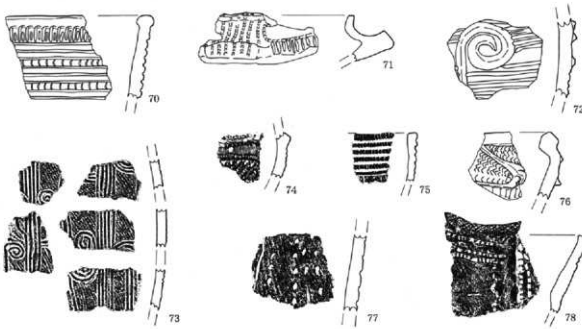
第51図　3号住居跡土器破片（1）



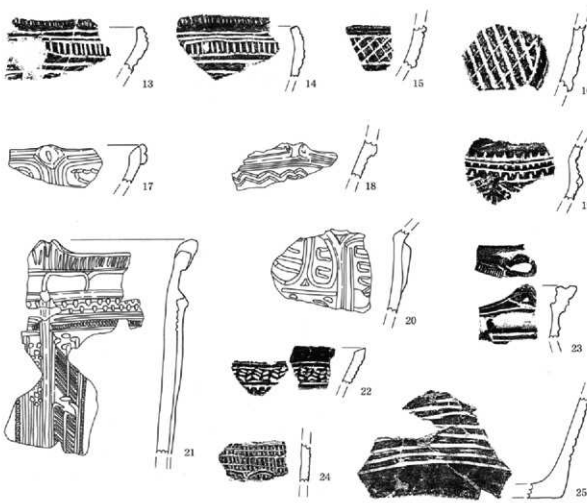
第52図　３号住居跡土器破片（２）



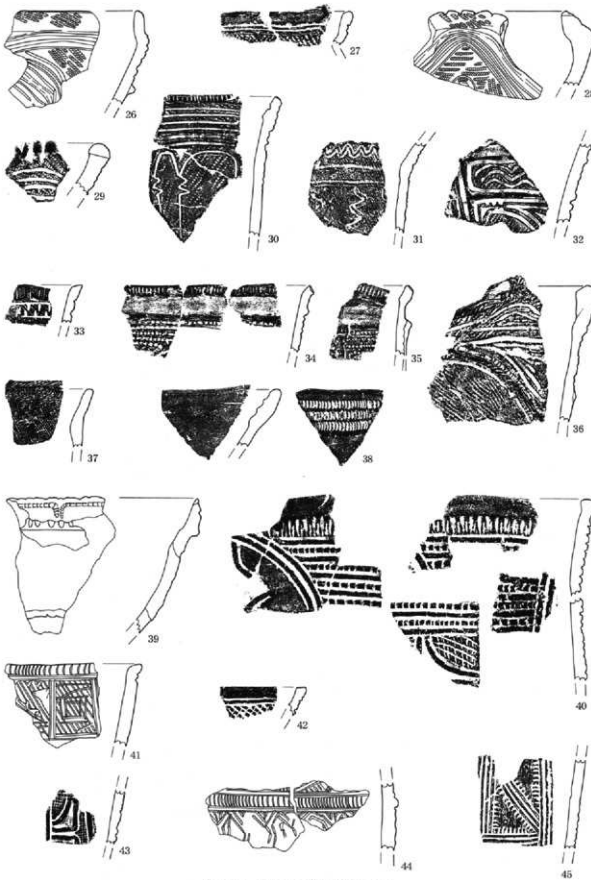
第53図　3号住居跡土器破片（3）



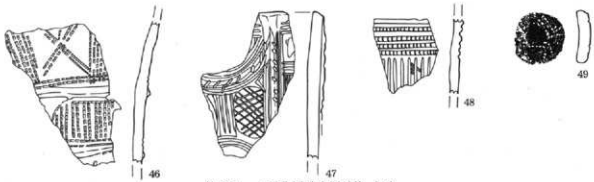
第54図　3号住居跡土器破片（4）



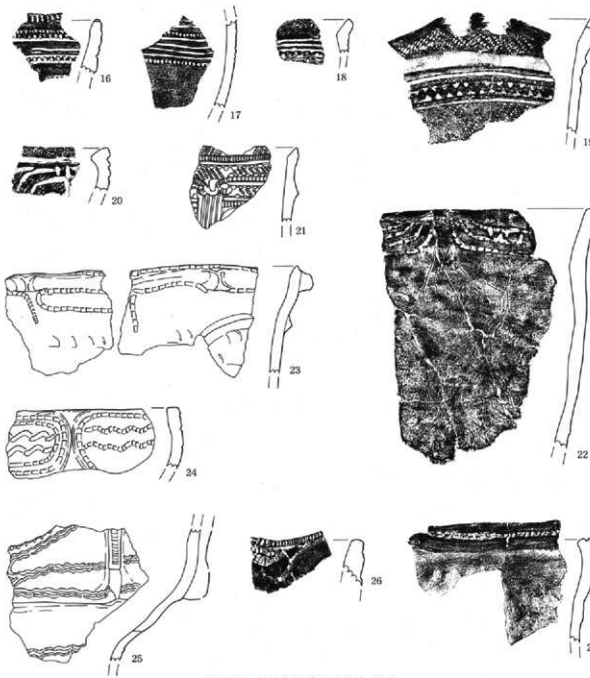
第55図　4号住居跡土器破片（1）



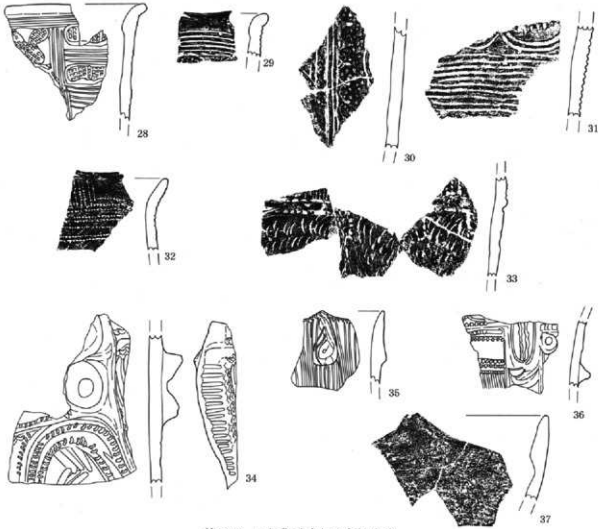
第56図　４号住居跡土器破片（２）



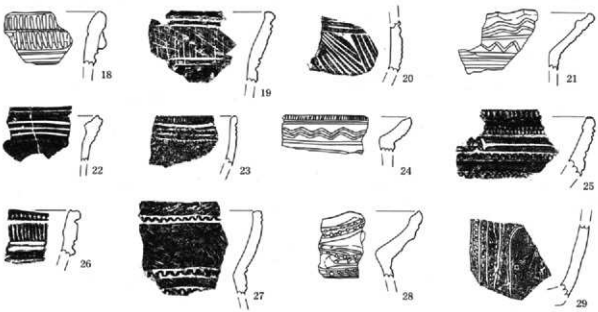
第57図　４号住居跡土器破片（３）



第58図　５号住居跡土器破片（１）



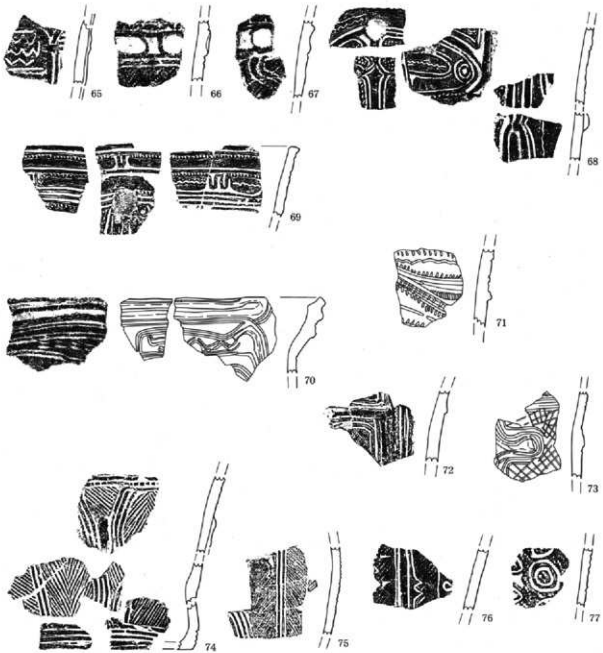
第59図　５号住居跡土器破片（２）



第60図　６号住居跡土器破片（１）

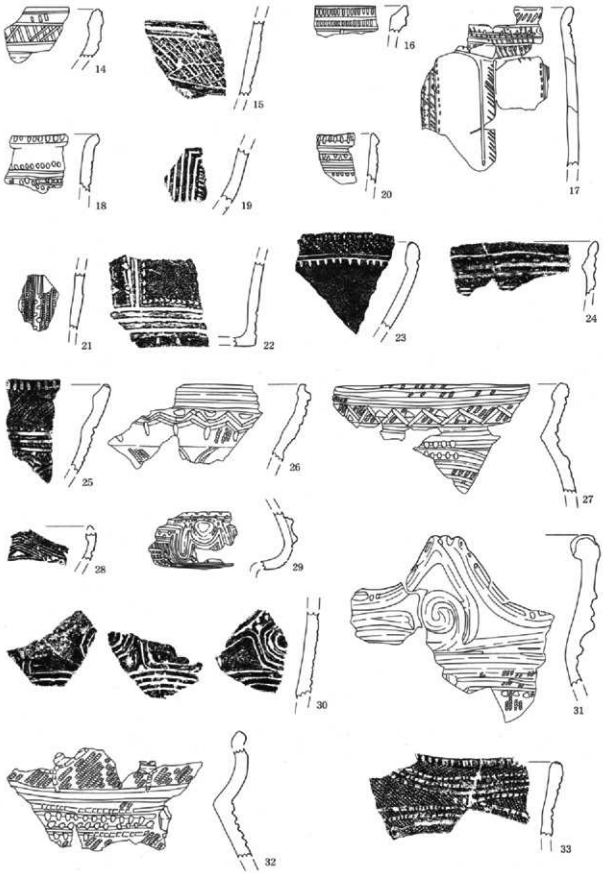
第61図　６号住居跡土器破片（２）

第62図　６号住居跡土器破片（３）

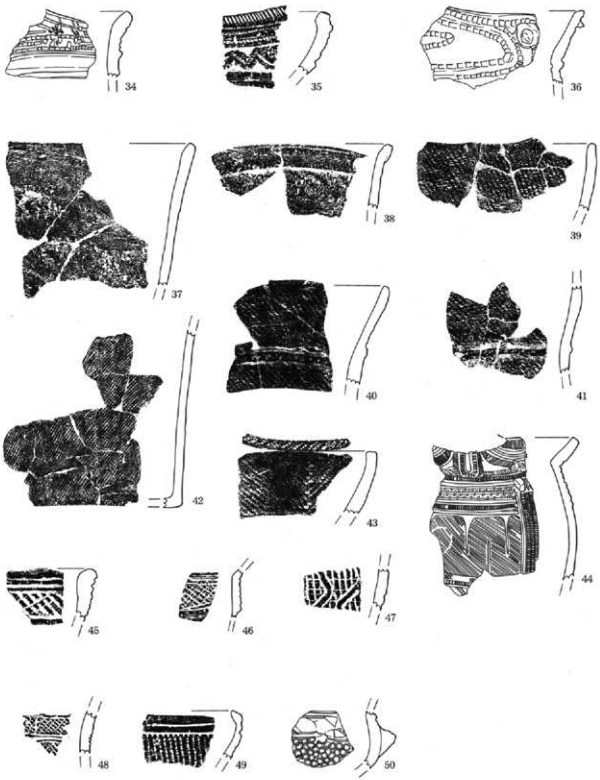


第63図　6号住居跡土器破片（4）

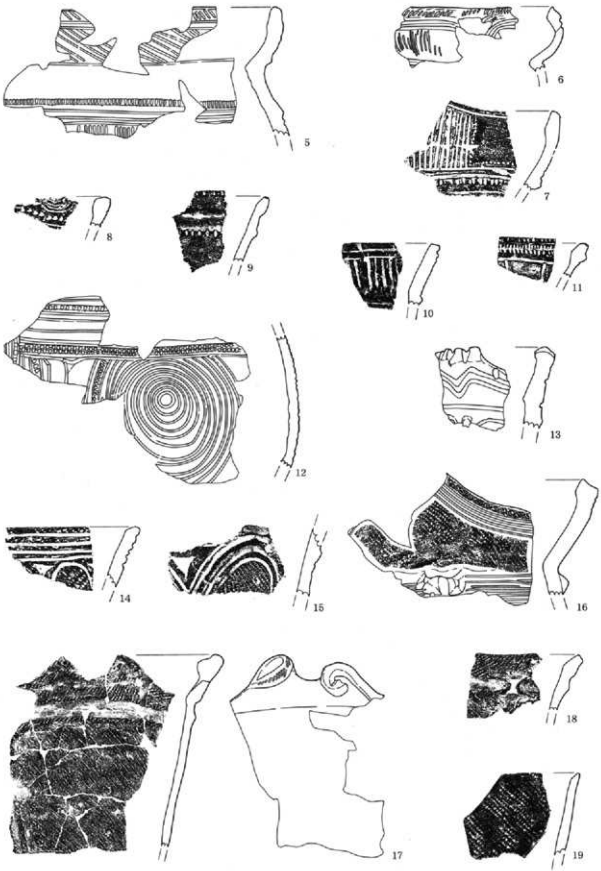
第64図　8号住居跡土器破片



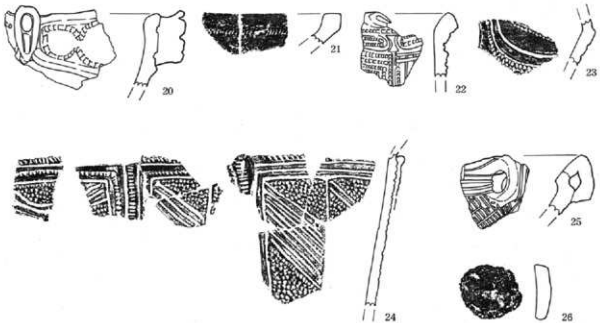
第65図　９号住居跡土器破片（１）



第66図　９号住居跡土器破片（２）



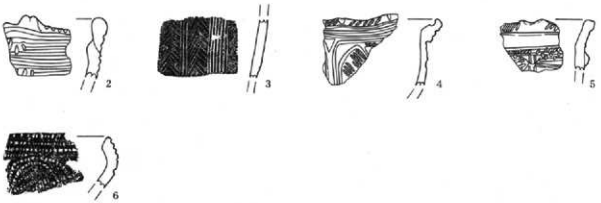
第67図　11号住居跡土器破片（1）



第68図　11号住居跡土器破片（２）

第69図　１号・２号竪穴状遺構土器破片

第70図　３号竪穴状遺構土器破片



第71図　４号竪穴状遺構土器破片

第３項　土坑

本項で扱う土坑は当該期の土器を伴うもののほか、平安以前であって深さが浅く陥し穴と見なせなかったものも含んでいる。これについては文中に可能性を示した。

１号土坑（第72図、第83図、ＰＬ16、62）Ｊ－９グリッド。上面・下面とも長楕円形。壁は垂直気味に立ち上がる。底面は一段落ち込む。規模は長辺213㎝、短辺139㎝、深さ89㎝である。掲載した土器は混入であろう。陥し穴か。

２号土坑（第72図、ＰＬ16）Ｋ・Ｌ－９グリッド。上面・下面とも不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺105㎝、短辺94㎝、深さ36㎝である。確認面に長楕円礫２つ並ぶ。

３号土坑（第72図、ＰＬ16）Ｊ・Ｋ－８グリッド。上面・下面とも長楕円形。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺163㎝、短辺91㎝、深さ30㎝である。陥し穴か。

４号土坑（第72図、ＰＬ16）Ｊ・Ｋ－７グリッド。上面・下面とも不整楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。規模は長辺137㎝、短辺83㎝、深さ32㎝である。陥し穴か。

５号土坑（第72図、第83図、ＰＬ16、62）Ｊ－７グリッド。上面・下面とも不整長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺148㎝、短辺97㎝、深さ46㎝である。掲載した土器は混入であろう。陥し穴か。

９号土坑（第72図、ＰＬ16）Ｌ・Ｍ－９グリッド。10号土坑と重複し、新旧関係不明。上面は隅丸長方形、下面は不整長方形。壁は垂直気味に立ち上がる。底面はやや凸凹する。規模は長辺195㎝、短辺102㎝、深さ39㎝である。陥し穴か。

10号土坑（第72図、ＰＬ16・17）Ｌ・Ｍ－９・10グリッド。９号土坑と重複し、新旧関係不明。上面・下面とも隅丸長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。規模は長辺249㎝、短辺100㎝、深さ48㎝である。陥し穴か。

11号土坑（第73図、ＰＬ17）Ｌ－５グリッド。上面は円形、下面は不定形。壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凸凹する。規模は長辺114㎝、短辺104㎝、深さ28㎝である。

12号土坑（第73図、ＰＬ17）Ｉ－９・10グリッド。不整楕円形と見られるが、調査区の関係で半分しか露呈できなかった。壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凸凹する。規模は長辺247㎝、短辺（94）㎝、深さ50㎝である。

13号土坑（第73図、ＰＬ17）Ｊ・Ｋ－９・10グリッド。上面・下面とも円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺99㎝、短辺98㎝、深さ49㎝である。

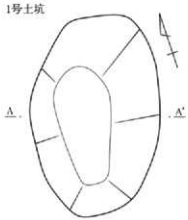
14号土坑（第73図、ＰＬ17）Ｑ－６・７グリッド。上面・下面とも円形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺109㎝、短辺99㎝、深さ17㎝である。

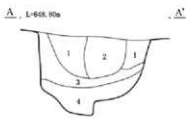
15号土坑（第73図、ＰＬ17）Ｓ－６グリッド。上面・下面とも円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、植物攪乱が著しい。規模は長辺60㎝、短辺56㎝、深さ11㎝である。

16号土坑（第73図、ＰＬ17）Ｒ・Ｓ－６グリッド。上面・下面とも円形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦で、植物攪乱が著しい。規模は長辺72㎝、短辺66㎝、深さ７㎝である。

17号土坑（第73図、第83図、ＰＬ17、62）Ｓ－５グリッド。上面・下面とも円形。壁は斜めに立ち上がる。

1号土坑





1．黒褐色土　YPk１％含む。
2．黒褐色土　YPk５％含む。
3．暗褐色土　YPk５％含む。
4．暗褐色土＋YPk＋黄褐色ローム

2号土坑

1．黒褐色土　暗褐色土小ブロック10％含む。
2．暗褐色土　YPkわずか含む。やや締まる。

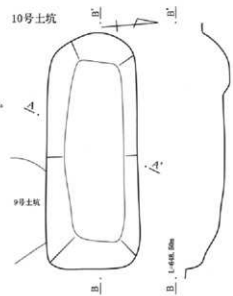
3号土坑

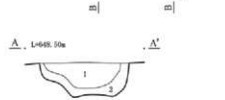
1．黒褐色土　YPkわずか含む。
2．暗褐色土　YPk20％含む。
3．黒褐色土　褐色火山灰ブロック10％含む。
4．暗褐色土　褐色火山灰ブロック５％含む。
5．黒褐色土　褐色火山灰ブロック５％含む。

4号土坑

1．黒褐色土　YPk１％含む。
2．暗褐色土　褐色火山灰ブロック５％含む。
3．暗褐色土　YPk５％含む。

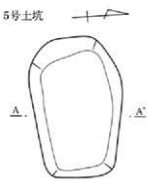
10号土坑

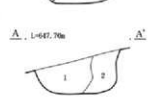




1．黒褐色土　ローム粒・炭粒・YPk５％含む。
2．暗褐色土　ローム粒・YPk５％含む。

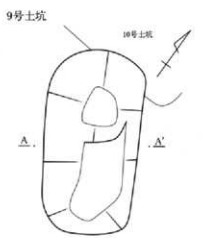
5号土坑





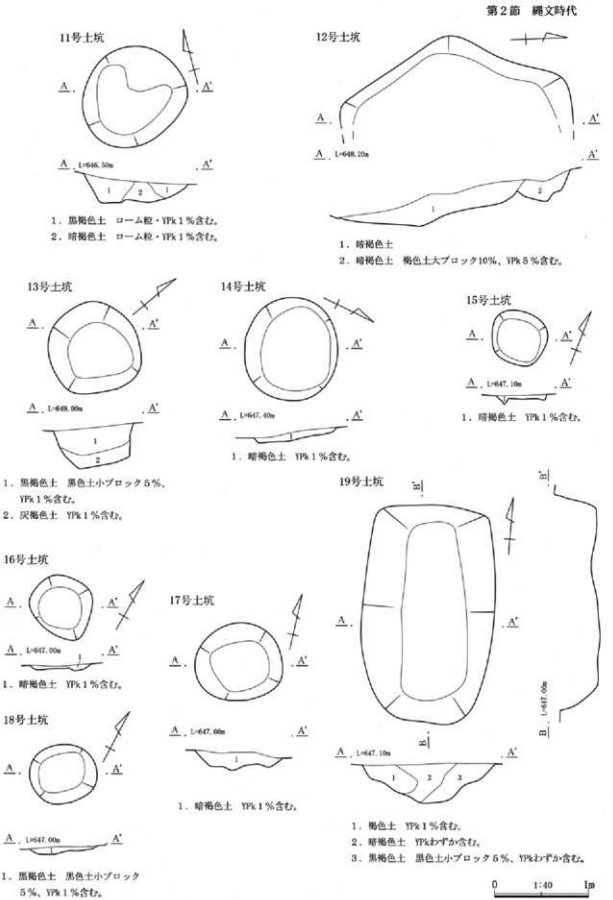
1．黒褐色土　YPk１％含む。
2．暗褐色土　YPk１％含む。

9号土坑



1．黒褐色土　ローム粒・YPk１％含む。
2．暗褐色土　ローム粒・YPk５％含む。

第72図　16区1、2、3、4、5、9、10号土坑



第73図　16区11、12、13、14、15、16、17、18、19号土坑

底面は平坦で、植物攪乱が著しい。規模は長辺93cm、短辺82cm、深さ21cmである。掲載した土器は混入であろう。

18号土坑（第73図、ＰＬ17）Ｓ－６グリッド。上面・下面とも円形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦で、植物攪乱が著しい。規模は長辺72cm、短辺63cm、深さ９cmである。

19号土坑（第73図、ＰＬ17）Ｒ－６グリッド。上面・下面とも隅丸長方形。壁は垂直気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺229cm、短辺141cm、深さ48cmである。陥し穴か。

22号土坑（第74図、第83図、ＰＬ18、61・62）Ｊ－10・11グリッド。上面・下面とも楕円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺127cm、短辺105cm、深さ40cmである。大形の深鉢(1)が確認面近くから出土し、底部は出土しなかったものの、上半部はほぼ復元できる。性格不明ながら、土器を納めた遺構と考えられる。

23号土坑（第74図、第83図、ＰＬ18、61・62）Ｏ－６グリッド。上面・下面とも円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺106cm、短辺101cm、深さ16cmである。出土した土器は確認面に近い。大角礫も混入する。

24号土坑（第74図、第83図、ＰＬ18、62）Ｎ・Ｏ－４グリッド。２号住居より後出。上面・下面とも不整円形。81号土坑とは新旧関係不明。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺104cm、短辺98cm、深さ63cmである。掲載した土器は混入であろう。

26号土坑（第74図、第84図、ＰＬ18、63）Ｊ・Ｋ－７グリッド。上面は楕円形、下面は円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。規模は長辺107cm、短辺88cm、深さ28.5cmである。大形の粗製深鉢がほぼ一個体(1)出土する。性格不明ながら、土器を納めた遺構と考えられる。

27号土坑（第74図、第84図、ＰＬ18・19、63）Ｋ－10グリッド。29号土坑より前出、35号土坑と新旧関係不明。上面・下面とも円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺83cm、短辺（80）cm、深さ24cmである。大形の深鉢(1)が確認面近くから出土する。この深鉢の出土状態については、調査時の観察記録がなく平断面図からも判断しにくいが、記録写真から胴部下半から正位に埋まっている状況がうかがえるため、あるいは底面に正置されていた可能性もある。性格不明ながら、土器を納めた遺構と考えられる。

28・35号土坑（第74図、ＰＬ19）両土坑の新旧関係不明。28号土坑はＫ－11グリッド。上面・下面とも円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺103cm、短辺（71）cm、深さ31cmである。35号土坑はＫ－10・11グリッド。上面・下面とも楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺83cm、短辺78cm、深さ43cmである。

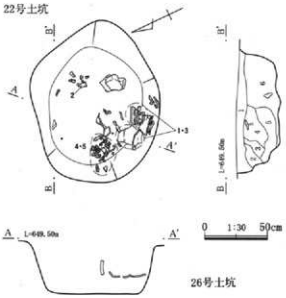
29号土坑（第75図、第85図、ＰＬ19、61.63・64）Ｋ－10・11グリッド。27号土坑より後出。上面・下面とも円形。壁は袋状を呈する。底面は平坦。規模は長辺100cm、短辺95cm、深さ46cmである。遺物は比較的多く、数個体分の大片が大礫とともに確認面近くで出土する。深鉢の底部片(4)は底面近くから出土する。性格不明ながら、土器を納めた遺構と考えられる。

36号土坑（第75図、第85図、ＰＬ19、61）Ｋ－10グリッド。上面・下面とも隅丸長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺123cm、短辺96cm、深さ26cmである。掲載した土器は混入であろう。

37号土坑（第75図、第85図、ＰＬ19、62）Ｌ－４グリッド。１号住居と新旧関係不明。南半部は重複により欠損のため、形態不明。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺161cm、短辺（116）cm、深さ59cmである。掲載した土器は混入であろう。

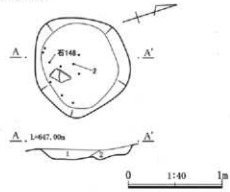
38号土坑（第75図、ＰＬ19）Ｉ－８・９グリッド。上面は不整長方形、下面は不整楕円形。壁はほぼ垂直に

22号土坑



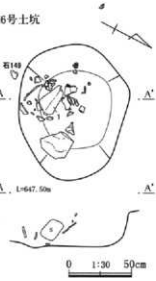
1．暗褐色土
2．暗褐色土　ローム粒わずか含む。
3．褐色土　ローム小ブロック20％含む。
4．暗褐色土　YPk５％含む。
5．黒褐色土
6．暗褐色土　YPkわずか含む。

23号土坑

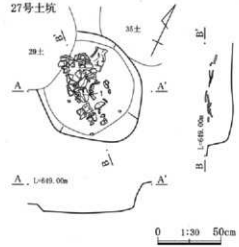


1．黒褐色土　褐色粒５％、ローム粒・YPk１％含む。
2．黒褐色土＋黄褐色ローム

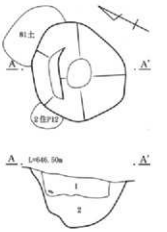
26号土坑



27号土坑

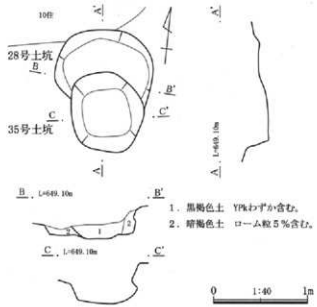


24号土坑



1．黒褐色土　白色粒・YPk１％含む。
2．黒褐色土　白色粒わずか含む。

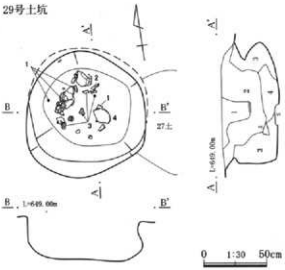
28号土坑
35号土坑



1．黒褐色土　YPkわずか含む。
2．暗褐色土　ローム粒５％含む。

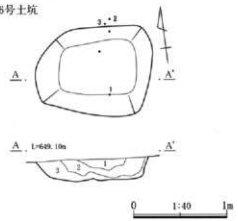
第74図　16区22、23、24、26、27、28・35号土坑

29号土坑



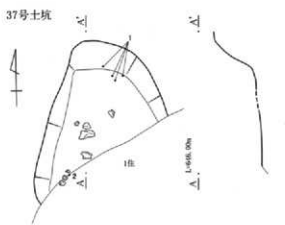
1．黒褐色土　YPkわずか含む。
2．暗褐色土　褐色粒・炭粒５％含む。
3．暗褐色土　ローム粒・褐色粒５％含む。
4．黒褐色土　炭粒１％含む。

36号土坑

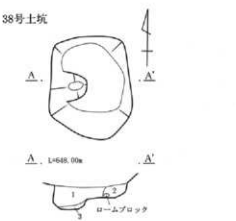


1．黒褐色土　YPkわずか含む。
2．暗褐色土　ローム小ブロック５％、YPk１％含む。
3．暗褐色土　ローム小ブロック20%、YPk１％含む。

37号土坑



38号土坑

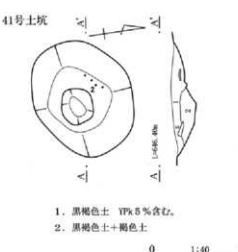


1．黒褐色土　細粒軽石わずか含む。
2．暗褐色土　ローム小ブロック20%含む。
3．暗褐色土　ローム粒５％含む。

40号土坑

1．黒褐色土　細粒軽石わずか含む。
2．黒褐色土＋褐色土
3．黒褐色土　やや砂質。

41号土坑



1．黒褐色土　YPk５％含む。
2．黒褐色土＋褐色土

第75図　16区29、36、37、38、40、41号土坑

立ち上がる。底面は平坦で、一部ピット状にくぼむ。別のピット重複の可能性あり。規模は長辺104cm、短辺89cm、深さ38cmである。

40号土坑（第75図、第85図、ＰＬ19、62）Ｑ－９・10グリッド。上面は楕円形、下面は不整円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺100cm、短辺81cm、深さ38cmである。掲載した土器は混入であろう。

41号土坑（第75図、第85図、ＰＬ19.62）Ｒ・Ｓ－４グリッド。上面は楕円形、下面は不整円形。壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凸凹する。規模は長辺126cm、短辺106cm、深さ26cmである。掲載した土器は混入であろう。

43号土坑（第76図、ＰＬ20）６－Ｑ・Ｒ－25グリッド。上面・下面とも不整形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。植物攪乱著しい。規模は長辺101cm、短辺87cm、深さ44cmである。

46号土坑（第76図、ＰＬ20）Ｎ－５グリッド。上面・下面とも不整形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。植物攪乱著しい。規模は長辺61cm、短辺45cm、深さ30cmである。

47号土坑（第76図、ＰＬ20）Ｍ－５グリッド。上面・下面とも不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺113cm、短辺111cm、深さ38cmである。

50号土坑（第76図、ＰＬ20）Ｐ－５グリッド。上面は不整円形、下面は隅丸方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺99cm、短辺90cm、深さ70cmである。

51・52・53・57号土坑（第76図、第86図、ＰＬ20、63）52号土坑は53号土坑より前出で、51号土坑とは新旧関係不明。51号土坑はＯ－５グリッド。上面は不整円形、下面は隅丸方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺72cm、短辺72cm、深さ25cmである。52号土坑はＯ－５グリッド。上面・下面とも不整方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺75cm、短辺（63）cm、深さ34cmである。掲載した土器は混入であろう。53号土坑はＯ－５グリッド。上面・下面とも不整方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺106cm、短辺100cm、深さ36cmである。57号土坑はＯ－５・６グリッド。上面・下面とも隅丸方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺92cm、短辺83cm、深さ15cmである。

54号土坑（第76図、ＰＬ20）Ｌ－10グリッド。上面・下面とも不整円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺119cm、短辺110cm、深さ32cmである。

58号土坑（第76図、ＰＬ21）Ｎ－５グリッド。４号竪穴状遺構と重複するが新旧関係不明。上面・下面とも不整方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺234cm、短辺185cm、深さ23cmである。

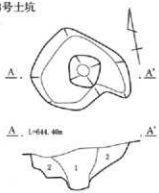
59・60号土坑（第77図、ＰＬ21）Ｏ－５グリッド。２号住・４号竪穴状遺構とは新旧関係不明。59号土坑は60号土坑より前出。59号土坑は上面・下面とも隅丸方形と推測される。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺83cm、短辺（33）cm、深さ27cmである。60号土坑は上面・下面とも隅丸方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺76cm、短辺66cm、深さ51cmである。

61号土坑（第77図、ＰＬ21）Ｎ・Ｏ－４グリッド。２号住、81号土坑とは新旧関係不明。上面・下面とも不整長方形。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺79cm、短辺50cm、深さ９cmである。

62号土坑（第77図、第86図、ＰＬ21、62）Ｐ－４グリッド。３・４号住、82号土坑より後出。上面は不整円形、下面は不整楕円形。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺84cm、短辺74cm、深さ15cmである。掲載した土器は混入であろう。

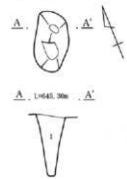
63号土坑（第77図、ＰＬ21）Ｐ－５グリッド。３・４号住より後出。上面・下面とも隅丸方形。壁はほぼ垂

43号土坑



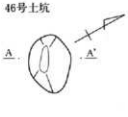
1．黒褐色土　褐色をモザイク状に20%含む。
2．褐色土　黒褐色土をモザイク状に10%含む。

45号土坑



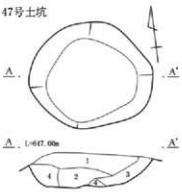
1．黒褐色土　やや砂質。

46号土坑



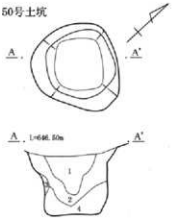
1．黒褐色土　ローム小ブロック５%、YPk１%含む。

47号土坑



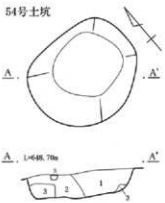
1．黒褐色土　褐色粒５%含む。
2．黒褐色土　YPkわずか含む。やや締まる。
3．黒褐色土　ローム小ブロック５%含む。
4．暗褐色土　ローム小ブロック10%含む。

50号土坑



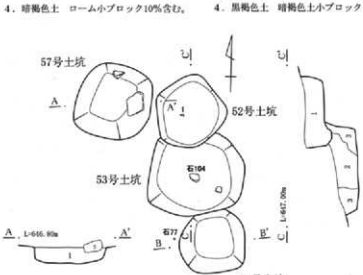
1．黒褐色土　YPk５%含む。
2．黒褐色土　暗褐色土小ブロック10%含む。
3．黄褐色土＋暗褐色土小ブロック
4．黒褐色土　暗褐色土小ブロック５%含む。

54号土坑



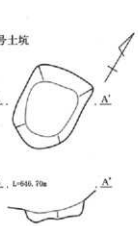
1．暗褐色土　ローム粒10%含む。
2．黒褐色土　YPkわずか含む。
3．暗褐色土　ローム大ブロック10%含む。

57号土坑



1．暗褐色土　ローム小ブロック20%含む。
2．黒褐色土　YPkわずか含む。
3．黒褐色土　ローム粒10%含む。

58号土坑



1．褐色土　黒褐色土をシミ状に含む。

0　1:40　1m

第76図　16区43、45、46、47、50、51・52・53・57、54、58号土坑

直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺62㎝、短辺61㎝、深さ19㎝である。

64号土坑（第77図、ＰＬ21）Ｐ－５グリッド。４号住とは新旧関係不明。上面・下面とも不整円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺66㎝、短辺59㎝、深さ17㎝である。

65号土坑（第77図、ＰＬ21）Ｏ－４グリッド。３号住より後出。上面・下面ともほぼ円形と推測。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺50㎝、短辺18㎝、深さ40㎝である。

66号土坑（第77図、第86図、ＰＬ21、62）Ｎ・Ｏ－12グリッド。上面は長楕円形、下面は不整形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺171㎝、短辺80㎝、深さ35㎝である。掲載した土器は混入であろう。陥し穴か。

71号土坑（第77図、ＰＬ21）Ｎ－４・５グリッド。２号住居と新旧関係不明。上面・下面とも不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺86㎝、短辺78㎝、深さ20㎝である。

77号土坑（第77図、ＰＬ22）Ｒ－５グリッド。上面・下面とも不整円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺95㎝、短辺73㎝、深さ22㎝である。

78号土坑（第78図、ＰＬ22）Ｒ・Ｓ－５グリッド。８号住居と新旧関係不明。上面・下面ともほぼ円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺101㎝、短辺（66）㎝、深さ21㎝である。

80号土坑（第78図、ＰＬ22）Ｒ－４・５グリッド。５号住居、２号竪穴状遺構と新旧関係不明。上面・下面ともほぼ円形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺59㎝、短辺56㎝、深さ23㎝である。

81号土坑（第78図、ＰＬ22）Ｎ・Ｏ－４グリッド。２号住居、61号土坑とは新旧関係不明。上面・下面とも隅丸長方形。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺70㎝、短辺59㎝、深さ６㎝である。

82号土坑（第78図、第86図、ＰＬ22、62）Ｐ－４グリッド。３号住居、62号土坑より前出。４号住居とは新旧関係不明。上面・下面とも不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺61㎝、短辺55㎝、深さ23㎝である。掲載した土器は混入であろう。

83号土坑（第78図、第86図、ＰＬ22、63）Ｐ－４グリッド。４号住居とは新旧関係不明。上面・下面とも不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺105㎝、短辺90㎝、深さ31㎝である。掲載した土器は混入であろう。

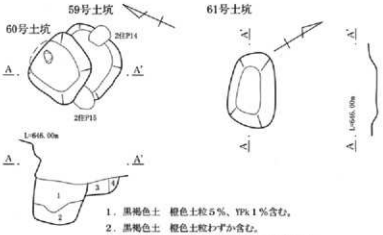
86号土坑（第78図、ＰＬ22）Ｑ・Ｒ－11・12グリッド。上面・下面とも隅丸長方形。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺178㎝、短辺117㎝、深さ15㎝である。陥し穴か。

94号土坑（第78図、ＰＬ22）Ｌ－12グリッド。上面・下面ともほぼ隅丸方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺95㎝、短辺90㎝、深さ36㎝である。

97号土坑（第78図、ＰＬ22）Ｎ－10グリッド。上面・下面とも不整円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺76㎝、短辺64㎝、深さ56㎝である。巨角礫混入。

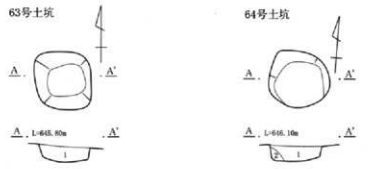
98号土坑（第79図、第86図、ＰＬ22、62）Ｎ－15グリッド。上面は長楕円形、下面は隅丸長方形。壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凸凹する。規模は長辺164㎝、短辺78㎝、深さ39㎝である。掲載した土器は混入であろう。陥し穴か。

99号土坑（第79図、ＰＬ23）Ｐ－11・12グリッド。72号土坑より前出。上面・下面ともほぼ円形と推測。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺75㎝、短辺（47）㎝、深さ34㎝である。



1．黒褐色土　橙色土粒５％、YPk１％含む。
2．黒褐色土　橙色土粒わずか含む。
3．黒褐色土　橙色土粒・炭粒５％、YPk１％含む。
4．暗褐色土＋ローム大ブロック

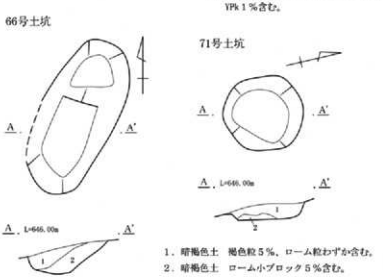
1．黒褐色土＋にぶい黄褐色土　YPk５％含む。
2．黒褐色土＋暗褐色土　YPkわずか含む。



1．黒褐色土＋暗褐色土　YPk１％含む。

1．黒褐色土　ローム大ブロック20%、YPk１％含む。
2．黄褐色土　黒褐色土小ブロック10%、YPk１％含む。

1．黒褐色土　YPk１％含む。



1．暗褐色土　褐色粒５％、ローム粒わずか含む。
2．暗褐色土　ローム小ブロック５％含む。

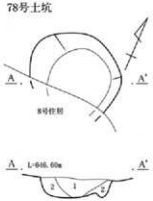
1．暗褐色土　褐色粒１％、ローム粒わずか含む。
2．暗褐色土＋ローム大ブロック

1．黒褐色土　ローム粒・炭粒・YPk５％含む。
2．黒褐色土　ローム大ブロック20%、炭粒１％含む。

0　1:40　1m

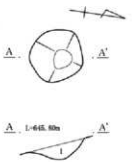
第77図　16区59・60、61、62、63、64、65、66、71、77号土坑

78号土坑



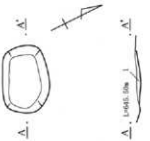
1．暗褐色土　褐色粒１％、ローム粒わずか含む。
2．暗褐色土　黒褐色土小ブロック５％含む。

80号土坑



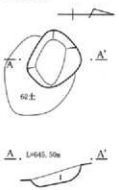
1．暗褐色土　白色粒１％、
褐色粒わずか含む。

81号土坑



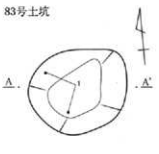
1．暗褐色土　ローム粒・白色粒５％含む。

82号土坑



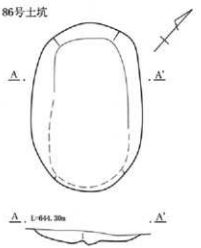
1．黒褐色土　褐色粒５％、
YPkわずか含む。

83号土坑



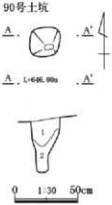
1．黒褐色土　白色粒１％、YPkわずか含む。
2．暗褐色土　YPkわずか含む。

86号土坑



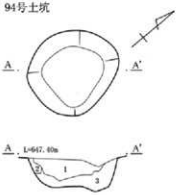
1．黒褐色土　褐色粒５％、YPkわずか含む。

90号土坑



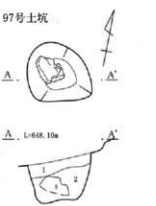
1．黒褐色土　ローム粒・炭粒
・YPk５％含む。
2．黒褐色土　ローム粒10%、
炭粒１％含む。

94号土坑



1．黒褐色土　白色粒１％、YPkわずか含む。
2．黒褐色土　ローム大ブロック20%含む。
3．黒褐色土　ローム粒10%含む。

97号土坑

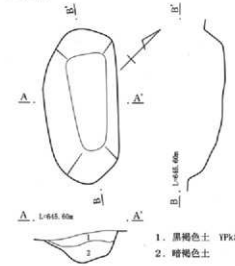


1．黒褐色土＋褐色土
2．黒褐色土　褐色土小ブロック５％、
YPkわずか含む。

0　1:40　1m

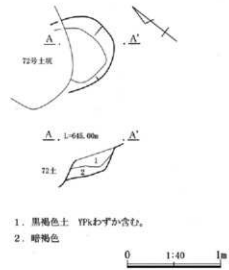
第78図　16区78、80、81、82、83、86、90、94、97号土坑

98号土坑



1．黒褐色土　YPkわずか含む。
2．暗褐色土

99号土坑



1．黒褐色土　YPkわずか含む。
2．暗褐色

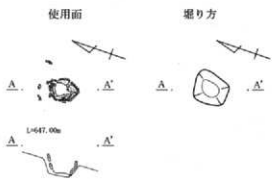
第79図　16区98、99号土坑

第４項　埋設土器

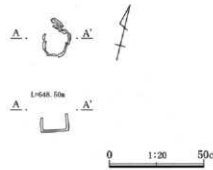
１号埋設土器（第80図、第87図、ＰＬ23，64）Ｍ－５グリッド。深鉢(1)を埋設する。上半部は不明。底部は出土しなかった。掘り方はやや方形気味に掘り込む。規模は長辺18cm、短辺17cm、深さ11cmである。２～５号住居が選地する南向き斜面と違い、１号住居と同様に南東斜面に位置し、遺構密度は薄い。尾根と斜面との傾斜変換点にあたる。

２号埋設土器（第80図、第87図、ＰＬ23，64）Ｋ・Ｌ－11グリッド。10・11号住居と重複するが、10号住居床面で検出のため調査時は、10号住居内の埋設土器として扱った。土器の年代観から10号住居より前出、11号住居とは年代的に近い。ただし、11号住居は残存状態が悪く輪郭もやや不明確であるが、位置として11号住居の壁面に重なることから、単独の遺構と結論した。掘り方の形状・規模など不明。

１号埋設土器



２号埋設土器

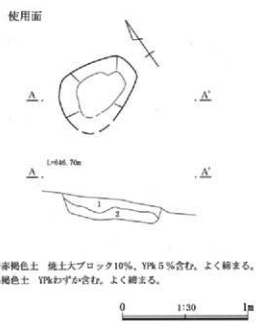


第80図　16区1号・2号埋設土器

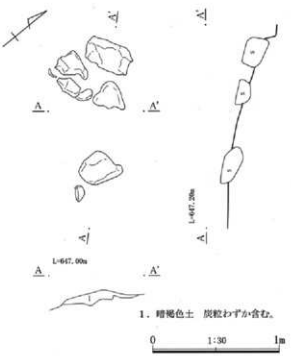
第５項　焼土・集石遺構

１号焼土（第81図、ＰＬ23）Ｎ・Ｏ－４・５グリッド。２号住居より後出し、２号住居が完全に埋まりきった状況のほぼ中央部で検出された。確認状態で焼土は、にじんだ状態で不分明であった。掘削後の断面観察の結果、焼土はブロック状であり、燃焼面を平面的に検出できなかった。掘り方規模は長辺69cm、短辺56cm、深さ24cmである。遺物は細かな土器片などであり、年代観を与えるものではない。

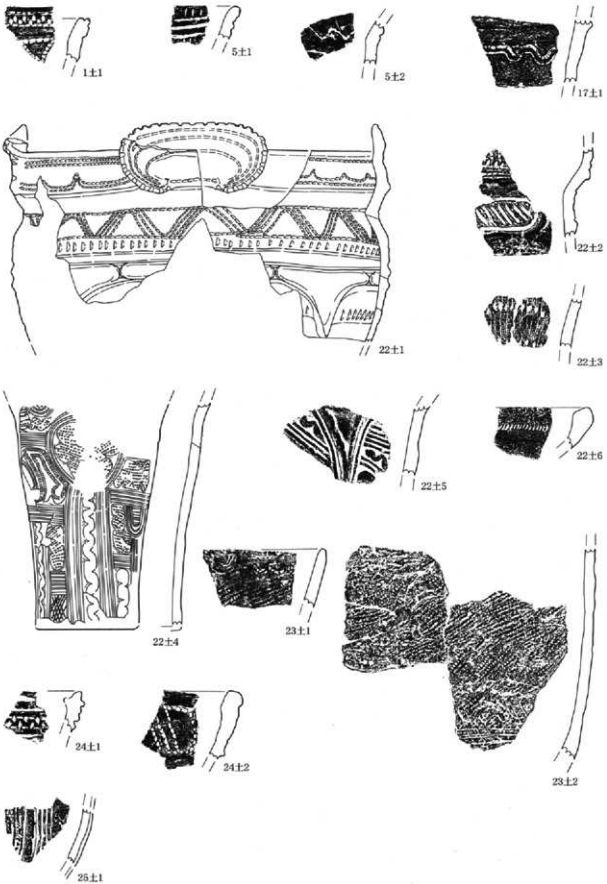
１号集石遺構（第82図、ＰＬ23）Ｌ・Ｍ－13グリッド。人頭大の円礫がやや集中する。確認状態で土坑を石が囲んでいることも推測されたため、中央部をトレンチ状に掘り下げて土層観察を行った。その結果、掘り込みは確認できず、自然埋没による水平な土層堆積が確認されたが、上層に炭粒を含む土層が観察された。出土位置は北側谷部の緩やかな斜面であり、黒色土の堆積が厚い部分で、遺構外遺物が最も多く出土した部分である。石の分布に規則性はないが、谷部内では巨礫の出土数が少ないので、遺構との関連が想定される。石が出土する高さも、ほぼそろっており、一時的に配置されたものか、崩落したものかと思われる。南東尾根上に位置する10・11号住居のうち、10号住居は石囲い炉で、11号住居は焼土のみで石を据えた掘り込み痕も認められず、他の住居の事例からも石囲いではないだろう。本遺構で出土した石に使用痕跡や焼け跡、ススの付着などがあったという調査記録はない。



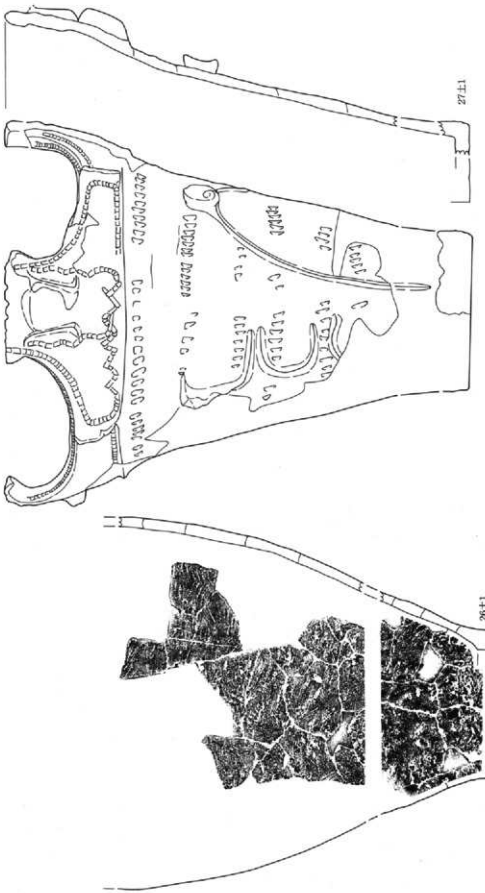
第81図　16区１号焼土



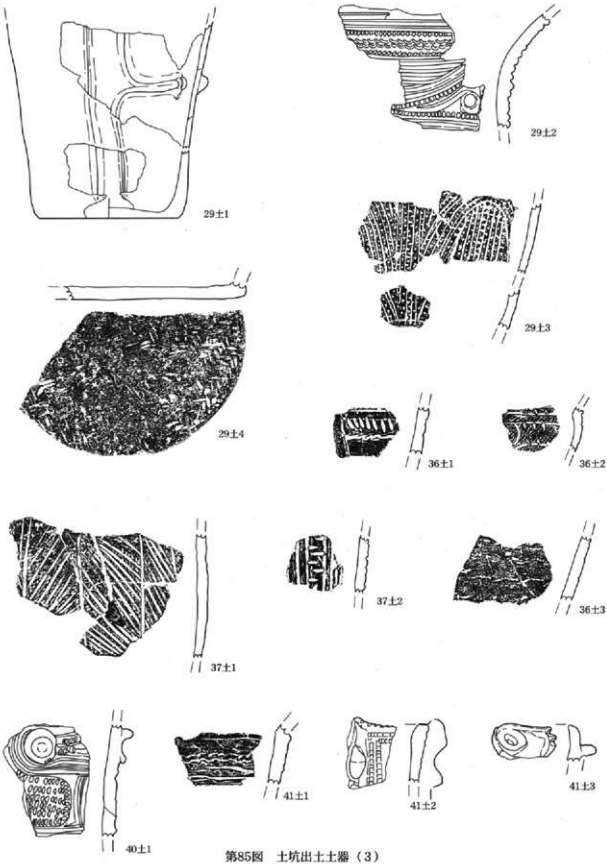
第82図　16区１号集石



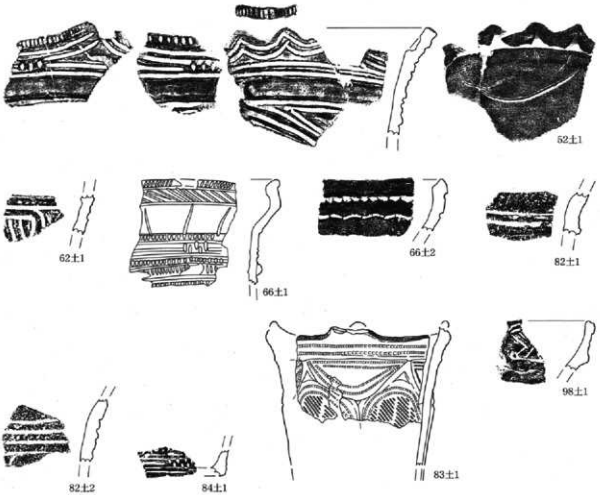
第83図　土坑出土土器（1）



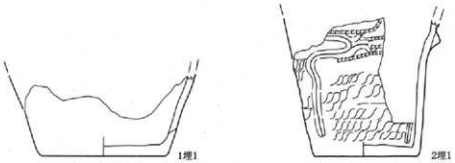
第84図　土坑出土土器（2）



第85図　土坑出土土器（３）



第86図　土坑出土土器（4）



第87図　1号・2号埋設土器出土土器

第３節　平安時代以前

第１項　土坑（陥し穴）

形態的な特徴により、以下の分類を基準に記述を行った。

筒形：上面・底面ほぼ円形で、壁が垂直に立ち上がる茶筒形のもの。

スリ鉢形：上面・底面ほぼ円形だが底面積は小さく、壁が斜めに立ち上がるもの。

箱形１類：上面・底面が長方形か隅丸長方形で、壁が垂直に立ち上がるもの。

２類：上面は楕円形で、途中から長方形となって底面も長方形か隅丸長方形となる。壁面は下半部は垂直で途中から外側に外反して、上面に向かって斜めに立ち上がるため、断面くの字形をなすもの。

溝状：上面は細長い楕円形、底面は端部の丸い細長い溝状になる。壁は長辺は斜め気味のＶ字形になるが、短辺側はほぼ垂直気味に立ち上がるもの。

以上、４種５分類とした。なお、箱形２類は発掘調査時の確認面が深くなったり、耕作により攪拌で消滅していた場合など、上半部を欠損して箱形１類となるため、同種として分類した。

７号土坑（第89図、ＰＬ25）Ｌ－６グリッド。上面は楕円形、下面は長楕円形。北壁は斜めで、底面は丸みを持ち、全体形はスリ鉢形。規模は長辺203㎝、短辺152㎝、深さ130㎝である。確認面から約20㎝下層がYPk層であることから、壁面の崩落が想像され、ロームと暗褐色土の混土による張り壁状の堆積が見られる。これを使用面と考えると、断面Ｔ字形が復元される。

８号土坑（第89図、ＰＬ25）Ｍ－８グリッド。上面は楕円形、下面は長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。全体形は箱形２類。規模は長辺163㎝、短辺146㎝、深さ169㎝である。

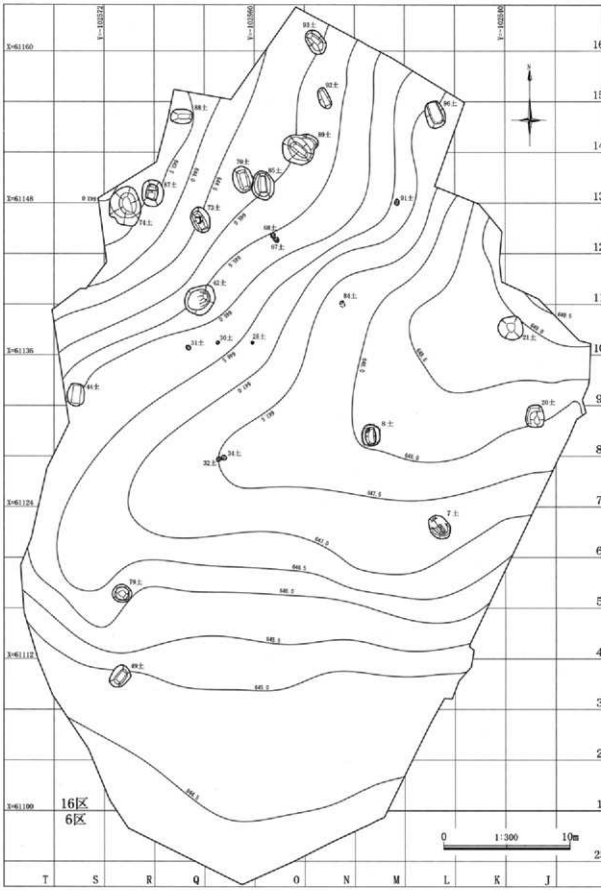
20号土坑（第89図、ＰＬ25）Ｊ－８・９グリッド。１号竪穴状遺構より後出。上面は隅丸方形、下面は楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。全体形はスリ鉢形。規模は長辺176㎝、短辺147㎝、深さ112㎝である。

21号土坑（第89図、ＰＬ25）Ｊ・Ｋ－10グリッド。上面は円形、下面は不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや丸みを持つ。全体形はスリ鉢形。規模は長辺202㎝、短辺195㎝、深さ87㎝である。

42号土坑（第90図、ＰＬ25）Ｐ・Ｑ－10・11グリッド。上面は楕円形、下面は長楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。全体形はスリ鉢形。壁面の中位から下位に黄褐色土を主体とする張り壁状の堆積があり、完掘後では中位のYPk層がオーバーハングしていた。このため、壁面が崩落したため、補修した可能性が考えられる。規模は長辺264㎝、短辺226㎝、深さ239㎝である。

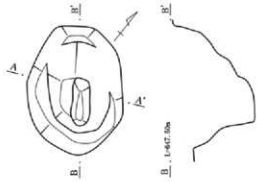
44号土坑（第90図、ＰＬ25）Ｓ－８・９グリッド。上面は隅丸長方形、下面は長方形。壁はほぼくの字形に立ち上がる。底面は平坦。全体形は箱形１類。底面から約30㎝上層に堅く締まった黒褐色土が平面的に検出された。底面としての使用が２時期想定される。規模は長辺177㎝、短辺135㎝、深さ90㎝、堀り方41㎝である。壁面には掘削時の成形痕と見られる方形の工具痕跡が、４面全てで顕著である。工具痕跡は現地計測値では、掘削上面で幅8.0㎝、下面で幅6.5㎝で、両端部が丸く張り出すように観察される。堅い壁面を鋭く削り込む形状から、金属の刃先を想定できるかもしれない。

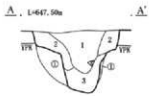
49号土坑（第91図、ＰＬ25）Ｒ－３グリッド。上面は楕円形、下面は長方形。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。全体形は箱形２類。規模は長辺183㎝、短辺140㎝、深さ168㎝である。断面観察により基本土層Ｖ層中からの掘り込みと判断され、縄文時代中期の遺物層位に対応する。



第88図　6・16区全体図（平安以前）

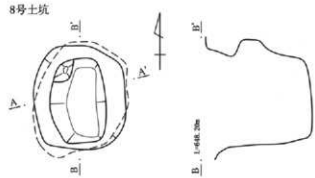
7号土坑

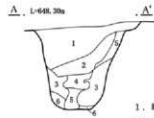




1．黒褐色土　暗灰黄色土大ブロック10%含む。
2．黒褐色土　YPkわずか含む。
3．暗褐色土　YPkわずか含む。
①．ローム＋暗褐色土　貼り壁か

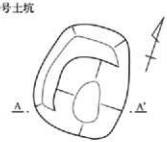
8号土坑

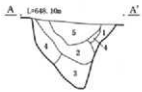




1．暗褐色土　YPk５%含む。
2．黒褐色土　ローム粒わずか含む。
3．黒褐色土＋ローム
4．黒褐色土　ローム小ブロック10%含む。
5．暗褐色土　YPk１%含む。
6．YPk　主体　黒褐色土10%含む。

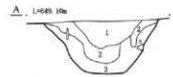
20号土坑





1．黒褐色土　YPk５%含む。
2．黒褐色土　YPk１%、褐色土大ブロック10%含む。
3．黒褐色土　YPk１%、褐色土大ブロック20%含む。
4．黒褐色土　YPk10%含む。
5．黒褐色土　YPk10%、黒褐色土をモザイク状に含む。

21号土坑

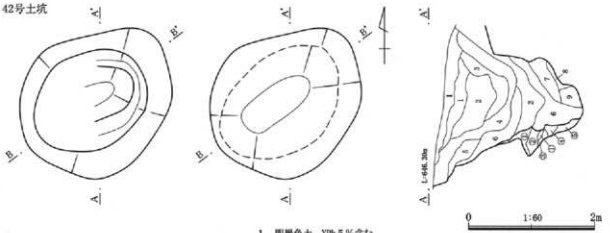


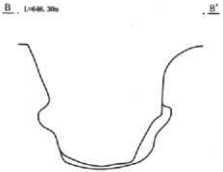
1．黒褐色土　YPk１%含む。
2．黒褐色土　YPk１%、褐色土をモザイク状に含む。
3．黒褐色土　YPk５%、ローム小ブロック20%含む。

0　1:60　2m

第89図　16区７、8、20、21号土坑（陥し穴）

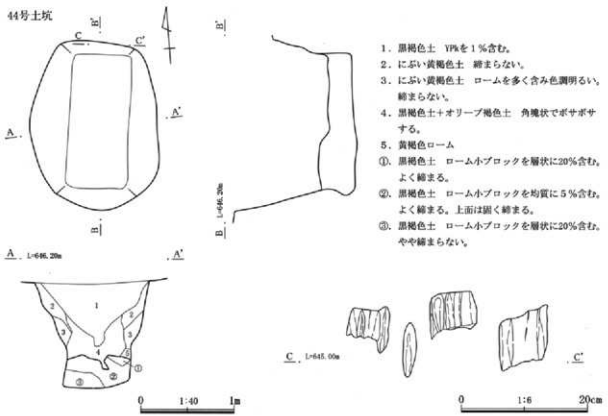
42号土坑





1．明褐色土　YPk５％含む。
2．黒褐色土　YPk１％、褐色土大ブロック20%含む。
3．黒褐色土　YPk１％、ローム大ブロック40%含む。
4．黒褐色土　YPk１％含む。
5．黒褐色土　YPk１％、ローム大ブロック20%含む。
6．黒褐色土　YPk１％、ローム大ブロック20%、褐色土大ブロック20%含む。
7．ローム大ブロック＋黒色土
8．黄褐色粘質土　やや締まる。
①．黒褐色土　YPk１％、ローム小ブロック20%、褐色土大ブロック20%含む。
②．黄褐色粘質土　やや締まる。
③．YPk
④．オリーブ褐色土　YPkを40%含む。
⑤．黄褐色粘質土　黒色土40%含む。やや締まる。

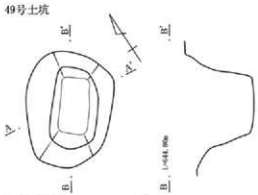
44号土坑

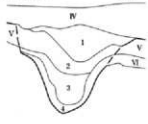


1．黒褐色土　YPkを１％含む。
2．にぶい黄褐色土　締まらない。
3．にぶい黄褐色土　ロームを多く含み色調明るい。締まらない。
4．黒褐色土＋オリーブ褐色土　角礫状でボサボサする。
5．黄褐色ローム
①．黒褐色土　ローム小ブロックを層状に20%含む。よく締まる。
②．黒褐色土　ローム小ブロックを均質に５％含む。よく締まる。上面は固く締まる。
③．黒褐色土　ローム小ブロックを層状に20%含む。やや締まらない。

第90図　16区42、44号土坑（陥し穴）

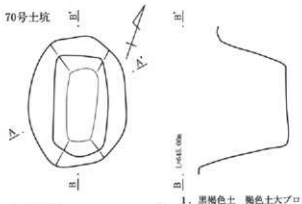
49号土坑





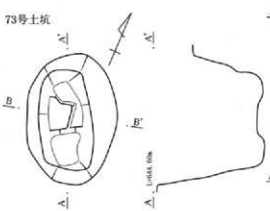
1．黒褐色土　褐色土をモザイク状に含む。
2．黒褐色土　YPk１％含む。
3．黒褐色土　ローム大ブロック10%含む。
4．暗褐色土　ローム小ブロック10%含む。

70号土坑



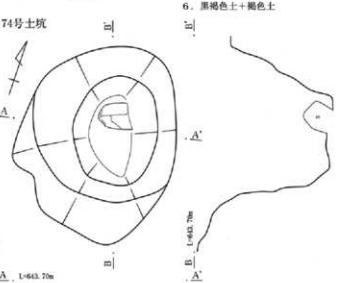
1．黒褐色土　褐色土大ブロック40％含む。
2．黒褐色土　YPk１％含む。
3．黒褐色土＋褐色土　中円礫５％含む。
4．黒褐色土　均質。YPk１％含む。
5．褐色土　黒褐色土大ブロック20％含む。
6．黒褐色土＋褐色土

73号土坑



1．褐色土　黄褐色土をモザイク状に含む。
2．黒褐色土　褐色土大ブロック10%、YPk１％含む。
3．黒褐色土＋褐色土
4．黒褐色土　褐色土小ブロック40%含む。
5．黒褐色土　やや粘質。やや締まる。

74号土坑



1．灰褐色土　YPk１％含む。
2．褐色土　黒褐色土をシミ状に含む。
3．黒褐色土＋褐色土　均質に混じる。YPk１％、大円礫含む。
4．黒褐色土　褐色土をシミ状に含む。
5．黄褐色土＋黒褐色土
6．黒褐色土　YPk１％含む。
7．黄褐色土小ブロック＋灰褐色土　締まらない。

0　1:60　2m

第91図　16区49、70、73、74号土坑（隠し穴）

70号土坑（第91図、ＰＬ26）Ｐ－13グリッド。上面は楕円形、下面は長方形。短辺の壁はややくの字形に立ち上がり、長辺の壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形２類。規模は長辺204㎝、短辺156㎝、深さ143㎝である。

73号土坑（第91図、ＰＬ26）Ｐ・Ｑ－12グリッド。上面は楕円形、下面は隅丸長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面は中央部がやや盛り上がる。底面に地山の巨礫が露呈する。全体形は箱形２類。規模は長辺207㎝、短辺143㎝、深さ171㎝である。

74号土坑（第91図、ＰＬ26）Ｒ－12・13グリッド。上面は楕円形、下面は長方形。短辺の壁はややくの字形に立ち上がり、長辺の壁は斜めに立ち上がる。底面に地山の巨礫が露呈する。全体形はスリ鉢形。規模は長辺311㎝、短辺260㎝、深さ214㎝である。

79号土坑（第92図、ＰＬ26）Ｒ－５グリッド。上面・下面ともに円形。壁は中位に崩落によるオーバーハングがあるが、本来は斜めに立ち上がっていたと見られる。底面はほぼ平坦。全体形は筒形。規模は長辺157㎝、短辺140㎝、深さ150㎝である。

85号土坑（第92図、ＰＬ26）Ｏ・Ｐ－13グリッド。上面は楕円形、下面は長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、中央部に地山の巨礫が露呈する。全体形は箱形２類。規模は長辺233㎝、短辺183㎝、深さ184㎝である。

87号土坑（第92図、ＰＬ26）Ｑ・Ｒ－12・13グリッド。上面は楕円形、下面は長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平らで南に傾斜する。全体形は箱形２類。規模は長辺209㎝、短辺171㎝、深さ187㎝である。

88号土坑（第92図、ＰＬ26）Ｑ－14グリッド。上面は楕円形、下面は長方形。短辺の壁はやや垂直気味に立ち上がり、長辺の壁は斜めに立ち上がる。底面はやや丸みを持つ。全体形は箱形１類。規模は長辺173㎝、短辺116㎝、深さ132㎝である。

89号土坑（第93図、ＰＬ26）Ｎ・Ｏ－13・14グリッド。上面は楕円形、下面は長楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。全体形はスリ鉢形。規模は長辺298㎝、短辺253㎝、深さ207㎝である。

92号土坑（第93図、ＰＬ26）Ｎ－14・15グリッド。上面は長楕円形、下面は長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形１類。規模は長辺173㎝、短辺89㎝、深さ111㎝である。

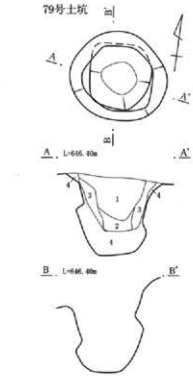
93号土坑（第93図、ＰＬ27）Ｎ－15・16グリッド。上面は楕円形、下面は長方形。短辺の壁はややくの字形に立ち上がり、長辺の壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形はスリ鉢形。規模は長辺209㎝、短辺133㎝、深さ157㎝である。

96号土坑（第93図、ＰＬ27）Ｌ－14・15グリッド。上面は隅丸長方形、下面は長方形。短辺の壁はやや斜めに立ち上がり、長辺の壁は垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形１類。規模は長辺210㎝、短辺152㎝、深さ142㎝である。

第２項　土坑（ピット）

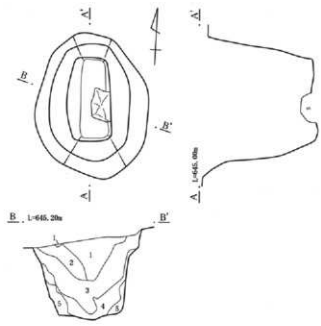
25号土坑（第94図）Ｐ－10グリッド。規模は長辺22㎝、短辺21㎝、深さ28㎝である。掲載した土器は混入であろう。25・30・31号土坑は、東西方向にほぼ直線に並んでおり、25・30号土坑の間隔は芯々距離で約３m、30・31号土坑の間隔は芯々距離で約2.7mである。このほか、北西の45号土坑も形状ピットであり、６号住居Ｐ１も位置的に関連づけられそうに思える。調査段階では認識もなく、掘立柱建物を想定したピットの確認作業も行っていないため、建物の存在は想像の範囲をでない。

79号土坑



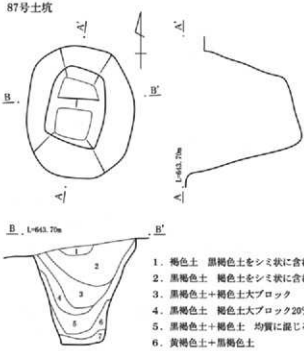
1．黒褐色土　褐色をシミ状に、YPk20%含む。
2．黒褐色土　YPk１%含む。
3．暗褐色土　YPk１%含む。
4．褐色土　ローム小ブロック５%含む。

85号土坑



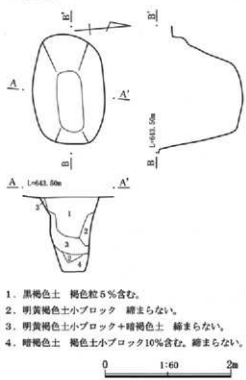
1．灰褐色土　YPk１%含む。
2．褐色土＋黒褐色土　ローム大ブロック10%含む。
3．黒褐色土　YPk１%含む。
4．褐色土＋黒褐色土　ローム大ブロック10%含む。
5．黒褐色土＋ローム小ブロック

87号土坑



1．褐色土　黒褐色土をシミ状に含む。
2．黒褐色土　褐色土をシミ状に含む。
3．黒褐色土＋褐色土大ブロック
4．黒褐色土　褐色土大ブロック20%含む。
5．黒褐色土＋褐色土　均質に混じる。
6．黄褐色土＋黒褐色土
7．黒褐色土　やや締まる。

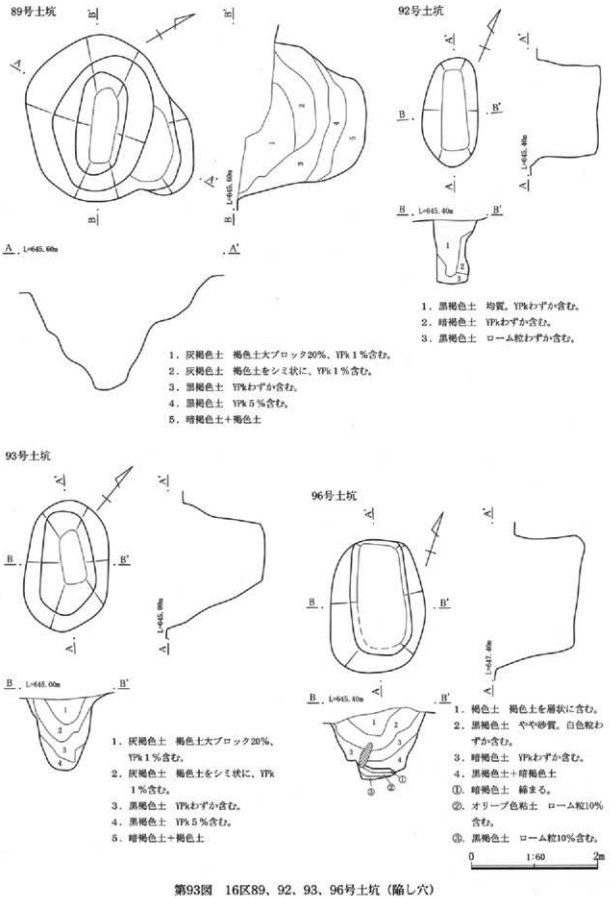
88号土坑



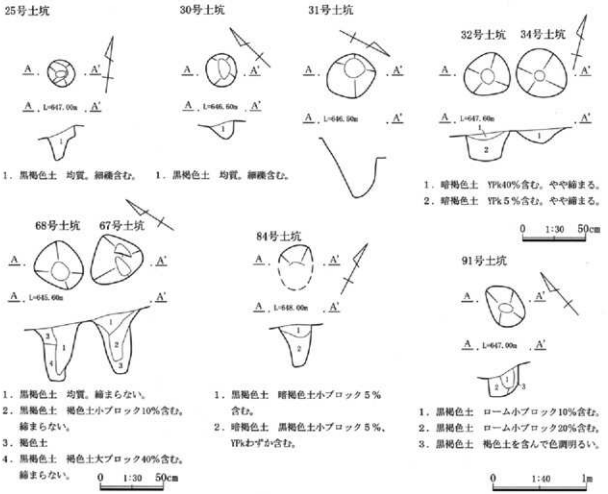
1．黒褐色土　褐色粒５%含む。
2．明黄褐色土小ブロック　締まらない。
3．明黄褐色土小ブロック＋暗褐色土　締まらない。
4．暗褐色土　褐色土小ブロック10%含む。締まらない。

0　1:60　2m

第92図　16区79、85、87、88号土坑（陥し穴）



第93図　16区89、92、93、96号土坑（陥し穴）



第94図　16区25、30、31、32・34、67・68、84、91号土坑（ピット）

30号土坑（第94図）Ｐ－10グリッド。規模は長辺27cm、短辺26cm、深さ15cm。

31号土坑（第94図）Ｑ－10グリッド。規模は長辺40cm、短辺34cm、深さ47cm。

32号土坑（第94図、ＰＬ27）Ｐ－７グリッド。34号土坑と近接するが、重複関係ではない。規模は長辺37cm、短辺36cm、深さ26cmである。

34号土坑（第94図、ＰＬ27）Ｐ－７・８グリッド。32号土坑と近接するが、重複関係ではない。規模は長辺40cm、短辺38cm、深さ11cmである。

45号土坑（第76図、ＰＬ20）Ｑ・Ｒ－11グリッド。上面は長楕円形、下面は不整形だが、主体的な形態はピット状。規模は長辺64cm、短辺36cm、深さ78cmである。

67号土坑（第94図、ＰＬ27）Ｏ－12グリッド。68号土坑と近接するが、重複関係ではない。規模は長辺44cm、短辺39cm、深さ53cmである。90号土坑も近く芯々距離で約1.75mである。関連か。

68号土坑（第94図、ＰＬ27）Ｏ－12グリッド。67号土坑と近接するが、重複関係ではない。規模は長辺39cm、短辺37cm、深さ53cmである。90号土坑も近く芯々距離で約1.95mである。関連か。

84号土坑（第94図、ＰＬ27、62）Ｎ－10・11グリッド。規模は長辺37cm、短辺（17）cm、深さ45cmである。

掲載した土器は混入であろう。

90号土坑（第78図、ＰＬ21）Ｎ・Ｏ－12グリッド。規模は長辺28㎝、短辺25㎝、深さ45㎝である。西側に近接して、67・68号土坑は芯々でそれぞれ1.75m、1.95m離れ、関連が想定される。

91号土坑（第94図、ＰＬ27）Ｍ－12・13グリッド。規模は長辺49㎝、短辺36㎝、深さ33㎝。

第４節　平安時代以降

第１項　土坑（陥し穴）

当該期の遺構は確認面に近い埋没土上層に、粕川テフラが純堆積に近い状態で混入することを根拠としている。このテフラの降下年代は、1128年に同定されている（第５章参照）。このテフラの堆積を持つ陥し穴は、西側に隣接する立馬Ⅰ遺跡で、平安時代住居を壊して作られたことが判明しており、平安時代に年次比定される遺構と考えられる（群埋文2003『年報22』）。

６号土坑（第96図、ＰＬ27）Ｊ・Ｋ－６グリッド。全体形は溝状。短辺の壁はややくの字形に立ち上がり、長辺の壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺246㎝、短辺117㎝、深さ112㎝である。底面に杭跡があるかどうかは、底面がYPk層であることから確認できなかった。

48号土坑（第96図、ＰＬ28）Ｑ－３グリッド。全体形は溝状。短辺の壁は斜めに立ち上がり、長辺の壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺242㎝、短辺112㎝、深さ151㎝である。底面に杭跡５基を検出した。埋没土は締まりが無く、容易に判別できる。３基については石膏型を採取した（１～３）。１は先端が鈍角で、２・３は鋭角に尖らせている。概ね20㎝前後埋め込まれている。杭の深さは20㎝前後であった。３基については石膏型を採取し、計測図を示してある。２本の先端は尖っていたが、１本は丸く鋭利ではない。底面は柔らかな黄褐色粘土で差し込むことに不都合はないとも想像されるが、やや異例な形状と認める。　**杭の規模**（径・深さ㎝）杭１：６～７・22、杭２：２・26、杭３：６・16、杭４：不明、杭５：６・不明。

69号土坑（第96図、ＰＬ28）Ｏ－12・13グリッド。全体形は溝状。短辺の壁はくの字形に立ち上がり、長辺の壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。底面に杭跡６基を検出した。埋没土は締まりが無く、容易に判別できる。規模は長辺300㎝、短辺131㎝、深さ152㎝である。　**杭の規模**（径・深さ㎝）杭１：４～６・21、杭２：４・51、杭３：６～７・34、杭４：４・22、杭５：６・42、杭６：６～７・48。

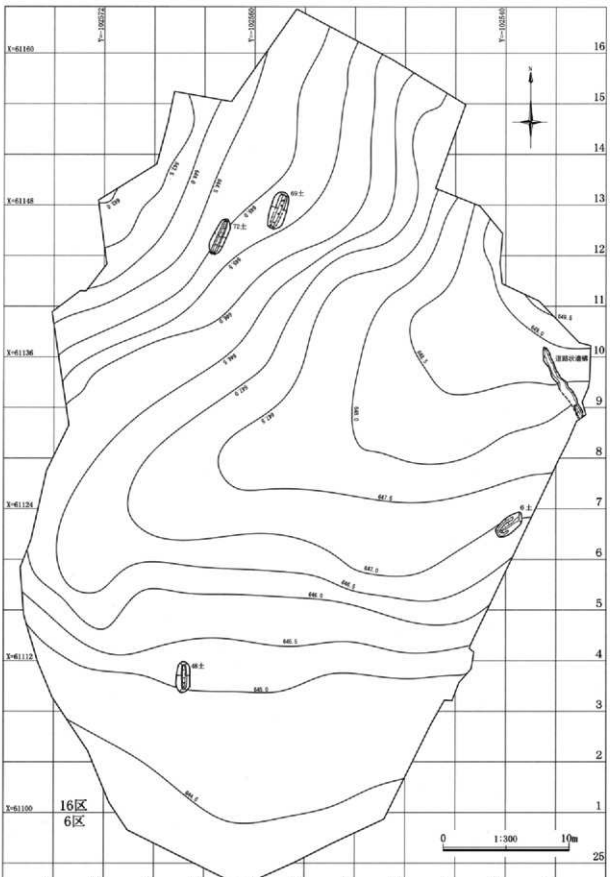
72号土坑（第96図、ＰＬ29）Ｐ－12グリッド。全体形は溝状。短辺の壁はくの字形に立ち上がり、長辺の壁はややくの字気味に立ち上がるが、下半はオーバーハング気味に掘り込む。底面は平坦。底面に杭跡７基を検出した。埋没土は締まりが無く、容易に判別できる。規模は長辺295㎝、短辺110㎝、深さ124㎝である。**杭の規模**（径・深さ㎝）杭１：７・14、杭２：７・22、杭３：６・28、杭４：４～５・42、杭５：４～６・32、杭６：５・28、杭７：５・32。

第２項　道路状遺構

１号道路状遺構（第97図、ＰＬ29）Ⅰ・Ｊ－８～10グリッド。　**主軸方位**　Ｎ－31°－Ｗ

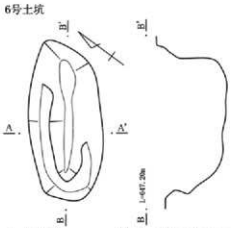
規模　長さ5.62m以上、幅0.36～0.62m。南端は調査区域外となり、北端は削平により消滅する。

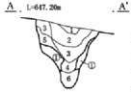
道路面　硬化した明確な道路面は二面確認される。下層道路面は砂を含んだ黒色土であるが、人為的な構築ではなく、歩行により徐々に硬化形成されたものと判断される。上層の道路面との間には、シルトや砂層が堆積しており、表流水などによる土の埋積と判断される。上部道路面は黒灰色シルトが硬化しており、埋積



第95図　6・16区全体図（平安以降）

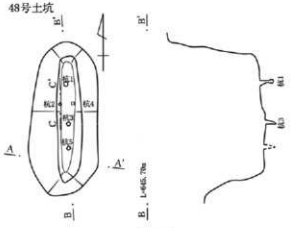
6号土坑

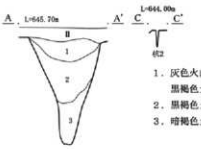




1．灰色火山灰ブロック（粕川テフラ？）＋黒褐色土
2．黒褐色土　YPk１％含む。
3．暗褐色土　YPk１％含む。
4．黒褐色土＋ローム小ブロック
5．褐色土　ローム粒10％含む。
6．ローム大ブロック＋YPk
①．にぶい黄褐色土　貼り壁か。

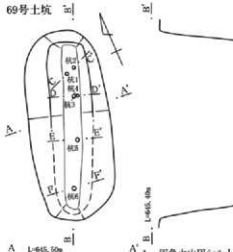
48号土坑





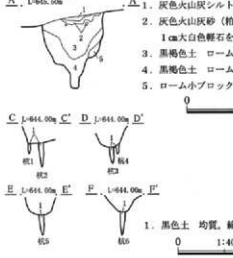
1．灰色火山灰（粕川テフラ？）黒褐色土を均質に含む。
2．黒褐色土　YPk１％含む。
3．暗褐色土　YPk１％含む。

69号土坑



1．灰色火山灰シルト（粕川テフラ？）
2．灰色火山灰砂（粕川テフラ？）１cm大白色軽石を含む。
3．黒褐色土　ローム粒・炭粒５％含む。
4．黒褐色土　ローム大ブロック20％含む。
5．ローム小ブロック＋黒褐色土

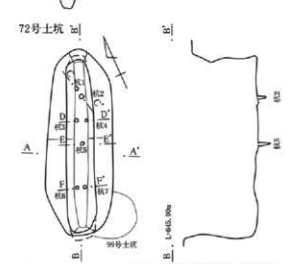
0　1:60　2m

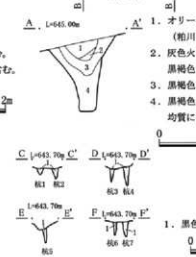


1．黒色土　均質。締まらない。

0　1:40　1m

72号土坑





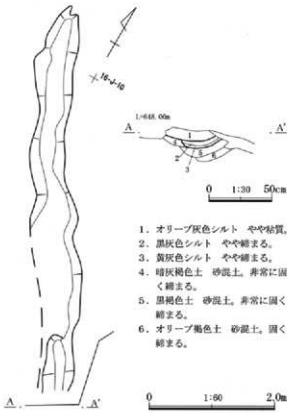
1．オリーブ灰色火山灰シルト（粕川テフラ？）
2．灰色火山灰（粕川テフラ？）＋黒褐色土大ブロック
3．黒褐色土　やや粘質。
4．黒褐色土＋褐色土　やや粘質。均質に混じる。

0　1:60　2m

1．黒色土　均質。締まらない。

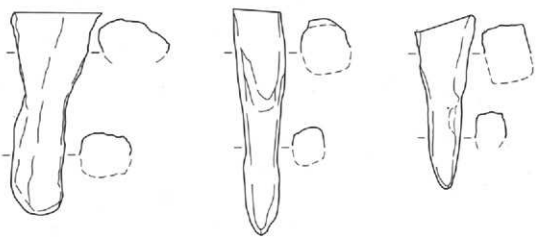
0　1:40　1m

第96図　16区６、48、69、72号土坑（陥し穴）



第97図　道路状遺構

したシルトが路面として硬化したと見られる。なお、道路面を被覆する覆土も灰色シルトであるが、表土下に硬化面は確認できず、この埋積により廃棄された可能性もある。調査時点で東側に並走する山道が存在していたことから、その前身と想定される。この山道は東側の久森沢川の沢筋に上るもので、山頂部に近い崖部には「あしぐら観音」と呼ばれる石仏群が、江戸～明治期にかけて造立されている。



第98図　16区48号土坑、杭、石膏型

第５節　遺構外出土遺物

第１項　出土状況

第99、100図に番号で示したのは掲載遺物のうち、出土位置が記録されているものであり、縄文中期の大破片が多くなっている。番号のないドットは未掲載物であるが、第４章第２節のまとめで、未掲載遺物をグリッドごとに分類した個数をしめしたので、そちらに反映されている。調査区南側中央部に集中がみられるのは、住居群の南に位置し、軽微な谷地形で土器が集積したためであろう。調査区北側の谷地形はやや大きく、広範囲からの流れ込みが想定されるが、遺物の集中状況は調査区の尾根側寄りであるため、遺跡内の住居周辺からの崩落した遺物が多くを占めているだろう。特にＭ－13、Ｎ－12・13グリッドにはかなりの遺物集中が認められる。第Ⅵ群第２類の大形深鉢である遺構外259・260・261もすべてこれらのグリッドから出土している。この周辺では、土坑(陥し穴)を除いて明確な遺構はないため、尾根側から投棄されたか、尾根側の遺構から崩落したものと解される。なお、早期や前期の土器については、破片が小さい関係で一括取り上げのものが多く、この図では反映していない。グリッドごとの出土状況は、第４章第２節のまとめに示してある。また、第101図に土器分類別の個数及び構成を示したが、第Ⅵ群が多いと同時に、多種多様である点もうかがえる。

第２項　土器

１．縄文時代草創期・早期

第Ⅰ群　草創期後半撚糸紋土器を一括した（第102図１～８）。

１は丸棒状の口唇部をもつ口縁部破片。口縁部をやや肥厚させて無紋帯を形成し、その下から条の大きめな浅い施紋の撚糸紋Ｒを縦位施紋する。口縁部の無紋帯は丁寧に磨かれている。２は１と同一個体の胴部破片。３はまばらなＲ施紋で薄手のつくりである。４～８は同一個体。他と同様、節の大きい浅めな撚糸紋Ｒを縦位施紋する。

１～８は口縁部無紋帯をもつことや縄の節が大きく浅めの施紋という特徴から稲荷原式に最も近い様相を呈しているといえよう。

第Ⅱ群　早期の土器を一括した（第102図９～第108図110）。

第１類　押型紋土器を一括した（第102図９～13）。

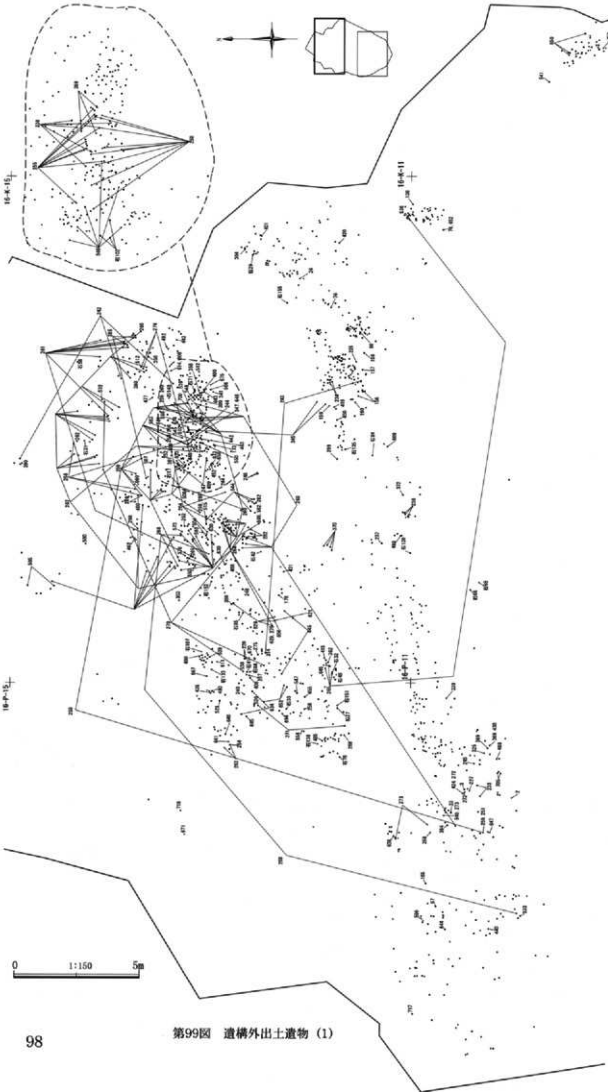
９は山形押型紋を縦位帯状施紋する。10～12は楕円押型紋を横位施紋する。９は樋沢式、10～12は細久保式に比定できよう。13は絡条体条痕が施される土器で、押型紋土器に伴う撚糸紋土器の系統と考えられる。

第２類　沈線紋土器を一括した（第102図14～第103図47）。

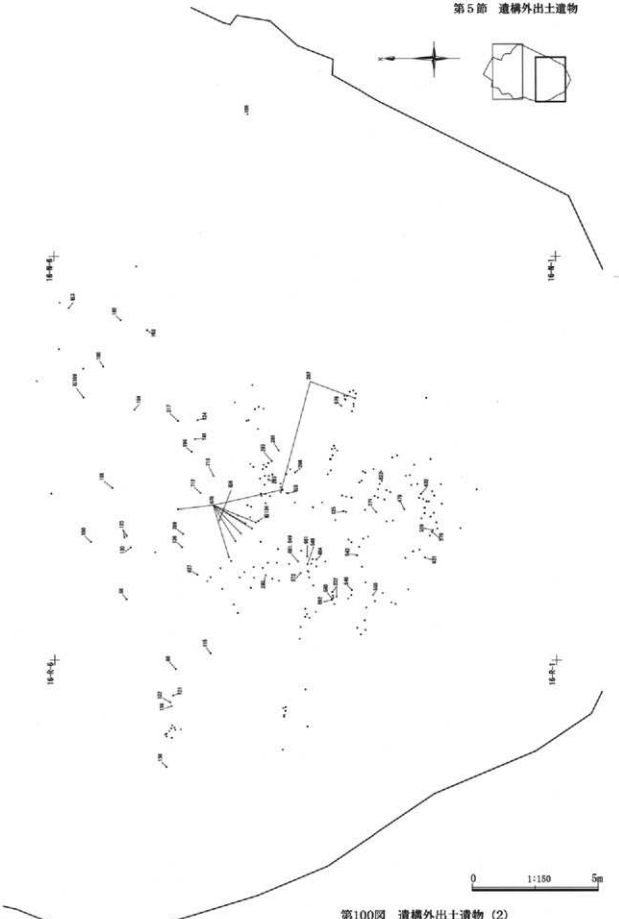
紋様要素・紋様構成からａ～ｃの３種に分類できる。そのほとんどに微量だが、繊維が混入されている。

ａ種　直線的な沈線で紋様が構成されるもの（14～38）

14は半截竹管状工具による平行沈線を横位、斜位にやや粗雑に施紋する。15は先の尖る口唇部で、深めの細沈線を縦位、斜位に施紋する。16は浅い複数条の沈線をＶ字状に施紋する。17は内湾する口縁部破片で、口唇下に半截竹管状工具による横位平行沈線を施し、その下に工具を変えて斜格子目沈線を施す。18は口唇部に細く深いキザミを有し、浅い沈線を施す。19～21は浅い沈線を施す口縁部破片。19の口唇は内削ぎを呈す。22は４条の沈線で縦位区画し、区画内は櫛歯状の充填沈線が施紋される。口唇下の横位沈線は最後に引きなおされている。部分的に地紋に擦痕が施される。23は22と同一個体で、区画内の部位に相当しよう。24～26は同一個体で、若干外に開く口縁部破片。口唇直下に刺突列をめぐらし、その下に鋸歯状に沈線を施す



第99図　遺構外出土遺物（1）



第100図　遺構外出土遺物（2）

と見られる。27は口唇下に横位２段の刺突列を施し、斜位の沈線を施す。28は１条の縦位沈線と３条の横位沈線で区画され、区画内は斜位の沈線を施す。沈線下には刺突列がめぐらされる。口縁部紋様帯を区画する区画紋ともとれよう。29は外反する胴部破片で刺突紋が確認できる。器面には横位の擦痕が施される。30は太めの沈線と先端の割れた工具による押引紋により紋様が構成される。31は深めの細沈線を斜位に施紋する。32は太沈線が斜位に施される。深くしっかりとした施紋ではない。33～36は半截竹管状工具による平行沈線を施すものだが、浅く粗雑な施紋である。37、38はごく浅い沈線により斜格子目状のモチーフが描かれている。

ｂ種　沈線により曲線的なモチーフを描くもの（39～44）

39は下端の２条の横位沈線が区画紋としてとらえられ、区画内に３条の沈線による曲線状モチーフが描かれる。曲線状モチーフの中心と、モチーフと区画紋との空間に刺突紋が施される。40～42は同一個体。浅く太めな平行沈線で同心円状のモチーフを描く。41の下端には横位区画が確認できる。42には同心円状モチーフの中心に先端の割れた工具による刺突紋が充填されている。43、44は先割れ工具の刺突列であるが、口縁部紋様帯下の区画紋の部位として本類に含めた。40～42と胎土や刺突紋の特徴が酷似しており、断定はできないがこれらと同一個体の可能性もある。

ｃ種　条線により紋様が構成されるもの（45～47）

45、46ともに横位に条線が施され、以下は横位の擦痕が施される。47は条線を施したのち、同一工具と思われる櫛歯状刺突を横位２段施す。

第２類土器の位置づけであるが、紋様構成を観察する限り関東地方の沈線紋土器に類例を求めることはできない。本遺跡は群馬県内にあるとはいえ長野原町に所在し、長野県や新潟県といった中部地方に地理的に近い。そのことからもこれらの土器群は関東地方に分布する沈線紋土器ではなく、中部地方の沈線紋土器に近い様相を呈しているように見受けられる。ａ種22～28などは「判ノ木山西式」（阿部1997）に近いといえるし、ｂ種は長野県御代田町下荒田遺跡（中沢1994）、同北相木村栃原岩陰（西沢1982）出土資料、ｃ種は「上林中道南式」（中沢2005）に類似しているといえよう。

第３類　沈線紋土器に伴うと思われる無紋・擦痕・条痕紋土器を一括した（第103図48～第104図54）。基本的に胎土や施紋技法から分類したが、のちの第６類との判別がつきにくいものもあり、必ずしも正確ではないかもしれない。

48は外反する口縁部破片で、外面と内面口唇下に浅い条痕を施す。49はほぼ直立する口縁部破片。外面と内面口唇下に擦痕を施す。50は胴部が膨らみ、緩く外反する器形を呈す。外面と内面口唇下に擦痕を施す。51、52は無紋、53は擦痕、54は条痕を施す。

第４類　野島式土器を一括した（第104図55～60）。

55は角頭状の口縁部破片で、口唇部にキザミを施す。キザミを付した細隆起線を口縁に沿って１条施し、以下太沈線を充填する。太沈線を充填することにより、微隆起線紋状の効果を出している。内面には条痕が施される。56～60も同様の構成で、細隆起線で区画し、区画内を太沈線で充填するものである。すべて内面には条痕を施す。第５類の鵜ヶ島台式に比べて、野島式の内面条痕は顕著に施される傾向がある。

第５類　鵜ヶ島台式土器を一括した（第104図61～第106図80）。紋様要素・紋様構成からａ～ｃの３種に分類できる。

ａ種　意匠区画に細隆起線を用いるもの（61～64）

61は角頭状の口唇部で若干内削ぎを呈す。口唇内面に細かいキザミを施す。口縁に沿って細隆起線を施し、円形刺突と半截竹管によるＣ字状刺突が施される。62は丸頭状口唇の口縁部破片で、横位の沈線を充填させ

て微隆起状にし、円形刺突を施す。63も角頭状の口唇部でやや内削ぎ、口唇内面に細かいキザミを施す。区画内はＣ字状刺突で充填される。64も同様の構成となる。

ｂ種　意匠区画に沈線を用いるもの（65～78）

刺突紋の種類によって3種に分類できる。

ｂ１種　半截竹管状工具を直角に近い角度で押捺することによりＣ字状の刺突を施すもの（65～71）

65は角頭状口唇の口縁部破片。沈線により三角形状の区画を描き、区画内をＣ字状刺突で充填する。区画外にもＣ字状刺突がまばらに施されている。66～67は沈線で区画した中にＣ字状刺突を充填する。68は沈線で縦位区画し、3条の沈線を斜位に平行施紋する。区画内にＣ字状刺突を充填するが、他の部位にも比較的ランダムに押捺される。69～71は口縁部紋様帯の下端、内折する部位の破片である。それぞれ刺突列によって紋様帯を画し、以下に無紋帯をつくっている。

ｂ２種　半截竹管状工具を寝かせて押捺することにより半円形状の刺突を施すもの（72～77）

72は沈線による意匠区画、区画内に刺突紋充填、円形刺突といった基本的な構成となる。内面に条痕が施される。73～76は口縁部紋様帯の下端、内折する部位で、77は外反する部位である。73は屈曲部に刺突列が施され、以下無紋帯となる。76は紋様帯内に地紋として条痕を施している。77は外反する屈曲部に沈線を施す。ｂ２種は、内面の条痕が比較的顕著に施紋される傾向がある。

ｂ３種　先割れ工具による刺突を施すもの（78）

78は口縁部紋様帯の下端、内折する部位で、地紋に条痕を施す。屈曲部に先割れ工具の刺突列をめぐらし、口縁部紋様帯を画す。

ｃ種　沈線で斜格子目紋を描くもの（79、80）

79、80は同一個体。先の尖る口唇部でキザミを施す。紋様帯の下端には段をつくって区画し、紋様帯内は沈線によって斜格子目紋を描く。内面に条痕が施される。

第６類　条痕を施すものを一括した（第106図81～第107図104）。内外面に条痕が施されるもの（81～94）、外面に条痕が施されるもの（95～100）、内面に条痕が施されるもの（101～104）に便宜的に分類できるが、小破片のため確実ではない。野島式～鵜ヶ島台式に伴うものであろう。

第７類　絡条体圧痕紋が施されるもの（第108図105、106）

105、106は同一個体。ＬＲ縄紋を地紋とし、絡条体圧痕紋を斜格子目状に施紋する。口唇部にも同様の絡条体圧痕紋を押捺する。茅山上層式以降の早期末に帰属するものと思われる。

第８類　底部を一括した（第108図107～110）。

107は鋭角な尖底である。無紋であるが、よく研磨されている。田戸下層式に比定できよう。108は鈍角な尖底で無紋。109は丸底で刺突が施される。帰属時期は断定できないが、第２類の可能性が高いと思われる。110は平底で条痕が施される。　（橋本　淳）

２．縄文時代前期以降

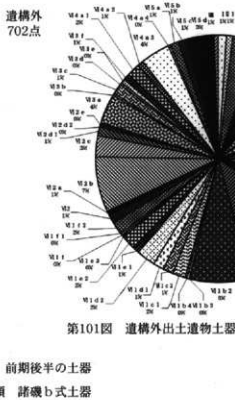
第Ⅲ群　関山式、黒浜式土器ほか前期の繊維を含む土器

第１類　１・２段の回転縄文を施すもの

第２類　羽状縄文を施すもの

第３類　その他

	遺構外
第Ⅰ群	8
第Ⅱ群第１類	5
第Ⅱ群第２類ａ種	25
第Ⅱ群第２類ｂ種	6
第Ⅱ群第２類ｃ種	3
第Ⅱ群第３類	7
第Ⅱ群第４類	6
第Ⅱ群第５類a種	4
第Ⅱ群第５類ｂ１種	7
第Ⅱ群第５類ｂ２種	6
第Ⅱ群第５類ｂ３種	1
第Ⅱ群第５類ｃ種	2
第Ⅱ群第６類	24
第Ⅱ群第７類	2
第Ⅱ群第８類	4
第Ⅲ群第１類	20
第Ⅲ群第２類	10
第Ⅲ群第３類	10
第Ⅳ群第１類ａ種	8
第Ⅳ群第１類ｂ種	18
第Ⅳ群第１類ｃ種	3
第Ⅳ群第２類ａ種	14
第Ⅳ群第２類ｂ種	7
第Ⅳ群第３類ａ種	8
第Ⅴ群	
第Ⅴ群第１類ａ種	14
第Ⅴ群第１類ｂ種	1
第Ⅴ群第２類	9
第Ⅵ群第１類ａ種	10
第Ⅵ群第１類ｂ１種	80
第Ⅵ群第１類ｂ２種	56
第Ⅵ群第１類ｂ３種	3
第Ⅵ群第１類ｂ４種	2
第Ⅵ群第１類ｃ１種	11
第Ⅵ群第１類ｃ２種	9
第Ⅵ群第１類ｄ１種	10
第Ⅵ群第１類ｄ２種	17
第Ⅵ群第１類ｅ１種	7
第Ⅵ群第１類ｅ２種	14
第Ⅵ群第１類ｅ３種	2
第Ⅵ群第１類ｆ種	1
第Ⅵ群第１類ｆ１種	1
第Ⅵ群第１類ｆ２種	12
第Ⅵ群第１類ｆ３種	1
第Ⅵ群第２類	7
第Ⅵ群第２類ａ種	4
第Ⅵ群第２類ｂ種	50
第Ⅵ群第２類ｃ種	19
第Ⅵ群第２類ｄ１種	8
第Ⅵ群第２類ｄ２種	2
第Ⅵ群第２類ｅ種	2
第Ⅵ群第３類	
第Ⅵ群第３類ａ種	28
第Ⅵ群第３類ｂ種	2
第Ⅵ群第３類ｃ種	9
第Ⅵ群第３類ｄ種	3
第Ⅵ群第３類ｅ種	3
第Ⅵ群第３類ｆ種	6
第Ⅵ群第４類ａ１種	13
第Ⅵ群第４類ａ２種	5
第Ⅵ群第４類ａ３種	27
第Ⅵ群第４類ａ４種	3
第Ⅵ群第５類ａ種	6
第Ⅵ群第５類ｂ種	9
第Ⅵ群第５類ｃ種	6
第Ⅵ群第５類ｄ種	19
第Ⅶ群	
第Ⅷ群	4



第101図　遺構外出土遺物土器分類別出土割合図

第Ⅳ群　前期後半の土器

第１類　諸磯ｂ式土器

ａ種　半截竹管による爪形文施す。　　ｂ種　浮線文に刻みを施す。

ｃ種　半截竹管による平行沈線施す。

第２類　諸磯ｃ式土器

ａ種　集合条線を施すもの

ｂ種　地文縄文で棒状、ボタン状貼付文の施されるもの

第３類　大木式土器

ａ種　鋸歯状の粘土紐が貼付されるもの

第Ⅴ群　前期終末の土器群

第１類　十三菩提式土器

ａ種　浮線上に内皮使用による刻みの施されるもの

ｂ種　三角形などの陰刻が施されるもの

第２類　その他

第Ⅵ群　中期初頭から前半の土器

第１類　五領ヶ台式土器

ａ種　集合沈線による横位、縦位、斜位の文様の描かれるもの。基本は地文無文。

ｂ種　沈線による直線文・曲線文、刺突により文様の描かれるもの。

ｂ１種　地文無文　　ｂ２種　地文縄文

ｂ３種　地文細縄文　　ｂ４種　地文細線、沈線

ｃ種　口縁部分に沈線・隆帯・三角印刻文により渦巻文、円形文、三角文の描かれるもの。

ｃ１種　地文無文　　ｃ２種　地文縄文

ｄ種　沈線と角押文の併用により文様が描かれるもの

ｄ１種　地文無文　　ｄ２種　地文縄文、充填縄文

ｅ種　地文のみのもの

ｅ１種　無文　　ｅ２種　縄文のみのもの　　ｅ３種　結節縄文を持つもの

ｆ種　浅鉢

ｆ１種　沈線と刺突、三角印刻文により文様が描かれるもの

ｆ２種　沈線と角押文の併用により文様が描かれるもの　　ｆ３種　無文

第２類　阿玉台式土器

ａ種　単列の角押文を施し、口縁部文様帯に対称性がないもの。

ｂ種　単列の角押文を施し、口縁部下の隆帯や沈線が一周して文様帯を分帯するもの。

ｃ種　複列の角押文を施すもの

ｄ種　角押文を施さないもの

ｄ１種　口縁部文様帯を意識しているもの　　ｄ２種　口縁部文様帯を意識していないもの

ｅ種　浅鉢

第３類　北陸系の土器

ａ種　半隆起線文により文様の描かれるもの。内皮使用による刻み文を施すものも含む。

ｂ種　蓮華文を口縁部に施すもの　　ｃ種　彫去して文様の描かれるもの

ｄ種　隆帯や沈線で渦巻文や同心円文を表出するもの

ｅ種　木目状撚糸文を施すもの　　ｆ種　その他

第４類　勝坂式土器

ａ種　楕円区画や三角区画等で横位の文様帯を構成するもの

ａ１種　角押文を多用するもの　　ａ２種　キャタピラ文、ペン先状刺突文を多用するもの

ａ３種　刺突文・沈線文を多用するもの　　ａ４種　縄文を施すもの

第５類　その他

ａ種　角押文を多用するもの　　ｂ種　環状突起や双環状突起を中心に隆線をつなぐもの

ｃ種　胴部に渦巻文を施文するもの　　ｄ種　その他

第Ⅶ群　中期後半の土器群の土器を一括した。

第Ⅷ群　後期・晩期の土器群の土器を一括した。

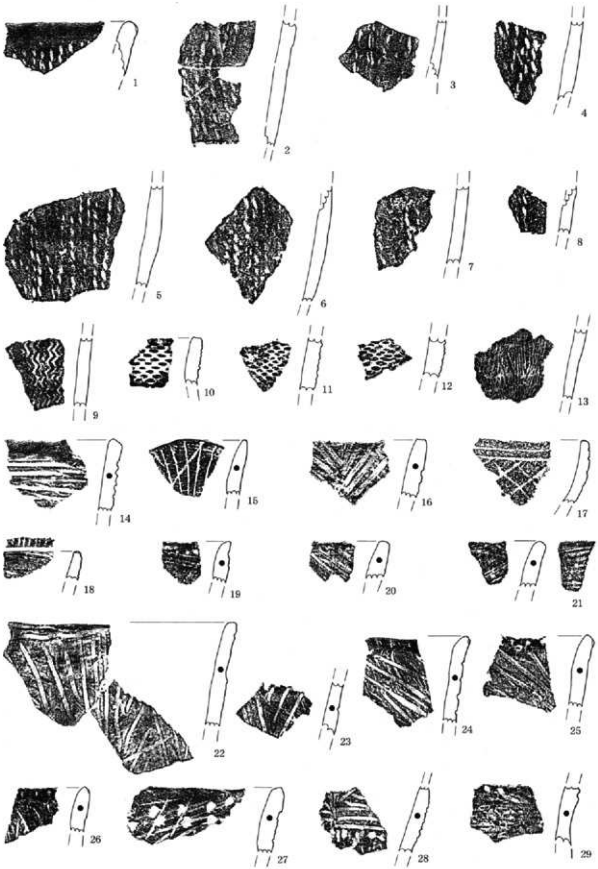
３．弥生時代以降

(1)弥生時代

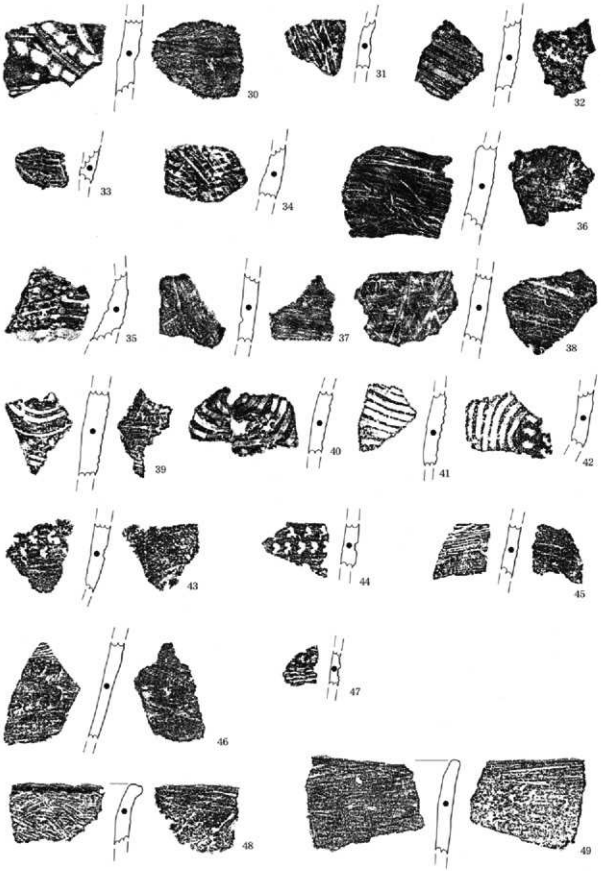
櫛描文を施す甕(710)は中期後半代と見られ、磨きを施す(711)、ナデのみで調整する(712・713)ものも、ほぼ同時期の一群と思われる。壺(709)も縄文施文後、斜め方向に刷毛目に近いナデが施されていることから、やはり同時期だろうか。

(2)平安時代

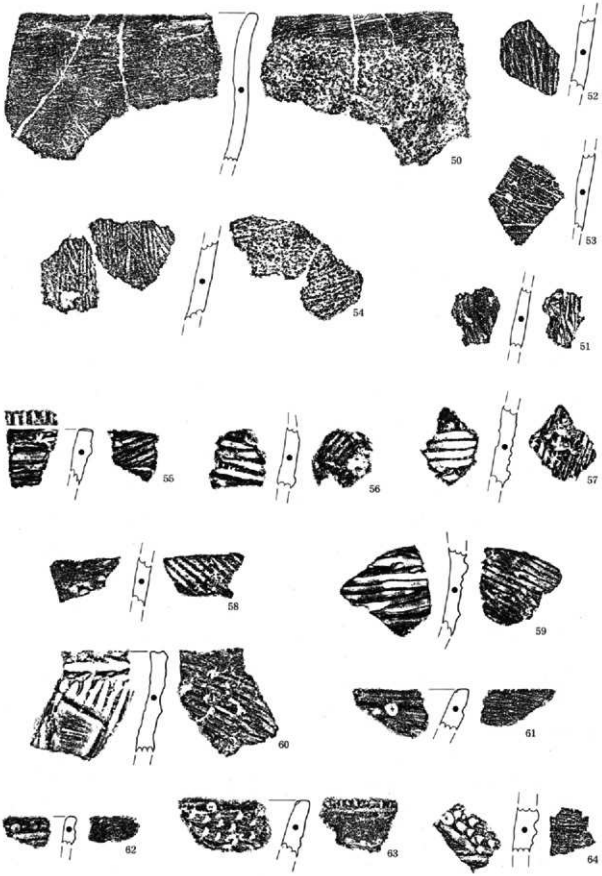
ロクロ目が顕著な椀(714・715)は、10世紀を前後する時期であろう。



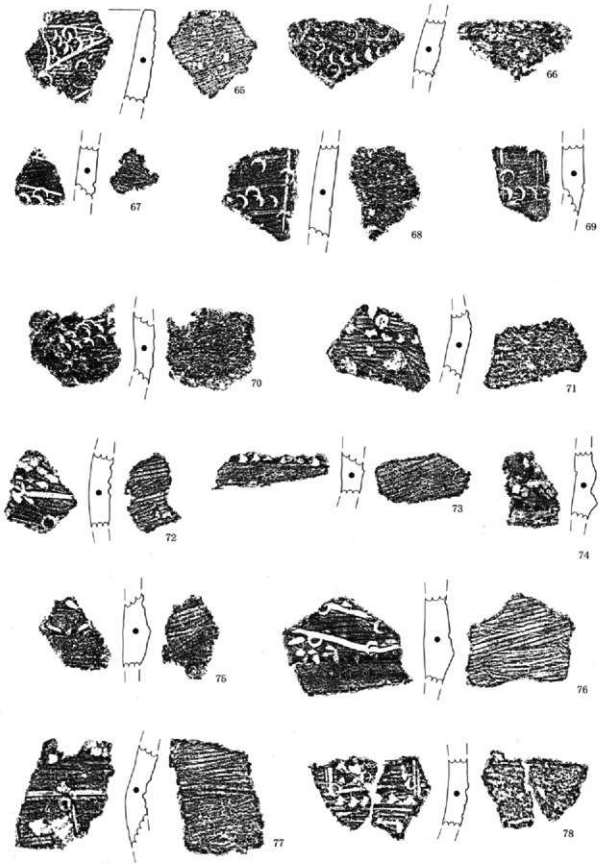
第102図　遺構外出土土器（１）



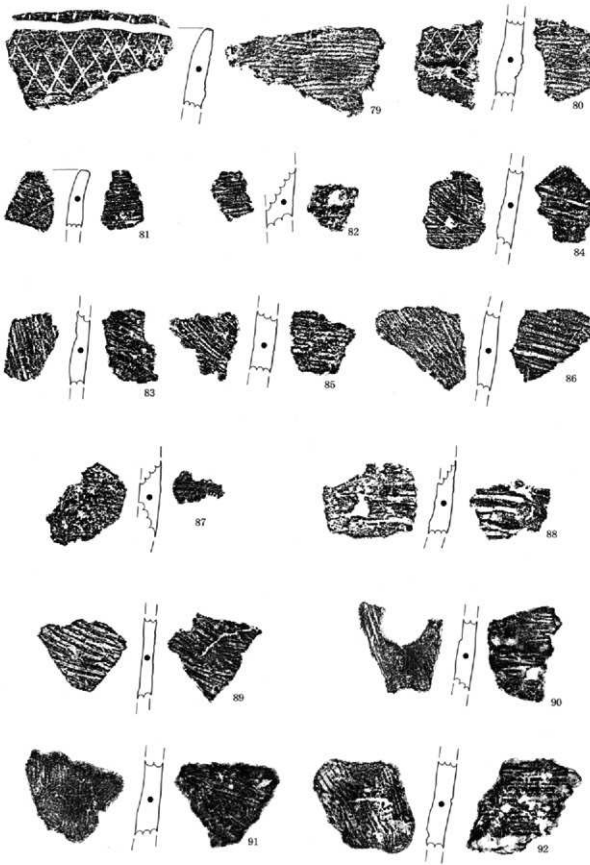
第103図　遺構外出土土器（２）



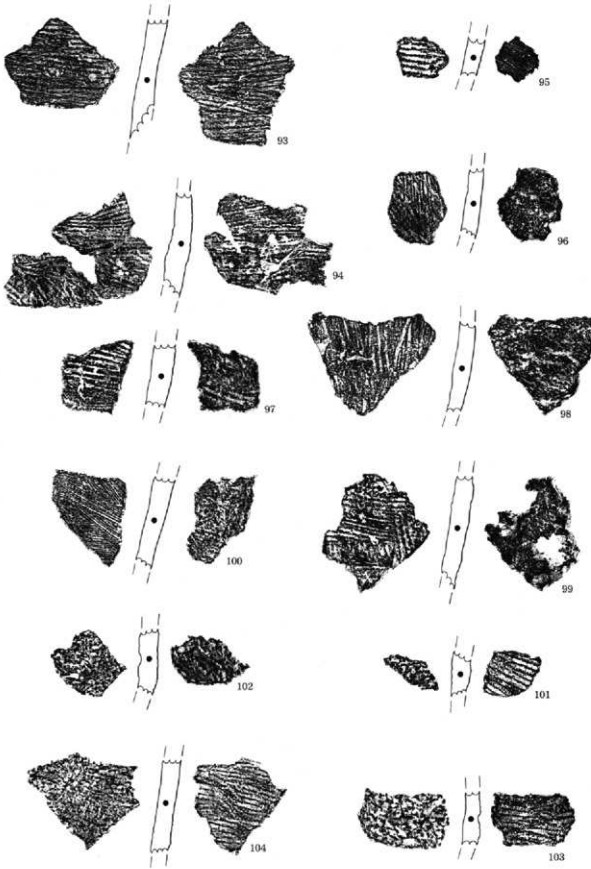
第104図　遺構外出土土器（３）



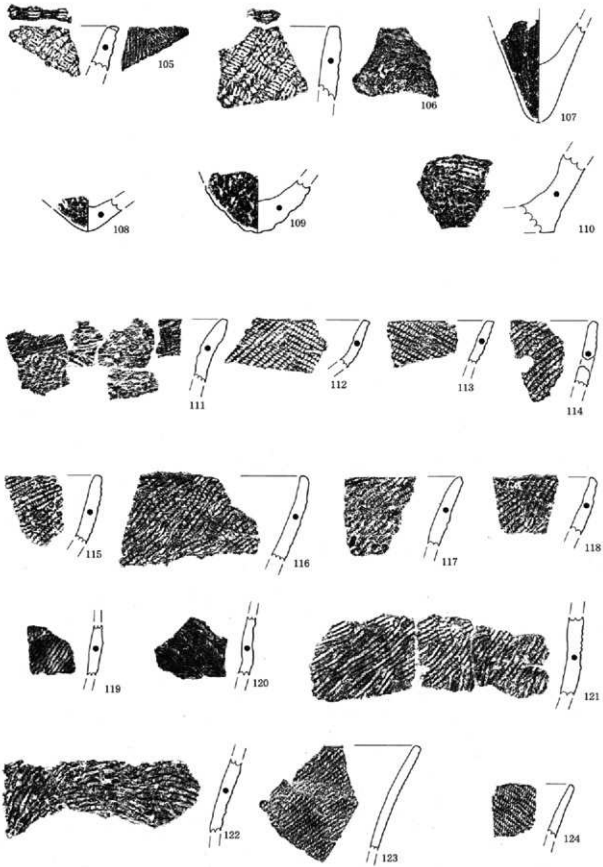
第105図　遺構外出土土器（４）



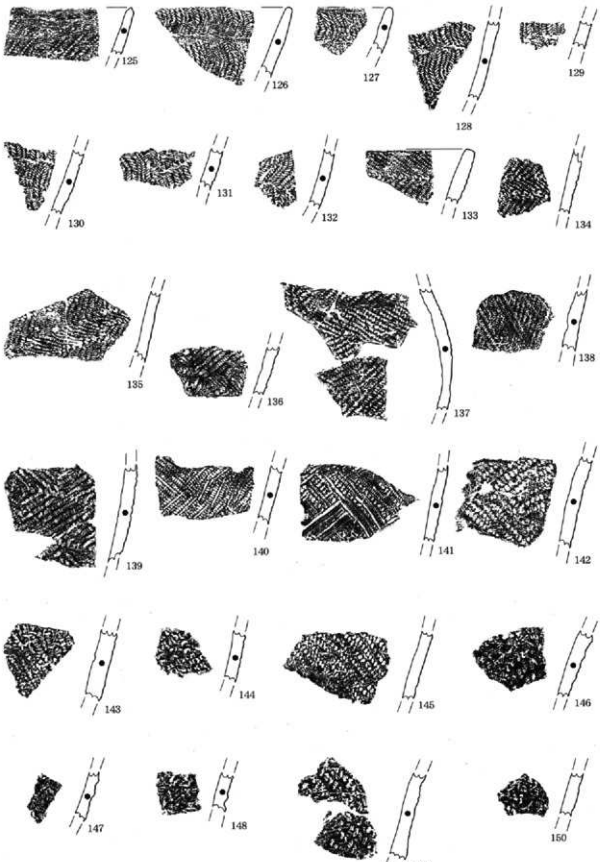
第106図　遺構外出土土器（５）



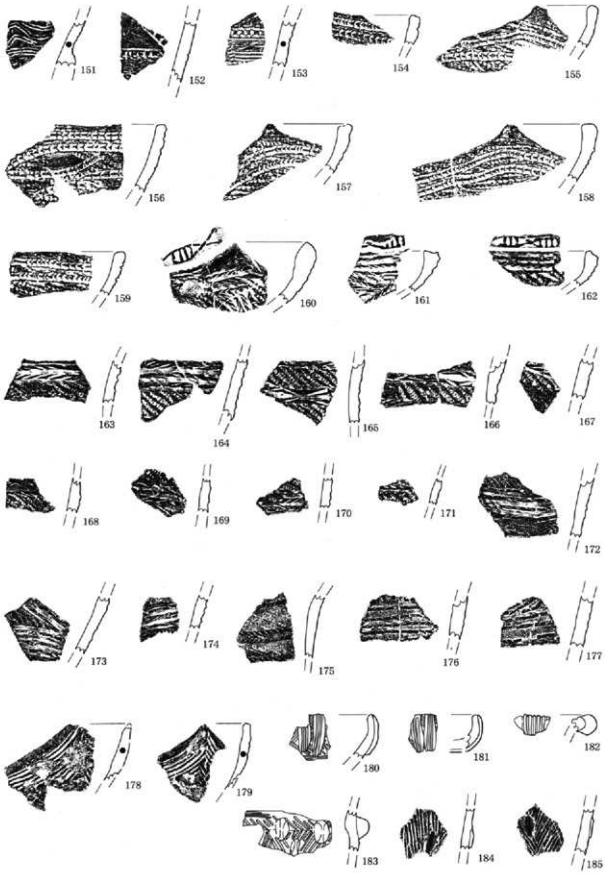
第107図　遺構外出土土器（６）



第108図　遺構外出土土器（７）

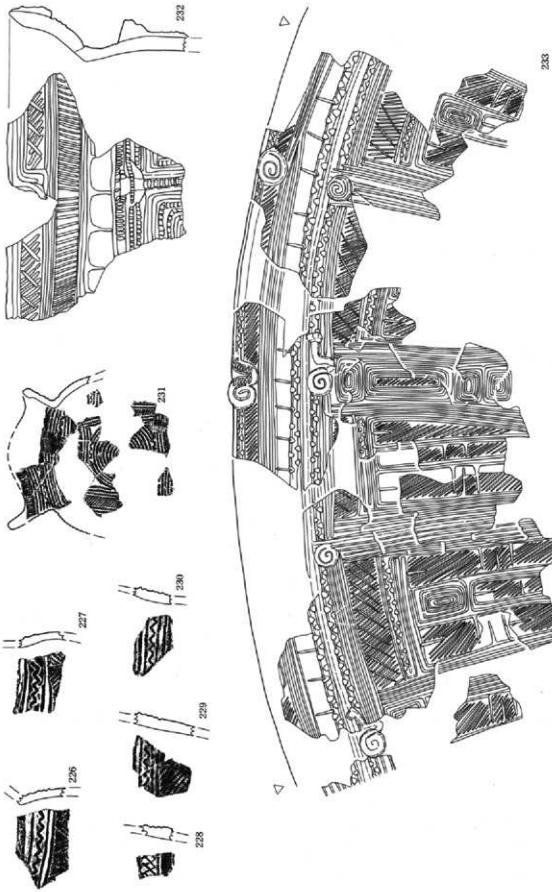


第109図　遺構外出土土器（８）

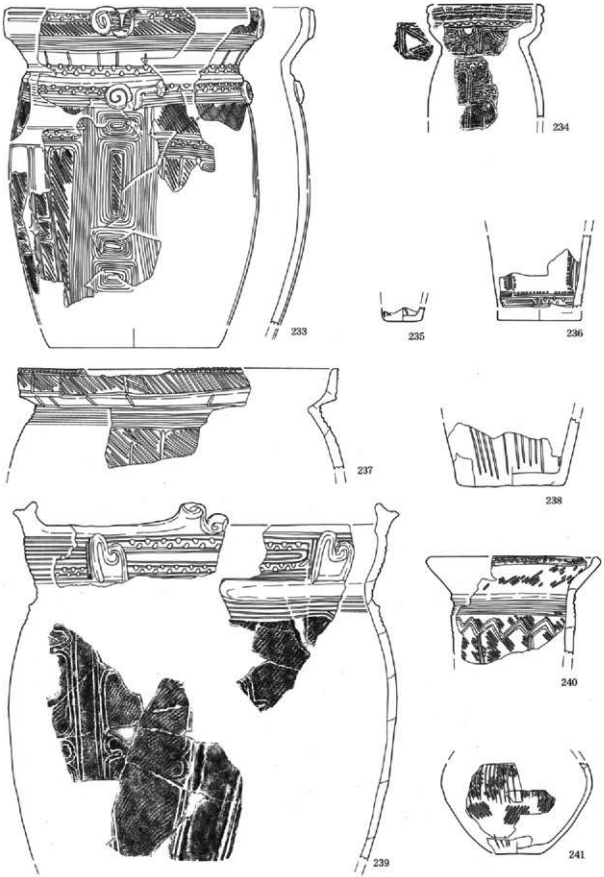


第110図　遺構外出土土器（9）

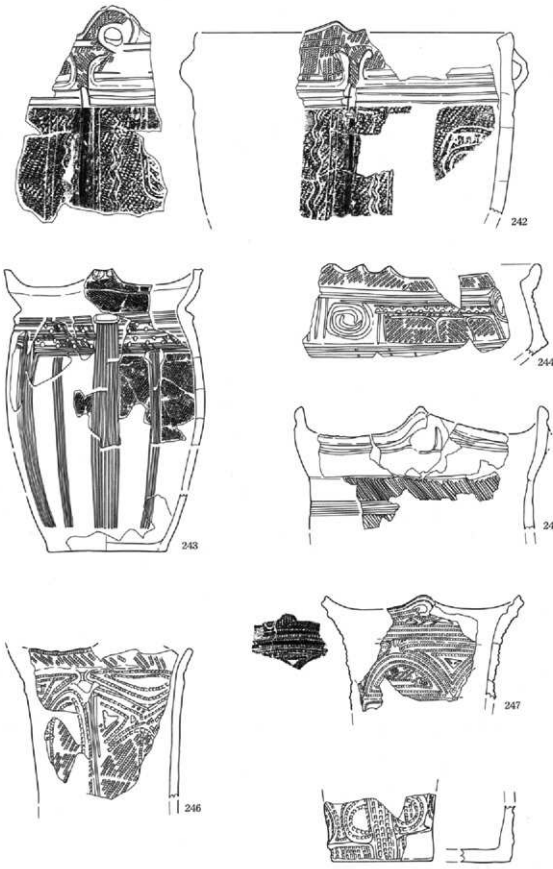
第111図　遺構外出土土器（10）



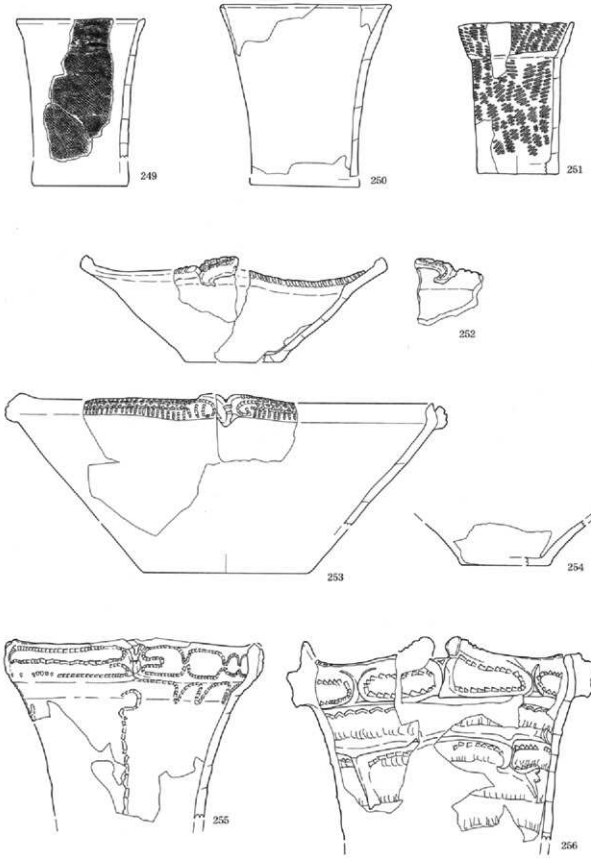
第112図　遺構外出土土器（11）



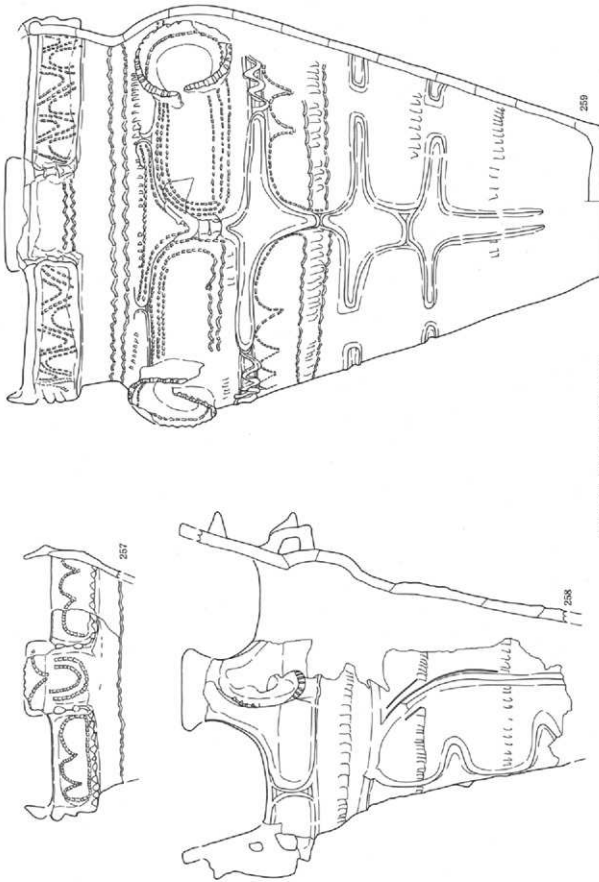
第113図　遺構外出土土器（12）



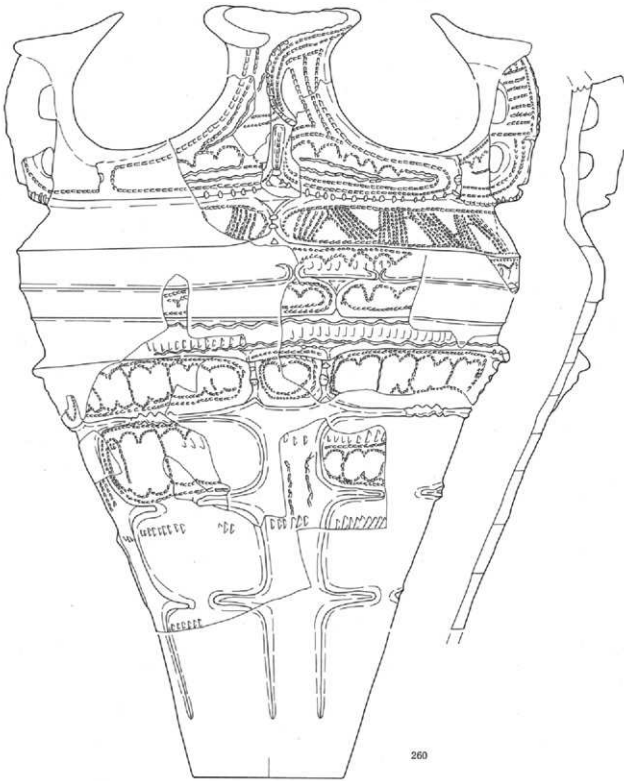
第114図　遺構外出土土器（13）



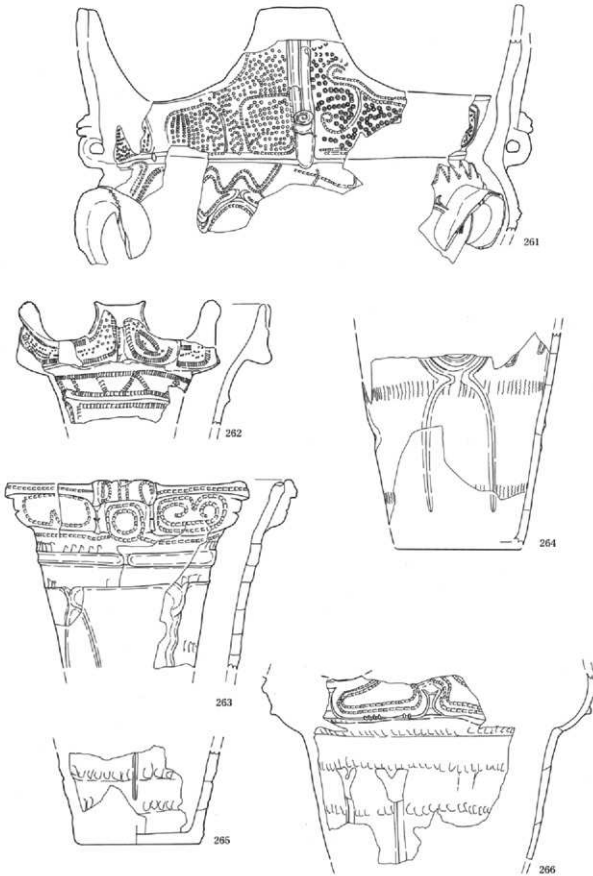
第115図　遺構外出土土器（14）



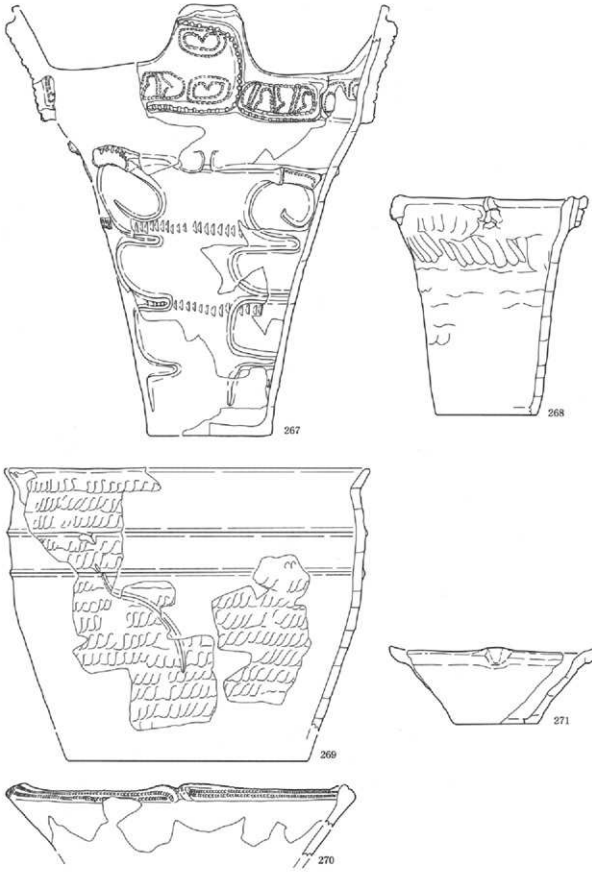
第116図　遺構外出土土器（15）



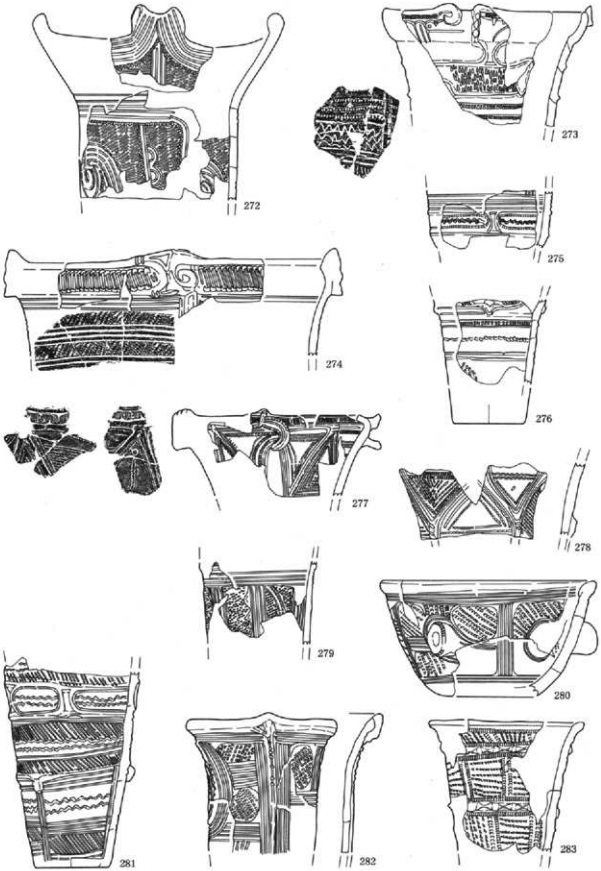
第117図　遺構外出土土器（16）



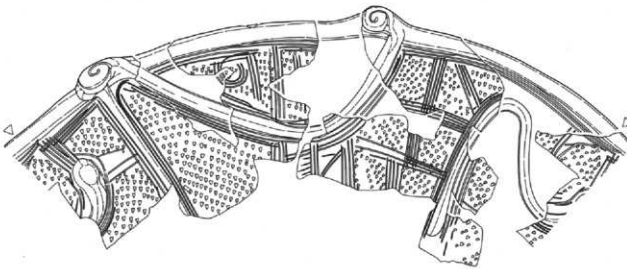
第118図　遺構外出土土器（17）

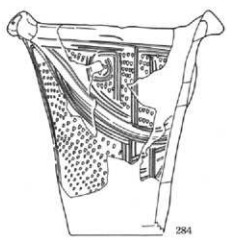


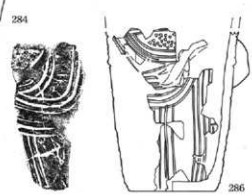
第119図　遺構外出土土器（18）



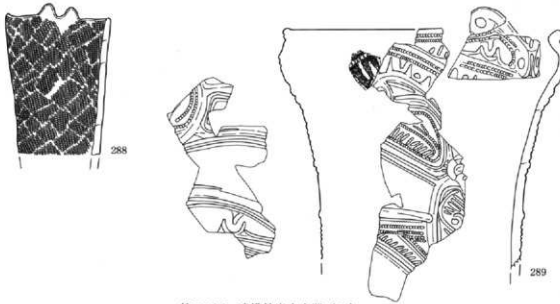
第120図　遺構外出土土器（19）



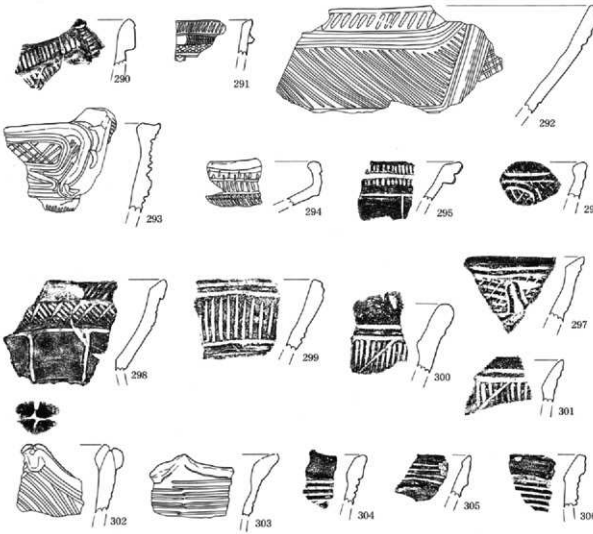




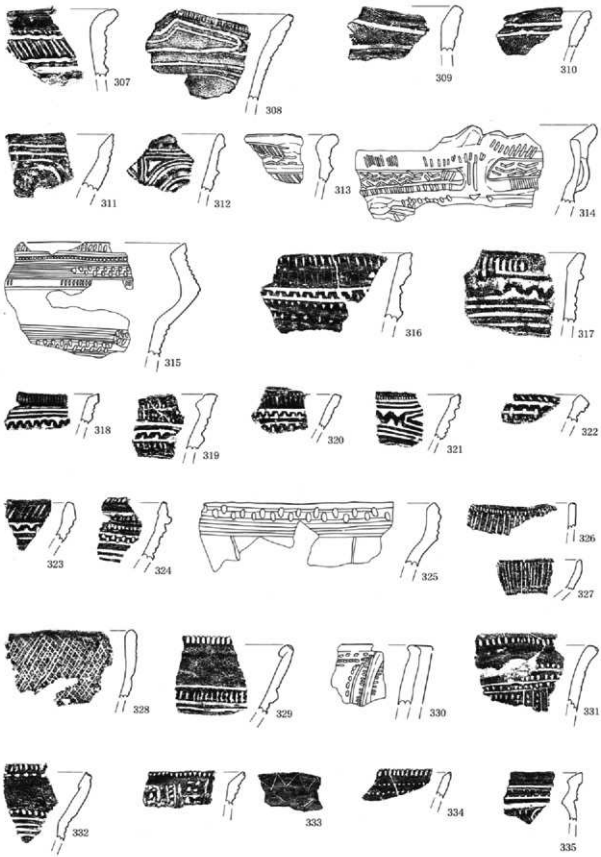
第121図　遺構外出土土器（20）



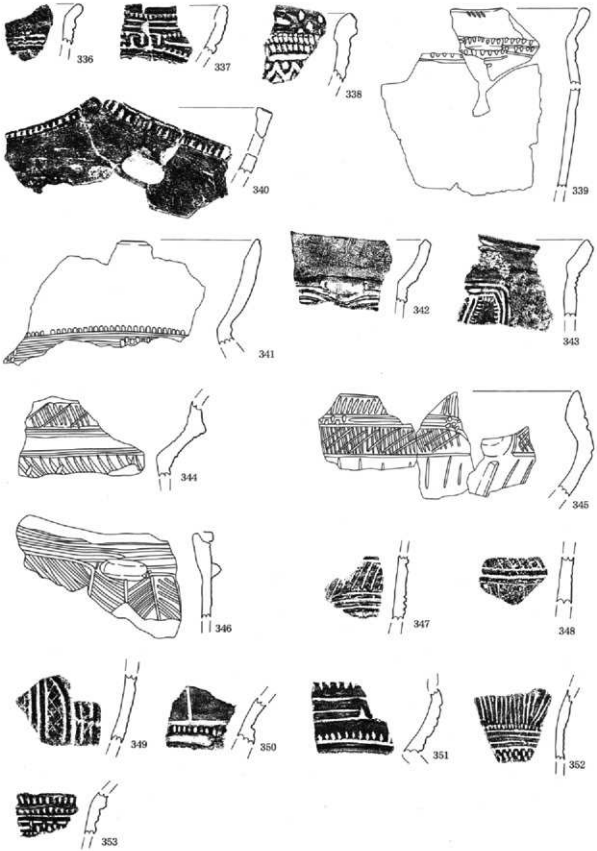
第122図　遺構外出土土器（21）



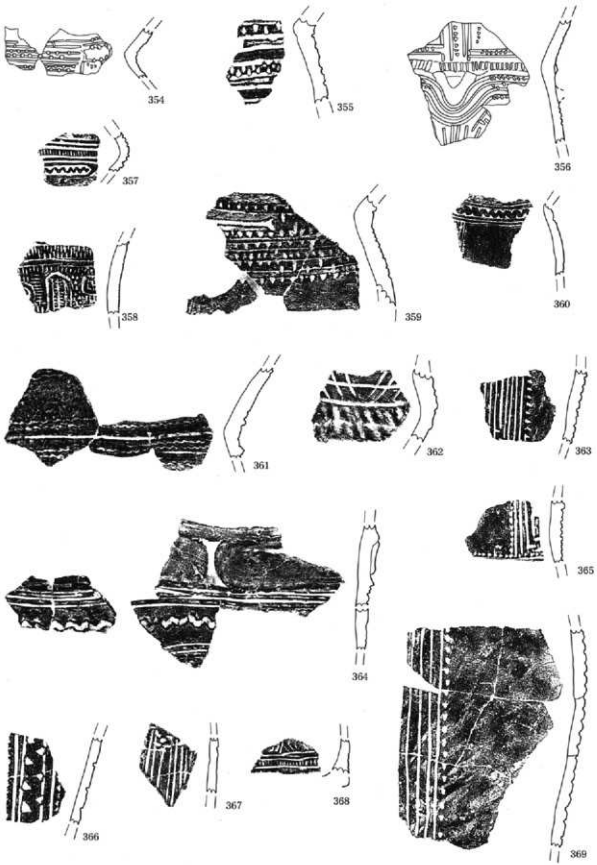
第123図　遺構外出土土器破片（１）



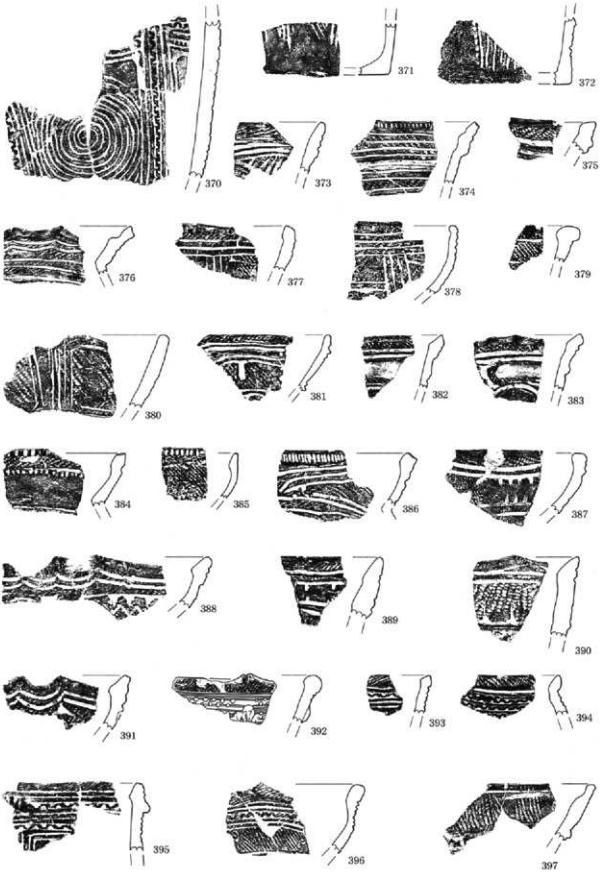
第124図　遺構外出土土器破片（２）



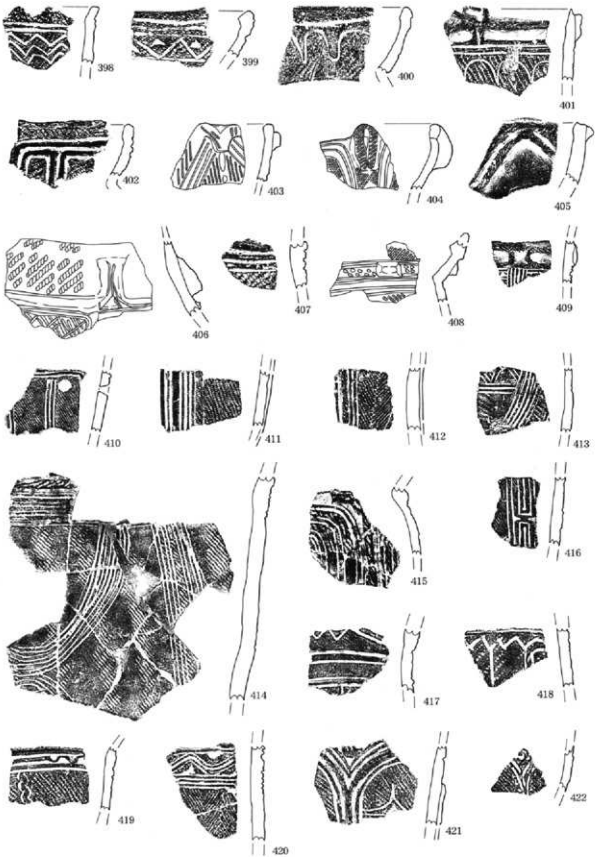
第125図　遺構外出土土器破片（３）



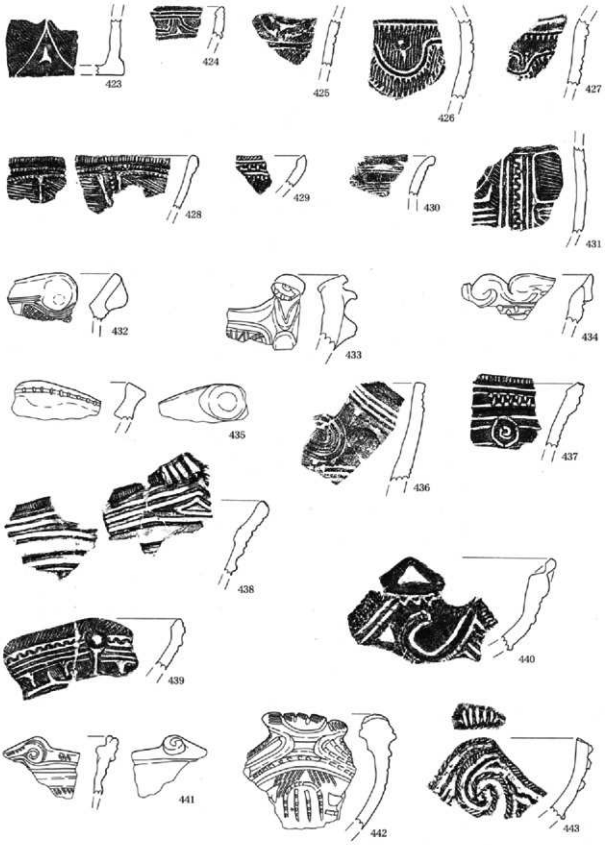
第126図　遺構外出土土器破片（4）



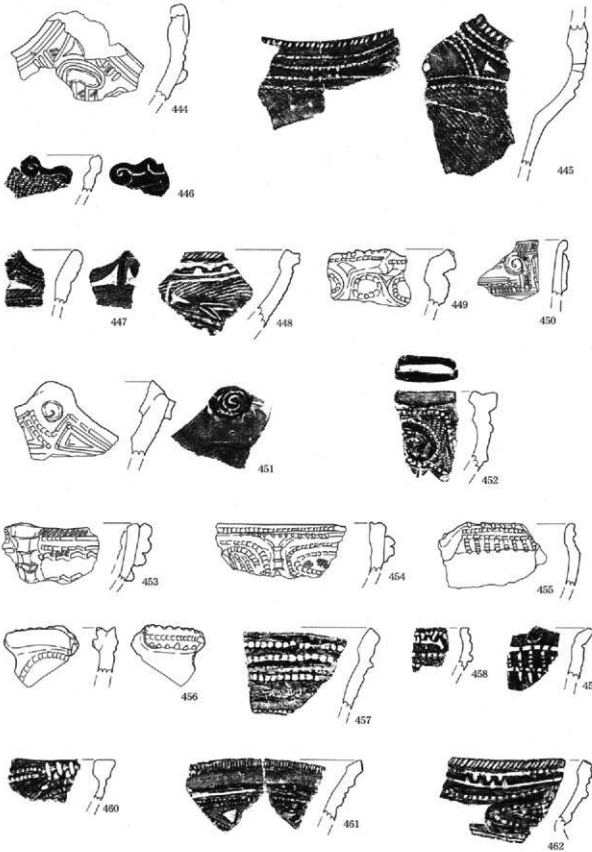
第127図　遺構外出土土器破片（５）



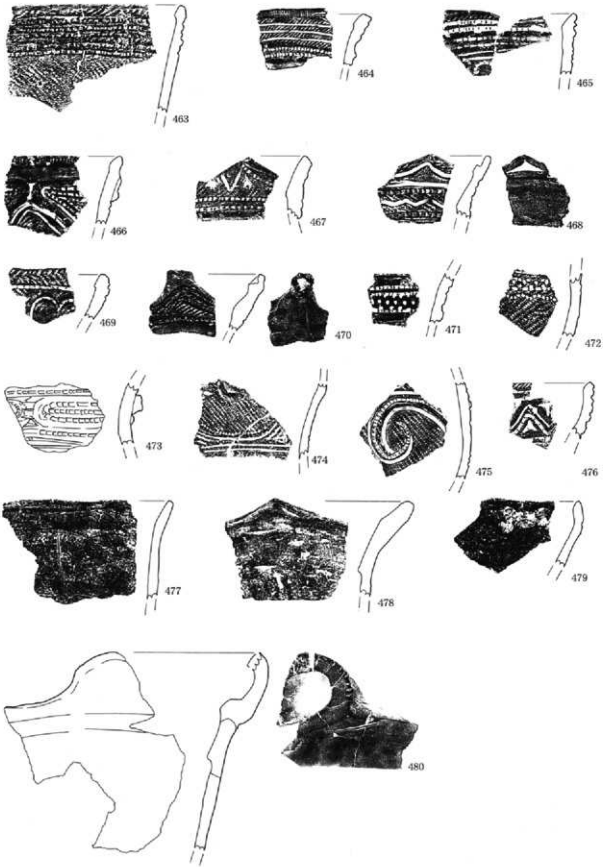
第128図　遺構外出土土器破片（6）



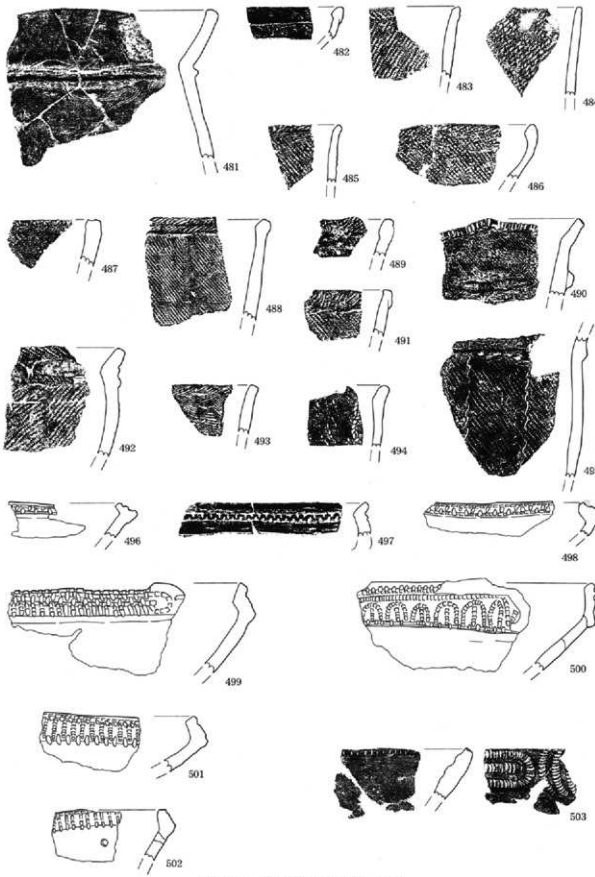
第129図　遺構外出土土器破片（7）



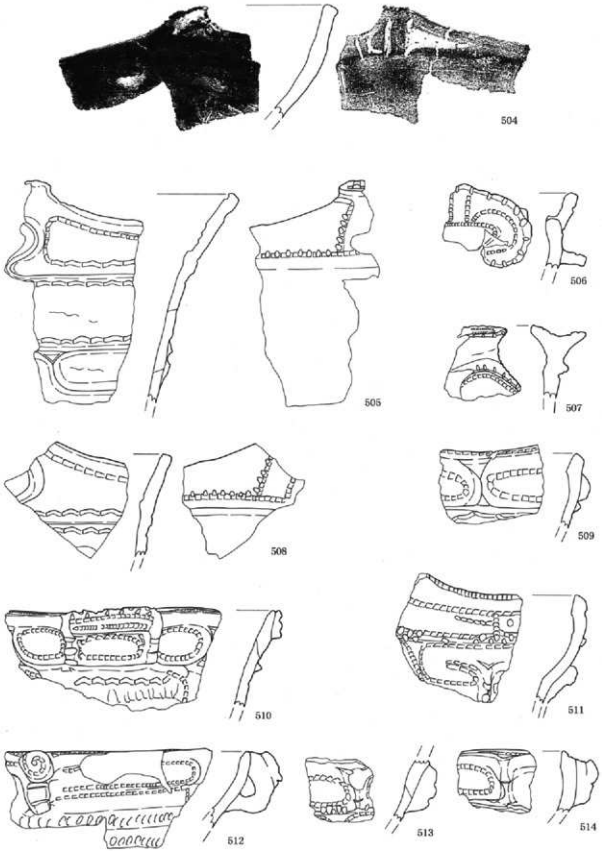
第130図　遺構外出土土器破片（８）



第131図　遺構外出土土器破片（９）

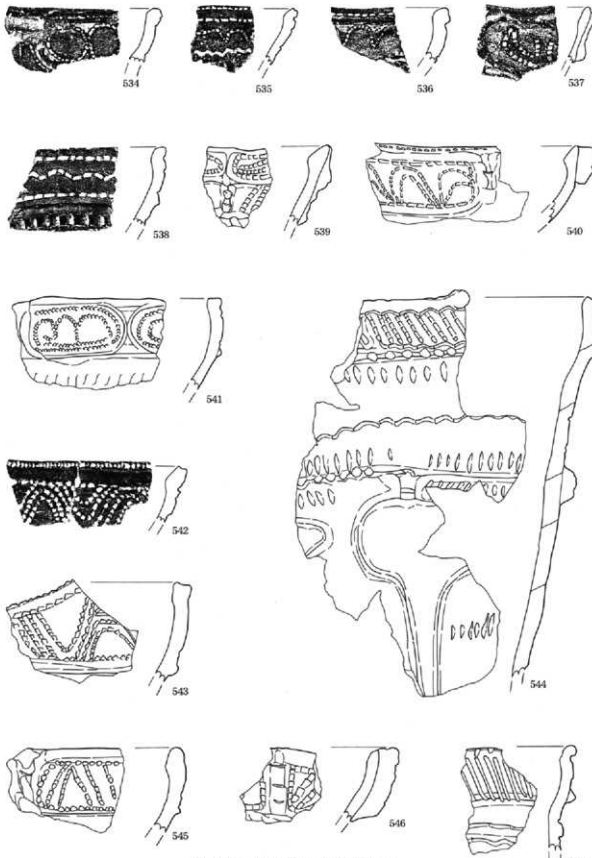


第132図　遺構外出土土器破片（10）

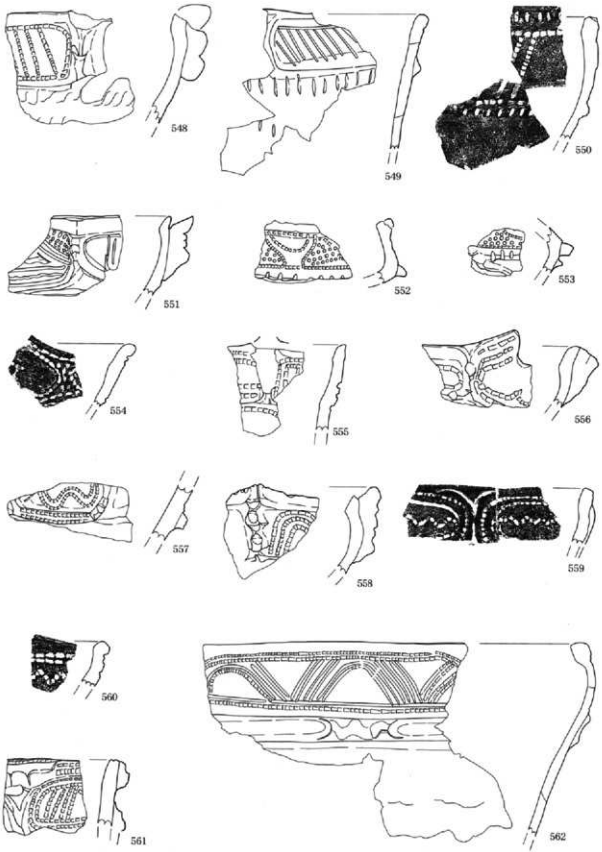


第133図　遺構外出土土器破片（11）

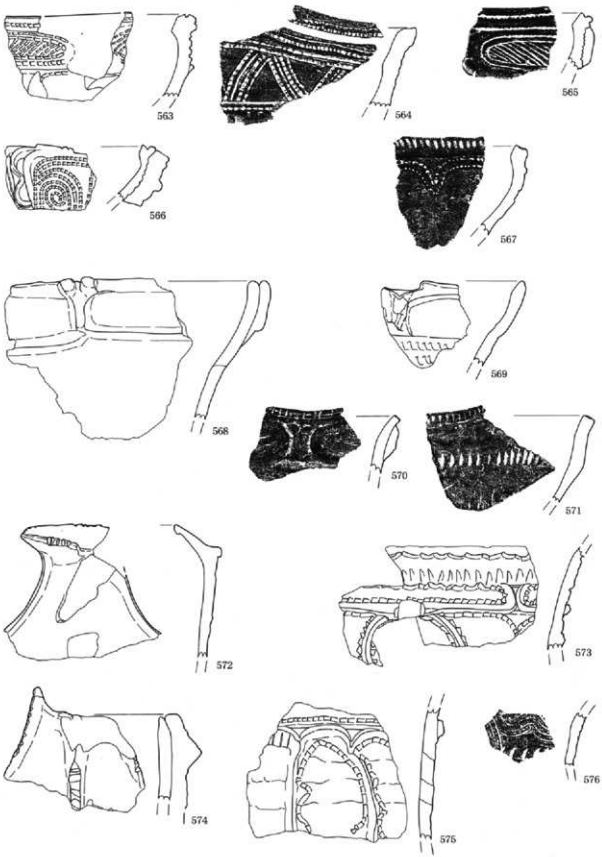
第134図　遺構外出土土器破片（12）



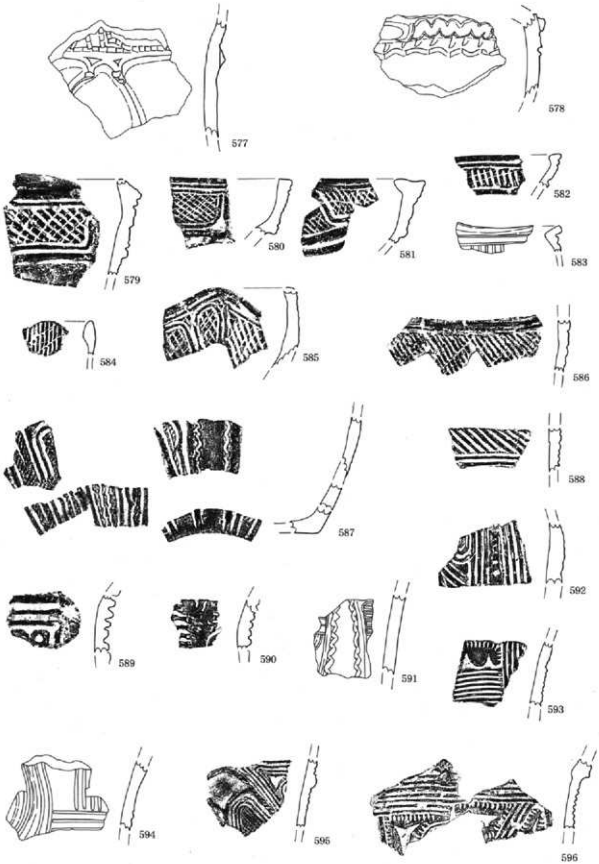
第135図　遺構外出土土器破片（13）



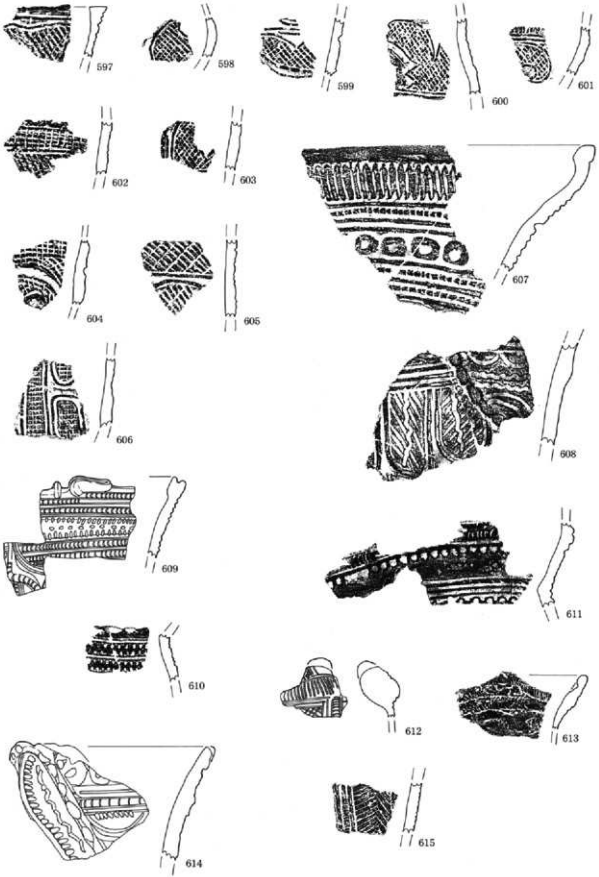
第136図　遺構外出土土器破片（14）



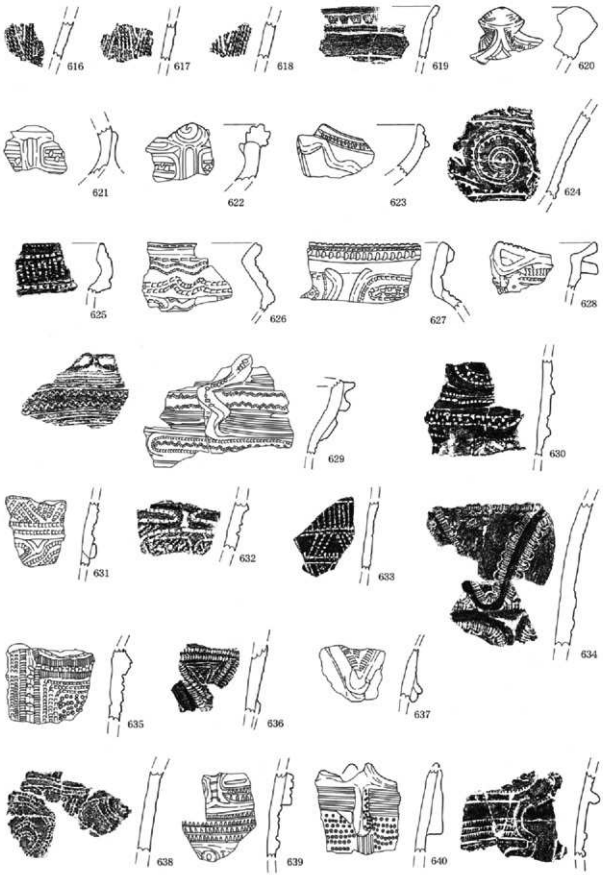
第137図　遺構外出土土器破片（15）



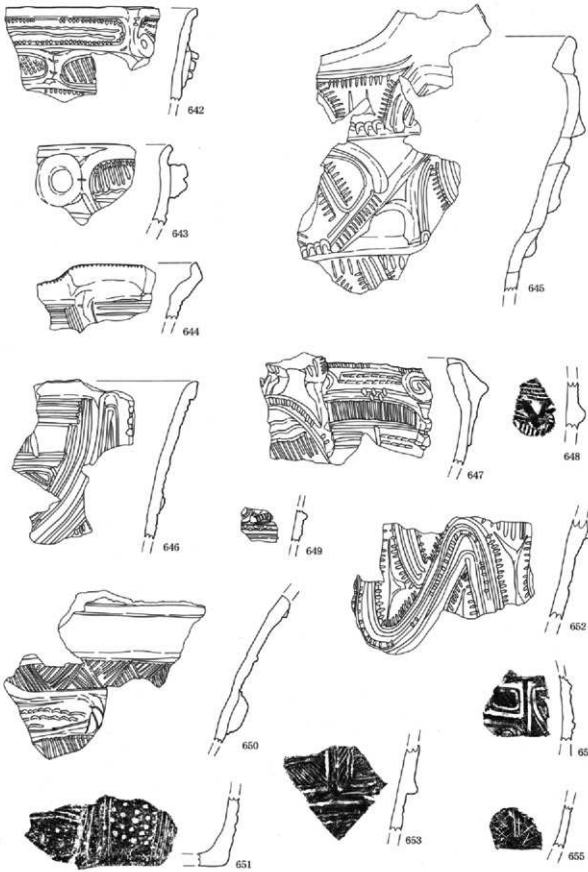
第138図　遺構外出土土器破片（16）



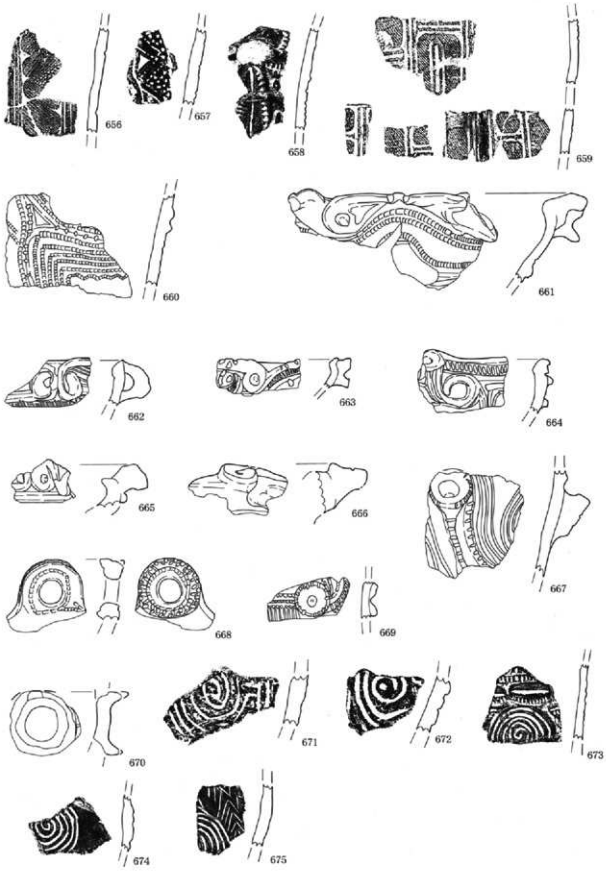
第139図　遺構外出土土器破片（17）



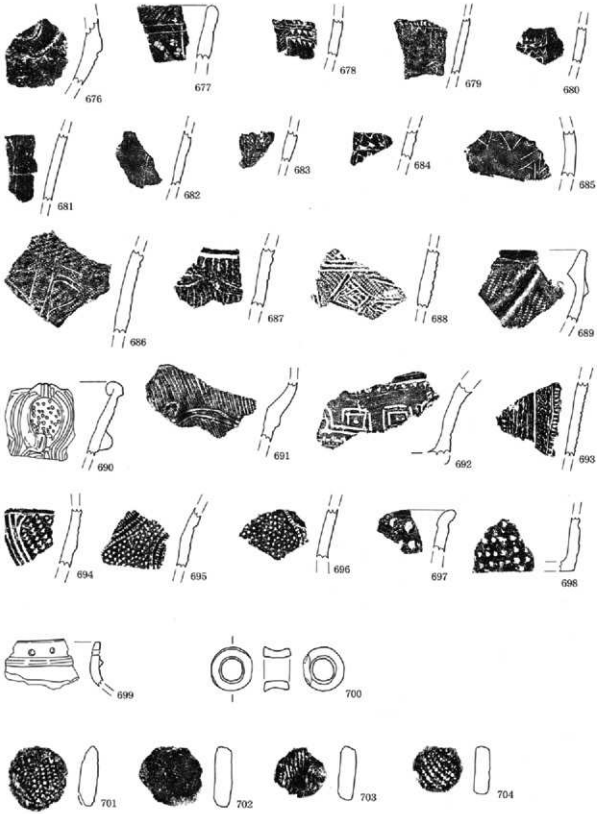
第140図　遺構外出土土器破片（18）



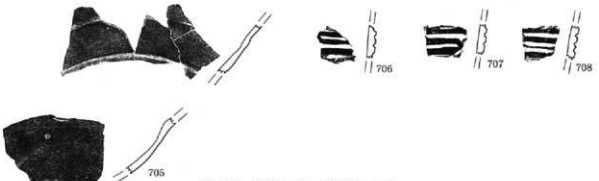
第141図　遺構外出土土器破片（19）



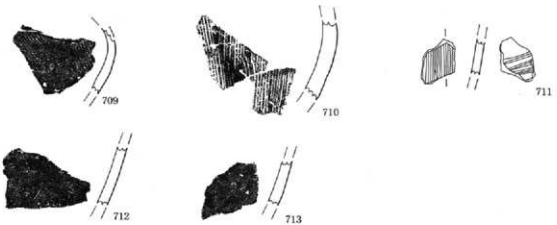
第142図　遺構外出土土器破片（20）



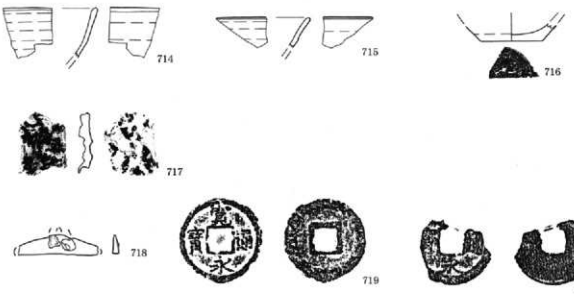
第143図　遺構外出土土器破片（21）



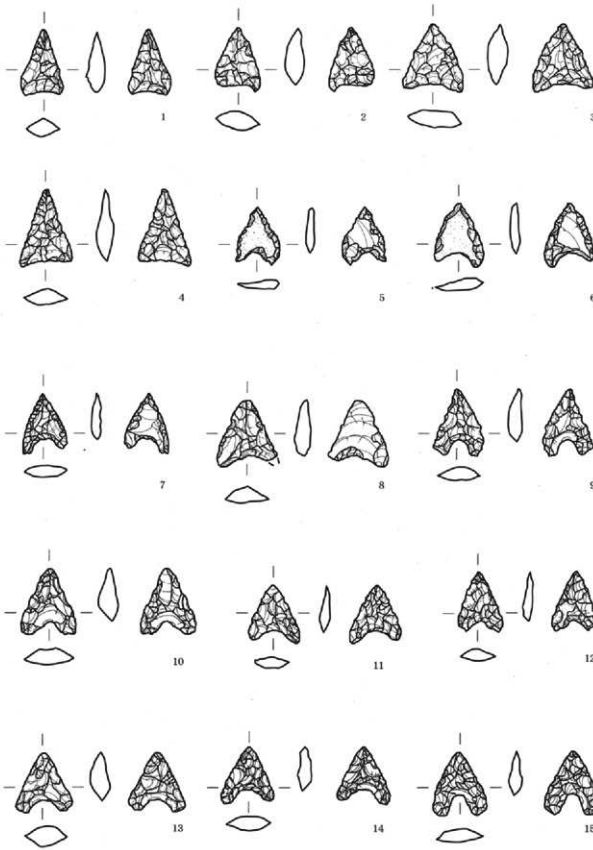
第144図　遺構外出土土器破片（22）



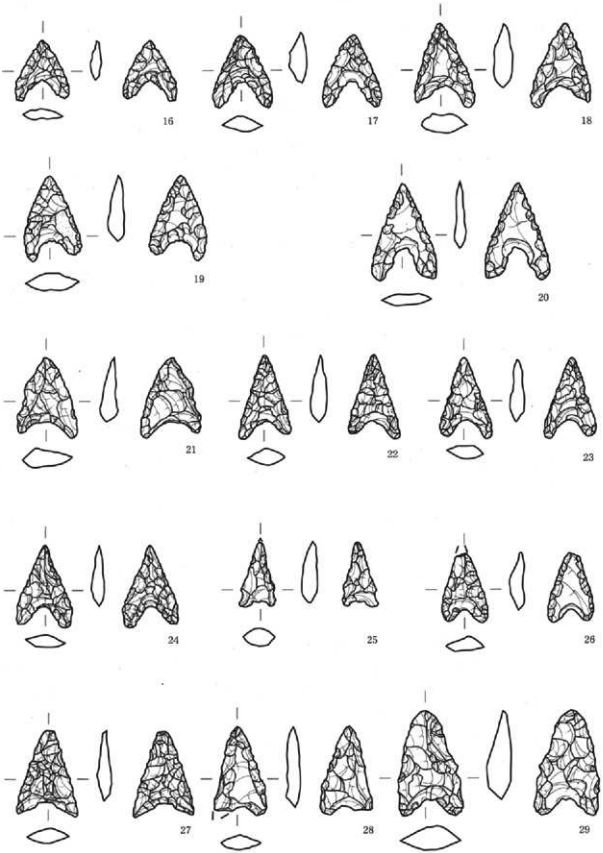
第145図　遺構外出土土器破片（23）



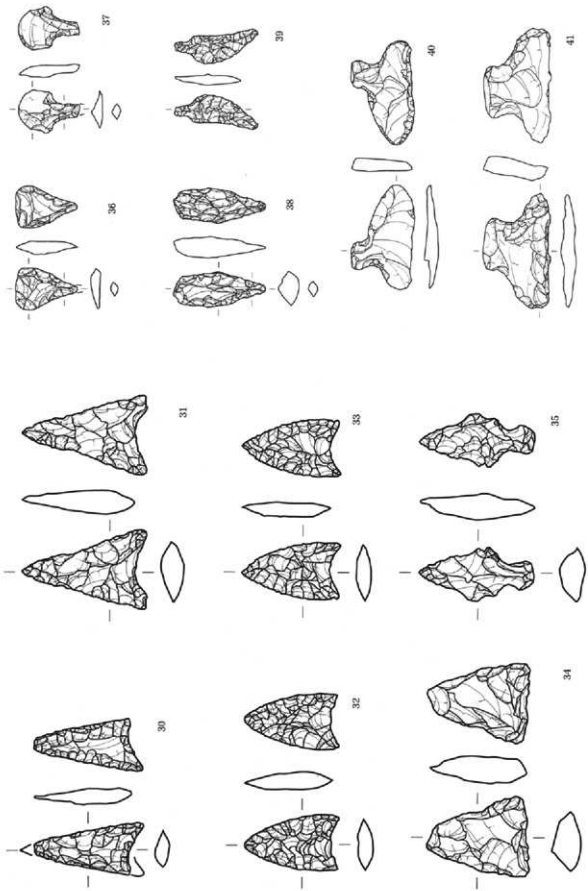
第146図　遺構外出土土器・鉄器



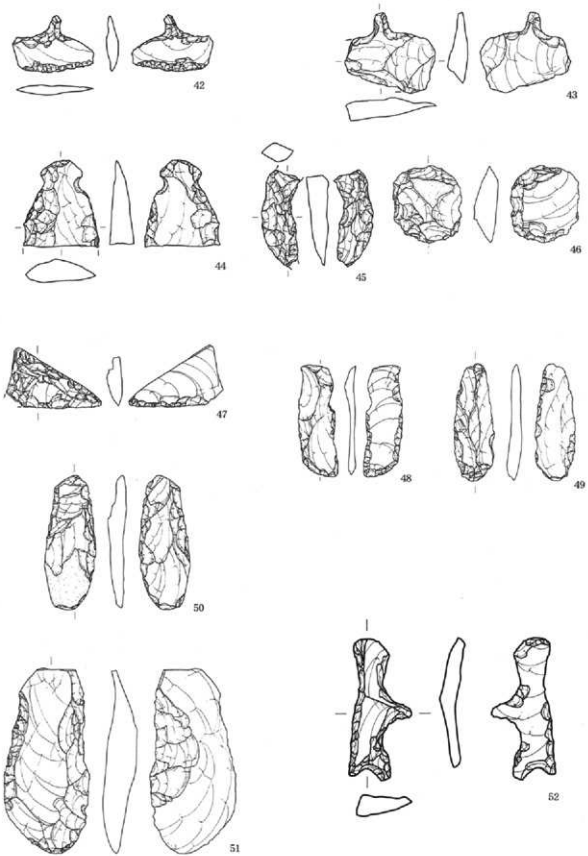
第147図　出土石器（１）



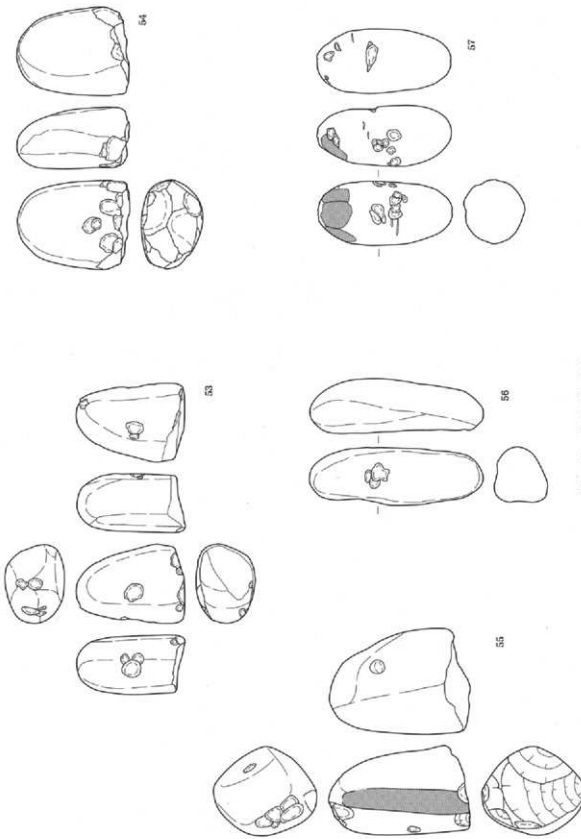
第148図　出土石器（２）



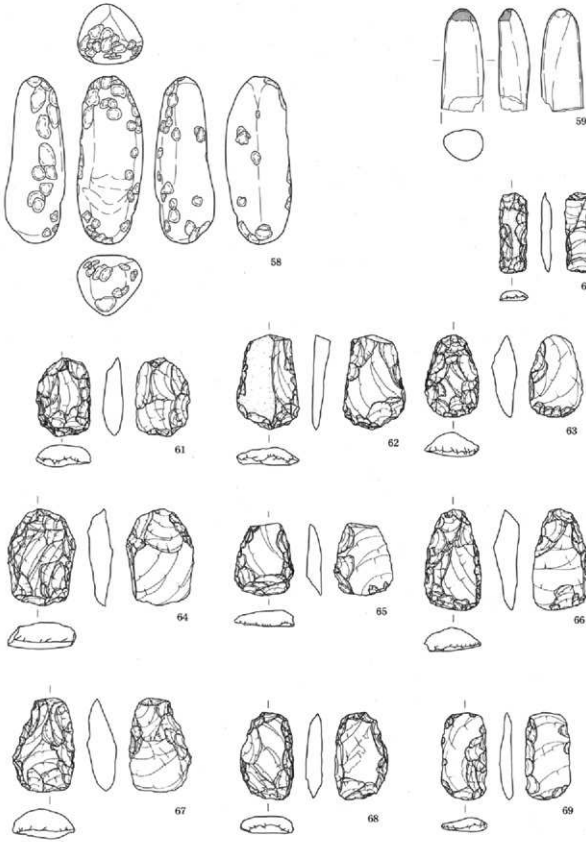
第149図　出土石器（3）



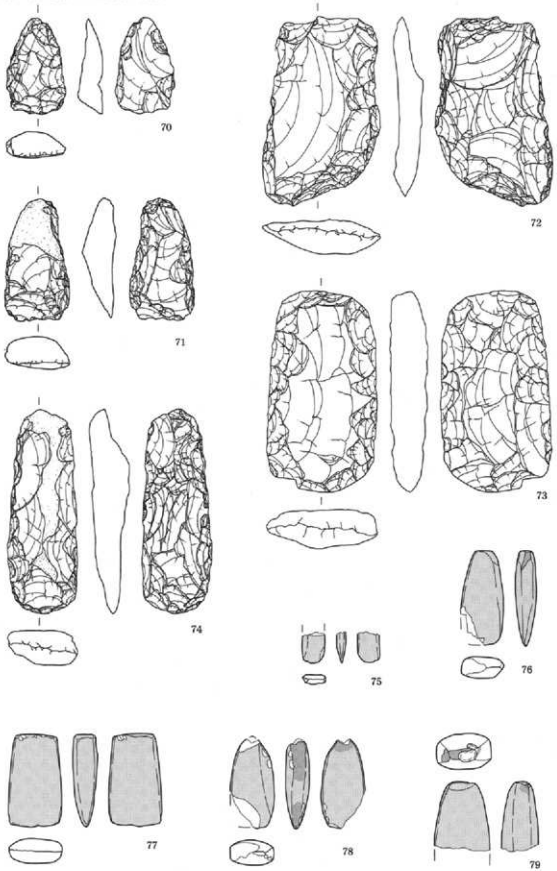
第150図　出土石器（４）



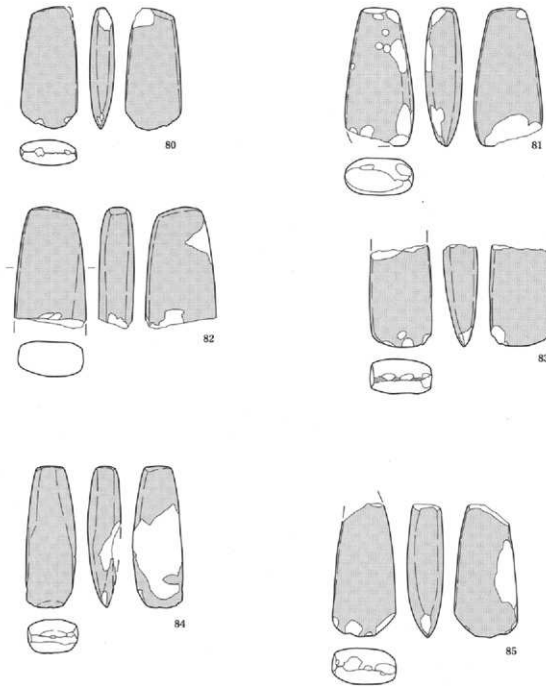
第151図　出土石器（５）



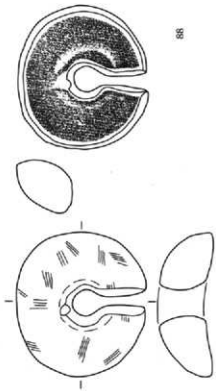
第152図　出土石器（６）

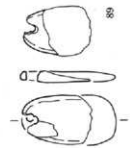


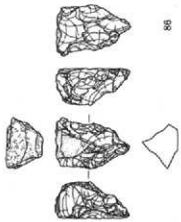
第153図　出土石器（７）

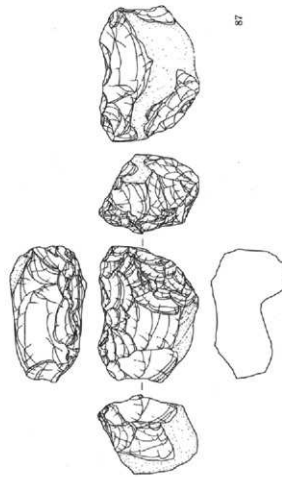


第154図　出土石器（8）

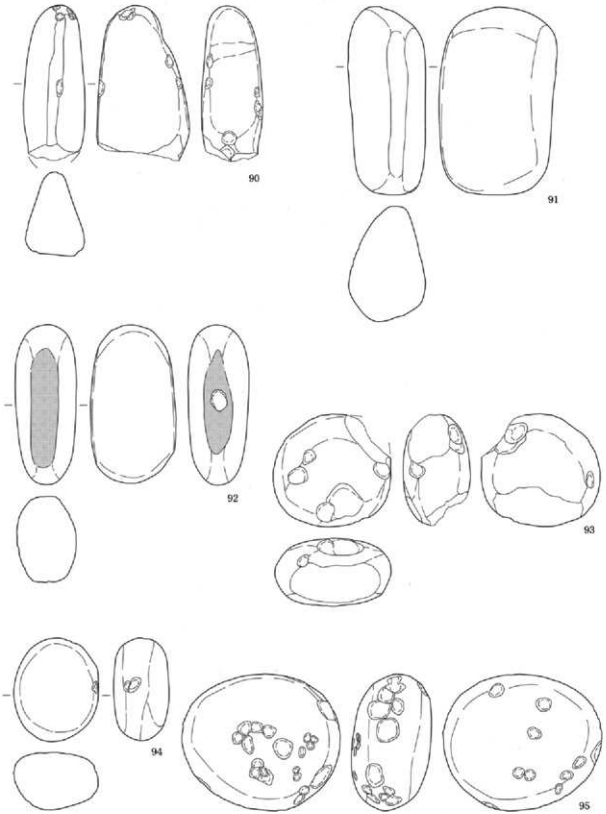




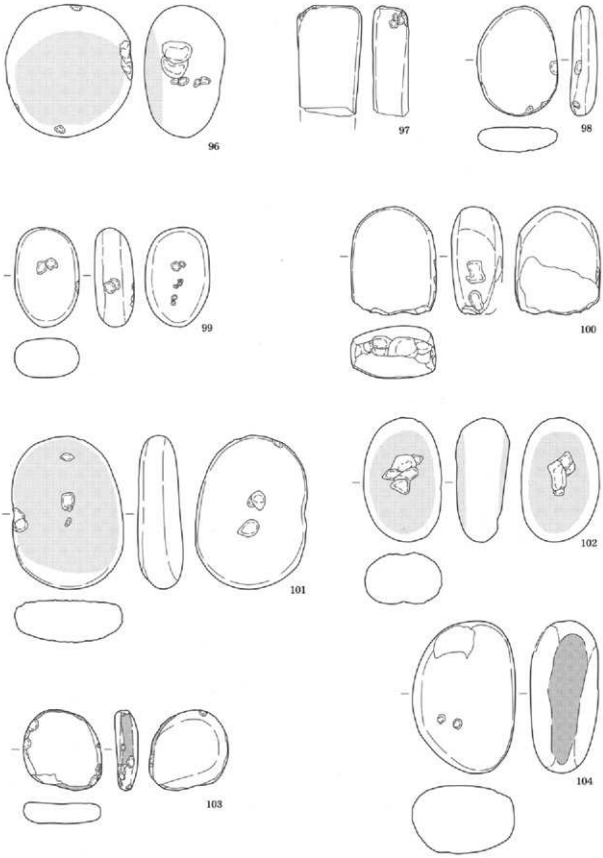




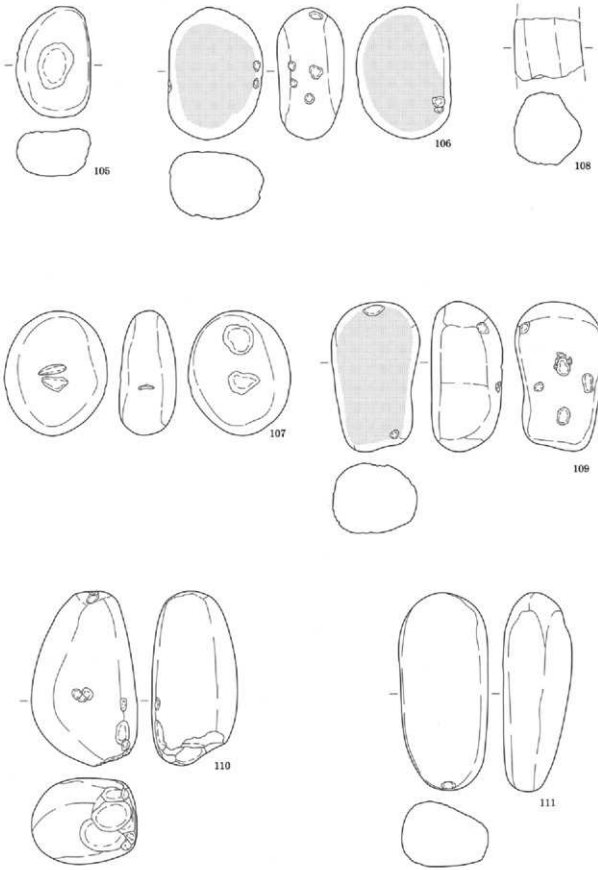
第155図　出土石器（９）



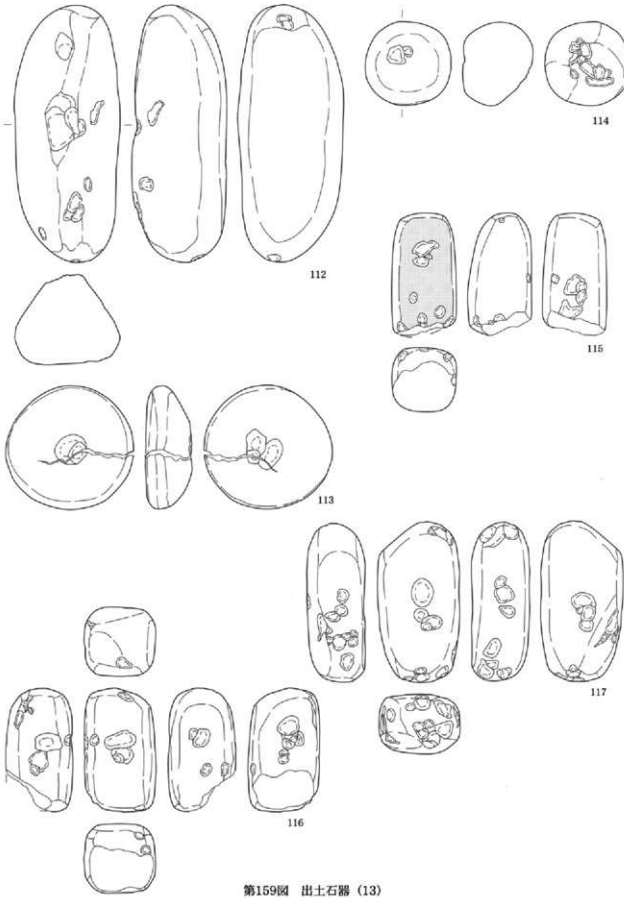
第156図　出土石器（10）



第157図　出土石器（11）

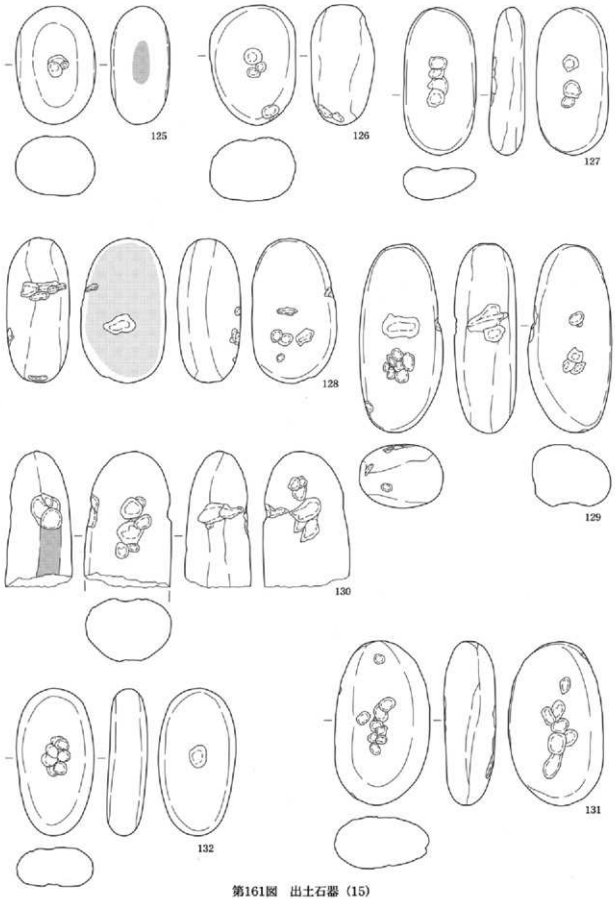


第158図　出土石器（12）

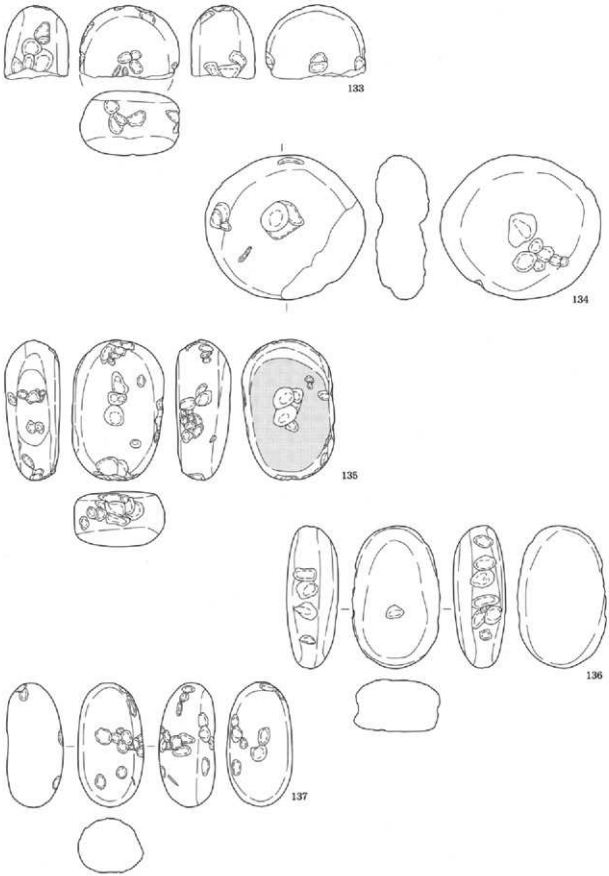


第159図　出土石器（13）

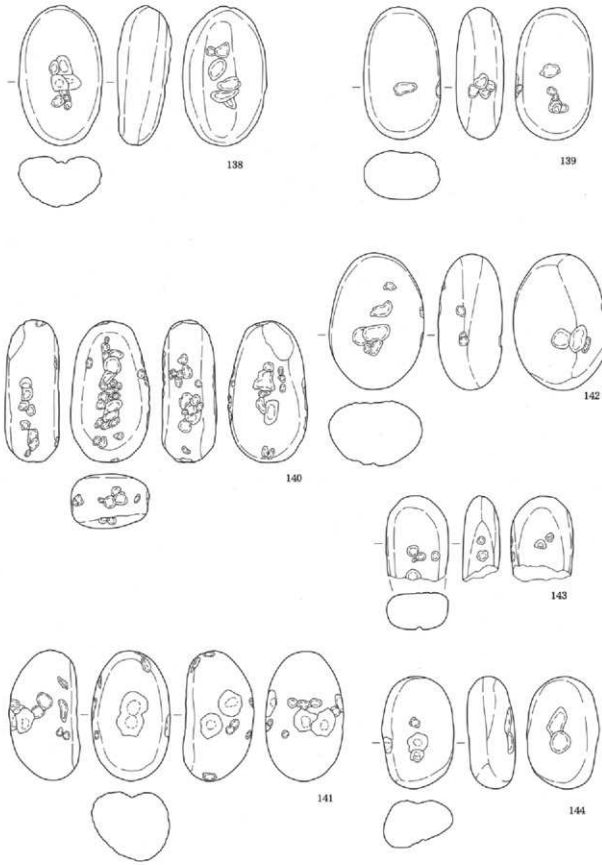
第160図　出土石器（14）



第161図　出土石器（15）

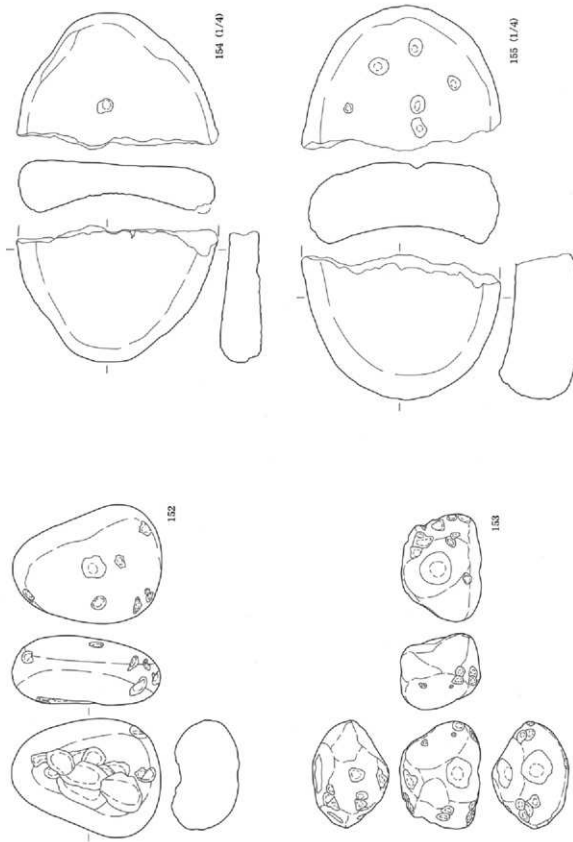


第162図　出土石器（16）

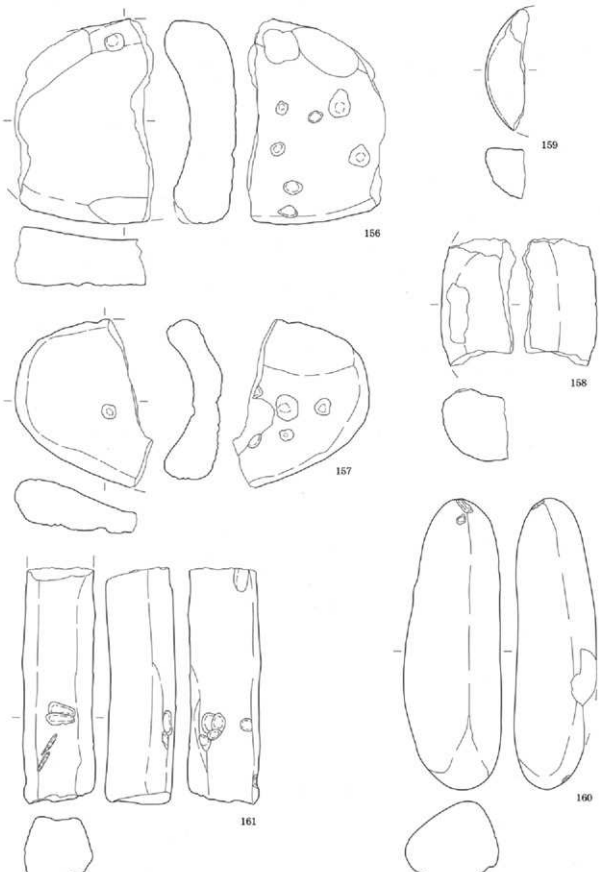


第163図　出土石器（17）

第164図　出土石器（18）



第165図　出土石器 (19)



第166図　出土石器（20）

第４章　まとめ

第１節　遺構

１．竪穴住居

住居11軒のうち、９軒は中期初頭から前半、10号住居１軒のみ中期後半、１軒は中期と思われる。住居規模は傾斜地形による崩落と黒色土中での範囲確認の難しさにより、全体形を確実に確認できたものは２・10号住居の２軒に過ぎない。２号住居は隅丸長方形、10号住居は不整円形を示しており、時期不明確な８号住居も炉の位置や柱穴の位置から不整円形に、残る８軒はほぼ２号住居に準じるものと考える。石囲い炉は10号住居中央部で検出され、８号住居中央部で地床炉、７号住居では中央やや東寄りで残存状況の悪い炉があるに過ぎない。そのほか焼土を床面に持つものは１・３・11号住居で、３号住居は西端に偏在し、ほかも中央より西や北にはずれる傾向がある。

住居内で特に注目される遺構は、内土坑とした深い土坑で、５号住居では東辺の南東隅部に62×48㎝、深さ38㎝の方形の土坑があり、底面に下半部の完存する土器が正置され、炉体土器のような使用痕跡が見られる。これは、炉の可能性が高い遺構と判断される。このため、床面から約60㎝下で深鉢（４住９）の下半部が正立していた４号住居の場合も類似例に含まれるだろう。また、７号住居でも東辺際に81×70㎝、深さ27㎝の隅丸方形の土坑があるが、焼土や土器は伴っていない。

伏せ甕は４軒の住居で検出された。１号住居では北辺やや右寄りで壁側に倒れる形で、深鉢が床面に倒置されていた。内部には人頭大の巨礫が入っており底部は発見できなかった。３号住居南西隅では口縁下向きに斜位で深鉢が埋設されていた。これは元来底部を持っていた可能性もあり、近くには扁平な石がある。４号住居南壁際では、伏せ甕が床面から74㎝下から出土しており、別の遺構である可能性もある。ほぼ完形の土器で、掘り込みは確認できなかった。10号住居南西Ｐ４の脇では、床面で横位に深鉢(10住４)の上半部と巨礫が並んで出土している。この土器の欠損する胴部下端部は一部平滑な調整痕があり、人為的に欠かれたと判断される。出土状況は１号住居の伏せ甕に類似する。

埋設土器は３軒の住居跡で検出され、５号住居では既述のとおり内土坑底部に正置されていた。２号住居中央南寄りでは、埋設土器が１ｍ程離れて２基正置されていた。１号埋設土器は使用痕から炉体土器の可能性がある。したがって２号埋設土器も可能性はある。６号住居では南側（尾根側）約50㎝の間隔で２基並んで出土した。１号埋設土器は口縁片で不自然な出土状態であり、移動している可能性がある。２号埋設土器は下半部が完存する深鉢(10)が横位に出土したもので、炉体土器を思わせるが誼左にかける。

２．土坑

土器を埋納したと思われる円形の土坑は、10号住居の南尾根側と、２号住居の北尾根側に集中している。22号土坑からは胴部上半部だけだが、推定口径38㎝の大形な深鉢が出土している。26号土坑では、大形で口縁部以外ほぼ復元できるが、粗製の深鉢が出土しており、位置も１基だけ調査区東端に離れるなど、異質な傾向にある。27号土坑からは、大形の深鉢がほぼ完形の状態で出土している。29号土坑は袋状に近い形態を持つ。出土遺物は多かったものの破片であった。これら土器が埋納されたと思われる土坑は、概ね円形で類似する形態であった。

１・３・４・５・９・10・19・66・86・98号土坑の10基は、深さが浅いため陥し穴とは見なせなかったが、平面形や規模からその可能性が高いだろう。

3．陥し穴

平安時代以前のもの18基、平安時代のもの４基として報告を行ったが、前述のとおり縄文時代の土坑とした中にも、10基可能性の高い土坑がある。形態は、筒形、スリ鉢形、箱形１類、箱形２類、溝状の４種５類に分類した。このうち溝状はすべて平安時代である。ただし、時期の認定は確認面上層に粕川テフラが堆積していることと、掘り込み面の層位を基準にしたものであり、具体的な年代幅を示す出土遺物はなかった。しかし、隣接する立馬Ⅰ遺跡では、10世紀前半の住居を壊して造られた同種形状の陥し穴が検出され、これを指標としている。この状況は、立馬Ⅰ遺跡の報告の際、明らかにする予定である。

底面に逆茂木とみられる杭痕跡を発見してきたものは、全て溝状の３基で、残る溝状のもの１基は底面がYPkであったため検出できなかったが、元来存在していたのではないかと考える。杭跡の本数は、48号土坑で５基、69号土坑で6基、72号土坑で７基である。この杭跡は確認が容易であったことから、見落としはほとんど無いだろう。本数は各土坑により異なるが、底面４カ所に杭を設ける点で共通し、１カ所につき杭を１基にするか２基にするかによって本数の違いが生じている。傾向として１－２－１基と交互に増減させることが看取される。

形状に関して特に注目されるのが、貼り壁、貼り床の存在であろう。貼り壁の場合、壁面の土層堆積の状況として、YPk層が露呈していた場合、その部分に黄色粘土を貼ることが発見された。数量は22基中３基に過ぎなかった。また、壁面をトレンチ状に掘り込むなど徹底した検証を行っておらず、若干の見落としを想定しておく必要がある。しかし、この貼り壁を持つものの形状は、２基がスリ鉢形、１基が溝状であり、壁が斜めに立ち上がっていることから、埋没の過程で上層の粘土が滑り落ち、ちょうど圧着した可能性も否定できず、検討を要するだろう。

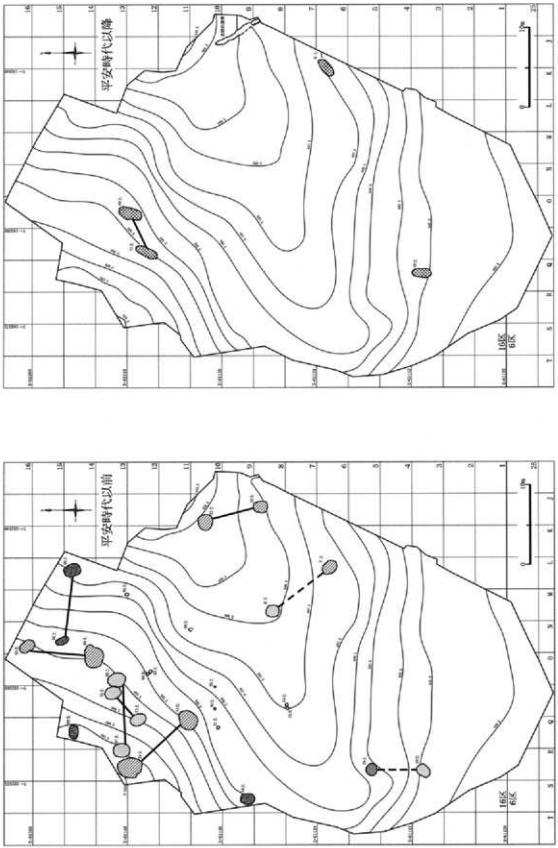
貼り床については44号土坑で確認され、底面から約30cm上層に堅く締まった水平面が検出された。杭跡は貼り床面及び掘り方底面ともに検出できなかった。なお、壁面には顕著な掘削工具痕跡が認められた。工具の形状から金属の刃先であったとも考えられ、弥生・古墳時代以降の所産とも比定される。これは近隣で調査された花畑遺跡での調査成果と合致する事例である(石田2004)。この土坑は形状的に陥し穴と変わらないにしても、別の用途も想定される土坑として認識される。

分布は第167図に示したとおり、２基１組で造られている可能性が看取される。これは同種の形態を持ち、かつ主軸方位の近しいものを抽出した結果である。ただし、こうした傾向が読み取れたため、南斜面に位置する７・８号土坑と、49・79号土坑の２基の組み合わせは、形態にこだわらず位置関係から結びつけた。この特徴は、すでに花畑遺跡や長野原一本松遺跡出土の陥し穴でも分析されているところである(石田2004)。地形的な位置関係では、傾斜に対して直交方向に６組、平行が２組で、南斜面では尾根と斜面を結ぶ位置、北斜面では緩斜面と急斜面の境目から急斜面を結ぶ傾向がうかがえる。２基の間隔は８m前後が多いがばらつきもあり、地形により長短を選択していたとみられる。なお、平安時代の場合、４基と少ないため傾向は分かりにくく、２基の組み合わせとしたものも１基ずつである可能性も残る。

＊石田真　2004『群馬県北西部における陥し穴の構築時期について』『研究紀要22号』財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

4．道路状遺構

非常に硬化した道路面が２面あり、長さ６m以上検出することができたが、時期を示す出土遺物はなかった。ただし、調査段階ですぐ東側に砂利道があったため、その前身であることはほぼ間違いない。この砂利道は、北側約200mの山中に付設されている水道施設への作業道として近年造られたものとみられる。調査



第167図　6・16区陥し穴分布図

区域外の工事が施工される前には、沿道各所で寸断された古道も観察することができた。おそらく、本遺構も同種の古道と考えられる。なお、この古道は背後の山中にある「あしぐら観音」(第1表周辺遺跡の一覧参照)を通過して、更に山中に入る江戸時代まで遡れる作業道である。

第2節 遺物

1．土器

(1)土器の構成

出土土器の大半は、中期初頭から前半の土器群であり、別に第6章考察(山口)を用意している。また、出土例の少ない草創期～早期については、第3章第4節で詳細な分類・観察(橋本)があるが、隣接する立馬Ⅰ遺跡報告の際、合わせて考察がなされる予定である。

ここでは、住居の時期と関わる問題として、出土遺物の分類的な構成をみよう。ちなみに7・8号住居は遺物が少なく検討できない。また、10号住居は石囲い炉内の埋設土器から第Ⅶ群の時期であり、他の住居群とは時期及び様相が異なる。

住居8軒の土器構成を比較すると、近似する3つにグループ分けできる。①1号住居と点数は少ないが11号住居、②2～4・9号住居は構成がよく似ている。③5号住居と6号住居も、構成がかなり似ている。なお、調査所見による新旧関係では、4号住居→3号住居→2号住居の順で新しく、4号住居→5号住居の関係にもある。

①1号住居では、大半を第Ⅵ群第1類が占めていて、しかも角押文というやや新しい様相を持つ第Ⅵ群第1類d種(以下Ⅵ1dと略す)が少ない傾向を持つ。またⅥ2以下、中期前半の土器群も少ない。ただし、床直遺物では41がⅥ2b、及び伏せ甕1がⅥ3dであり、全体の構成とは異なっている。おそらく全体構成が示すほど古相ではなく、床直遺物の時期であろう。11号住居もⅥ1c・dを含んでいないが、Ⅵ4aを12%含んでいるのは1号住居と違う点である。床直遺物では遺存状態の良いものはなく、特に考慮されない。

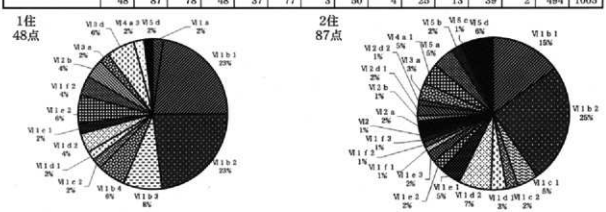
②2～4号住居では、Ⅵ1が7割程度を占め、9号住居だけは8割程度を占めるが、これは縄文のみを施すⅥ1eが多いためで、やや特殊だが、Ⅵ1a・bが多い①1・11号住居とは違う。やはり②のグループに属するだろう。このグループでは、Ⅵ1c・dが2割程度と多くなっている。また個別にみると、2号住居ではⅥ5がやや多めである。3号住居ではⅥ2が2割を越えている。4・9号住居ではⅥ3が10%を越える特徴を持ち、さらに9号住居ではⅥ1eが20%を越えている。

床直遺物などで考えると、2号住居の埋設土器22がⅥ2、埋設土器24がⅥ5aとやはり全体構成と一致する。3号住居では埋設土器3がⅥ1b1で、Ⅵ2が多い全体構成に反して、Ⅵ1段階の時期と考えられよう。4号住居は遺存状態の良い床直遺物5がⅥ1d2で、時期を示す有力な遺物と思われる。ただし、床面より70cm以上深い位置で倒立して発見された深鉢6がⅥ4a3であるのが整合性に欠け、問題を残している。9号住居の床直遺物では、遺存状態の良い深鉢7がⅥ1aで、12はⅥ1e3で、ほぼこの時期に比定されよう。結果として、4号住居と9号住居が本遺跡では最古ではなかろうか。

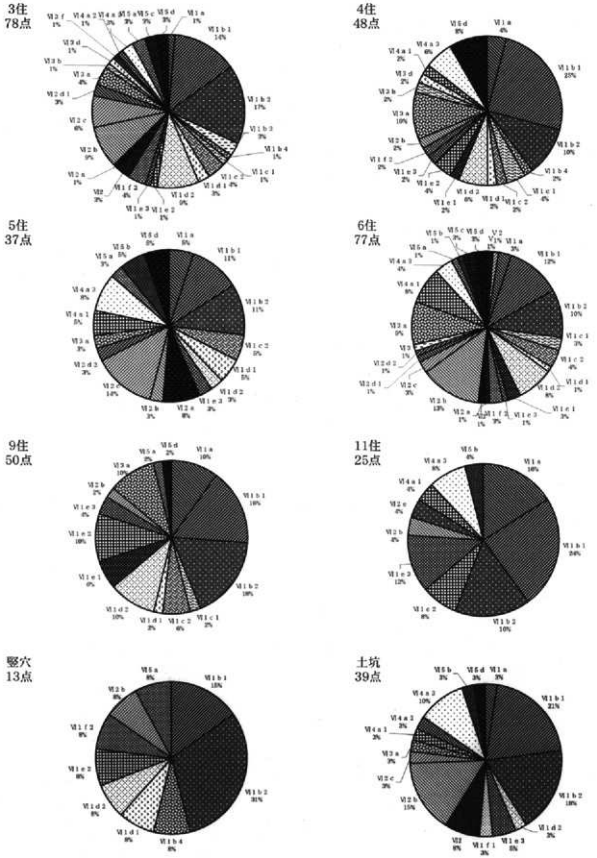
③5・6号住居では、Ⅵ1a・bの割合が少なくなり、Ⅵ1c・dがⅥ1内部で占める割合が高まっている。なお、特徴的な構成でⅥ2が1/4を占めている。また、同じくⅥ4も10%を超えている。床直遺物では5号住居の場合、遺存状態の良いものが多い。深鉢1・3・7・9はⅥ1a～dそれぞれで、特に内土坑内で炉体土器とも思われる10はⅥ1e3である。しかし、ほかの床直遺物でも遺存状態の良い12・13・15がⅥ2b・a・cとなっており、雑多な構成となっている。この住居の場合、床面が分かりにくい点と、出土遺物の多くが

第２表　住居ほか出土遺物分類別一覧

	1住	2住	3住	4住	5住	6住	7住	9住	10住	11住	竪穴	土坑	埋設	遺構外	合計
第Ⅴ群						1									1
第Ⅴ群第１類ａ種														14	14
第Ⅴ群第１類ｂ種														1	1
第Ⅴ群第２類						1								9	10
第Ⅵ群第１類ａ種	1		1	2	2	2		5		4		1		10	28
第Ⅵ群第１類ｂ１種	11	13	11	12	4	9		8		6	2	8		80	164
第Ⅵ群第１類ｂ２種	11	22	13	5	4	8	1	9		4	4	7		56	144
第Ⅵ群第１類ｂ３種	4		2											3	9
第Ⅵ群第１類ｂ４種	3		1	1							1			2	8
第Ⅵ群第１類ｃ１種		4	1	2		2		1						11	21
第Ⅵ群第１類ｃ２種	1	2	3	1	2	3	1	3						9	25
第Ⅵ群第１類ｄ１種	1	3	2	1	2	1		1			1			10	22
第Ⅵ群第１類ｄ２種	2	6	7	3	1	6		5			1	1		17	49
第Ⅵ群第１類ｅ１種	1	4		1		2		3					1	7	19
第Ⅵ群第１類ｅ２種	3	2	1	2				5		2	1			14	30
第Ⅵ群第１類ｅ３種		2	1	1	1	1		2		3		2		2	15
第Ⅵ群第１類ｆ種														1	1
第Ⅵ群第１類ｆ１種		1										1		1	3
第Ⅵ群第１類ｆ２種	2	1	3	1		2					1			12	22
第Ⅵ群第１類ｆ３種		1													1
第Ⅵ群第２類		1	2			1	1					3		7	15
第Ⅵ群第２類ａ種		2	1		3	1								4	11
第Ⅵ群第２類ｂ種	2	1	7	1	1	10		1		1	1	6	1	50	82
第Ⅵ群第２類ｃ種			5		5	2						1		19	32
第Ⅵ群第２類ｄ１種		2	2			1								8	13
第Ⅵ群第２類ｄ２種		1			1	1								2	5
第Ⅵ群第２類ｅ種										1				2	3
第Ⅵ群第３類						1									1
第Ⅵ群第３類ａ種	1	3	3	5	1	7		5				1		28	54
第Ⅵ群第３類ｂ種			1	1										2	4
第Ⅵ群第３類ｃ種														9	9
第Ⅵ群第３類ｄ種	3		1	1										3	8
第Ⅵ群第３類ｅ種														3	3
第Ⅵ群第３類ｆ種			1											6	7
第Ⅵ群第４類ａ１種		4		1	2	6				1		1		13	28
第Ⅵ群第４類ａ２種			1									1		5	7
第Ⅵ群第４類ａ３種	1		2	3	3	3				2		4		27	45
第Ⅵ群第４類ａ４種														3	3
第Ⅵ群第５類ａ種		4	2		1	1		1			1			6	16
第Ⅵ群第５類ｂ種		2			2	1				1		1		9	16
第Ⅵ群第５類ｃ種		1	2			2								6	11
第Ⅵ群第５類ｄ種	1	5	2	4	2	2		1				1		19	37
第Ⅶ群									4						4
第Ⅷ群														4	4
	48	87	78	48	37	77	3	50	4	25	13	39	2	494	1005



第168図　住居ほか出土遺物分類別割合図（１）



第169図　住居ほか出土遺物分類別割合図（2）

4号住居との重複部分にある点から、前出する4号住居の遺物を含めている可能性が高いと思われる。おそらく5号住居は、この第Ⅵ群時期の住居では最新のものではないかと考える。6号住居の床直遺物はⅥ1が大部分を占め、全体構成上多くなっているⅥ2は、小破片の埋土中が多い。この住居の場合は、全体構成が示すほど新しい様相を持たず、②グループの時期に近いものと考える。

以上、出土土器の分類構成から、住居の時期を推測してみたが、やはり埋没途中の廃棄や混入遺物が多いことから、1号住居・6号住居では掲載遺物全体の構成からうかがえる状況と、床直遺物が対応していないことが判明した。

(2)土器の胎土

ここでは、胎土が各土器群で特徴を持つことから、その様相をまとめる。胎土は飯森が肉眼観察で行い、特徴的な含有物を中心に記載を行った。参考に遺構外遺物4(Ⅰ群)の土器について、石材鑑定を行った渡辺専門員が顕微鏡観察した結果、結晶片岩、角閃石、石英、磁鉄鉱が含まれることが判明した。なお、片岩を含む場合、肉眼で針状に見える石片が含まれるため、合わせて観察してもらったところ、海綿骨針ではなく、片岩の細片であることが判明した。この土器については、観察表上では「片岩を含む」となっている。また、軟質白色岩片及び軟質白色粒子という用語を適宜使用したが、渡辺専門員による鑑定を1点だけ依頼した結果、軽石が風化したものという見解を得た。おそらく、塊状の岩石を砕いて混ぜ込んでいる可能性が高く、注目される様相である。

掲載した縄文土器1,165点の約80％が第Ⅵ群の土器920点であり、全体傾向は第Ⅵ群の土器の傾向が現れているに過ぎない。したがって、各群を相互に比較することが有効であろう。第Ⅰ群8点はすべて片岩を含む。第Ⅱ群は第2・5・6類が約75％を占めていて、しかもそれぞれが様相を変えるため、全体として見ることはあまり意味をなさない。むしろ、各類別では非常に特徴が現れている。第Ⅱ群第1類5点と少ないが、特徴的な岩片をあまり含んでいない。第Ⅱ群第2類34点で比較的掲載点数が多い。特徴的な岩片をあまり含まず、ほとんどが繊維を含むことが特徴である。第Ⅱ群第3類8点では小礫を多く含む点があるが、少ない点数では参考程度である。第Ⅱ群第4類は6点と少ないが、67％が片岩を含む特徴を持つ。第Ⅱ群第5類20点では、60％が軟質白色粒子を多く含んでおり、特異な様相を持つ。意識的に軟質白色粒子を選んで混ぜ込んでいるのだろう。第Ⅱ群第6類23点は片岩多く含む9％、白色粒子多く含む4％、軟質白色粒子多く含む9％と少ないが、意識的に岩片を混ぜ込んでいる傾向を認めてよいだろう。以上までが草創期から早期の胎土の様相である。

第Ⅲ群39点は、白色粒子を含むものが23％ある一方で、片岩や金雲母は全く含まれないことも注目される。ただ、もっとも大きな特徴は繊維土器である点で、これを加味して考えなければならない。第Ⅳ群61点も第Ⅲ群の組成を踏襲しているが、片岩を含むものが7％含まれる。また、繊維を含むものがほとんどない点も大きな変化である。第Ⅴ群は26点と若干少ないが、第Ⅲ・Ⅳ群からの傾向を踏襲している。第Ⅴ群は第Ⅵ群へと不分明に変化していく土器群と考えているが、胎土からは第Ⅲ・Ⅳ群という前期土器群に含まれる特徴が明白にうかがえる。これは想定外の傾向である。

第Ⅵ群は全体で920点あるが、その52％を占めるのが第Ⅵ群第1類479点であり、胎土の構成もほぼその影響下にあるため、各類別に比較した方が適切であろう。第Ⅵ群第1類では片岩を含む13％、金雲母を含む15％、白色岩片を含む14％と特徴的な岩石を半数近く含む傾向を持っている。ただし、多く含むまでではなく、意識的に混入しているレベルとは言いにくい。第Ⅵ群第2類194点は特徴が鮮明に出ている。特に金雲

母を含む22％、多く含む14％は目立つ。ただ、この土器群であればもっと多くを占めていいはずで、むしろ白色岩片含む25％、多く含む19％が凌駕しており注目される。分量的に金雲母と白色岩片は、意識的に混入されているはずで、金雲母の代用的に白色岩片を混ぜる意識が働いたものと想像する。第Ⅵ群第３類87点は軟質白色岩片・軟質白色粒子を多く含む８％という傾向が特徴的である。また、金雲母多く含む７％、白色岩片多く含む８％など、多く混入する点では、全体構成は第Ⅵ群第１類に近いがむしろ意識的に混ぜ込んでいると判断できる。第Ⅵ群第４類72点は第Ⅵ群第２類とは対極的な特徴をよく表出している。金雲母含む３％と非常に少なく、金雲母に対する意識がない。また、白色岩片や片岩についても多く含むものが少ない点で、意識的に岩片を混ぜ込む傾向は見られない。第Ⅵ群第５類は第１類から第４類に含まれないもので雑多な土器群であるが、胎土の構成を見る限り、第Ⅵ群第１類と第４類を合わせたような傾向が現れている。なお、第Ⅶ群・第Ⅷ群は参考程度にとどめておく。

以上見てきた胎土構成を再確認するためにも、岩石ごとの構成を再確認する。金雲母を多く含むのは、第Ⅵ群(中期初頭～前半)に限られ、42点中でも第Ⅵ群第２類が67％を占める。次いで第Ⅵ群第１・３類が14％ずつと続く。また第Ⅵ群第４類が含まれないのも、第Ⅵ群内で際だった特徴である。

白色岩片を多く含む傾向も、特に第Ⅵ群の土器に突出したものである。74点中50％は第Ⅵ群第２類が占めていて、金雲母と同じ位置づけである。また、第Ⅵ群第１類も32％と多い。しかし、第Ⅵ群第１類が掲載点数が多く、土器全体で見れば白色岩片を多く含むとしても、土器群中では多くを占めていないことは注意を要する。

片岩の様相はやや複雑である。含有量に関わらず含むものを全体に抽出すると、全体の９％108点を数え、このうち60％が第Ⅵ群第１類で占められる。ただし、第Ⅵ群第１類だけで見れば、14％を占めるに過ぎず、ほかに含まれる金雲母16％や白色岩片19％に比べて際だっているわけではない。むしろ、掲載点数が２番目に多い第Ⅵ群第２類が７％に過ぎない方が注目され、金雲母や白色岩片を好み、片岩は積極的には混ぜ込んでいないと判断される。また片岩を含む傾向は、第Ⅲ・Ⅶ・Ⅷ群を除いて、第Ⅳ～Ⅵ群では一様にあることが判明する。また、第Ⅱ群では含むものと含まないものとが分かれている。参考に片岩を多く含むものを抽出したところ、第Ⅵ群が多く、この時期意識的に岩片を混ぜ込む特徴をみることができた。また、第Ⅱ群第６類が22％を占めるのは注目で、前述のとおり白色岩片や軟質白色岩片も含めて、多く混ぜ込むという特徴を示している。

軟質白色岩片・軟質白色粒子を多く含むものは、土器全体の中でも非常に少ない。その中で第Ⅱ群第５類は44％で、非常に際だったものである。また、掲載点数の少ない第Ⅵ群第３類が26％であるのも、第Ⅵ群の土器全体で見れば、非常に際だった特徴であろう。

２．石器

石器の遺構別出土状況は、第４．６．８表のとおりであるが、器種別組成を見るために、出土総数4,338点(未掲載を含む)の大半3,772点を占める剥片石器と、残る556点の４割を超える礫石器229点を除外した337点についてグラフ処理を行った。ここで言う礫石器とは、顕著な磨り面や敲打面を持たず、磨石や凹石などに分類できない軽微な大形石器を総称している。

遺跡全体と住居全体の器種組成は、わずかな違いしかない。おそらく、住居遺物を除いた掲載遺物のほとんどが遺構外遺物であり、それらが傾斜地形により崩落したもので、本来住居遺物であったためと想像される。器種別に組成をみると、全体に石鏃が約45％近くを占めている。ついで約20％が磨石・凹石類。石斧は

遺跡全体の約15％、住居全体の11％で、打製と磨製の割合は、ほぼ２：１である。さらに、ドリル・スクレイパー類が残る15％を占める。なお、石匙は全体で６点出土するが、住居遺物は１点もない。

住居別の組成は出土点数が少なく、あまり参考にならないが、２・３号住居は比較的点数が多く、若干傾向がうかがえる。３号住は住居全体の様相と近いが、スクレイパーが含まれない。一方、２号住居ではスクレイパーが10点20％と突出している。両者は重複関係にあるが、その影響とは思いにくい。

器種別の形態としては、石鏃のうち大部分は1.5ｇ以下で、中でも45％は0.5～1.0ｇである。打製石斧の形態は、バチ形と短冊形で分銅形はない。重さも100ｇ以下のものが73％を占めている。磨製石斧では小型なものが１点ある。磨石については、特殊形としたタイプが23点中８点36％含まれる。これは狭い側面を平面的に使うもので、断面三角形や台形に近いものがある。分類は観察表に示してある。

石材については掲載遺物のみの鑑定を行ったため、総数161点で出土総数4,338点のわずか４％にすぎない。ただし、器種別組成に使用した337点と同じ構成であることを考えれば、337点中の161点となり、ほぼ48％をみることができる。しかも、未掲載遺物のうち116点は欠損する石鏃であるため、石鏃を除いた石材組成は遺跡全体にやや近い様相を示していると言える。

総数161点中もっとも多い石材は、粗粒輝石安山岩で46％を占めるが、72点中62点は敲石・磨石・凹石である。その他の石材では黒曜石が13％を占めるが、20点中19点が石鏃である。またチャートも全て石鏃、珪質変質岩も８点中６点が石鏃である。全体の石材組成にみえる多種な傾向は、石鏃の影響がかなり大きいと言える。

器種別では石鏃の54％が黒曜石で占められるが、珪質変質岩やチャートも10％を超えている。スクレーパーは86％が黒色安山岩を占め、敲石・磨石・凹石では93％まで粗粒輝石安山岩を用いている。磨製石斧も11点中９点が蛇紋岩で占められる。

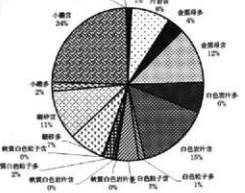
３．出土状況

第177～180図及び第３～８表に、遺跡内出土遺物総数を遺構・グリッド別で示した。これは掲載遺物に、未掲載遺物を足しあげた総数になっている。グラフではグリッド別に分布傾向を図示しており、遺構を位置から各グリッドに読み替えている。また、複数のグリッドにわたる遺構の場合、土坑など小規模な遺構は面積割合の多いグリッドに含めた。住居の場合は、出土数量も多く影響が大きくなるため、出土傾向などを加味して、以下のとおりグリッド位置を決定した。１住：Ｌ－４、２住：Ｏ－５、３住：Ｏ－４、４住：Ｐ－４、５住：Ｑ－４、６住：Ｐ－10、７住：Ｒ－４、８住：Ｓ－５、９住：Ｏ－11、10住：Ｋ－11、11住：Ｌ－11。なお、出土地点が不明な表土などや、出土範囲の広いトレンチ出土遺物については、グリッド遺物からは除外したため、グラフと表で総数は異なる。

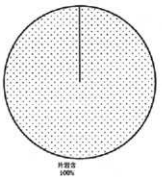
グラフ作成については、第Ⅵ群土器の点数が極めて多い性格を考慮して、第Ⅴ群以前とグラフを分離した。第Ⅰ～Ⅴ群土器のグラフの点数(縦軸)は一目盛り５点で、第Ⅵ群土器では一目盛り200点である。点数はあくまで破片数であり、同一個体は考慮したが、不確実なものは各１点とカウントしてある。

遺物の出土位置は調査区の南北に分かれる。Ｙ軸では６～９グリッドが少ない。この部分は尾根部分であり、遺物包含層となる黒色土層が少ないためである。ただし、第Ⅰ～Ⅴ群土器ではＯ～Ｓ－９グリッドにも遺物の出土が相当数あり、第Ⅵ群土器と大きな違いを示している。本遺跡の場合、出土遺物は谷地形に埋積する傾向にあるため、谷地形の埋没状況との関係から、古段階で谷が埋まるからと考える。したがって、第Ⅰ～Ⅴ群土器段階でも、出土分布もあくまで遺構の分布ではなく、包含層となる谷地形の埋没土に比例する

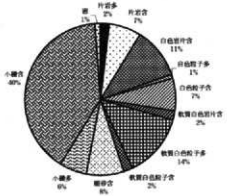
縄文土器全体
1165点



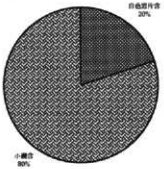
第Ⅰ群
8点



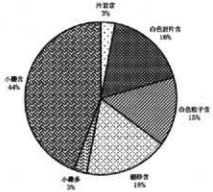
第Ⅱ群全体
102点



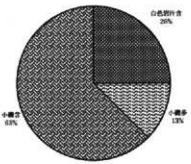
第Ⅱ群第1類
5点



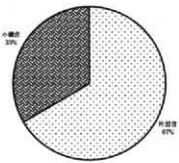
第Ⅱ群第2類
34点



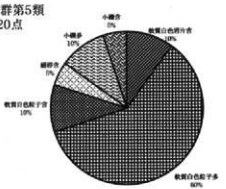
第Ⅱ群第3類
8点



第Ⅱ群第4類
6点

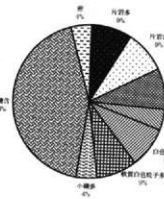


第Ⅱ群第5類
20点

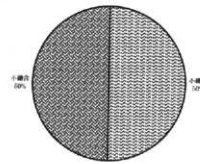


第170図　出土遺物分類別胎土割合図（1）

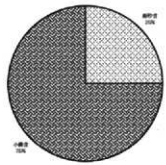
第Ⅱ群第6類
23点



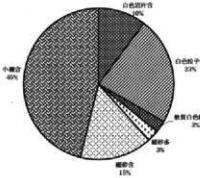
第Ⅱ群第7類
2点



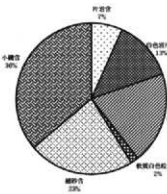
第Ⅱ群第8類
4点



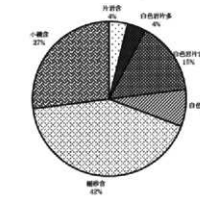
第Ⅲ群
39点



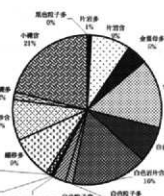
第Ⅳ群
61点



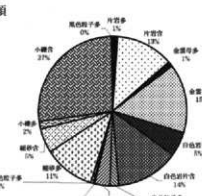
第Ⅴ群
26点



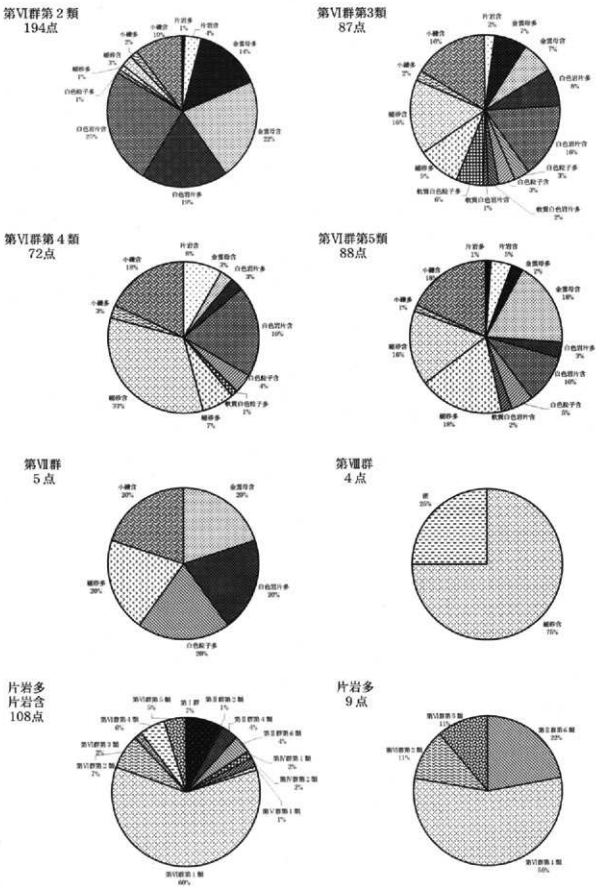
第Ⅵ群全体
920点



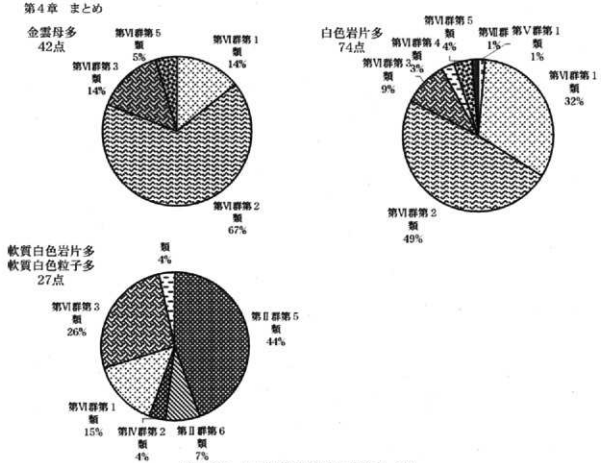
第Ⅵ群第1類
479点



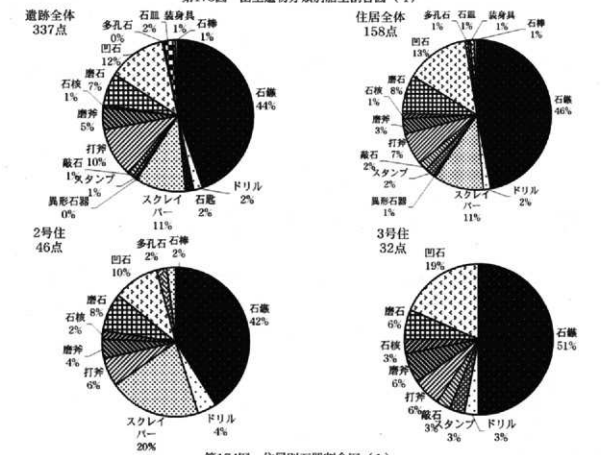
第171図　出土遺物分類別胎土割合図（2）



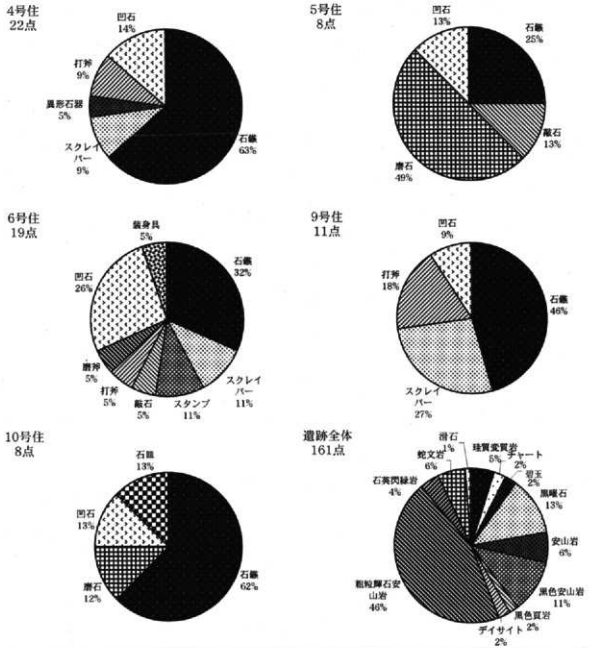
第172図　出土遺物分類別胎土割合図（３）



第173図　出土遺物分類別胎土割合図（4）

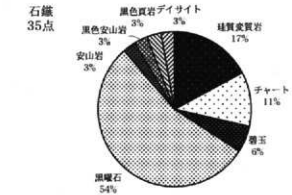


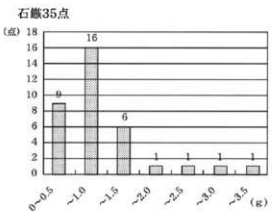
第174図　住居別石器割合図（1）

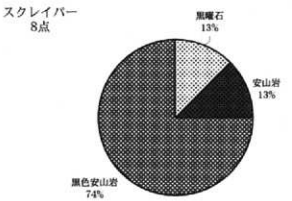


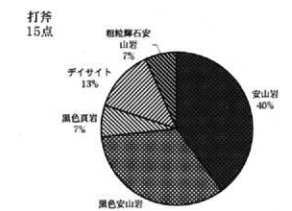
	遺跡全体	石鏃	スクレイパー	打斧	敲石・磨石・凹石
珪質変質岩	8	6			
チャート	4	4			
碧玉	4	2			
黒曜石	20	19	1		
安山岩	10	1	1	6	1
黒色安山岩	18	1	6	5	
黒色頁岩	3	1		1	
デイサイト	4	1		2	
粗粒輝石安山岩	72			1	62
石英閃緑岩	7				4
蛇文岩	9				
滑石	2				
計	161	35	8	15	67

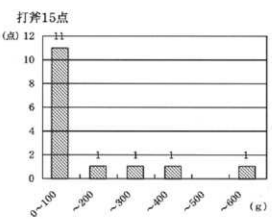
第175図　住居別石器割合図（２）・石器別石材割合図（１）

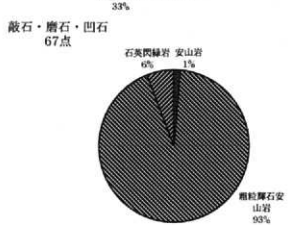


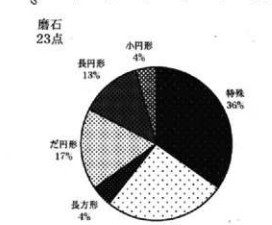












第176図　石器別石材割合図（2）

ものと結論する。

土器の出土は住居からが多いため、出土のピークも遺構の分布にほぼ重なる。分類別では、第Ⅵ群土器第１・２類（無文で判別困難な同群遺物は第１・２類とした）が出土土器総数40,557点のうち38,885点・約96％を占めており、住居の時期などからみても、遺構及び周辺の谷地形にほぼ一致して分布している。この他、第Ⅲ群土器の出土も全体傾向と等しいが、若干Ｏ～Ｑ－４・５グリッドに集中する。前期の遺構は明確でないため、この周辺に多い土坑が当期に該当する可能性がある。

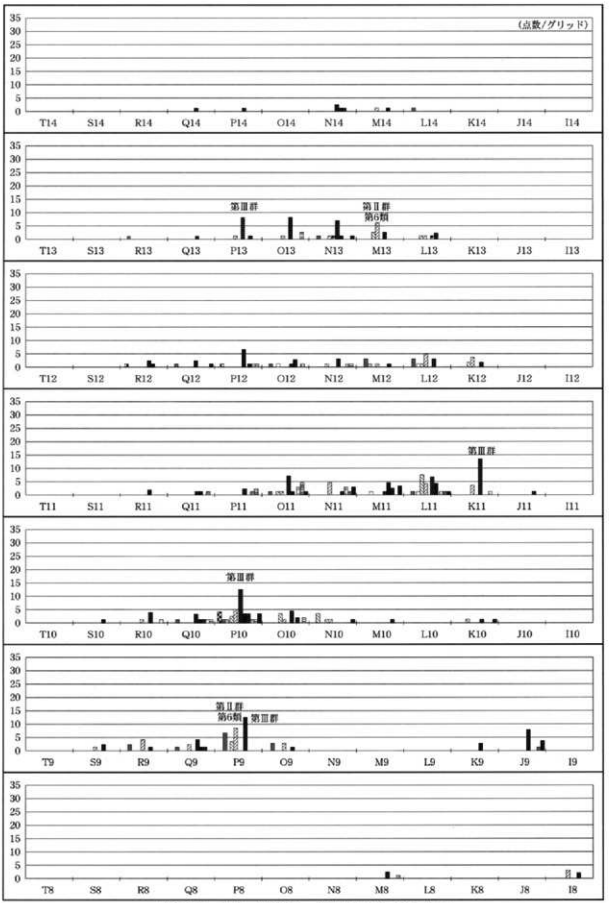
住居の土器出土数では、２号住居4,260点と群を抜いて多く、次いで３・４号住居が3,000点弱で続く。１・５・６・９号住居は約1,000～1,500点と数量が減り、10・11号住居では300点前後と、２～４号住居の1/10以下まで減っている。ただし、10号住居が中期後半代である以外、他の住居は連続する住居群であるため、この出土量の増減には、遺構の遺存条件などが大きく作用したものと推測される。

特に土器の様相を考察された山口氏は「各住居跡とも五領ヶ台Ⅱ式、直後段階の土器、阿玉台Ⅰa式・Ⅰb式が出土しており、それらが、各住居跡で主体となる様相で把握されない。特に埋設土器を伴う住居跡相互の重複関係も出土土器の新旧と合致してはおらず、また、重複部分の出土の偏りも見受けられることから、住居跡内の出土の一括資料の抽出や層位的検証は困難と判断した」（第６章）と述べられているとおり、遺構と出土土器との関係に一括性が認められていない。

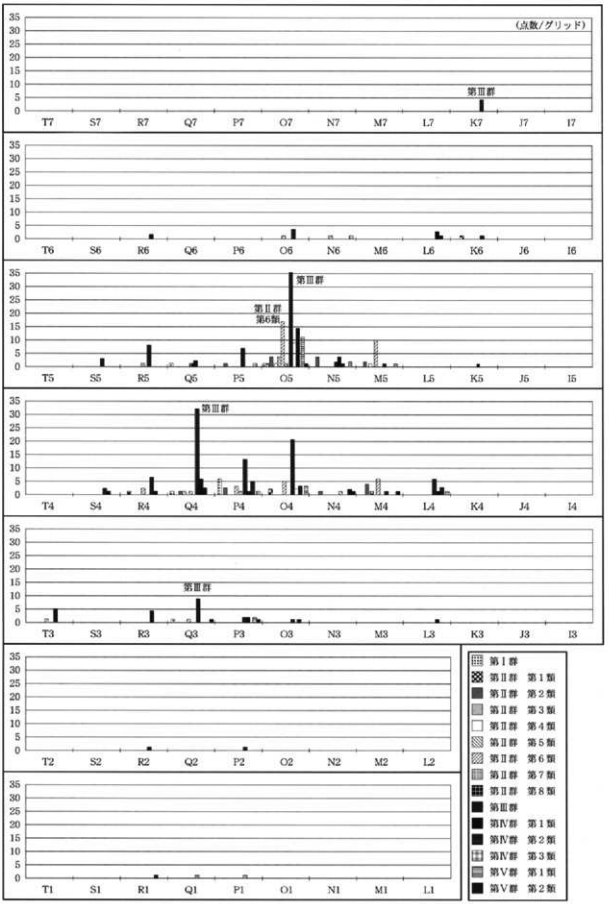
遺構の重複関係では、２号住居が最も新しいため、遺構の遺存状態や調査過程で最も多く遺物が把握されたものと判断される。ただし、２号住居に前出する３・４号住居も土器3,000点弱と、１号住居以下とも格差を持って多いため、２～４号住居周辺に特有な事情が介在している可能性が強い。これは一面では斜面に位置するため、遺物投棄による混入という側面を有しているが、それだけでは５・７・８号住居と、大きな条件的違いを認めることができない。つまり、地形的な条件とは違った人為的条件の違いを想定する必要を感じる。

住居と周辺の遺構との関係に着目すると、土坑が住居周辺に集中している(第１節参照)。特に10号住居の南では大形の深鉢を伴う土坑が数基分布している。反面、２～４号住居周辺では同様に円形の土坑が分布するものの、土器を伴っていない状況である。こうした状況から想像して、住居埋没土への遺物混入の多くは、斜面上部にある土坑群に帰属する遺物を給源とするのではなかろうか。加えて、４号住居本文中でふれたとおり、深鉢(6)は土器の様相から明らかに住居時期に後出していながら、明確な遺構の重複関係を検出できず、同住居内遺物として扱っている。この点では、一つの方法として、混入する異時期の遺物を別扱いする方法も検討された。しかし、編集者の力量も関係して、作為的な遺物の分別がかえって混乱を招くと判断されたため、なるべく遺構内での出土位置をよりどころに遺物の帰属を決定した次第である。つまり、４号住居に見られた状況は、４号住居１カ所に限られる状況ではなく、例えば２号住居内に重複する土坑などでも、元来土器を伴っていなかったのかという疑問、埋没土中にまとまって出土した遺物が、掘り込みを伴う別の遺構であった可能性など、考慮すべき要素は多くあると言わなければならない。住居遺物の検討に際しては、こうした状況を加味しなければならないだろう。

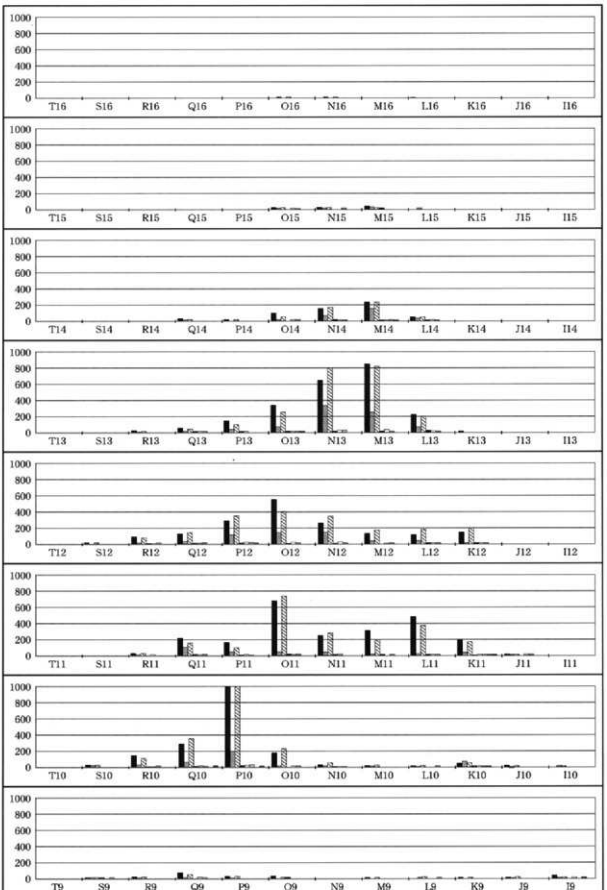
ところで、北側に位置する10・11号住居の土器出土量が少ない点に関連して、遺構外出土遺物がＭ－13、Ｎ－12・13で極めて多い状況が注目される。遺物の時期が近い11号住居については、他の住居との遺物出土量の比較からも推測されるとおり、崩落によって遺物が欠損して、その多くが北斜面の遺構外出土遺物となっていると考えられよう。



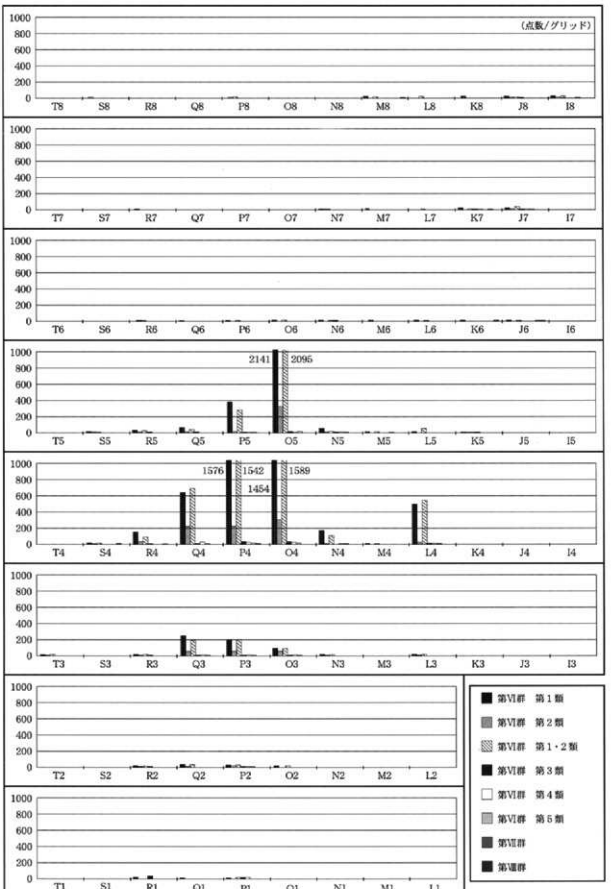
第177図　グリッド別第Ⅰ～Ⅴ群土器分布グラフ(1)



第178図　グリッド別第Ⅰ～Ⅴ群土器分布グラフ(2)



第179図　グリッド別第Ⅵ～Ⅷ群土器分布グラフ（１）



第180図　グリッド別第Ⅵ～Ⅷ群土器分布グラフ(2)

第３表　遺構・グリッド別遺物出土数一覧（1）

	第1群	第1Ⅱ類群	第2Ⅱ類群	第3Ⅱ類群	第4Ⅱ類群	第5Ⅱ類群	第6Ⅱ類群	第7Ⅱ類群	第8Ⅱ類群	第Ⅲ群	第1Ⅳ類群	第2Ⅳ類群	第3Ⅳ類群	第1Ⅴ類群	第2Ⅴ類群	第1Ⅵ類群	第2Ⅵ類群	第1・2・Ⅵ群類	第3Ⅵ類群	第4Ⅵ類群	第5Ⅵ類群	第Ⅶ群	第Ⅷ群	
1号住										5	1	2			1	507	23	538	4	1	1			1083
2号住	1	1				3	17	1		28	7	9		9	2	1954	340	1837	24	8	19			4260
3号住		2					2			16		1		3		1262	299	1322	30	15	6			2958
4号住			1				3			11	1	4		1		1401	189	1265	13	14	11	1		2915
5号住					1		1			25	2	1				392	192	416	5	21	5			1061
6号住		1	1	1		2	4			7	1			1	3	687	139	730	11	19	18			1625
7号住		1					1			1						9	2	9						23
8号住										1														1
9号住			1			1	1			7			1	2		438	22	432	7		4			916
10号住							2			5						153	11	131		3		4		309
11号住					1	2	1			2	1					158	8	71	1	3	1			245
1号竪穴							3			2						22		13			1			42
2号竪穴							1			3						10	1							15
3号竪穴												1				31		19	2					53
4号竪穴																6								6
1土										8					1	3	7	3	6					28
2土										2							9		2					13
4土										4							6		1	1		2		14
5土																	10	1	13	5	1			30
6土																	4		6			1		11
7土											2	1					1		1					5
8土										2					1		5		5				2	15
9土																	2							2
13土																	9		5					14
14土																	1							1
17土																		4						4
19土										2								1	2					5
20土																	5		8					13
21土																			1					1
22土												1					20	15	9		3	5		53
23土							1			2							2		4					9
24土																	41	3	36					80
25土																	2		1					3
26土																	6		23	1				30
27土																	5	50	12					67
28土																			3					3
29土																	9	5	13	1	1			29
31土																		2	2					4
36土										1							7	1	6					15
37土																	7		8					16
40土										1	1						22	3	15		2			44
41土										2	1						9	4	4			1		21
42土															1		140	79	122	1	2	1		346
44土							1			1							4	4	2		2			14
46土																	1	2						3
47土				1											1		2		4					8
48土										4						1	57	12	29		3	1		107
49土																			2					2
50土										2									6					8
52土												1					11		9					21
53土												1					1		10					12
54土																		1	2					3
57土																	2							2
62土																	1		1					2
63土					1																			1
65土																	2		1					3
66土																	30	5	13			1		39
67土																	1							1
69土																	70	24	77		1	4		176
70土										4							42	10	40	2	1			99
71土															1				2					4
72土																	57	19	57	1	2	3		139
73土				1						1							49	14	31			5		101
74土										1	1						53	2	51	1	1	4		114
77土																			7					7
78土																	1							1
82土																	2							2

第4表　遺構・グリッド別遺物出土数一覧（2）

	石鏃	ドリル	石匙	スクレイパー	異形石器	剥片			スタンプ	敲石	打斧	磨斧	石核	磨石	凹石	礫石器	多孔石	石皿	装身具	石棒	
						黒曜石	頁岩類	その他													
1号住	2					120	14	12						1		4					153
2号住	20	2		10		567	68	110			3	2	1	4	5	23	1			1	817
3号住	16	1				148	36	18	1	1	2	2	1	2	6	5					239
4号住	14			2	1	157	60	22			2				3	14					275
5号住	2					55	32	12		1				4	1	4					111
6号住	6			2		80	13	10	2	1	1	1			5	8			1		130
7号住						1	3				1			1							6
8号住							1														1
9号住	5			3		74	8	4			2				1	2					99
10号住	5					15	5	10						1	1			1			38
11号住	4					14	3	3													24
1号竪穴						3	4	4													11
2号竪穴						1		1								1					3
3号竪穴						3	1	1													5
1土						1		1								1					3
3土						3		2						1							6
4土						2		1													3
5土											1										1
8土						1										2					3
10土						1	1														2
13土						1	2														3
19土								2													2
20土							2														2
22土						11	2	2													15
23土						4	1								1						6
24土						3		1													4
26土															1						1
27土	1					1															2
28土						1															1
29土						7	1				1										9
36土	1					2	1	1								1					6
37土																1					1
38土						2															2
40土						1															1
42土	1			1		13	2	8			1				1	5					32
46土							2														2
47土							1														1
48土				1																	1
51土												1									1
52土	1					9															10
53土						3	1							1		1					6
54土	1					3															4
60土																1					1
66土						2					1										3
69土						5	1	1								1					8
70土				1		4	1								1						7
71土						1															1
72土				1		3															4
73土						1	1	1													3
74土						5	1	2													8
84土						1															1
85土								1													1
88土						1															1

第５表　遺構・グリッド別遺物出土数一覧（３）

	第Ⅰ群	第Ⅱ1類群	第Ⅱ2類群	第Ⅱ3類群	第Ⅱ4類群	第Ⅱ5類群	第Ⅱ6類群	第Ⅱ7類群	第Ⅱ8類群	第Ⅲ群	第Ⅳ1類群	第Ⅳ2類群	第Ⅳ3類群	第Ⅴ1類群	第Ⅴ2類群	第Ⅵ1類群	第Ⅵ2類群	第Ⅵ1・Ⅵ2群類	第Ⅵ3類群	第Ⅵ4類群	第Ⅵ5類群	第Ⅶ群	第Ⅷ群	
83土	1															1		1						3
84土																7		7						14
85土							1			4						43	11	21	1		2			83
86土										1						3	1	5						10
88土																6	2	3						11
89土																67	4	39		2	1			113
92土																		1			1			2
93土																2			2					4
96土																8	2	1	1	1				13
97土																4		7		1				12
98土																1	4							5
1埋甕																1		35						36
2埋甕																	1			1				2
1焼土										1					1	10	4	13						29
1遺																		9						9
北側谷						1				1					1	58	16	55	1		2			135
I－8グリッド																4		8						12
I－9グリッド																42	1	20		3		3		69
I－10グリッド																	5	2						7
J－6グリッド																				1	1			2
J－7グリッド																2								2
J－8グリッド																17	4	5	1					27
J－9グリッド																5	3	5						13
J－10グリッド																9	1	4						14
J－11グリッド																5	2	5						12
K－5グリッド									1							1	6	2						10
K－6グリッド			1							1						1						2		5
K－7グリッド																3								3
K－8グリッド																1								1
K－9グリッド																		1						1
K－10グリッド						1									1	23	22	31		1	5	1		85
K－11グリッド							1			8			1			43	6	33	1		4		1	98
K－12グリッド						2	4			2						163	7	202	3	5	1			389
K－13グリッド																1								1
L－3グリッド											1					10	1	16						28
L－4グリッド										1		1				7	1	17						27
L－5グリッド																9		6						15
L－6グリッド																		2						2
L－7グリッド																		1						1
L－8グリッド																		1						1
L－9グリッド																	2	10			1			13
L－10グリッド																6		10			1			17
L－11グリッド			1			5	3			4	3		1	1	1	341	12	317	3	1	3			696
L－12グリッド			2		1	1	5			3						115	25	181	1	2	2			338
L－13グリッド						1	1		1	2						227	91	215	16	5	1			560
L－14グリッド			1													54	28	50	2	5	2			142
L－15グリッド																	4							4
M－4グリッド			4		1		6			1				1		2		1						16
M－5グリッド			1		1		10			1						3		11				1		28
M－6グリッド																3								3
M－7グリッド																1								1
M－9グリッド																		1						1
M－10グリッド												1				5	2	13						21
M－11グリッド					1					1	4	2			3	323	19	203	4		1			561
M－12グリッド			3	1			1				1					132	32	163		5	10			348
M－13グリッド						2	6			2						850	266	818	10	32	22			2008
M－14グリッド							1				1					231	170	224	7	5	6	1		646
M－15グリッド																30	18	9	1					58
M－16グリッド																1								1
N－3グリッド																4	1	2						7
N－4グリッド			1											1		133	6	84		1	1			227
N－5グリッド			4							2	3	1		2		71	1	22	1	3	1			111
N－6グリッド							1							1		5		3	1					11
N－7グリッド																1	1	3						5
N－10グリッド			3			1	1								1	24	10	47	2		2			91
N－11グリッド							4					1	2	1	2	267	36	285	5	7				610

第6表　遺構・グリッド別遺物出土数一覧（4）

	石鏃	ドリル	石匙	スクレイパー	異形石器	剥片			スタンプ	敲石	打斧	磨斧	石核	磨石	凹石	礫石器	多孔石	石皿	装身具	石棒	
						黒曜石	頁岩類	その他													
89土						2		3								1					6
92土							1														1
97土						2								1		1					4
1焼土								2													2
1道						5															5
I-7グリッド							1														1
I-8グリッド						1															1
I-9グリッド	1					3	2	1													7
I-10グリッド							11				1					1					13
I-11グリッド						4	2														6
J-6グリッド								1								1					2
J-7グリッド						3	1														4
J-8グリッド							1														1
J-9グリッド						3															3
J-10グリッド						2	1	5													8
K-5グリッド						1															1
K-9グリッド						4															4
K-10グリッド						19	5	3								1					28
K-11グリッド						7		3								4					14
K-12グリッド	1					16	6	2						1		2					28
L-3グリッド						2															2
L-4グリッド	1					6															7
L-5グリッド						1										1					2
L-9グリッド						1															1
L-10グリッド						1															1
L-11グリッド	1					48	7	8			2					2					68
L-12グリッド	1					17	3	1							1	12		1			36
L-13グリッド	1					13	7	7						1		1					30
L-14グリッド						4										1			1		6
M-4グリッド						4															4
M-5グリッド				1		5	1														7
M-6グリッド			1					1													2
M-7グリッド						1															1
M-9グリッド						1	1											1			3
M-10グリッド						1															1
M-11グリッド	2			1		52	12	9			1	1			1	2					81
M-12グリッド	1		1			24	3	8			1					2					40
M-13グリッド	6			1		96	12	20			1			1	2	10					149
M-14グリッド	1					4		1								4					10
M-15グリッド								1													1
N-3グリッド																1					1
N-4グリッド				1		18	1									1					21
N-5グリッド	4			1		39	16	22								2					84
N-7グリッド						1															1
N-9グリッド																1					1
N-10グリッド	1					9						1									11
N-11グリッド	4					48	5	2							1	4					64
N-12グリッド			1	1		29	2	13							1	1				1	49
N-13グリッド	1					96	2	12			1				1	8					121
N-14グリッド	2					12	4									1					19
O-3グリッド	1					2	1	3							1	1					9
O-4グリッド						51	2	25				1				6					85
O-5グリッド	1					77	2	8			1			1							90

第７表　遺構・グリッド別遺物出土数一覧（５）

	第1群	第1Ⅱ類群	第2Ⅱ類群	第3Ⅱ類群	第4Ⅱ類群	第5Ⅱ類群	第6Ⅱ類群	第7Ⅱ類群	第8Ⅱ類群	第Ⅲ群	第1Ⅳ類群	第2Ⅳ類群	第3Ⅳ類群	第1Ⅴ類群	第2Ⅴ類群	第1Ⅵ類群	第2Ⅵ類群	第1・第2群別	第3Ⅵ類群	第4Ⅵ類群	第5Ⅵ類群	第Ⅶ群	第Ⅷ群	
N-12グリッド						1				3			1	1		266	151	351	2	16	1			803
N-13グリッド			1				1		1	7	1				1	659	334	807	11	19	21			1854
N-14グリッド										2	1	1				153	51	157	6	5	4			380
N-15グリッド																19	7	20						46
O-2グリッド																9		11						20
O-3グリッド										1		1				70	9	65	3	1	5			155
O-4グリッド							3			5	2	1				118	25	211	2	2	8			377
O-5グリッド			3		1	1				7		3		2		173	4	239	4	1	1			439
O-6グリッド										1						11		10						22
O-9グリッド			2				2			1						39		1	1					46
O-10グリッド						3	1			4		2		2		183	7	231		1	4			440
O-11グリッド											1		1	2	1	267	24	326		3	2			627
O-12グリッド			1		1					1	2			1		461	109	307	4	14	6			907
O-13グリッド										4				2		310	59	242	3	5	8			633
O-14グリッド																27	5	24						56
O-15グリッド																17	5	12		5	3			42
O-16グリッド																7		4						11
P-1グリッド										1						1		3	1					6
P-2グリッド										1						36	22	31	2	3	2			97
P-3グリッド										2	2			2	1	200	52	189	6	12	5			471
P-4グリッド	5		1					1		3		1				171	28	275	8	5				498
P-5グリッド										5				1		381	10	291	1	1	1			691
P-6グリッド																5		3						8
P-8グリッド																	1	3						4
P-9グリッド			6			3	8			12						43	1	35						103
P-10グリッド		3					1			6	2	3	1			629	70	406	5		5		1	1132
P-11グリッド										2			1	2		168	42	99	2	7	2			322
P-12グリッド		1								6		1	1	1		236	84	283	9	16	10	1		649
P-13グリッド							1			4		1				104	19	64		2				195
P-14グリッド										1						2		3						6
Q-1グリッド										1								1						2
Q-2グリッド																38	2	43						83
Q-3グリッド	1						1			5					1	213	58	156	8	7	6			456
Q-4グリッド	1			1						8	4	1				255	45	304		8	1			638
Q-5グリッド	1								1	2						65	3	52	1					125
Q-9グリッド			1				2			3		1				52	3	37		2	1			102
Q-10グリッド			1							3	1	1	1	1		304	57	367	4	8	2		1	751
Q-11グリッド											1					83	16	36	4		10			150
Q-12グリッド										1					1	74	18	107	3	2	1			207
Q-13グリッド										1						44	16	22	1	2	3			89
Q-14グリッド										1						17	2	13						33
R-1グリッド												1				1		8						10
R-2グリッド										1						22	8	17	1					49
R-3グリッド										4						22	17	23	1					67
R-4グリッド										3	1					122	27	68	1			1		223
R-5グリッド									1	8						26	13	23	1					72
R-7グリッド																1								1
R-8グリッド			2				4			1						24	4	17						52
R-10グリッド							1			4					1	146	26	110	1	3	4			296
R-11グリッド										2						28	6	23		1				60
R-12グリッド		1								1						36	10	19			1			68
R-13グリッド			1													18	1	5						25
S-4グリッド																5	1	3						9
S-5グリッド										2						10		3						15
S-8グリッド																		1						1
S-9グリッド										1						1		1						3
S-10グリッド										1						15	5	16						37
S-12グリッド																4		3						7
T-3グリッド							1			5						12	4	19						41
トレンチ		1					1									28	14	36	1					81
Aトレンチ							1									3	2	14				2		24
Bトレンチ		1		1							1					33	25	33	1		1			96
Cトレンチ																1								1
Eトレンチ																34	16	21						71
表土				2		1	4			14	2	3			4	267	38	140	3		1			479
合計	10	12	45	7	8	31	115	3	4	336	52	49	11	51	24	7894	3876	7115	274	335	283	17	5	40557

第8表　遺構・グリッド別遺物出土数一覧（6）

	石鏃	ドリル	石匙	スクレイパー	黒曜石器	剥片 黒曜石	剥片 頁岩類	剥片 その他	スタンプ	敲石	打斧	磨斧	石核	磨石	凹石	礫石器	多孔石	石皿	装身具	石棒	
O-6グリッド	1	1		1		41	1														45
O-7グリッド							1														1
O-9グリッド							1														1
O-10グリッド						76	10	4			2	1				3					96
O-11グリッド	2			3		43	5	7						1							61
O-12グリッド	1		1			15	6	3			2	2				5					35
O-13グリッド						23	4	8						1	2	3					41
O-14グリッド						3	2														5
P-1グリッド						29															29
P-2グリッド							1									1					2
P-3グリッド	4					13	7	5								3					32
P-4グリッド	3			1		30	1	3							2	2					42
P-5グリッド	1					18	5	5						1		2					32
P-6グリッド						2															2
P-7グリッド						4															4
P-8グリッド	2							1													3
P-9グリッド						86	9	3			1					4					103
P-10グリッド	4					34	6	14								9					67
P-11グリッド	4					22	6	4				1			2	3					42
P-12グリッド	1					16	7	6		1						5		1			37
P-13グリッド						2	1									5					8
P-14グリッド						1															1
Q-1グリッド						6	2	2													10
Q-2グリッド						1	2														3
Q-3グリッド	2					39	3									4					48
Q-4グリッド	1			2		8	11	5			1					3					31
Q-5グリッド			1			4	2	1													8
Q-8グリッド						1															1
Q-9グリッド	1					50	1	1								2					55
Q-10グリッド	5					13	9	7						1	1	11					47
Q-11グリッド						5	1				1					1					8
Q-12グリッド						7	1				1	2				1					12
Q-13グリッド							1									3					4
Q-14グリッド	1					2	1														4
R-2グリッド						7									1						8
R-3グリッド						3		2								2					7
R-4グリッド		1				14	4	4			2					1					26
R-5グリッド	2					4		6													12
R-9グリッド						9		1													10
R-10グリッド			1			17	2	6				1				6					33
R-11グリッド	1					5		1								1					8
R-12グリッド						4	1	4								1					10
S-5グリッド							2				1					1					4
S-8グリッド						3															3
S-9グリッド							1														1
S-10グリッド							2														2
T-3グリッド				1		2		3								1					7
T-5グリッド						1															1
トレンチ	1					1															2
Bトレンチ											1										1
Eトレンチ							1											1			2
表土	5	1		1		45		1										1			54
合計	151	6	6	36	1	2774	500	498	3	4	35	16	2	24	42	229	1	6	2	2	4338

第５章　自然科学分析

第１節　立馬Ⅱ遺跡における火山灰分析

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

群馬県域とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代が不明な土層や遺構が検出された立馬遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を行って指標テフラの検出同定を行い、土層や遺構の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった遺構は、立馬Ⅱ遺跡の試掘トレンチ２（16区O-8）および試掘トレンチ１の２地点である。

２．土層の層序

（１）立馬Ⅱ遺跡試掘トレンチ２（16区O-8）

立馬Ⅱ遺跡の試掘トレンチ２（16区O-8）では、下位より桃色軽石混じり黄色軽石層（層厚20cm以上，軽石の最大径53mm）、亜角礫混じり褐色土（層厚12cm，礫の最大径118mm）、灰白色軽石を多く含む褐色土（層厚18mm）、褐色土（層厚12cm）、黄白色軽石に富む褐色土（層厚８cm，軽石の最大径13mm）、黄褐色土（層厚９cm）、成層したテフラ層（層厚90cm）、黄褐色土（層厚５cm）、成層したテフラ層（層厚3.6cm）、褐色土（層厚1.3cm）、固結した黄褐色粗粒火山灰層（層厚0.9cm）、褐色土（層厚１cm）、かすかに成層した黄灰色砂質細粒火山灰層（層厚５cm）、黄褐色土（層厚８cm）が認められる（第181図）。

２層の成層したテフラ層のうち、下位のテフラ層は、下位より灰色粗粒火山灰層（層厚２cm）、細かく成層した黄灰色細粒火山灰層（層厚４cm）、若干桃色がかった灰色粗粒火山灰層（層厚1.8cm）、黄白色軽石層（層厚81cm，軽石の最大径35mm，石質岩片の最大径13mm）、桃灰色粗粒火山灰層（層厚0.8cm）、桃褐色砂質細粒火山灰層（層厚0.4cm）からなる。このうち、厚い黄白色軽石層については、層相から約1.3～1.4万年前*1の浅間板鼻黄色軽石（As-YP，新井，1962，町田・新井，1992）にほぼ連続して噴出したと考えられている浅間草津黄色軽石（As-YPk，新井，1962）に同定される。また上位のテフラ層は、下位より褐色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚２cm）、赤褐色細粒火山灰層（層厚１cm）からなる。これらAs-YPkより上位のテフラも、この噴火に関係したテフラの可能性が高い。

（２）立馬Ⅱ遺跡試掘トレンチ１

試掘トレンチ１では、下位より粗粒の赤色軽石（最大径83mm）や亜角礫（最大径123mm）混じり桃褐色砂層（層厚30cm以上）、黄色軽石層（層厚13cm，軽石の最大径31mm，石質岩片の最大径８mm）、桃色軽石混じり黄色軽石層（層厚21cm，軽石の最大径48mm，石質岩片の最大径22mm）、褐色土（層厚５cm以上）が認められる（第181図）。

３．屈折率測定

（１）測定試料と測定方法

テフラ粒子の起源を明らかにするために、立馬Ⅱ遺跡の試掘トレンチ２（16区O-8）の試料２、４、試掘トレンチ２の試料０、１の合計４点について、温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）により屈折率測定を行った。

（２）測定結果

屈折率測定の結果を表に示す。立馬Ⅱ遺跡の試掘トレンチ２（16区O-8）の試料４には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石（γ）の屈折率は、1.701-1.710である。また試料２に含まれる火山ガラス（n）の屈折率は、1.502-1.505である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石（γ）の屈折率は、1.704-1.709である。

立馬Ⅱ遺跡の試掘トレンチ１の試料１に含まれる火山ガラス（n）の屈折率は、1.516-1.520である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石（γ）の屈折率は、1.702-1.710である。試料０には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石（γ）の屈折率は、1.701-1.710である。

４．考察－指標テフラとの同定

立馬Ⅱ遺跡試掘トレンチ２の試料４のテフラ層は、層相、重鉱物の組合せ、さらに斜方輝石の屈折率などから、約1.9～2.4万年前*1に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group，新井，1962，早田，未公表資料）の中・上部に同定される。試料２に多く含まれるテフラは、重鉱物の組合せ、火山ガラスや斜方輝石の屈折率などから、約1.6～1.8万年前*1に浅間火山から噴出した浅間大窪沢軽石群（As-Ok Group）に由来する。テフラの分布を考慮すると、下位にある浅間大窪沢第１軽石（As-Ok1，中沢ほか，1984，早田，1996）に由来する可能性がより高い。これらのテフラとの層位関係や、軽石の岩相などから、これらのテフラの間に層位がある灰白色軽石については、As-Hgに由来すると考えられる。

立馬Ⅱ遺跡試掘トレンチ１の桃褐色砂層中に含まれる赤色軽石（試料１）や試料０のテフラ層については、重鉱物の組合せや斜方輝石の屈折率など、As-BP Groupの中・上部と共通した特徴をもつ。したがって、試料０のテフラ層はAs-BP Groupの中・上部に、またその下位の桃褐色砂層については層位や層相を加味して考慮すると、約２万年前の浅間火山の山体崩壊に由来する浅間応桑岩屑なだれ堆積物の可能性が高いと考えられる。

５．まとめ

立馬Ⅱ遺跡では、浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group，約1.9～2.4万年前*1）の中・上部、浅間荻生軽石（As-Hg，約1.8万年前）、浅間大窪沢第１軽石（As-Ok1，約1.7～1.8万年前*1）、浅間草津黄色軽石（As-YPk，約1.3～1.4万年前*1）などを検出することができた。

*1　放射性炭素（^{14}C）年代.

文献

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79.

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.

新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.157，p.41-52.

新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法－研究対象別分析法」，p.138-148.

荒牧重雄（1968）浅間火山の地質．地団研専報，no.45，65p.

早津賢二（1985）妙高火山群－その地質と活動史．第一法規，344p.

早津賢二・新井房夫（1980）妙高火山群テフラ地域の第四紀テフラ層－示標テフラ層の記載および火山活動との関係．地質雑，86，p.243-263.

苅谷愛彦・佐々木明彦・新井房夫（1988）三国山地平標山に分布する第四紀末期のテフラ層．地学雑，107，p.92-103.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテフラのカタログ．古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」，p.865-928.

中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦（1984）浅間火山，黒斑～前掛期のテフラ層序．日本第四紀学会講演要旨集，no.14，p.69-70.

早田　勉（1991）浅間火山の生い立ち．佐久考古通信，no.53，p.2-7.

早田　勉（1995）テフラからさぐる浅間山の活動史．御代田町誌自然編，p.22-43.

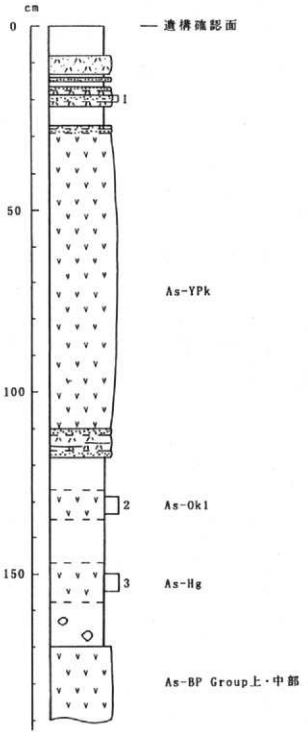
早田　勉（1996）関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴－とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて－．名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，7，p.256-267.

若狭　徹（2000）群馬の弥生土器が続わるとき．かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く－古墳が成立する頃の土器の交流」，p.41-43.

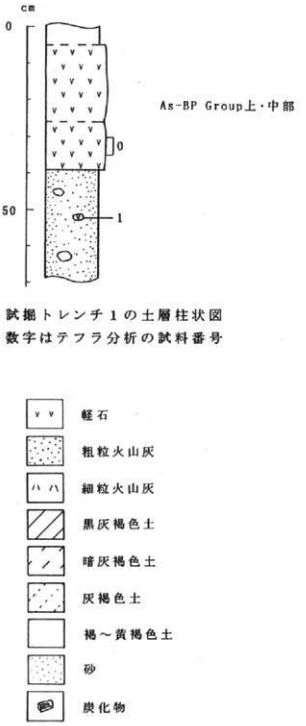
屈折率測定結果

遺跡	地点	試料	火山ガラス（n）	組成	斜方輝石（γ）	角閃石（n2）
立馬Ⅱ	試掘トレンチ2	2	1.502-1.505	opx>cpx	1.704-1.709	-
立馬Ⅱ	試掘トレンチ2	4	-	opx>cpx	1.701-1.710	-
立馬Ⅱ	試掘トレンチ1	0	-	opx>cpx	1.701-1.710	-
立馬Ⅱ	試掘トレンチ1	1	1.516-1.520	opx>cpx	1.702-1.710	-

屈折率の測定は，温度一定型測定法（新井，1972，1993）による．opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石．0は，量が少ないことを示す．



試掘トレンチ２の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



試掘トレンチ１の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

第181図　試掘トレンチ土層柱状図

第6章　考察

第1節　縄文時代中期初頭～前葉の土器群

山口　逸弘

立馬Ⅱ遺跡では、中期初頭～前葉にかけての集落跡が検出されている。この段階の資料は、県内平野部や利根川上流域でも極めて出土量が限られている。吾妻川流域である本遺跡でまとまった出土量が提示されることは、該期土器群の様相が周辺地域の様相と併せて、明確になるもの と期待されよう。

本遺跡がある吾妻川流域は、群馬県でも北西部にあたり、上流域では長野県と新潟県に県境を接する。この地理的要因から、両県の特徴的な縄文文化が波及しやすい地域と目されていたが、吾妻川流域の縄文時代資料が量的に整わず、両県との比較が果たせずにいた。中期初頭・前葉段階の遺跡に関しては、長野県では、梨久保遺跡（三上他1986）をはじめ、屋代遺跡群（寺内2000）や松原遺跡（上田1998）などが充実し、かつ特徴的な土器群を抽出し、問題点を提起している。新潟県域の資料も近年増加しつつある。最近は、津南町における調査で多くが提示されており、道下遺跡（佐藤他2000）や道尻手遺跡（佐藤他2005）などで、報告書が刊行されている。

群馬県内でも該期資料も僅かずつではあるが、増加している。主に開発の集中した西毛地域の資料に偏るが、吉井町神保植松遺跡（谷藤1997）、富岡市南蛇井増光寺遺跡（小野1997）、松井田町行田大道北遺跡（長井1997）などが知られる。このような県内の中期初頭・前葉の土器群を出土する遺跡の中にあって、立馬Ⅱ遺跡の該期土器群の出土量は群を抜いて多く、かつ良好な資料が充実している。おそらく、今後の群馬県における該期研究では中心的な役割を占める資料群と評価されよう。

土器の出土状態

立馬Ⅱ遺跡で検出された該期住居跡は11軒である。その他に土坑約100基を見ることができるが、包含層出土遺物にも多量の土器群を見ることができる。今回は、全ての土器を観察することができず、一部の土器に限って概要を述べるに止めたい。

本遺跡における該期住居跡は南・北側への斜面地形に営まれており、上層を厚い包含層が覆う。包含層からの該期遺物の出土は多く、おそらく、斜面に形成された廃棄・流入行為を伴う層位と思われる。住居跡内にも、多量の遺物が廃棄・流入しており、そのため、住居跡出土遺物といえども、複数時期に渡る土器群が混在する様相となっている。

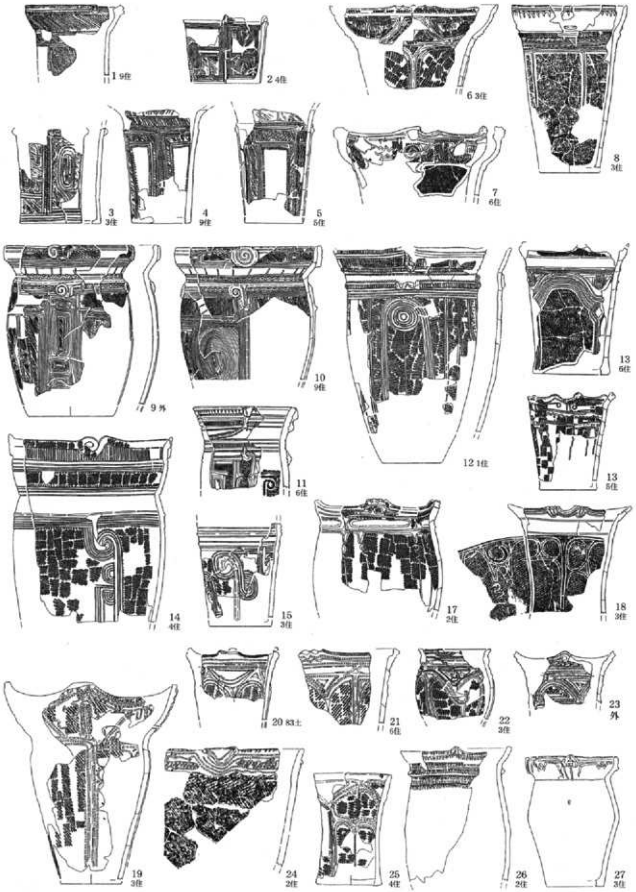
発掘調査では原位置で遺物の取り上げを試みてはいるが、住居跡の重複などの層位的な検証を経ても、厳密な一括性が抽出し得なかった。つまり、各住居跡とも五領ヶ台Ⅱ式、直後段階の土器、阿玉台Ⅰａ式・Ⅰｂ式が出土しており、それらが、各住居跡で主体となる様相で把握されない。特に埋設土器を伴う住居跡相互の重複関係も出土土器の新旧と合致してはおらず、また、重複部分の出土の偏りも見受けられることから、住居跡内の一括資料の抽出や層位的検証は困難と判断した。

出土土器の様相（第182・183図）

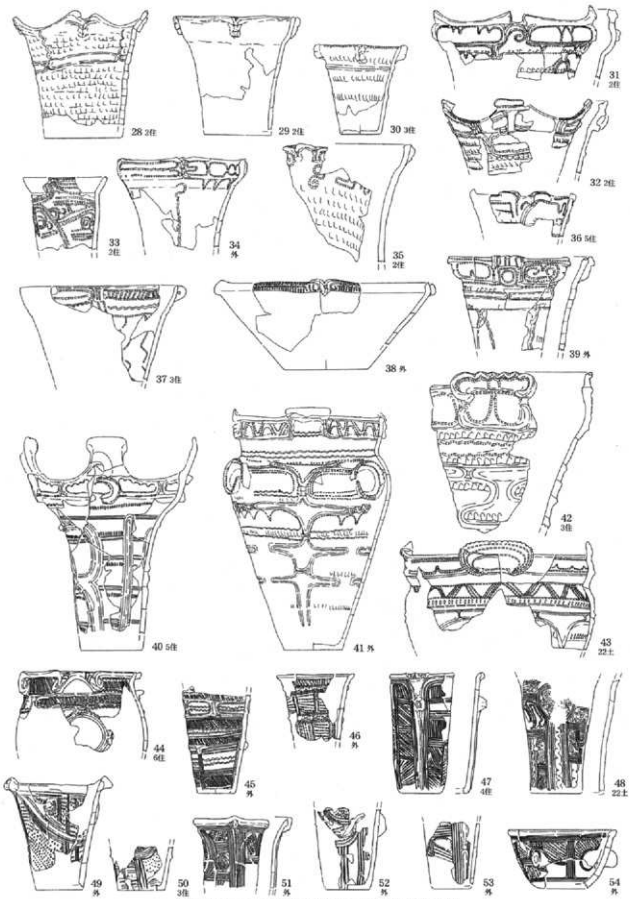
ここでは、本遺跡出土土器のうち、住居跡単位ではなく、中期初頭～前葉と考えられる土器の幾つかを選び、大略を述べるに止め、本遺跡該期資料の再吟味の際に一助となるようにしたい。ただし、類例に乏しい資料であるため、型式学的な判断も確定的には加えられなかった。土器の型式帰属や図の序列に編年論的な意図は設けていない。

尚、本報告書中第３章５節で出土土器に対する詳細な分類が、編集者によって試みられている。本稿は一部の土器に関しての記述であり、全体を通しているの編集者の分類を優先して頂きたい。

五領ヶ台Ⅱ式土器；集合沈線文を施す例（１～５・９・10）と縄文施文の一群（６～８・12～18）に大別できるが、個々の土器の多様性は深く、単純な分類では解釈できない土器群である。集合沈線文を施す一群の中には、１のように従来五領ヶ台Ⅱ式の範疇で捉え得る例もあるが、隆帯上に縄文が加わる



第182図　立馬Ⅱ遺跡中期初頭～前葉の土器群（1）



第183図　立馬Ⅱ遺跡中期初頭～前葉の土器群（2）

例（２）や４・５に見るように体部区画に截痕列を施す区画を設ける一群も含めた。２・３は底部に横位沈線を施し、体部文様帯を区画文化する構成方法を示している。また、縄文施文をする一群も様々である。６は口縁部文様帯に沈線による弧線文が連続する例で、Ⅱ式後半段階に安定する例である。７・８も後半段階と判断した。８の頸部の交互刺突文は９・10にも見られ、この段階の特徴の一つといえよう。16～18もⅡ式の後半であろうか、口縁部は狭くなり、体部文様帯の意匠文も複雑な例（18）もある。

さて、当段階に含めた一群で、頸部あるいは体部上半に渦巻状意匠や同心円文を充てる土器群を集めた（９～15）。９・10は集合沈線文を施す一群で、頸部に渦巻状小突起を付す。この２個体は文様構成も類似し、極めて近縁性の深い例と見なせよう。12・13は縄文施文を施す例であるが、体部上半に沈線による大柄の同心円文を配す。11・14・15は反転する懸垂状意匠を付す。14・15は隆帯が剥落しているが、体部上半の横位沈線群を跨った貼付が観察できる。11はさらに口縁部突起より派生した隆線が頸部にまで伸びており口縁部下の半肉彫連続三叉文や多截竹管内皮施文の沈線描出方法から、北陸的な色彩が強い。一方14・15も内皮使用の描出方法であるが、体部文様帯は意匠化しており、所謂「深沢タイプ」「深沢系」と呼ばれる土器群に近似する（寺内2000）。

五領ヶ台式直後段階；紙数の関係から多くは掲載できないが、例えば２号住６等もこの段階と思われる。小型式名が地域ごとに設定されており、例えば神谷原式や大石式、八辺式等が提起されている。

本稿では角押文を施す一群を抽出して、この段階に掲載したが、五領ヶ台Ⅱ式終末段階の土器との分別要素も確定しておらず検討の余地は多い。角押文を施し、幅狭の口縁部文様帯下に大柄の三角区画文を配すを20～23に挙げた。19は口縁部下の区画が判然としないが、三角形に近い区画と思われる。大木７ｂ式に近い例と考えた。25も口唇部下に大柄の三角区画文が連続する。また、体部文様の少ない例として、24・26を挙げたが角押文の横位施文が特徴的な個体である。この段階に納めた27であるが、県内では阿玉台Ⅰａ式や五領ヶ台直後段階の土器と伴出する傾向があるが、文様要素が少なく、そのため量的な充実が果たせていない。

阿玉台Ⅰａ式・Ⅰｂ式；出土量が多く、大型個体も含めて掲載を見送った資料が多い。28～30は無文小型深鉢である。Ⅰａ式に多く見られるが、Ⅰｂ式の組成にも加わるため、時期的な判断が難しい。31～37まで結節沈線あるいは角押文の単列施文で体部懸垂文構成が未発達な例を集めⅠａ式と考えた。非対称性の口縁部突起や体部のヒダ状調整なども参考にした。33はあるいは五領ヶ台直後段階の一群への帰属が望ましいかもしれない。38の浅鉢もⅠａ式からⅠｂ式へ継続する例である。39～43はⅠｂ式と考えた。口縁部文様帯区画が確立し、体部懸垂文構成も明瞭である。結節沈線は単列施文が基本で、複列としても単独施文によるものである。既にこの段階で口縁部突起の多様さが際立っている。

勝坂１式古段階；阿玉台Ⅰｂ式に伴うと見られる勝坂１式を集めた。五領ヶ台式直後段階から継続する一群もあるようだが、県内ではなかなか良好な資料を充てられない。これも課題の一つである。44と45は「斜行沈線文系土器」の変容形であろうか。45の横位多段の文様帯が特徴的である。46も横位隆帯で分帯された例であるが充填文として三角刺突文が施される。47～53は体部一帯ともいえる小区画文構成や懸垂状区画文（49・50・52）を集めた。54は勝坂式としては珍しい鉢である。

以上のように、立馬Ⅱ遺跡の中期初頭～前葉の出土土器を概観した。斜面包含層に覆われるため、一括資料としては扱えない資料群ではあるが、個々の土器は県内で断片的でしか知られていなかった時期の資料であり、今後の該期土器研究の一助となろう。

第７章　付編

第１節　聞き取り記録「立馬における狩猟経験」

日時　平成16年９月14日（火）

話者　小出庫雄(長野原町）聞き手・編集記録　飯森康広

獲物　クマ・イノシシ

狩猟期　12月過ぎ（脂がのっていないと、皮をなめしても毛が抜けてしまう）

獲物の居場所　クマは絶壁の縁。蚊の少ないところ。逃げやすいところ。

イノシシは王城山では雪でしなったツツジの根元などに寝ころんでいる。

獲物の行動　明るいところが嫌いで、木立ちの中を行き来している。斜面は斜めに降りることが通例で、追い込まれない限り尾根を真っ直ぐに駆け下りたりはしない。

エサ　クリ、ナガイモ、ヘビ、サワガニ、ウサギの子など

狩猟の段取り

「見切り」・・・下見のこと。下見によって獲物の動きをつかむ。足跡を見て、どこから獲物が来て、どこへ向かったかをつかみ、出かけた先から戻っていないことを確認する。獲物は巣に向かって追い込む。もし逆に追うと予測もつかないところへ逃げられてしまう。「たつま」・・・獲物を撃つ場所。撃つ人を指す。年寄りは「たつめ」ともいう。立馬では斜面の南北に40m間隔で撃ち手を立たせた（５人くらい）。銃は横には撃てないので、前しか撃てない。木を背にして待つ。木の陰にいると、左右で死角ができてしまう。「たつま」では気づかれないように待つため、タバコも吸えない。５時間も待つことがある。

「せこ」・・・追い込む人。むつかしい役目。足跡を確認しながら獲物を追い込む。獲物が来ていることを確認して、追い込みを始めることを「ふんぎり」といい、「たつま」に無線連絡して開始する。追い込むルートをはずれているものは、最初にルートへ追い込んでいく。追い込みは声を使い、銃は使わない。獲物をあわてさせると、「たつま」に獲物が突進してしまい失敗する。獲物は「せこ」の50mくらい先を歩かせる。獲物は後ろを振り返りながら追われていき、前方に対する注意がそがれる。途中別ルートを探りそうな場所には「せこ」が先回りしておく。または、ひょっとして逃げていきそうな場所に１人撃ち手を置くこともある。そこを「すてだつめ」という。

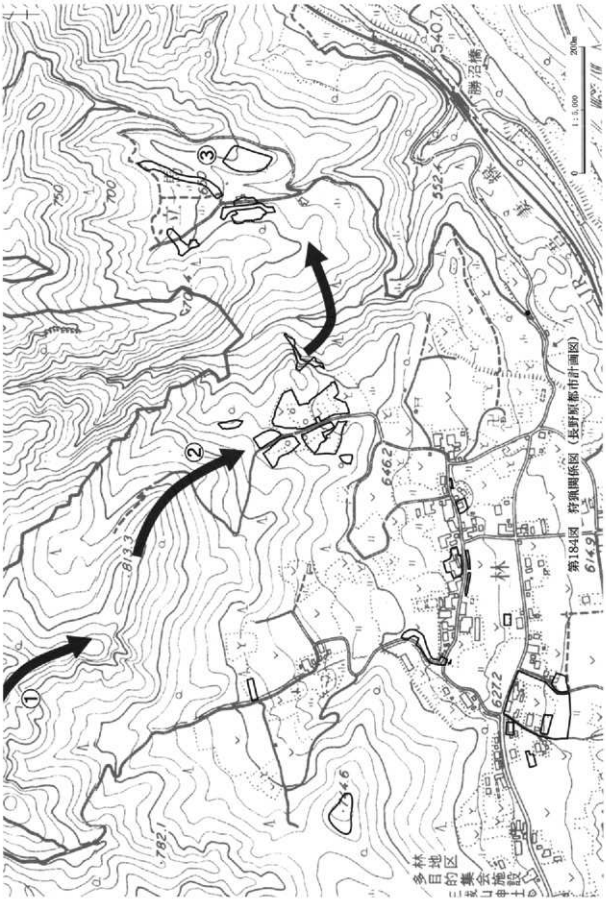
立馬の実際

獲物は川原畑方面から来る。「見切り」をして獲物を確認したら、「から笠松」の南辺り（①）から追い込みを始める。獲物はやや緩やかな斜面を東に追われる（②）。南側は日当たりの良い林集落なので南には逃げない。北側も斜面がきついので通例は逃げ込まない。立馬の東側は崖なので自然、「たつま」（③）に追い込まれる。

参考

ワナによる狩猟

エサ場への降り口辺りに仕掛ける。２・３日は石や丸太などの障害物を通路に置いて超えさせておき、慣れたところで障害物を超えた位置にワナを仕掛ける。用心深いのでなかなか引っかからない。ワイヤーの臭いなどで気づかれてしまう。立馬の陥し穴もただ掘ってあるだけは捕れないのではないか。柵などを使ったのかもしれない。



第184図　狩猟関係図（長野県都市計画図）

第９表　出土土器・金属器観察表

番号	種類 器種	出土位置（cm） 遺存状態	法量（cm）	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
１号住居跡					
1	縄文土器 深鉢	＋16 ほぼ完形	口32.4 残存高38.9	①金雲母含む②良好③にぶい赤褐	胴部は地文に斜位縄文ＲＬ施文後、半截竹管による平行沈線。第Ⅵ群第３類ｄ種
2	縄文土器 深鉢	＋19 口縁～胴部片	口(13.4) 残存高10.9	①細砂微②良好③にぶい黄褐	口縁部は焼成工具で刻み目。胴部は地文に縦位縄文ＲＬ施文後、角押文で文様。第Ⅵ群第１類ｄ２種
3	縄文土器 深鉢	＋25 胴～底部片	底10.0 残存高4.5	①小礫微②良好③暗赤褐	無文。縦方向に磨く。第Ⅵ群第１類ｅ１種
4	縄文土器 深鉢	Ｎ－12 口縁部片	残存高1.9	①金雲母含む②良好③暗赤褐	単沈線を縦位、斜位に施す。第Ⅵ群第１類a種
5	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高3.4	①細砂微②良好③明赤褐	半截竹管による平行沈線施文後、刺突を施す。第Ⅵ群第１類ｂ１種
6	縄文土器 深鉢	Ｌ－13 口縁部片	残存高3.8	①小礫含む②良好③暗赤褐	半截竹管による平行沈線施文後、刺突を施す。第Ⅵ群第１類ｂ１種
7	縄文土器 深鉢	＋15 口縁部片	残存高3.5	①細砂多②良好③暗赤褐	幅５mmの半截竹管による平行沈線施文後、幅2mm弱の竹管で沈線・刺突を施す。第Ⅵ群第１類ｂ１種
8	縄文土器 深鉢	＋20 口縁部片	残存高8.0	①片岩含む②良好③暗赤褐	半截竹管による平行沈線施文。口唇部刻みは垂直と斜めが混在。第Ⅵ群第１類ｂ１種
9	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高6.8	①白色岩片含む②良好③暗赤褐	半截竹管による平行沈線施文後、刺突を施す。第Ⅵ群第１類ｂ１種
10	縄文土器 深鉢	＋16 肩～胴部片	残存高6.5	①細砂多②やや良③暗褐	単沈線施文後、刺突を施す。第Ⅵ群第１類ｂ１種
11	縄文土器 深鉢	＋31 胴～底部片	残存高2.3	①小礫多②良好③明赤褐	半截竹管による平行沈線施文後、刺突を施す。第Ⅵ群第１類ｂ１種
12	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高3.4	①白色岩片含む②やや良③黒褐	単沈線施文後、刺突を施す。口縁部刻みは棒状工具押圧。第Ⅵ群第１類ｂ１種
13	縄文土器 深鉢	床直 口縁部片	残存高3.5	①小礫多②良好③暗赤褐	地文横位縄文ＬＲ施文後、単沈線施す。磨きにより縄文薄い。第Ⅵ群第１類ｂ１種
14	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高3.2	①金雲母含む②良好③褐	単沈線施文後、刺突を施す。地文横位縄文ＬＲ施文。内面は棒状工具で三角形の抉り込み表出。第Ⅵ群第１類ｂ２種
15	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高3.1	①細砂含む②やや良③にぶい黄褐	地文縦位縄文ＬＲ施文後、単沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ２種
16	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高2.4	①細砂含む②良好③黒褐	口縁部横位縄文ＬＲ施文。半截竹管による平行沈線施す。内面は棒状工具で三角形の抉り込み表出。第Ⅵ群第１類ｂ２種
17	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高3.6	①小礫含む②良好③黒褐	単沈線施文後、刺突を施す。胴部縦位細縄文ＬＲ施文。第Ⅵ群第１類ｂ３種
18	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高5.0	①細砂含む②良好③黒褐	地文口縁部横位、胴部縦位縄文ＬＲ施文後、単沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ２種
19	縄文土器 深鉢	肩～胴部片	残存高5.5	①細砂含む②良好③赤褐	地文縦位縄文ＬＲ施文後、単沈線施す。隆帯上に横位縄文ＬＲ施文。第Ⅵ群第１類ｂ２種
20	縄文土器 深鉢	肩部片	残存高4.8	①細砂多②やや軟③暗褐	口縁部半截竹管による平行沈線で斜格子文施文。地文横位・縦位縄文ＬＲが混じり施文後、刺突。第Ⅵ群第１類ｂ２種
21	縄文土器 深鉢	Ｂトレンチ 肩部片	残存高3.6	①白色岩片微②堅い③褐	地文に半截竹管による平行細線後、平行沈線、刺突を施す。横状把手には内皮使用による刻み。第Ⅵ群第１類ｂ４種
22	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高3.2	①細砂含む②良好③暗赤褐	地文縦位細縄文ＬＲ施文後、平行沈線、刺突を施す。第Ⅵ群第１類ｂ３種
23	縄文土器 深鉢	肩部片	残存高2.5	①細砂多②堅い③暗赤褐	地文縦位縄文ＬＲ施文後、半截竹管による平行沈線、刺突を施す。第Ⅵ群第１類ｂ２種
24	縄文土器 深鉢	肩～胴部片	残存高5.2	①細砂含む②良好③赤褐	地文縦位縄文ＲＬ施文後、半截竹管による平行半隆起線施す。内皮使用による刻みを施す。第Ⅵ群第１類ｂ２種

25	縄文土器 深鉢	+12 口縁～胴部片	残存高13.7	①金雲母多②良好 ③赤褐	胴部地文斜位縄文ＬＲ施文後、幅９㎜の半截竹管による平行沈線横位に、幅５㎜弱で弧線文施す。口縁部は篦状工具で円形の抉り込みと線刻を施す。第Ⅵ群第１類ｂ２種
26	縄文土器 深鉢	Ｂトレンチ 口縁～胴部片	残存高17.4	①細砂微②良好③赤褐	地文口縁部横位、胴部縦位細縄文Ｌ施文後、半截竹管による平行沈線、刺突を施す。第Ⅵ群第１類ｂ３種
27	縄文土器 深鉢	+7 口縁部片	残存高4.7	①金雲母含む②良好③暗赤褐	地文横位縄文ＬＲ施文後、半截竹管による平行沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ２種
28	縄文土器 深鉢	+9 口縁～胴部片	残存高12.9	①小礫微②良好③赤褐	隆帯貼付によりＹ字状懸垂文、三角形区画を表出後、地文口縁部横位、胴部縦位縄文ＲＬ施文し、半截竹管による平行沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ２種
29	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高3.6	①細砂含む②良好③赤褐	地文斜位細縄文ＲＬ施文後、幅７㎜の半截竹管による平行沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ３種
30	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高7.6	①軟質白色粒子多、小礫含む②良好③にぶい褐	幅５㎜の半截竹管による平行沈線で区画文施文後、幅２㎜弱の半截竹管による平行沈線で細線を充填。第Ⅵ群第１類ｂ４種
31	縄文土器 深鉢	+6 胴部片	残存高14.2	①軟質白色粒子多、小礫含む②良好③にぶい褐	幅５㎜の半截竹管による平行沈線で区画文、玉抱三叉文を施文後、幅２㎜弱の半截竹管による平行沈線で細線を充填。第Ⅵ群第１類ｂ４種
32	縄文土器 深鉢	+27 口縁部片	残存高4.4	①小礫含む②良好③赤褐	地文口縁部横位、胴部縦位細縄文ＬＲ施文後、単沈線施す。口縁部玉抱三叉文表出。第Ⅵ群第１類ｃ２種
33	縄文土器 深鉢	+6 肩部片	残存高5.8	①細砂多②やや良③褐	地文縦位縄文ＬＲ施文後、角押文施す。第Ⅵ群第１類ｄ２種
34	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高5.5	①細砂微②良好③にぶい赤褐	口縁部横位、胴部縦位縄文ＲＬ施文。口縁部輪積み痕顕著。第Ⅵ群第１類ｃ２種
35	縄文土器 深鉢	+25 口縁部片	残存高3.4	①小礫含む②良好③暗赤褐	口縁部横位、胴部縦位縄文ＲＬ施文。第Ⅵ群第１類ｃ２種
36	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高3.4	①細砂多②やや軟③黒褐	口縁部横位、胴部縦位縄文ＬＲ施文。第Ⅵ群第１類ｃ２種
37	縄文土器 深鉢	+42 口縁部片	残存高5.6	①小礫含む②やや良③橙	口唇部半截竹管による平行沈線で刺む。内面角押か。第Ⅵ群第１類ｆ２種
38	縄文土器 深鉢	+34 口縁部片	残存高5.2	①細砂多②良好③暗赤褐	半截竹管による平行沈線を横位に施す。内面口縁部は半截竹管による平行沈線を縦位に施文後、角押文施す。第Ⅵ群第１類ｆ２種
39	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高2.7	①金雲母含む②やや良③褐	半截竹管による平行半隆起線施す。第Ⅵ群第１類ｂ１種
40	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高3.8	①小礫微②堅い③赤褐	細線を斜格子状に施文後、内皮使用による刺み文で区画する。第Ⅵ群第３類ａ種
41	縄文土器 深鉢	底直 口縁～胴部片	残存高27.6	①金雲母多②堅い③暗赤褐	１列の角押文施す。隆帯は断面三角形。第Ⅵ群第２類ｂ種
42	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高7.7	①軟質白色粒子多、小礫含む②やや軟③黄橙	半截竹管による平行沈線施す。隆帯は断面半円形。第Ⅵ群第３類ｄ種
43	縄文土器 深鉢	+15、Ｌ－4 口縁部片	残存高11.7	①金雲母多②堅い③暗黒褐	１列の角押文施す。隆帯は断面三角形。第Ⅵ群第２類ｂ種
44	縄文土器 深鉢	+16 胴部片	残存高4.4	①細砂多②良好③黒褐	半截竹管による平行半隆起線施す。第Ⅵ群第３類ｄ種
45	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高6.5	①白色粒子多②良好③赤褐	単沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ１種
46	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高3.9	①細砂多②やや良③暗赤褐	両端を突出させた半截竹管による押し引き状の平行沈線施す。第Ⅵ群第１類ｄ１種
47	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高4.9	①細砂多②良好③赤褐	単沈線、隆帯で矩形区画を表出後、刺突を施す。第Ⅵ群第４類ａ３種
48	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高8.2	①金雲母含む②良好③暗赤褐	半截竹管による平行沈線で矢印状文様を描出。第Ⅵ群第５類ｄ種
２号住居跡					
1	縄文土器 深鉢	+22 胴～底部片	残存高11.0	①片岩含む②やや良③暗赤褐	地文に斜位縄文ＬＲ施文後、単沈線で文様。第Ⅵ群第１類ｂ２種
2	縄文土器 深鉢	+10 底部片	底(10.1) 残存高5.2	①金雲母含む②やや良③暗赤褐	地文に斜位縄文ＲＬ施文後、単沈線で文様。第Ⅵ群第１類ｂ２種

3	縄文土器 深鉢	+36 口縁～肩部片	口17.7 残存高6.2	①片岩含む②良好 ③暗赤褐	口唇部横位縄文LR、口縁部以下地文に斜位縄文LR施文後、単沈線で文様。内面は竹管刺突と箆状工具で抉り込む。第VI群第1類b2種
4	縄文土器 深鉢	+14 口縁～胴部1/2	口(24.8) 残存高23.4	①白色岩片多②やや軟③暗赤褐	口唇部は箆状工具で刻み目。地文口縁部横位、胴部縦位縄文RL施文後、単沈線で文様。第VI群第1類c2種
5	縄文土器 深鉢	+57 ほぼ完形	口22.6 残存高27.5	①黒色粒子多②やや良③橙	断面三角形の隆帯に竹管で斜め下方から刺突。口唇部の刻みも同じ工具か。第VI群第1類d1種
6	縄文土器 深鉢	+20 2/3	口(36.2)底 14.0高(43.5)	①片岩含む②良好 ③暗赤褐	口縁部は角押文で施文後、縦位の縄文RL施文。第VI群第1類d2種
7	縄文土器 深鉢	口縁～胴部片	口(11.7) 残存高9.2	①片岩含む②やや良③赤褐	地文は縦位の結節縄文施文後、単沈線、角押文で文様。第VI群第1類d2種
8	縄文土器 深鉢	+52 口縁～胴部片	口(24.0) 残存高18.5	①片岩含む②やや軟③暗オリーブ褐	地文は口縁部横位、胴部縦位の無節縄文L施文後、角押文で文様。第VI群第1類d2種
9	縄文土器 深鉢	+91 口縁～胴部片	口(21.6) 残存高14.1	①白色岩片多②やや良③暗オリーブ褐	地文は口縁部横位・斜位、胴部縦位の縄文RL施文後、角押文で文様。第VI群第1類d2種
10	縄文土器 深鉢	+52 胴～底部1/2	底7.7 残存高10.8	①片岩含む②良好 ③暗赤褐	地文は縦位の結節縄文施文後、単沈線、角押文で文様。第VI群第1類d2種
11	縄文土器 深鉢	+12 底～胴部片	底9.3 残存高11.7	①白色岩片多②やや良③褐	無文。第VI群第1類e1種
12	縄文土器 深鉢	+9 口縁～胴部片	残存高21.9	①片岩含む②良好 ③暗赤褐	指頭圧痕後、斜位のナデ調整。第VI群第1類e1種
13	縄文土器 深鉢	+22 口縁～胴部片	残存高28.3	①片岩含む②良好 ③暗赤褐	箆状工具により全体に圧痕を施す。第VI群第1類e1種
14	縄文土器 深鉢	+74 口縁～胴部片	口15.4 残存高10.7	①白色岩片多②やや軟③暗赤褐	口縁部は箆状工具で刻み目。胴部は縦位結節縄文。第VI群第1類e3種
15	縄文土器 深鉢	N－4 口縁～胴部片	口(8.0) 残存高9.5	①白色粒子含む②やや良③灰褐	口縁部は横位、胴部は縦位の縄文LR施文。第VI群第1類e2種
16	縄文土器 浅鉢	+51 口縁～底部片	口(25.2)底 (14.2)高10.0	①片岩含む②良好 ③暗赤褐	無文。口縁部の台状肥手は中央に刺突。第VI群第1類f3種
17	縄文土器 浅鉢	+14 口縁～底部片	口(30.0)底 (14.0)高13.0	①小礫含む②良好 ③明赤褐	外面無文。内面単沈線、竹管刺突で文様。第VI群第1類f1種
18	縄文土器 深鉢	+105、4住 口縁～肩部片	口(33.4) 残存高15.6	①白色岩片・金雲母含む②良好③灰褐	把手一方は棒状工具により刻む。1列の角押文で文様。第VI群第2類a種
19	縄文土器 深鉢	+52 口縁～胴部片	残存高18.5	①金雲母多②良好 ③黒褐	1列の角押文で渦巻文などを施す。第VI群第2類a種
20	縄文土器 深鉢	+41 口縁～肩部片	口(31.8) 残存高15.2	①金雲母・白色岩片含む②良好③暗オリーブ褐	外面は1列の角押文で文様を施文。欠損するが波状部下2カ所は橋状把手がつく。内面は竹管刺突施文。第VI群第2類b種
21	縄文土器 深鉢	+23 3/4	口28.5 残存高24.0	①白色岩片含む②良好③褐	波頂部の刻みは箆状工具による。第VI群第2類d1種
22	縄文土器 深鉢	2理設土器 胴～底部片	底12.2 残存高9.0	①小礫含む②良好 ③暗赤褐	断面三角形の懸垂文を四単位施す。第VI群第2類
23	縄文土器 深鉢	+14 2/3	口(27.1) 残存高23.7	①白色岩片・金雲母多②良好③暗褐	胴部は斜位のナデにより輪積み痕を残さない。第VI群第2類d2種
24	縄文土器 深鉢	1理設土器 口縁～胴部片	口(17.6) 残存高14.7	①白色岩片含む②良好③赤褐	口唇部の刻みは箆状工具。口縁部以下は地文縦位・斜位縄文LR施文後、角押文で文様。内面に火ハゼあり。第VI群第5類a種
25	縄文土器 深鉢	+44 口縁～胴部片	残存高20.5	①白色岩片含む②やや軟③暗オリーブ褐	単沈線と下方からの竹管刺突により施文。第VI群第5類b種
26	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高3.2	①金雲母微②良好③暗褐	半截竹管による平行沈線施文後、刺突。第VI群第1類b1種
27	縄文土器 深鉢	+38 口縁部片	残存高4.5	①細砂多②良好③黒褐	半截竹管による平行沈線施文後、刺突。第VI群第1類b1種
28	縄文土器 深鉢	+43 口縁部片	残存高7.2	①金雲母多②良好③暗赤褐	単沈線施文後、刺突を施す。第VI群第1類b1種
29	縄文土器 深鉢	床直 胴部片	残存高8.3	①小礫含む②やや良③暗褐	半截竹管による平行沈線施文後、刺突。第VI群第1類b1種

30	縄文土器 深鉢	＋27 口縁部片	残存高5.6	①小礫含む②やや良③黒褐	単沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ１種
31	縄文土器 深鉢	＋91 口縁部片	残存高3.7	①金雲母含む②やや良③暗褐	単沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ１種
32	縄文土器 深鉢	＋66 口縁部片	残存高2.8	①小礫多②やや軟③にぶい黄褐	単沈線施す。内面は折り返しにより三角形の抉り込みに似せる。第Ⅵ群第１類ｂ１種
33	縄文土器 深鉢	＋48 口縁部片	残存高6.6	①片岩微②良好③暗赤褐	竹管による単沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ１種
34	縄文土器 深鉢	＋23 胴部片	残存高6.9	①細砂多②良好③暗赤褐	竹管による単沈線施文後、刺突を施す。第Ⅵ群第１類ｂ１種
35	縄文土器 深鉢	＋７ 胴部片	残存高3.5	①細砂多②良好③黒褐	竹管による単沈線施文後、刺突を施す。第Ⅵ群第１類ｂ１種
36	縄文土器 深鉢	胴～底部片	残存高4.7	①細砂含む②良好③明褐	半截竹管による平行沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ１種
37	縄文土器 深鉢	＋102 口縁部片	残存高2.3	①白色粒子多②やや良③黒褐	半截竹管による平行沈線を模位に施す。内面も一部横位沈線。第Ⅵ群第１類ｂ１種
38	縄文土器 深鉢	＋107 口縁部片	残存高3.5	①片岩含む②良好③赤褐	地文横位縄文ＬＲ施文後、単沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ２種
39	縄文土器 深鉢	＋45 口縁部片	残存高9.6	①小礫含む②良好③赤褐	地文口縁部横位、胴部縦位縄文ＬＲ施文後、単沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ２種
40	縄文土器 深鉢	＋20 口縁部片	残存高7.1	①小礫含む②良好③赤褐	地文胴部縦位縄文ＲＬ施文。第Ⅵ群第１類ｂ２種
41	縄文土器 深鉢	＋78 口縁部片	残存高4.0	①細砂多②良好③赤褐	地文横位縄文ＬＲ施文後、単沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ２種
42	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高2.5	①細砂多②良好③にぶい黄褐	単沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ１種
43	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高4.5	①細砂多②良好③暗赤褐	地文横位縄文ＬＲ施文後、半截竹管による平行沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ２種
44	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高2.8	①細砂含む②良好③褐	地文横位縄文ＲＬ施文後、半截竹管による平行沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ２種
45	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高2.9	①細砂微②やや良③明褐	地文横位縄文ＲＬ施文後、半截竹管による平行沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ２種
46	縄文土器 深鉢	＋61 口縁部片	残存高4.3	①金雲母多②やや良③暗褐	地文横位縄文ＲＬ施文後、単沈線施す。口縁部内・外面とも粘土紐貼付により三角形の抉り込みに似せる。第Ⅵ群第１類ｂ２種
47	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高3.6	①細砂含む②良好③暗褐	地文口縁部横位、胴部縦位縄文ＬＲ施文後、半截竹管による平行沈線施す。内面は竹管により三角形の抉り込み表出。第Ⅵ群第１類ｂ２種
48	縄文土器 深鉢	口縁～胴部片	残存高6.4	①金雲母含む②良好③暗褐	隆帯を貼付後、口唇部横位、口縁下部斜位の短い縄文ＬＲ施文。第Ⅵ群第１類ｂ２種
49	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高5.1	①細砂多②やや軟③褐	隆帯を貼付後、口縁部横位、口縁部下、横位・縦位縄文ＬＲが重なり羽状となる。第Ⅵ群第１類ｂ２種
50	縄文土器 深鉢	＋30 口縁部片	残存高6.8	①細砂含む②良好③暗赤褐	地文縄文ＬＲは斜位気味にやや乱れて施文後、半截竹管による平行沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ２種
51	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高4.1	①細砂含む②良好③暗赤褐	地文口縁部横位、胴部縦位縄文ＬＲ施文後、半截竹管による平行沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ２種
52	縄文土器 深鉢	＋71 口縁部片	残存高4.2	①小礫含む②良好③黒褐	地文横位縄文ＬＲ施文後、単沈線、刺突を施す。口唇部は棒状工具で押す。第Ⅵ群第１類ｂ２種
53	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高5.5	①細砂含む②良好③褐	隆帯を貼付後、隆帯上は棒状工具で刻む。胴部結節縄文Ｒ Ｌ施文。第Ⅵ群第１類ｂ２種
54	縄文土器 深鉢	＋20 口縁部片	残存高6.6	①白色粒子含む②やや良③黒褐	地文縦位縄文ＬＲ施文後、半截竹管による平行沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ２種
55	縄文土器 深鉢	Ｎ－４ 口縁部片	残存高5.8	①白色粒子含む②やや良③黒褐	地文縦位縄文ＬＲ施文後、半截竹管による平行沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ２種
56	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高6.4	①白色粒子含む②やや良③黒褐	地文横位縄文ＬＲ施文後、半截竹管による平行沈線施す。第Ⅵ群第１類ｂ２種
57	縄文土器 深鉢	口縁～底部片	残存高4.1	①細砂含む②良好③赤褐	地文縦位無節縄文Ｌ施文後、単沈線、刺突を施す。第Ⅵ群第１類ｂ２種
58	縄文土器 深鉢	＋69 口縁部片	残存高6.6	①白色岩片含む②良好③にぶい赤褐	断面三角形の隆帯により渦巻文表出。角押文施す。第Ⅵ群第１類ｃ１種
59	縄文土器 深鉢	＋75 口縁部片	残存高6.3	①白色岩片含む②良好③にぶい赤褐	断面三角形の隆帯により渦巻文表出。角押文施す。第Ⅵ群第１類ｃ１種

60	縄文土器 深鉢	+22 口縁部片	残存高5.1	①白色粒子含む②良好	隆帯貼付後、単沈線、角押文施す。第Ⅵ群第１類ｃ１種
61	縄文土器 深鉢	+63 口縁部片	残存高6.6	①片岩含む②良好③暗赤褐	地文横位縄文ＲＬ施文後、単沈線で玉抱三叉文表出。第Ⅵ群第１類ｃ２種
62	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高4.3	①小礫含む②堅い③黒褐	角押文施す。口縁部内・外面粘土紐貼付により三角形の抉り込みを表出。第Ⅵ群第１類ｄ１種
63	縄文土器 深鉢	+42 胴～底部片	底(8.3) 残存高3.1	①細砂含む②良好③赤褐	単沈線施文後、刺突、角押文施す。第Ⅵ群第１類ｄ１種
64	縄文土器 深鉢	+25、O－3 口縁部片	残存高6.2	①小礫多②良好③暗褐	口縁部に断面丸みを持つ隆帯で区画し、口唇部横位、口縁部縦位縄文ＲＬ施文後、角押文施す。第Ⅵ群第１類ｄ２種
65	縄文土器 深鉢	+26 口縁部片	残存高5.9	①小礫含む②堅い③暗赤褐	口縁部指頭圧痕顕著。第Ⅵ群第１類ｃ１種
66	縄文土器 深鉢	+18 口縁部片	残存高10.0	①片岩含む②堅い③赤褐	口縁部の刻みは抉状工具の刺突。第Ⅵ群第１類ｅ１種
67	縄文土器 ４住 深鉢	口縁部片	残存高5.9	①白色岩片含む②堅い③暗褐	口縁部横位、胴部縦位縄文ＬＲ施文。突起上は縄文を押圧。第Ⅵ群第１類ｅ２種
68	縄文土器 深鉢	+23 口縁部片	残存高4.4	①小礫多②良好③暗赤褐	胴部縦位結節縄文ＬＲ、口唇部は横位縄文施文後、沈線施す。第Ⅵ群第１類ｅ３種
69	縄文土器 浅鉢	口縁部片	残存高2.7	①金雲母含む②良好③暗赤褐	外面平載竹管による平行沈線、内面口縁部箆状工具による刻み後、角押文施す。第Ⅵ群第１類ｆ２種
70	縄文土器 深鉢	床直 口縁部片	残存高8.8	①小礫含む②良好③暗褐	隆帯は断面三角形で低い。第Ⅵ群第２類ｄ１種
71	縄文土器 深鉢	+98 口縁部片	残存高4.5	①白色岩片含む②堅い③にぶい橙	半隆起線、内皮使用による刻み文施す。第Ⅵ群第３類ａ種
72	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高4.7	①片岩含む②良好③暗赤褐	地文縦位結縄文ＬＲ施文後、平載竹管による平行沈線、内皮使用による刻み文施す。第Ⅵ群第５類ｄ種
73	縄文土器 深鉢	+６ 口縁部片	残存高6.4	①小礫含む②良好③暗赤褐	断面台形の隆帯で楕円形区画を表出、横状把手部は角押文施す。第Ⅵ群第４類ａ１種
74	縄文土器 深鉢	+69 口縁部片	残存高5.8	①白色粒子含む②良好③にぶい褐	断面台形の隆帯で楕円形区画を表出後、角押文施す。第Ⅵ群第４類ａ１種
75	縄文土器 深鉢	+19 口縁部片	残存高3.5	①白色粒子含む②良好③赤褐	断面台形の低い隆帯で楕円形区画を表出後、単沈線、角押文施す。第Ⅵ群第４類ａ１種
76	縄文土器 深鉢	+39 口縁部片	残存高6.4	①白色岩片含む②良好③暗褐	低い隆帯で楕円形区画を表出後、単沈線、角押文施す。円形文は粘土貼付後、刺突。第Ⅵ群第４類ａ１種
77	縄文土器 深鉢	+107 口縁部片	残存高4.1	①小礫含む②良好③にぶい赤褐	角押文施す。第Ⅵ群第５類ａ種
78	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高3.5	①片岩含む②良好③極暗赤褐	角押文施す。第Ⅵ群第５類ａ種
79	縄文土器 深鉢	+48 胴部片	残存高7.8	①白色岩片含む②良好③赤褐	角押文施す。第Ⅵ群第５類ａ種
80	縄文土器 深鉢	+108 口縁部片	残存高2.6	①白色岩片含む②良好③褐	キャタピラ文施す。第Ⅵ群第５類ｄ種
81	縄文土器 深鉢	+50 肩部片	残存高8.6	①細砂多②やや軟③赤褐	棒状工具により単沈線、波状文施す。第Ⅵ群第５類ｂ種
82	縄文土器 深鉢	+19、N－4 口縁～胴部片	残存高13.0	①片岩含む②良好③暗赤褐	地文縦位縄文ＬＲ施文後、単沈線で渦巻文などを表出。第Ⅵ群第５類ｃ種
83	縄文土器 深鉢	+74 胴部片	残存高9.3	①細砂含む②やや良③赤褐	単沈線による横位沈線、波状文施文後、細い沈線で格子目文施す。第Ⅵ群第５類ｄ種
84	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高2.9	①細砂含む②やや良③にぶい黄褐	単沈線で文様表出。第Ⅵ群第５類ｄ種
85	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高5.5	①白色粒子含む②良好③赤褐	地文縦位縄文ＬＲ施文後、半隆起線文、刺突を施す。第Ⅵ群第３類ａ種
86	縄文土器 深鉢	胴～底部片	残存高4.8	①白色粒子含む②良好③赤褐	地文縦位縄文ＬＲ施文後、半隆起線文、刺突を施す。第Ⅵ群第３類ａ種
87	縄文土器 深鉢	胴～底部片	残存高3.5	①金雲母含む②良好③赤褐	斜め上方から刺突気味に窪ませる。第Ⅵ群第５類ｄ種
88	縄文土器 土製円盤	+12	径3.0厚1.0	①白色粒子多②やや良③暗赤褐	摩滅激しい。
３号住居跡					